

支那戰場余話

寺前信次

平成12年(2000年)春

支那戰場余話目次

まえがき	1	纏 足	8
支那は地名、中国は国名	5	首 丘	8
朝鮮半島の追想	6	華麗な宋の都・開封へ転勤	8
満州懐古	10	城郭都市	8
中国東北部をなぜ満州と呼ぶか	12	北宋の国都・開封城	9
極寒の齊々哈爾	13	開封・竜亭	9
昭和の軍制大改革	17	皇帝の由来	9
北支那戦線へ征く	19	恋しい開封懐古	9
山海関の万里の長城	21	古都の逆旅	9
秦皇島	22	豊かな異国情緒	9
北戴河	22	開封市民とのつどい	10
支那の火薬・火器の発達	23	開封の風俗街	10
喫驚の北京城	24	カフェ街	10
外国公使館区域	26	支那P	10
義和団事件	28	朝鮮P	10
紫禁城と故宮博物院	29	芸者置屋	10
太子密建の法	31	開封にまつわる故事物語	10
皇 城	32	運用の妙は一心に存す	10
内 城	34	杞 憂	10
酒池肉林	35	紅一点	10
外 城	36	五十歩百歩	10
岡田閉右衛門と韃靼漂流記	37	中原会戦	11
頤和園	38	会戦の意味	11
芦溝橋（日支事変の導火線となった）	41	中原会戦の規模と戦果	11
兵は猶火の如し	42	中原会戦とビルマ作戦との比較	11
ナゾの銃声は誰が射ったか	43	補給と給養	11
芦溝橋と一文字山へ	45	降伏勧告文と娘子軍	12
万里の長城	47	中隊長として朱仙鎮へ	12
狼 煙	49	鎮の出現	12
人間万事塞翁が馬	49	岳 飛	12
王昭君	49	乾坤一擲	12
天高く馬肥ゆ	50	黄河渡河作戦（河南作戦）	12
雁 書	50	金瑯敷章	12
北支那を南下して中原へ	51	日章旗（国旗・日の丸）	12
邯鄲の夢	54	背水の陣地構築	13
始皇帝の生誕の秘密	55	我れ大佐に進級、首に懸賞金	13
大黄河	58	死生観	13
黄河の明正の由来	60	空中から侍従武官の視察など	13
旧黄河を通過して開封へ	63	日米開戦を3号無線で知る	13
陽 武	64	朝日新聞特派員来る	13
鉄道警備	64	慰問袋・千人針・御守など	13
燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らんや	67	黄砂と下痢	13
本当の支那を見た通許県	68	蝗の大群	14
良民証	69	想い出の黄河と中牟	14
こんな民族となぜ戦争するのか	70	部下戦友からの貴重な投稿文	14
もてなし上手な農民たち	72	あとがき	14
通許県城内生活	76	軍人勅諭	15
楽しみはカメラのみ	78	米英に宣戦布告の詔書	15
結婚披露宴に招待される	79	終戦の詔書	15
葬 式	81		

まえがき

西暦2000年(平成12)を迎えた。1000年に一度の記念すべき年だ、20世紀の最後の年だと世間は騒ぎ囃していたが、私にはそのような刺激は全くなかった。16世紀に始まった世界支配の西暦には植民地化という歴史があるばかりで、世界には仏暦や、イスラム暦、ユダヤ暦、イラン暦、チベット暦、エチオピア暦等があり、我が国にも明治、大正、昭和、平成といった年号が歴然と現存している。

Y2Kは蓋を開けて見れば、弁を以て飾る政治家などの言葉遊びのように空騒ぎに終わった。本年は昨年^{ゴト}の次の年であり、来年^{ゴト}の前の年に過ぎないと思っていたのは、私が名^ナを竹帛^{タケヒョク}に垂れ芳^{ハナ}を百世^{ヒャクセイ}に流すような人物でないからだが、馬^{ウマ}齢^{レイ}を重ねてきた草臥^{クサヒ}れた一介^{イチケイ}の老人^{ロウジン}に過ぎないからである。そして西暦に馴染^{ナミ}みの薄い戦前派だからかも知れない。

命を的にして馬革^{バカク}を以て屍^{ツツ}を裏む覚悟で戦った戦中は勿論のこと、全く丸裸から再出発した粒々^{リツリツ}辛苦^{シンク}の戦後も、「月日^{ツキニチ}に閑守^{カンシュ}なし」の警^{ケイ}えの通り無常迅速^{ムジョウジュン}に過ぎ去ってしまった。正月も「門松^{カドマツ}は冥土^{メイ土}の旅の一里塚^{イチリヅカ}」の感じがして、目出度くもなしであった。

戦袍^{センポウ}を脱いで55年目を迎えた我が人生もいよいよ延長戦に入り、辛うじて余喘^{ヨゼン}を保つ行死走肉^{コウシソウニク}(歩くしかばねと走る肉)の無用無能の人となってしまうた今では、「鐘鳴り漏^{モロ}尽^{ツク}く」(これから先いくらも生きて行かない)状態だと思っていると、古代中国の荘子^{ソウシ}の言葉が浮かんできた。それは「天の神は衆を与えるために老境^{ロウキョウ}をもたらし、我々老人を休ませるために死をもたらす」という名言であり、宜^{ヨシ}なるかなと痛感していた。

荘子は蝶となって百年も花上に遊んだ夢を見て目覚めたという言うが、自分が夢で蝶になったのか、蝶が夢を見て今の自分になったのかというような「胡蝶の夢」とは異なり、私がしょっちゅう見ている夢は、支那大陸(現中国)やビルマの激戦地の幻覚である。夢は五臓六腑の疲れだというのが、私には「夏草や兵^{ツツモノ}どもが夢の跡」で、夢の中で行き来することも楽しいものである。

聖戦だと教え込まれ、洗脳されていた愚かな戦争の話はいい加減に止めよ、ということは百も承知している。戦争のことを書くのは私の八十年の生涯の中で最大の悲しみである。しかし、この拙文はつまらない戦争や戦國の行動を記録することが目的ではない。今までに書かなかったこと。強く印象に残っていること。これだけは書き遺しておきたいこと。日本では見られないこと。今昔の比較などで知らなければならないことなど、私の生涯の中でも忘れられない支那の裏側のことである。

我々年代の者は幼いときから 仁を根本とする儒教思想で育てられ、小学校以来、漢字文化の中で生長してきた。旧制中学時代には国文よりも十八史略を

主体とした漢文を学び、「公を以て私を滅す」（滅私奉公）、「名を後世に揚げ以て父母を顕す」、「身体髮膚これを父母に受く、敢えて毀傷せざるは孝の始めなり」など、孝行を人倫の基本とした古代中国の感化、影響は深大で、今日の日本とは隔世の感がする。

【十八史略とは中国の神話時代から十三世紀（南宋）までの歴史を概要したもので、時代順に史記を始めとして十八の歴史書を素材とし、これを略述したから十八史略と名付けられた。略述といっても名言、名場面は最大限に取り入れられている】

中国は数千年の歴史を誇る文明大国で、その文明のほとんどは自前で生み出している。文字のほかにも制度、思想、宗教、学問、芸術、科学技術まで、いずれも自らが創り出したもので、他の追随を許さない精緻な大陸文明は、漠然としながらも子供の頃から我々を引き付けていた。

当時の日本の少年たちは小学校に入ると漢文調の「一旦緩急あれば義勇公に奉じ」と書いた「教育勅語」を基にして、忠君愛国の思想を徹底して教育されたが、それらも中国の影響であった。

第一次世界大戦後の日本は、経済恐慌時代を経て満州事変が勃発し、政界の墮落と相俟って軍部の勢力が台頭した。一方の支那（中国）大陸は蒋介石の中央政府の権威は不安定で、国共相剋をはじめ地方軍閥は群雄割拠して覇を競い、済南事件（山東省）の日支武力衝突以来（1928）、国内は依然として混沌を続けていた。

内外の情勢はともに噛み合わず、我が国では昭和11年に2・26事件が勃発し、その翌年には北京郊外で「蘆溝橋事件」（日支事変の発端）が惹起し、ひいては大東亜戦争へと発展していった。（連合国は東京裁判で太平洋戦争と呼称した）

我々戦前派は次の世代のように、幼少期から軍国主義（？）の影響はもろに受けておらず、「俺たちが戦場に征かなければ、祖国はどうなるだろうか？」と思いつめて、軍の学校や隊に入る時代ではなかった。（軍国主義は戦後の東京裁判によって作られた語である）

しかし明治以来の富国強兵政策から、多くの日本男子たちは「大きくなったら軍人になり、国家に貢献したい」と夢見ていたことは事実である。その思想は日露戦争に於ける日本の大勝利をもって始まり、国定教科書の徹底した忠君愛国の教育と、教育勅語によって涵養された。そのためにどんな子供たちでも、日露戦争で活躍して戦死した橋中佐（陸軍）や広瀬中佐（海軍）を軍神として崇拜し、多くの軍国美談が花を咲かしていた。

子孫のために、我々が教育された「教育勅語」を次頁に記載しておく。

ごく自然に私も軍人を志して陸士に入学し、昭和13年に満州の齊々哈爾に駐屯する第7師団歩兵第25聯隊（札幌編成）隊付きのために満州（現中国東北部）に渡った。これが私の初めての海外雄飛であった。

未だ経済が貧困で疲弊していた日本国内でも失業者が溢れていたが、朝鮮半島の極貧に喘ぐ生活は目を覆うものはずかりであった。さらに満州民族の生活は言語に絶する残酷な状態で、心に深く銘記されている。

最前線の戦場で直接戦闘に参加して、敵弾下に身を曝したのは昭和15年であった。そこは項羽と劉邦とが中原に鹿を逐った北支那の黄河流域（河南省）で、当時の北支方面軍の最激戦地であった。

朝鮮半島から満州の奉天（現瀋陽）を経て山海関の長城を越え、支那本土に駒を進めてから2回も往復し、満州・齊々哈爾の往復を含めると大陸との行き来は3回を数えることになる。

終戦は第二次世界大戦最大の陸上戦の激戦を展開した屍山血河のビルマ戦線であった。凄惨なビルマの戦闘はこの世の地獄であり、語るにも悪寒を覚えてくる。ビルマに赴任以来、戦闘に明け暮れた私は一般住民との接触は全く皆無で、戦場の非情冷酷の無惨な印象しか遺っていない。

それに反し支那大陸の戦場は辛苦悲惨と共に面白い一面があった。それは戦闘ばかりではなく、警備や作戦の合間の駐屯期間もあったから、住民大衆との触れ合いも多く、彼等の国を理解するための効果は顕著であった。特に前宋の都であった「開封」に駐屯する機会に恵まれた関係から、中国古人の書を読み、見ることのできない世の人を友とすることも出来る余裕があった。

私を魅了した支那大陸は戦後の国交回復から17回も訪中させた。しかし戦争当時の支那と昨今の中国とでは、世の中がひっくり返ったような感がある。

御名 御聖

明治二十三年十月三十日

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク
孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ
存ス爾臣民父母に孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ
修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ徳器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法
ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ
忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン
斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ認
ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテ威其徳ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

共産革命後の中国は真っ白い鷺が真っ黒い鴉に変貌したようで、これを中国の故事では滄海変じて桑田となる「滄桑の變」と言うのであろう。

劍電彈雨の実弾が飛来する実戦場に身を投じてから、本年は丁度、還暦を迎える年数が経過した。人間は過去を求める動物と言われるように、銘肌鏤骨しなければならぬ針の筵のような戦場の体験記は、1980年に上梓した「両忘」をはじめ、17回に及ぶ訪中紀行文の中にも記述したから省略する。

この「支那戦場余話」と題した拙書は、一般にあまり活字になっていない話や、こぼれ話、余談など、私が見聞体験した戦場行動とはあまり関係のない事柄を多く記述した。戦場記事は今までに書かなかったことについてののみ記述した積もりである。

昔は今の鏡である。眠れる獅子と言われた支那はスケールが大きく驚嘆させられたが、しかし、共産革命後の彼等は由緒ある建造物を破壊したのみならず、祖先伝来の文字や言葉までもぶち壊し、四書（大学、中庸、論語、孟子）五経（儒教の教典のうち最も重要な五種の書）を読む能力までも失ってしまった。

二千年以上も続いた漢文文化が抹消されたことは、同文同種の我々にとって戦乱の世紀だった無惨な戦場よりも遺憾である。この拙文が昔の支那を知る資料の一端ともなればと考え、私が歩いた戦場を逐次に追憶して、纏まりのない「河漢の言」を綴った次第である。

今日まで紀行文は約五〇冊ばかり書き残した。年老いてしまった今では旅行もままならないために紀行文さえ書けず、この拙文をもって掉尾を飾りたいと思っている。しかし、渋柿の長持ちと言うか、八十の三つ子と言われるとおり、能力のない者が老碌して子供に返り、文盲に近い状態で綴ってみたが、やはり意味のない騒々しい愚劣な「蛙鳴蟬噪」の文になってしまった。

平成12年1月6日記



兵隊さん
さようなら

支那は地名、中国は国名

この文章の中では嘗て我々日本人が用いていた呼称のとおり、共産革命以前の大陸を懐かしい昔の呼び名の「支那」・「満州」と書き、革命後の大陸を現代風に中国・中国東北部と書くことにした。

今から2200年ばかり昔、大陸に秦帝国が興った。これは周王朝後半の春秋・戦国時代の乱世を統一して出来た帝国で、当時としては正しく空前の世界国家であった。

「支那」という語源は、万里の長城などの土木工事を起こし、その威名が四方に伝わった「秦」の「音」に由来すると言われている。それがインドや西方に伝わり、「シン」が訛って「チャイナ」(CHINA)となって逆輸入され、漢訳仏典では「支那」「震旦」などと音訳されたのである。

「支那」というのは、国威が四隣に振るった時の栄光の形見の名前である。英語では「チャイナ」であり、露語では「キタイ」(これはモンゴル系の遊牧民族である「契丹」からきていると言う)であり、インドあたりでは「シノ」と発音している。

ところが共産革命後の革命政権は、由緒ある支那を廃止して中華人民共和国(略して中国)と称したが、我が国まで中国という「国名」を、「地名」にまで使用している。英語圏は昔ながらの「チャイナ」である。

「地名」と「国名」とは全く概念を異にするものである。支那五千年の歴史は存在するが、中国五千年の歴史などと言うものはない。満州族の支配した国は「清国」であり、その前の漢民族の支配した国は「明国」、その前がモンゴル族が支配した「元国」であつた。元国や明国、清国は国名であつて地名ではない。韓国というのは国名で、朝鮮半島というのは地名であるのと同様である。

若し「支那」という言葉を一切使用してはならないと言うなら、世界地図から支那本部、東支那海、南支那海、インド支那半島などの名称を削除するばかりでなく、英語圏のチャイナも、露語のキタイも使用禁止しなければならない。

現在の中国では、東支那海を「東海」、南支那海を「南海」と呼称しているが、世界に通用している地名ではない。日本の天気予報でも東支那海、南支那海と呼んでいる通りで、世界地図の通用地名はチャイナ(支那)である。

以上のようなことから、この拙文では地名を親しみの深い昔の「支那」という言葉を使うことにしたが、何も侮辱している訳ではないことは勿論であり、世界に通用した尊敬する地名だと信じている。「支那」はどこまでも国名ではなく地名である。

朝鮮半島の追想

昭和13年極月、下関から^{釜山}釜山連絡船に乗船して玄界灘の荒波を乗り越え、朝鮮半島の東南部の釜山港へと出帆した。幾多の先輩将兵がたどった対馬海峡は、後輩の我々にとっては胸躍る思いであった。しかし無防備だった連絡船も、昭和18年に北支戦線から帰国したときには船首・船尾に砲が据え付けられ、厳重な警戒態勢をとっていた。^将将に朝鮮海峡は我が日本の生命線であり、運命線という感じが私の記憶に残っている。

初めての8時間の航海に船酔いすることもなく釜山港に接岸した。その時の光景を追憶すると、朝鮮の人達の正視するにしのびない惨めな姿が想い出されてくる。初めて大陸に第一步を踏み出した時のことでもあり、今日の衰えた我が脳細胞にも明瞭に刻まれている。

それは連絡船が埠頭に接岸した瞬間、朝鮮の人達の大群衆が連絡船の残飯を求めて押し寄せてきた情景である。船員が甲板から埠頭に掃き捨てる乗客の弁当^{弁当}を、我先にと奪い合うのであった。僅かに食べ残したご飯や料理に蟻が群がるような场景は、私は生まれて初めて目にする光景であった。

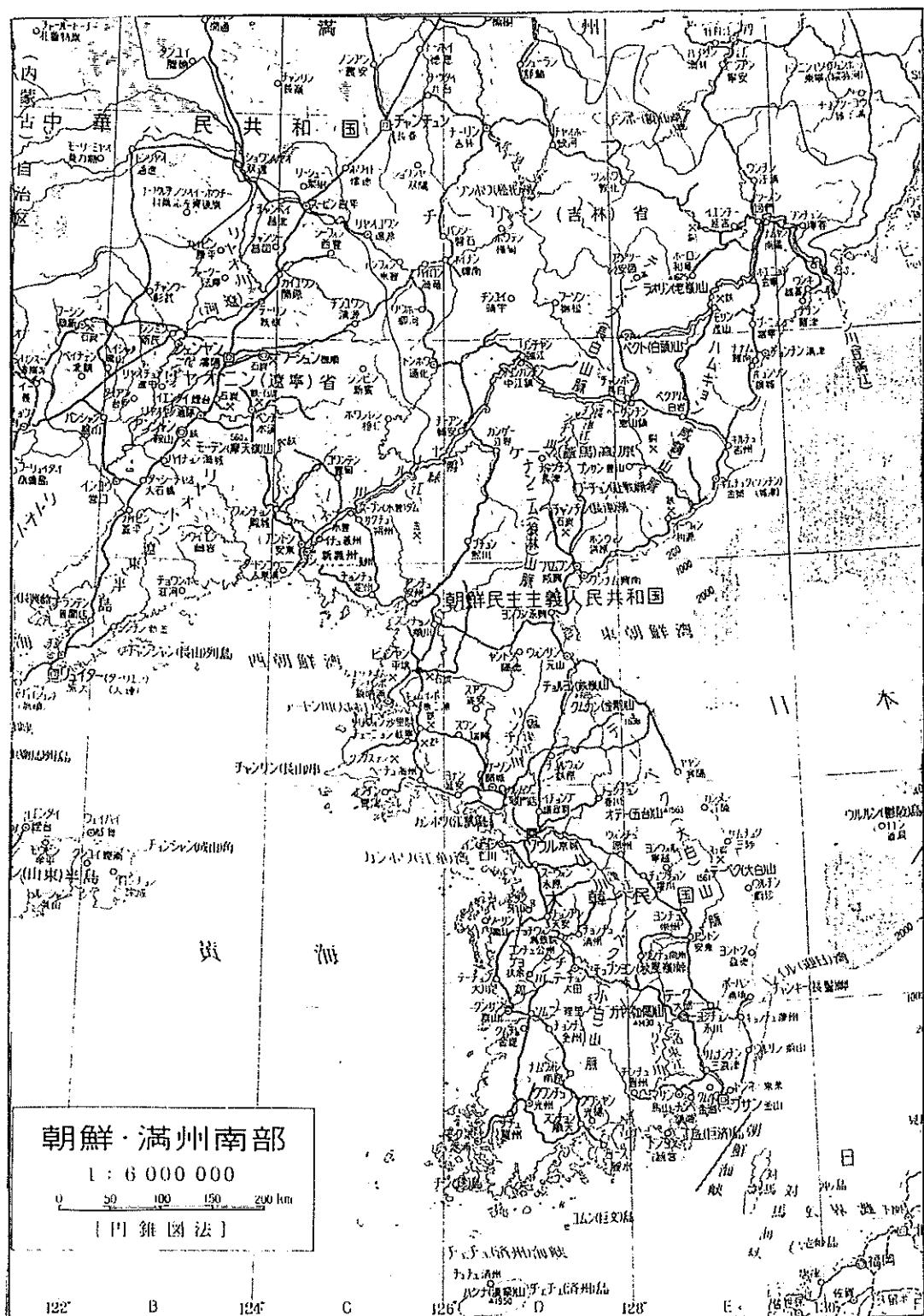
歴史を振り返ってみると、朝鮮半島は古い時代から幾たびも周辺の多民族からの侵略を受け、近代においては清国の支配下に置かれ、1910年（明治43年）に日本に合併された気の毒な民族である。

当時の世界の情報通信は幼稚なもので、今日では考えられない未発達な状態であったから、朝鮮の人達の辛酸な状況も我々は全く無知な状況に置かれていた。陸士予科で同じ区隊であった北朝鮮出身の「^{キョウ}恙」氏から聞いてはいたものの、これほどまでとは想像もできなかった。

私の小学生の時代に朝鮮の人が近所の^{ハコバ}機場で働いていたが、それほど貧困な生活だったとは考えられなかった。朝鮮半島から敢然と日本に渡ってきた人達は、概ね土方が職業であったようだが、一縷の^{イナル}望みを抱いて頑張る姿からも、何百人もの失業者の埠頭の光景は想像もできなかった。

当時の東京の飯田橋や水道橋の橋の下に失業者や乞食が住み着き、習志野練兵場の^{ショウシヤ}廠舎（演習場の宿舎）付近にも、残飯目当ての襤褸を着た浮浪者がいたことを思うと、昭和の世界大恐慌の影響が甚大であることが窺えるのであった。

当時は東大を卒業しても、就職できたものは三分の一に過ぎなかった。私の旧制中学時代には東大・京大出の若い人が教壇に立ち、職が見つかると思われぬ間に消えていなくなっていたが、深刻な不況を物語っていた。今このように追憶すると、大正、昭和、平成を生き抜いた過去も光陰矢の如しである。



朝鮮半島を縦貫する鉄道は釜山港に埠頭駅があり、乗車した大陸縦貫鉄道は日本内地では見られない広軌鉄道（軌間1435mm以上）であった。今では新幹線で広軌は見慣れているが、狭軌鉄道に馴らされた日本人に説明するために、列車の網棚（荷物棚）に乗客が寝れるほどの広さだと説明していた。島国根性の日本人に広大な大陸を先ず第一に印象づけるには十分であった。

発車して動き出した車窓から眺める光景はすべてが物珍しく、今でも脳裡に刻まれている景観の第一は、藁葺きの屋根藁の先端が地面すれすれに垂れ下がっていた景観であった。日本内地の藁屋根と違って屋根の高さが低く、あれでは屋内が暗いだろうと風俗習慣の違いを感じていた。

次に驚いたことは、一面の鉄道沿線の山や丘の地肌が、赤く剥き出しになっていて緑が全くないことである。濃い緑につつまれた日本内地では考えられない光景であった。その原因は暖房用の薪を採るために根までも掘り起こし、新たに植林しないためであった。藁屋根の低いのはオンドルの暖房効果を高めるためであろう。

「大邱」（テーク）は歩兵聯隊の所在地だけに注視していたところ、兵士の姿が見えていた。懐かしい感じで眺めていたのは海峡を渡ったということだろうか。当時の朝鮮半島に駐留していた陸軍は2個師団（19、20師団）で、兵士は国内の日本人で充当されていた。それに大邱はリンゴの産地で、小粒で味の良い林檎を喰った記憶も遺っている。

前記した同期生の「恙」氏が、朝鮮の人達に徴兵制度を施行するのは、教育程度が低いために早期に過ぎると言っていたことを思い出していた。朝鮮の人達に志願兵制度が施行されたのは大東亜戦争末期で、私がそれを知ったのはビルマ戦線の末期である。

朝鮮の人達のチョゴリー姿や、山高の帽子をのせた老人の姿は、内地でも見受けられたから珍しくはなかったが、小さい子供が丸太に板を渡してギッタンバツタンと遊んでいた光景は、半島ならではの遊びで懐かしい光景である。

軍都であった「竜山」を過ぎて停車した「京城」（ソウル）では下車せず、ホームからは市街が見えなかったのは残念であった。現在のように高層建築が櫛比していない景観は、全く記憶に留まっていない。

次の「開城」（ケーソン）は「高麗」の王都だけに、城郭都市の印象が微かに覚えている。夜半に停車した「平壤」（ピエンヤン）の印象は強烈だ。極寒の北鮮

の寒い夜に拘わらず、国防婦人会の襟をかけた婦人達が我々に湯茶の接待を



してくれ、激励してくれたことであった。支那戦線に出征する軍人か、満州に行く軍人か判らない彼女たちの、通過していく軍人に対する熱烈な歓送は内地と変わらず、目頭を熱くして感動したことが忘れられない。

(前頁の下の写真は国防婦人会の^{タスキ}袴をかけた婦人。現在の婦人会のようなもの)

「新義州」(シンイチュ)の国境の町は、釜山から列車で概ね24時間だったと記憶している。唄で歌われていた町を流れる鴨緑江は、字のように河の水は鴨のような緑色ではなく、泥水の汚い河であった。雨が降れば河口の水は濁ることは当然だが、この河の上流に日本が建設した東洋一のダムがあり、北朝鮮は豊富な電力に恵まれているのだと、目を向けていたことが懐かしい思い出である。

戦後の朝鮮半島は南北に分断され、一般人の我々は北朝鮮に足を踏み入れることは期待できない。しかし、私は戦時中に3回も往復したから興味があり、感じだけでも味わうことが出来たことは貴重な経験である。

現在の北朝鮮のように密告と圧政だけでは、独裁体制を何時までも支えきれものではない、と私は思っている。指導者という者は国民から尊敬できる人間的な要素が不可欠だからである。

中国の共産革命は、ある意味で皇帝支配を^{ツグエ}覆した近代的な色彩を持っているが、毛沢東でさえも自分の子供を後継者に指名しなかった。それに反し、北朝鮮の世襲は余りにも前近代的で、封建的だと言わなければならない。

東西冷戦態勢が崩壊して本家のソ聯が解体してしまったが、北朝鮮は十分に国民を食べさすことも出来ずに、共産主義のために暮らさなければならないことは、本当に人間らしく生きることだろうか。

世界が大きく変わって民主化を求めているとき、厳しい共産主義体制を強要することは、素人ながら、論理的に矛盾しないのだろうか、と心配している。そして現在の我々の最大の関心事は、北朝鮮の「核」である。

朝鮮半島を縦断して感慨深いのは、1910年(明治43年)、日韓合併によって設立された李王家のことである。李王家は日本の皇族に準じた礼遇を受けたため、当時の当主であった「李王垠」^{リョウギン}様は、陸軍大佐の李王垠殿下として陸士予科の教授部長を勤められ、我々は其の指導を受けたのである。今は亡き李王垠様の御冥福を祈りたい

満州懷古（7頁地図参照）

鴨緑江を渡った対岸の「安東」（アンチュ）では、税関検査のため列車は必ず30分は停車した。主に民間人が対象で密輸防止のためである。

安東を離れて北上すると山岳地帯にさしかかる。すると列車の窓は昼夜に拘わらず閉めなければならなかった。列車に警乗する兵士も厳重な警戒態勢をとり、朝鮮と違って満州は危険を肌で感じてきた。それは満鮮国境から以北はバルチザン（遊撃・ゲリラ）が横行していたからであった。

当時は国境から奉天（^{フンチヤン}瀋陽）、更に奥地にかけて匪賊、馬賊が跳梁跋扈（はねまわること）し、特に長白山の虎と云われた「金日成」を首謀としたゲリラは有名で、山岳地帯は彼等の巢窟であった。

各駅の周りには幾条もの鉄条網を張り巡らし、満鉄社員は軍隊と同様に武装して警備していた。初めて目にした軍民一体の光景に、ひしひしと戦場という雰囲気吸い込まれていった。

回顧すると、金日成の生涯の夢は、独立と統一であった。その目的を達成するために、あらゆるものを犠牲にした革命家であった。彼は社会主義者である前に民族主義者だったのであろう。

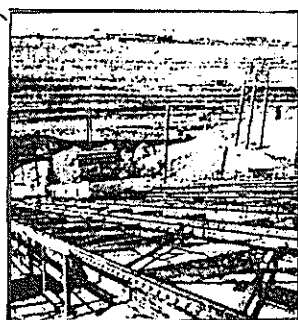
独立問題でいえば、鮮満国境付近での抗日武装闘争は評価されても、後日の数百万の犠牲者を出した朝鮮戦争は失敗であった。そして統一に執着するあまり、北朝鮮国内での国家建設でも、軍事優先に走りすぎたのではないだろうか。

深山幽谷の山岳の深い谷間に「本溪湖」（^{ホンキイコ}現在本溪）の製鉄所の煤煙が、^{モク}藤々と立ち昇る光景は忘れられない。付近一帯は鉄と石炭を多量に産出し、日本の原動力を形成する大工業都市であった。これらの貴重な施設は戦後、ソ聯は戦利品だと称して持ち帰ってしまった。全く盗賊で北方四島と同然である。

長かった山岳地帯から抜け出して視界が開けてくると、果てしない一望千里の赤い満州と歌われた平野が展開した。狭い日本に閉じこめられてきた日本人は、誰しも興奮のあまり自然に大歓声をあげるのであった。

小学校以来、教えられてきた「撫順」（フーシュン）の露天掘りの炭坑が、大平野の中に現れてくると車内は総立ちになって、再び喚声が巻き起こった。

（右の写真は露天掘りの撫順炭坑の運搬車が走る景観）



現在の満州旅行では飛行機で入国しない場合、大連から鉄道で北上するときには撫順は通過しないため、参考として若干記述しておくことにした。撫順の炭坑町の始まりは清代末期の1896年、支那人によって会社が設立されたが、その直後の98年にロシア軍が接収した。日露戦争の後、1905年から1945年までは日本が採掘権を持ち、満鉄が経営に当たっていた。現在は石炭以外にも鉄鋼、マグネサイト等も産出し、重化学工業都市として発展している。

もう一つ撫順で書き残しておきたいことは、満州皇帝の「愛新覚羅溥儀」や国民党の戦犯が戦後、収容された施設があったことである。「溥儀」は1949年10月、ソ聯から中共に引き渡され、撫順戦犯管理所に入れられて洗脳された。膨大な告白書を書いた彼は東京裁判にも出廷し、中国共産党のお陰で人間性に目覚め、爽やかな幸福に暮らせるようになったと書いている。

中国共産党が、溥儀のような旧社会の象徴的な人物を徹底的に改造・洗脳し、死刑にするよりも生かして役立てることが最善だと判断したことは、人間的に進歩したと云わなければならないだろう。その後、思想改造された一人として彼は植物園の職員となり、小さなアパートで生活していたという。

撫順を過ぎて南満州鉄道の本線と交差したところが「遼陽」である。日露戦争で活躍した橋中佐の奮戦地と思うと、自然に心の中に「ここはお国を何百里離れて遠き満州の 赤い夕日に照らされて 戦友は野末の石の下」の戦友の歌詞が浮かんできた。

遼陽の大広野を北進すると直ぐ、「無比の勝利を世に誇れ」と叫んだ、日露戦争大勝利の奉天大会戦の「奉天」で、戦後は「瀋陽」と旧名にかえた。

清朝初期の首都であつた大都市は今も重工業都市の中心で、戦時中の面影は今もなお遺っている。しかし軍旅中だった私は駅前付近は熟知していたが、観光と云った行動をとったことがない。ただ奉天駅だけはロシアが建築したもので、古い侵略の歴史を物語っていた。

奉天の観光は戦後のことで2回訪れ、清朝初代の太祖ヌルハチ、第2代ホンダイジュの御陵を始め、張作霖を爆死させた皇古屯駅や満州事変の勃発地点の「柳条湖」「北大營」などは、「52年目の満州旅行」及び「癌を押して旅順要塞へ」に書き綴ってある。

奉天「瀋陽」駅を離れると直ぐ右側に、南満州鉄道の線路を爆破した柳条湖が見え、北大營の兵舎も見えていた。そこには三本のレールが線路脇に立てられて記念碑となっていた。何も知らなかった当時の我々は憤慨しながら興奮の眼で凝視していた。

更に北に進んで新「京」（現長「春」）に到着し、直ぐ軍司令官官邸に赴いて申告となった。当時の新京は白樺が疎かに生えた田舎で、駅から軍司令官官舎が一目瞭然と見えていた。そして満州皇帝の皇居の前で拝礼した記憶が遺っている。

中国東北部をなぜ満州と呼ぶのか

現在の中国では東北と呼んでいる地域を、嘗て日本は満州と呼んでいたが、満州という地名の呼び方の由来を記しておきたい。

内陸部のチベットや新^{シンキウ}疆ウィグル地区、内蒙古などは古くから土地の部族名を地名として使用していた。中国本部でも中華を意味する華に北・中・南を付け、華北・華中・華南と呼んでいた。それと同様に東北部を東三省と呼んだ。

漢族の支配が満州に及んだのは古代の前漢のとき、遼^{リョウトウ}東・遼^{リョウタイ}西の二郡を置いたのが始まりと伝えられている。しかし前漢を別にすれば、その後の満州支配は明の時代まで途絶えていた。この間、満州から起こった王朝の高句麗^{コウクリ}、渤海^{ボヘ}などは、いずれもツングース族系である。ツングース系には漢代以降の鮮卑^{センビ}、唐代の靺鞨^{ムツカツ}、唐代の契丹^{キツタン}、宋代の女真^{ジョジン}、満州族なども含まれている。

「明」に代わって中国の支配者となった「清」は、女真族の一支族である満州族の政権である。女真族は12世紀から13世紀にかけて、「金^{キン}」と称して淮水^{ワイスイ}（黄河と長江の中間の河）以北の華北地方を領有したが、モンゴル族が興るとこれに征服され、故郷である遼東の地で狩猟と農耕の生活をしていた。

明朝が成立すると又その支配を受け、長白山地に住む建州女真、ハルビンや長春付近の海西女真、黒竜江流域の野人女真の三部族に別れ、人参や貂皮を携えて入貢していた。

しかし建州女真の一部長の家に、「ヌルハチ」（1559～1626）という英傑が現れて諸部を統一すると、急速に勢力を充実させ、1616年正月に「後金」の国号をたて、「明」からの独立を宣言するに至った。

ヌルハチ（清の太祖）は明に対抗して民族の文化を守るため、モンゴル文字を借りて満州文字をつくった（1599年2月）。彼の尊号を「滿^{マン}住^{ジュ}」といったが、これは曼殊師利＝文殊（菩薩）の対音であり、「満州」の呼称はこの文殊から出たと説かれている。そして今までの女真族を改めて「満州族」と称したのであった。

現代中国で東北を満州と呼ぶのを嫌うのは、日本が後押しして清朝皇帝の末裔をかついで、満州国を建設しただけではないようだ。辛亥革命で孫文は「滅^{メイ}滿^{マン}興^{キョウ}漢^{ハン}」をスローガンにして、征服王朝である満州族を覆^{フツ}したが、その民族の故郷であるからである。根本は漢民族にとっては異民族に支配された名称が、もっとも気に入らないようである。

しかしこの拙文では、我々が慣用として使用していた、歴史的な満州という地名を使うことにする。

酷寒の齊々哈爾 (下図参照)

チチハルは酷寒零下44度まで体験した北満の私の任地である。哈爾濱の北西約280km、嫩江中流の東岸に発達した町で、農畜・林産・金鉱の集散地として商業の盛んな城郭都市であった。

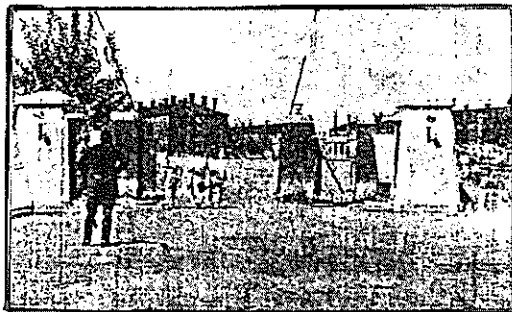
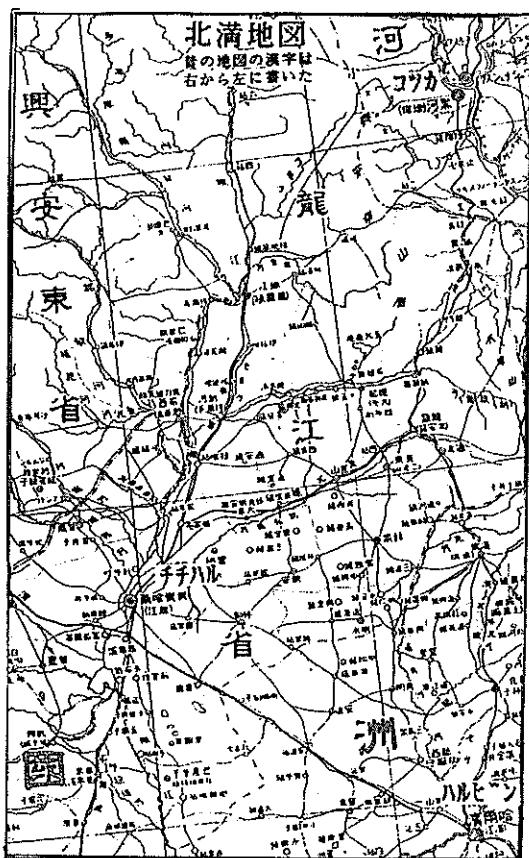
満州事変の当時は馬占山の根拠地として有名な黒竜江省の主都である。馬占山は馬賊出身の軍人で黒竜江省に勢力を張り、日本軍に降伏して満州国の軍政部長となった人物である。

チチハルには馬占山高地という日本軍と戦った古戦場もあり、当時の師団司令部の建物は彼の本拠地の洋風建築で、旅団司令部もまた彼の妾宅の絢爛豪華な洋風建築であった。馬賊のロマンとして古き良き時代の香りが漂っていた。

当時の我が第7師団長は園部和一郎中将(軍司令官で退官)、歩兵第13旅団長は古沢健児少将、歩兵第25聯隊長は磐井虎二郎大佐(22期、終戦時は108師団長)、配属になった歩兵砲中隊長は葛原元文大尉(37期、終戦時中佐)の錚々たる軍人であった。

第7師団は関東軍の総予備隊としてチチハルに駐屯し、訓練に邁進した北鎮健児の最新鋭部隊であった。(そのために昭和13年7月の長鼓峰事件、昭和14年5月のノモハン事件に真っ先に動員され、犠牲は甚大である)

我が歩兵第25聯隊(札幌編成)は、チチハル城外南部の殺伐とした広野に、歩兵第26聯隊(旭川編成)と共に南大營に駐屯し、二階建ての赤煉瓦の兵舎に起居していた。(右は聯隊正門)



兵舎内はペーチカの暖房設備が完備した二段ベット式で、日本国内のどの兵舎より立派な設備を誇り、零下50度以上の寒冷でも寒さ知らずであった。

(右の写真はチチハルの南大営兵舎)

ペーチカ(Pechka)とはロシア特有の暖房装置で外部は亜鉛引きとなっており、内部に垂直面の屈曲した煙道を設け、空洞部に室内の空気を対流させて部屋を暖める装置である。

石炭の使用量は極く少量で外面が暖まり、石炭が真っ赤に燃焼すると煙道を遮断して保温状態にする。室内ではシャツ一枚でも生活は可能であった。

暖房完備のために虱^{シラミ}が発生するのであろうか。生まれて初めて虱を拝見したのであった。成虫は退治できても、卵を完全に退治することは困難のようである。卵が数珠つなぎになった衣類を零下40度の屋外^{サラ}に曝しても死なず、すべて煮沸しなければならないようであった。

(右上はペーチカの簡単な装置図)

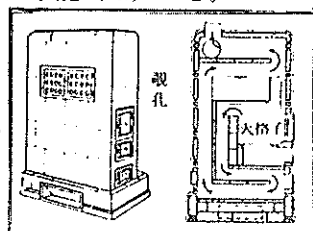
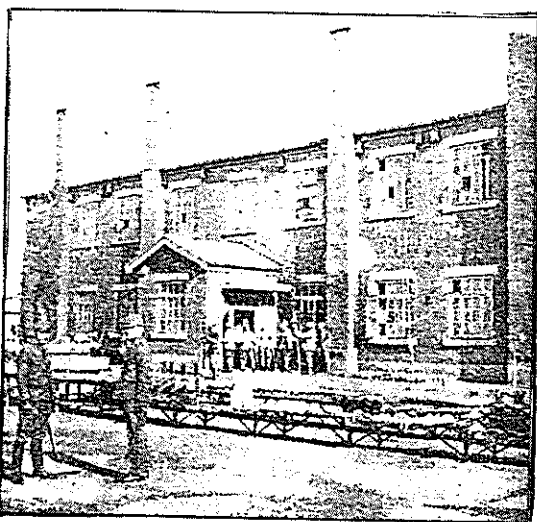
寒冷地の屋外演習では凍傷^{トウシヨウ}に最も注意しなければならない。これも経験を積まなければ知らず知らずのうちに凍傷にかかり、手足を切断することが屢々^{ハシバシ}であった。凍傷は寒いというよりも、痛いという感じを通り越すと感覚がなくなり、気が着いた時にはすでに遅く、怖ろしい病であった。

風速1位の風が吹くと体感温度は3度下がると云われていた。そのために風上に向かって演習することは厳禁である。小銃の射撃も一発撃つと、右手の人差し指を5分間ほど擦らないとカチカチに凍り、次の弾を撃つことはできない。

日本人の兵士は手袋を2枚もはいても、以上のような状態に対し、寒さに慣れた満州族やロシ人は一枚の手袋で平気であった。これで極寒時の戦闘が可能なのだろうか。敵との戦いよりも自然との闘いが問題である。

砲兵の実弾射撃演習を見学した時、不発弾が非常に多かったが、寒冷の影響で信管が故障するらしい。これでは戦闘どころではない。

(右上の写真は防寒姿の中隊長の葛原大尉)



1月8日の陸軍始めの式典で聯隊長の軍人勅諭の奉詔は、途中に一回休憩して手足を揉んだものだ。しかし、それでも入隊したばかりの初年兵は、緊張と馴れないために凍傷にかかり、足の指を切断する事件が発生している。

耐寒演習で嫩江の凍結した氷の上で幕舎露營したことがあった。円形の幕舎の中央にストーブを設置して外周に藁を敷き、足をストーブの方に向け、頭は外側に向けて寝たが、温度は足がプラス2度で、頭部はマイナスであった。

ストーブは地面を30^{センチ}ほど掘り下げて据えるのだが、30^{センチ}掘るのに約1時間もかかった。氷やツンドラの土地を掘るのは容易ではなく、幕舎から藁まで運ぶのでは実戦に役立たない。今ならばドリルで穴を開け、少量の火薬で掘れるだろうが、冬期の戦闘継続は不可能に近いのではないだろうか。

軍馬も将兵と同様に防寒をしてやらなければ生きていけない。当時は馬脚に脚絆を巻き、馬体はマントのようなもので覆ったが、それでも馬は寒いのか、風上に尻を向けて寒さを凌いでいた。

北満州では道路も畑も水も全てが凍るから、四つ足の馬でも滑ってしまい歩けない。そのため蹄鉄には爪のようなものを取り付け、乗馬する将兵も半分は歩行しなければ寒さに耐えられなかった。

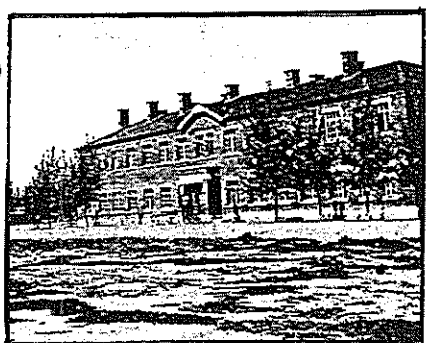
行軍はまた発汗状態を見極めなければならなかった。汗をかく前に兵馬を休憩させなければ、零下40度だと汗は皮膚の表面で凍り、耐久力を衰えさせるのである。行軍は20分ごとの休憩なら、発汗せずにすんだようである。

軍隊では小便1丁、糞8丁と云われていたが、あの重い防寒服や防寒靴を着用して隊列から離れると、遅れを取り戻すことは至難なことで、急げばひどい発汗に見舞われ、落伍の原因にもなるのであった。

将兵の防寒帽をかぶった姿は一見ただけでは誰だか分らない。人のはく息が睫毛や眉毛、鼻の下に白く凍り付き、防寒帽も息が凍って真っ白になるからである。涎も直ぐにツララとなり、小便さえも直ぐに凍る寒さは体験者でないと理解し難いかもしれない。

北満では人間の殺傷には武器は不要である。裸にして放り出せば一巻の終わりだ。首筋から水を流し込んでも5分は掛からずにお陀仏だろう。(右は25聯隊本部の建物)

満州では死人は埋葬するのだが、冬期間は土を掘ることが出来ないから、棺桶を墓地に運んで雪を掛けておくのが普通であった。また便所の汲み取りも凍っているから鉄棒で叩き割り、畑に運んで放り投げておくだけであった。春先の氷解時は衛生上、最悪の状態である。



我が兵舎である南大営の南の荒野に軽爆撃機戦隊の飛行場があった。この戦隊は後日のノモハン戦で活躍したことで有名である。当時は夜間になると飛行機のエンジンの騒音が一晩中聞こえてきた。それは極寒のためにエンジンが凍り、緊急発進できないからであった。今は考えられないが飛行隊も保温のために苦労していたのである。

南大営の北側には黒大理石の素晴らしい忠霊塔が天に聳えていた。チチハルを遠く離れた彼方からも見え、10里四方に部落一つもない大平原の貴重な目標となっていた。特に三寒四温の顕著な満州の冬期は晴天つづきで、一望千里の中でも方向を間違えることはなかったようである。

チチハル城壁の南門外に「竜沙公園」という庭園があった。これは清代末の1897年、辺境防備にあたった將軍・程德全が、辺塞に佳境がないことを愁いて造った公園で、支那らしい澄江閣や未雨亭などの建物が建った憩いの場であった。

公園で私の深く印象に残っているのは写真屋である。超時代遅れの箱形の写真機にはシャッターがない。写物体に向かった箱の穴がシャッターの代わりで、塞いでいた手を除くと撮影開始となり、10秒ほどしてから再び手を当てると終わりであった。不思議なことに、それでも良く撮れていたが、10秒間も微動もできないのは難点であった。懐かしい思い出である。

一般の交通機関は遊牧民族の流れであろうか、幌を付けた二人乗りの馬車であった。警戒信号の代用のように馬の首に鈴が付けられ、顎の下にツララを下げて走っている光景も満州ならではの光景である。

チチハルの日本人小学校の幼い児童がスケート靴を首にぶら下げて、登下校する姿も楽しい思い出である。満州ではスケート場を造るのは簡単で、校庭に水を撒けば直ぐに立派なスケート場である。又、チチハルは湿地帯のために各所にスケート場が設けられ、満人で賑わっていたことも懐かしい。

満人の小学校を見学したこともあった。1年生の小さい子供から日本語の読本で教えられていた。戦後、満州を訪れたときに、流暢な日本語を話す車内販売の老人に話し掛けられたことがある。彼も満人小学校で日本語を学ばされた一人だが、非常に感謝していたことが私の脳裡に刻まれている。

チチハルの数多い印象の最後の一つとして駅舎がある。煉瓦造りの4階建ての建物は北満第一の駅舎で、列車が入ってくる時にカランコロンと鳴らす鐘の音は、何にも優る悠長なロマンの響きであった。

もう一つは貧しい生活の農民は肥料を購入する金がなく、極寒零下数十度の中を籠をかずき、馬車の馬が排泄した馬糞を拾い集めていた光景である。日本も極貧であったが、満人の極貧は桁外れであったことである。

昭和の軍制大改革

日本陸軍は昭和初期までの軍縮に従い、兵制は近衛師団を含めて17ヶ師団が平時編制として常置され、そのうち2ヶ師団が朝鮮の羅南（北朝鮮）と竜山（京城）に配置された。（19、20師団である）

満州事変の発生と国際情勢の変化に伴い、昭和11年に軍備充実計画が実施され、翌12年に支那事変が勃発すると特設師団が編成され、満州や支那に派遣して事変の処理に対応した。この時の特設師団は何れも原隊に100の番号を冠した。（例えば9師団ならば109師団の如し）

私が赴任していた歩兵第25聯隊が満州に駐屯していたころ、支那事変が逐次拡大していった為、日本陸軍は新陸軍の建設に総力を傾注していた。昭和14年に軍備改変要領を制定した陸軍は、昭和15年に軍備、軍制の両面にわたって大改革を実施した。世に「昭和の軍制大改革」と呼んでいる。

師団は歩兵2ヶ旅団編成で、1ヶ旅団は歩兵2ヶ聯隊であったが（歩兵4ヶ聯隊）、歩兵旅団司令部を1ヶ廃止して師団は歩兵3ヶ聯隊となり、歩兵団司令部が1ヶ設けられた。即ち師団の歩兵戦力は四分の一減となった。

騎兵聯隊は乗車・戦車中隊を加えた搜索聯隊に改編され、野（山）砲兵聯隊は4ヶ大隊編成から3ヶ大隊編成の聯隊に改編された。歩兵聯隊内においても編成が改訂されて、次のような編成となった。

- ◎歩兵聯隊＝聯隊本部、歩兵3ヶ大隊、聯隊砲中隊（含速射砲）、通信中隊
- ◎歩兵大隊＝大隊本部、歩兵4ヶ中隊（各3小隊）、機関銃中隊、大隊砲小隊（歩兵は重火器の増加と通信隊が新設され、歩兵聯隊は概ね3500名、歩兵大隊は約1000名）

我々が学んでいた師団戦術が歩兵4単位から3単位になったため、戦術計画も非常に計画しにくくなり頭痛の種であった。今までの師団は一方面を単独で任務を達成できる戦力を保持していたが、3単位師団に改編されてからは軍内師団の能力しかなく、戸惑った感想を持っている。

なお、新軍制に伴い、作戰要務令、歩兵操典等も改訂された。従来の兵科名がなくなり（主計、軍医、獣医羅の各部はそのまま）、今までの陸軍歩兵大尉は、ただの陸軍大尉となった。軍服もまた改編されて立襟が折襟になり、編成・装備・教育訓練上、陸軍は一新された感があった。

軍服は我々の期までは立襟であったが次の期から折襟になったため、非常に古参になつたような感覚を味わった経験がある。歩兵の赤い襟章と聯隊番号を着用していたことも今は遠い過去のこと、懐かしい思い出となった。

前記した作戦要務令や各種兵科操典及び内務班に就いて、歩兵聯隊の未経験者や軍隊未経験者のために、若干の説明しておきたい。

『作戦要務令』 既存の戦闘綱要、陣中要務令を改正して作戦要務令が編纂されたのは、支那事変中の昭和13年である。作戦要務令は四部に分かれ、第一部は搜索、警戒、行軍、宿営、通信などの陣中勤務を、第二部は戦闘指揮、攻撃、防御、追撃及び退却、持久戦、諸兵連合の戦闘、陣地戦・対陣、特殊地形の戦闘原則である。「第三部」と「第四部」は秘密書類で一般には公開されていない。内容は高度な特殊作戦が主で、敵前上陸作戦、渡河作戦、船舶輸送、宣伝謀略などが書かれ、一般の将校は殆どが知らないのが現状だ。（陸大の再審試験には秘密であった第三部・第四部からも出題されたから、私も聯隊本部の金庫から借り出して学習した経験がある。果たして機密の必要があるのかと疑問に思う）

『歩兵操典』 各種兵科操典は各兵科将兵の教育訓練から、各級指揮官の指揮の基礎原則を記述した教範である。

『内務班』 旧軍の内務班というところは兵士の寝室・学習・教育・兵器の手入れなど、兵営内の兵士が全ての起居を共にする場所である。

内務班は兵舎内の寝室単位に編成され、軍曹、伍長を最上級者として初年兵の二等兵まで、二〇人ぐらいで構成されている。

中隊長（将校）を父親に班長（軍曹級の下士官）を母親と見立てて家族的な「和楽」を作る趣旨になっていたが、実情は両親役が自室に引き上げたあと、二年兵や三年兵などの古兵が、連夜のごとく初年兵を鍛錬（制裁）するという光景が、各班で展開されたようだ。

各班には必ず一人や二人の制裁を趣味とする古兵がいて、要領の悪い兵や動作の鈍い兵、それに幹部候補生試験に合格すると階級を追い越される兵などが、特に目の敵にされたようだ。

制裁の方法は手やスリッパで殴るピンタが代表的で、「腕立て伏せ」から「^{ウツリス}鴛の谷渡り」「^{クニワカ}ミンミン蟬」のように、長い兵営の歴史から生まれた奇抜な演技まで、多彩をきわめていたようだ。

絶対服従を強いられる初年兵は、二年兵になって次年次の兵に仕返すことで、憂さを晴らすほかはなかった。将校や下士官たちも知りつつ黙認していたのは（黙認しない将校・下士官も多い）、それが民間人を軍隊生活になじませ、練度を高める早道の一つと考えていたからであった。しかし、戦線に出動すると、内部の融和が戦闘遂行に不可欠になるから、こうした制裁は影を潜めていった。（実際の所、私は嫌がらせの制裁の場面に出会したことはない）

齊々哈爾で御世話になった葛原中隊長は少佐に進級して師団副官に栄転し、次の中隊長・海辺政次中尉（少17期）はノモハンで戦死された。祈御冥福。

北支那戦線へ征く

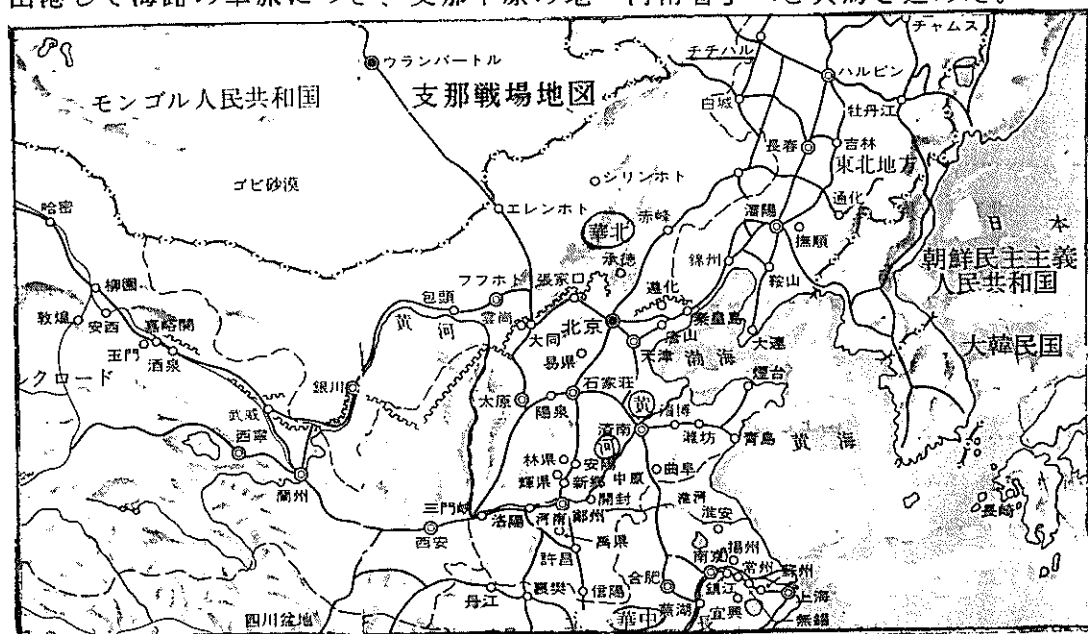
昭和6年御9月18日、奉天（瀋陽）郊外の柳条湖で、満鉄線路の一部が爆破された事件は満州事件と拡大し、翌年3月に満州国の建設となった。昭和になって初めての戦争状態であったから、国民の熱狂はいやが上にも盛り上がっていった。後日、軍籍に身を投じた私は、図らずも満州の地に足跡を残すことが出来たが、当時としては千載一遇の機会であり、時運の歯車が噛みあったと云うべきである。

昭和12年7月7日夜、北京郊外の芦溝橋に起こった謎の数発の銃声は、日支両軍の不拡大方針にも拘わらず、戦火は次第に支那全土に拡大し、泥沼の戦いが切って落とされたのであった。

前記した通り昭和14年に制定された軍備・軍制の改革と、外地に派遣した将兵の帰還と部隊の整備の必要上から、それと交替のために新しく歩兵3ヶ聯隊の6ヶ師団を新設した。これが32、33、34、35、36、37師団である。

昭和14年3月25日に編成を完結した第35師団（通称号は東兵団）の歩兵聯隊は、219聯隊・220聯隊・221聯隊の3ヶ聯隊であった。

私の赴任する命下された聯隊は、札幌歩兵第25聯隊留守隊で新編成された歩兵第219聯隊であった。軍紀を親授された聯隊は昭和14年春、小樽港を出港して海路の軍旅につき、支那中原の地「河南省」へと兵馬を進めた。



武運に恵まれた私が在満チチハルの原隊・歩兵第25聯隊から、北支那派遣の兄弟聯隊・歩兵第219聯隊付を拝命したのは昭和15年秋9月であった。万^{マン}里^リの彼方で戦っていた戦列に参加するため、意気揚々と大陸を縦横断する列車に乗車して出陣したのであった。

任地である河南省の黄河流域は、大陸文化の中心の地で、しかも歴史を賑わした幾多の英雄豪傑が覇を競った中原の地は、現在も北支那最大の激戦地であった。英雄達に因んだ若者が、青雲の志を抱いて赴任の途についたことは当然だが、弾雨飛来の戦場に身を曝^{さら}す不安もまた大であったと思っている。

当時の満州国と支那との国境を越え、万里の長城の東の起点である「山海関^{サンハイカン}」を通過し、世界の栄耀榮華の頂点をきわめた北京城を眺め、支那事変の導火線となった芦溝橋^{ロコウキョウ}をつぶさに見学し、出来ることなら嘗て蛮族の侵入を食い止めた万里の長城にも訪れ、中国の古代史と日本軍の戦跡を辿ってみたい心境だったことを、釜中の魚のようになった今、懐かしく回顧しながらワープロを叩いている。

夢としか思えないような各地の様相を、昔の支那を知らない人々のために、軍旅の道順に従いながら、戦闘以外のことを重点にして書いていきたい。

「参考までに」

満州事変当時の満州への軍隊輸送は、概ね広島の子品港からの船舶輸送か、下関から関釜連絡船の航路を使用して、それ以降は大陸縦貫鉄道輸送であったと思っている。

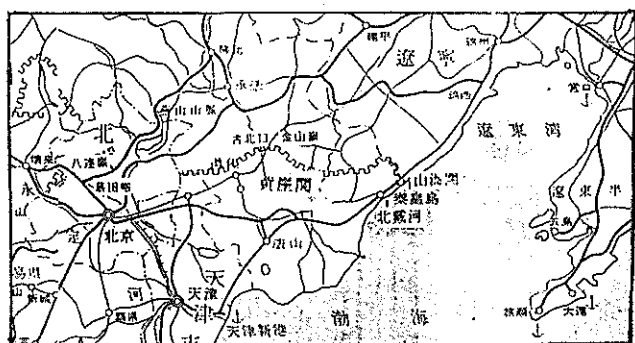
支那事変では朝鮮半島に駐屯していた師団は鉄道輸送で北支那戦線に出動し、内地部隊は普通、子品港からの船舶輸送であった。それは船舶輸送の方が一度に大量の人馬や火砲、自動車を輸送できるからであった。当時、私が学んだ記憶では、船舶では1人2トンの計算だったと思っている。即ち1万トン級の船舶では、約5000人と弾薬・糧秣の輸送が可能だったのである。

しかし飛行機輸送主体の現在から考えて見れば、補給路を延長した牛馬輸送の感じがする。

単独赴任や少部隊の場合は関釜連絡船を利用して北支那に渡っていた。幸い今回の私の赴任も列車で征途に就いたから、支那の歴史と景観を楽しみながら心の葛藤を紛らわすことができ、楽しく任地に向かったのである。

山海関の万里の長城

当時の山海関は満州と支那との国境を劃した国際都市で、山海関の市街は支那領であった。国際列車は必ず30分は停車して、密輸防止のために税関の検査が行われていた。軍人は検査が除外されていたのを幸いに停車時間を利用して、プラットホームから駆け足で「天下第一関」と云われた長城の見学に走ったものだ。私は2回も戦線を往復したから都合、4回この地を訪れ、戦後もまた足跡を残している。山海関は北戴河とともに現在は秦皇島市となっている。(上図参照)



現在の山海関の駅は内陸に移動して昔の面影は全くない。渤海湾の蒼波に突き出た長城の突端は崩壊し、現在の岬となっている老龍頭は新設されて威容を一新している。

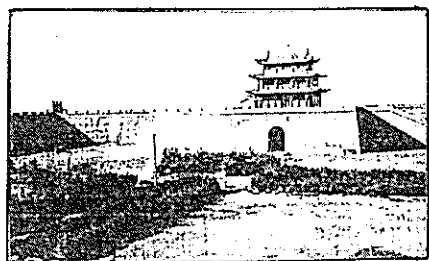
万里の長城は東端の山海関から北を廻り、昔の熱河省との国境を巡って北京北方の八達嶺を通り、西方・甘肅省の嘉峪関までの全長6000 km、大陸を東西に横切る大城壁である。

戦後、私は山海関から北京北方の八達嶺のほか、慕田峪、古北口、金山嶺、黄崖関、そして甘肅省・敦煌北方の「天下第一雄関」と呼ばれる「嘉峪関」を訪れている。



(上の写真は昔の山海関の長城の楼閣)

古代支那の歴代王朝が造った万里の長城は、「匈奴」または「胡」と呼ばれる遊牧騎馬民族から、辺境を守る防衛線であった。防衛線を守る軍司令官が節度使であり、地方長官も兼ねていた。(右は嘉峪関の長城の楼閣)



「胡」は漢以前の北方民族のことで、後には西域民族の総称となった。所謂、古代支那の北方の異民族の蔑称である。即ち鮮卑、突厥、契丹、靺鞨、回鶻などである。その靺鞨は隋唐時代には朝鮮半島北部に居住していたツングース系諸族の総称で、後に女真族(満州民族)となった。

満州民族を含む北方騎馬民族からの漢民族の防衛は時代が移り変わっても、民族葛藤の歴史は不変であった。反対の立場の異民族は支那本部を虎視眈々と狙っていた。それがヌルハチの清朝となり、後日の張作霖の北京入城となったのである。だから大正時代から昭和初期にかけて、満州民族の独立の気運が高まったことは肯定できるのである。

一望千里の荒涼とした満州から長城線を越えた途端、そこには世界が変わったように、大地には活気がみなぎっていたことが思い出される。そして私が初めて山海関の万里の長城を眼にした時の感想も、満州民族と漢民族との軋轢の歴史であった。蒋介石が関外（長城の外側）の領土を重要視しなかったことは、自己の領土の防衛が第一だと考えたからであろう。

又、支那は日本と比較すると、桁違いにスケールが大きいのに驚かされたのであった。日本の防衛思想の「城」は「点」に過ぎず、支那の防衛思想は古来から「点と線」の長城であり、圧倒されながら山海関を通過したのである。

秦皇島（前頁地図参照）

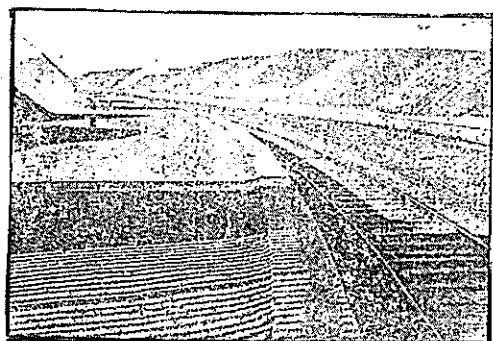
山海関の次の秦皇島の名称の由来は、秦の始皇帝が長城を築くために、約30万の軍兵と数百万人の農民を駆り出し、大量のレンガを焼かせたからである。当時は島であつたが、今は陸続きになったと伝えられている。

北戴河（前頁地図参照）

山海関から秦皇島、北戴河にかけての海岸は、楊柳や青松と白砂とが相映る風光明媚な海岸である。当時から北戴河は支那のニスと云われた別荘地で、現在でも中国要人の避暑地として有名である。嘗ては張学良も第何夫人かを引き連れて悦楽に耽った所であつた。一度は訪れてみたいと思っていた私も戦後に望みが叶って足跡したが、瀟洒な建物がたった景観はヨーロッパの縮刷版といった趣であつた。

山海関・秦皇島・北戴河から天津にかけての海岸線は、山のように塩が積み上げられていた塩の大生産地であつた。現在は見られない光景だが、私の脳裡には明瞭に刻み込まれている。（右は塩の山積の光景）

塩と綿花があれば火薬の製造は簡単で、北支那は綿花の世界的な大産地でもあったから、塩の山を見て驚嘆したのである。



支那では塩は昔から政府の専売であった。従って政府役人に賄賂^{ブイロ}を使った闇行為が盛んで、塩・茶・酒の密売組織は大陸をくまなく張り巡らし、闇商人が莫大な利益をえていた。そのため唐朝では、一斗以上の闇塩を売った者には杖^{ジョウツイ}刑、一石以上を売った者は斬首^{ザンシュ}の酷刑を科したとの記録が残っている。それほど塩は貴重品であった。

大陸文明が発達した宋時代（都は河南省・開封で私が赴任した街）は、火薬、羅針盤、活版印刷が発明され、紙の発明と並んで世界に誇る支那大陸の偉業であった。火薬に絶対必要な塩の大産地がこの海岸だと知った時、支那の爆竹が盛んなことは勿論、群雄割拠する軍閥が小銃弾製造に必要な火薬に不自由しない原因が判明したのであった。項を改めて「火薬と火器、城郭」に就いて下記してみたい。

支那の火薬・火器の発達

磁針の指北性を実用化した羅針盤、筆写用具としての紙、そして火薬は支那の三大発明とされることは上記の通りである。

唐時代に発明された黒色火薬は、宋代になると軍事上で実用化されてきた。火薬を用いた火器兵器は、当初は専ら燃焼性のものが主で、兵法書の一つである「武経総要」にもすでに毒薬煙^{ドクヤン}毬^キ、火砲などが見えている。

やがて爆^{バク}炸^ワ性火器も登場し、管形火器^{カンケイカキ}つまり大砲が発明されるが、城壁を破壊するほどの大きな威力を持つには至らなかった。

火薬は13世紀にイスラムを経由して西欧に伝わり、火器兵器として著しい発展をとげた。その結果、中世までの高い城壁に頼る城郭構造は根本的な変革を迫られることになった。ルネサンス期以降には、むしろ低平な要塞型の城郭都市へと変貌するのは、まさしく火器の出現によるところが大である。

それに対して支那では、火薬の実用化においては西欧に遥かに先行したものの、火器兵器としての発達は緩慢^{カンマン}であったことは否めない。

支那大陸の前近代における外からの脅威^{キョウイ}といえば、もっぱら北方遊牧民族であった。遊牧民族の軍事力は言うまでもなく、弓矢を主要武器とした騎馬戦術である。火器が武器としてあまり大きな比重を占めるに至らず、それが火器発達の緩慢さの一つの原因と言えるだろう。

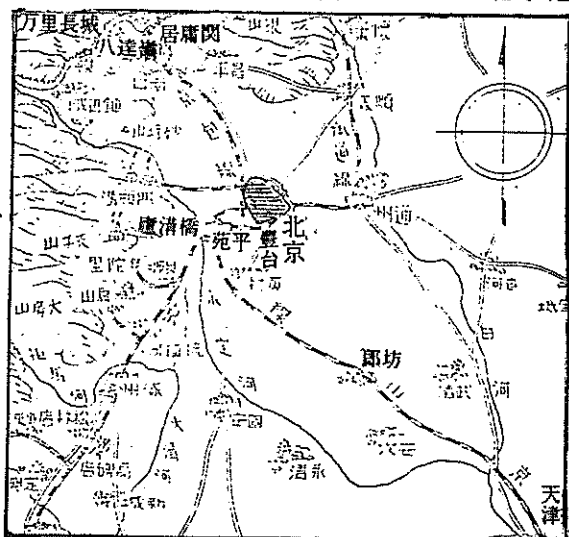
私の戦跡の地を振り返ってみても、城郭構造も宋元時代でも唐代と大差なく、後の明清時代に至っても事情はさして変わらなかったようだ。

以上で「山海関の万里の長城」を終えるが、詳しいことは拙書「数々の万里の長城に登る」「清王朝ゆかりの地の見学」の紀行文を参照されたい。

喫驚の北京城（下図参照）

何事につけて支那大陸のスケールの大きいのに驚愕されながら内陸へと進み、1860年の北京条約によって開港した「天津」に着く。いよいよ北京近しと欣喜雀躍して興奮していると、やがて古都の匂いが漂う「豊台」であった当時のことが想い出として遺っている。それから早や60年の歳月が経過して無常迅速を感じている。

日支事変の発火点となった芦溝橋は豊台の郊外である。現在は北京市内と繋がった都会地となっているが、当時は自然の景観が広がった農村地帯で、戦地に足を踏み入れた感じがしていた。（右は鳥瞰図）



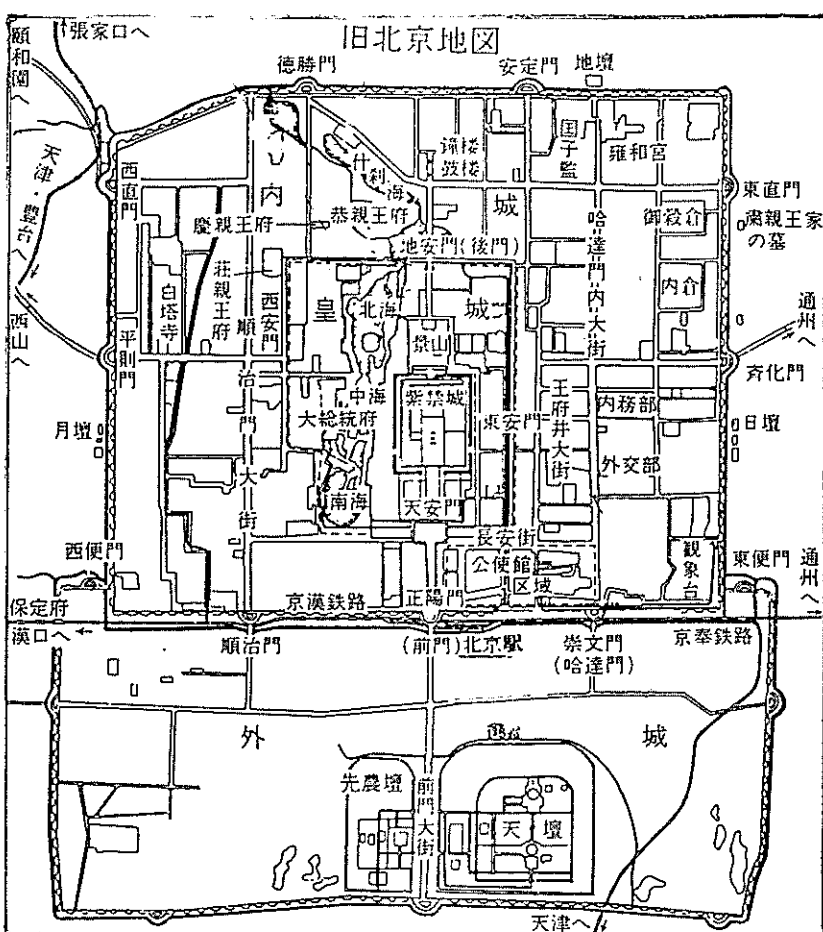
豊台には我が支那駐屯軍の旅団司令部が在り、旅団長の河辺少将と部下の第一聯隊長だった牟田口大佐は、事件発生時に名声を轟かせていた。不思議なことにも私がビルマ戦線に赴任したときには、ビルマ方面軍司令官が河辺中将（後に進級して大将）、第15軍司令官が牟田口中将のコンビであった。

当時の「北京」という呼称は「北平」と呼ぶのが正当である。1928年に国民党（孫文～蒋介石）によって支那が統一されて、都は「南京」に遷都した。それから1949年10月の共産党の人民政府が成立するまでの間は、「北平」と呼ばれていたのである。しかし日本では北京と呼称していたから、この拙文でも北京と書くことにした。

北京で先ず吃驚仰天したことは、威圧を感じさせられる壮大な大城壁の周囲に敷設した鉄道線路を、時間をかけてゆっくりと進行して北京駅に滑り込んだことであった。それは日本では想像もできない大陸的な光景で、万里の長城に匹敵する喫驚であった。今では想像もできないことであり、しかも、現在は全く其の面影もとどめず、表現する言葉も知らない。

鉄道線路に沿った大城壁は、北京の「内城」と「外城」の境界線を形成しており、北京駅は内城の南側の大門である「正陽門」の直ぐ前に位置していた。現在の天安門広場の南側に、「正陽門」と「前門」だけがボツンと遺っているが、其の場所が昔の北京の表玄関の北京駅である。（次頁の地図参照）

天に聳える雄大無辺の城塞都市である北京城は明清時代の遺産で、上記の通りに内城と外城に区分されていた。しかし共産党政権になった1950年から62年にかけて、内外の城壁は全て撤去されてしまった。
(右図参照)



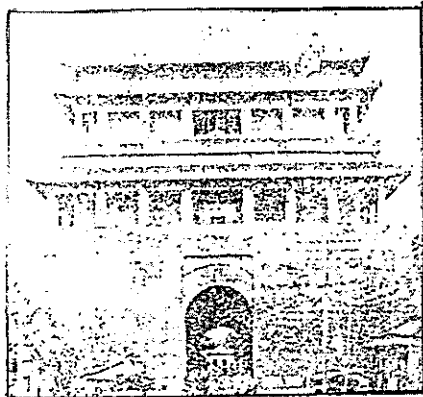
貴重な世界文化遺産を遺す知恵がなかったことは誠に遺憾千万で、子孫のために昔の情景を書き残したい一心で、この拙文を書き始めたのである。

老耄れてしまった今の我が能力では、残念ながら思うように書けない。

都としての北京の歴史は古く、「夏」の幽州、「周代」の燕の故地であったが、千余年前に満蒙地方に興った「遼」(936)がこの地に都城を築き、引き続いて「金」(1153)、元(1173)、明(1402)、清(1616)の5朝が宮居した帝都である。古くは燕京、北平の名がついていた。

私の脳裡に深く刻み込まれている北京の第一は、正陽門停車場の前に聳えていた巨人のような城門と樓閣であった。

それは在りし昔のままの主なき宮殿を九重にとりまく正門の一つで、石畳の上にそそり立つ城門上に、二重の屋根を反らして聳える樓閣の堂々とした偉観は、清朝三百年の榮華の名残をとどめていた。正に支那を表徴する建築美だ。
(右は数ある昔の北京の城門・樓閣の一つ)



北京城は前頁の地図のように周囲24kmの「内城」と、その南に接続する長方形の「外城」から成り立っていた。その城郭都市としての規模の宏大さは図抜けていただけでなく、城壁の高さ10は、厚さは基底約19は、壁上約16はという堂々たる黒煉瓦造りの城壁が巡らされていた。

旧「皇城」は内城のほぼ中央に位置して主要な部分を占め、周囲は10km余の城壁に囲まれ、その城内には「紫禁城」をはじめとして豪華華麗、この世の榮耀榮華きわめた禁苑があった。禁苑は皇帝以外は入れない場所である。

（支那の城郭都市については一項を設けて特別に記述したい）

正陽門停車場の前の広場に立ち、格調が高い樓閣を見上げていた眼を市街の道路に移すと、荷物を積んだ数十頭の「ラクダの隊商」の列が通っていった。アラビヤ、ペルシャ、イラン、トルコ、チベット、その他の異国の隊商が、引きも切らずに産物を運ぶ昔の写真は見たが、今の世界の大都市の北京で眼にしたことも驚きであった。

更に度肝を抜かれたのは「纏足」の女性の姿であった。家鴨のヒヨコのようにヨチヨチと歩いている寛束ない足取りは実に奇怪で、その驚きも亦、今になってもも忘れられない光景である。男の寵愛を受けるために歩行の自由を剥ぎ取られた纏足は、実に男尊女卑の最たるものであった。

（纏足については別に項を設けて記述したい）

以上は、北京を初めて眺めた正陽門停車場の前に立った感想の一端だが、これから正陽門をくぐって「内城」に足を踏み入れ、北支那派遣軍司令部に申告のために徒歩で歩いた。

外国公使館区域

前記したように当時の北京市街は、城壁に囲まれた巨大な二つの部分から成っていた。紫禁城を中心にした「皇城」を取り巻く外周の「内城」は、満州人と漢民族の官僚の居住区であり、内城の南に接した「外城」は一般の支那人の居住区であった。（前頁地図参照）

内城の中心部を形成する「皇城」は現在と違い、完全に城壁で囲まれた別な区域であった。そして南の天安門は明時代からの「承天門」で、南の正門にあたり、北の後門は地安門である。

皇城の北側は現在の地安門大街、南は東・西の長安街、東は河沿大街、西は直線ではなく曲がりくねっていた。即ち、中・南海の政府高官たちの事務・居住区で、一般の人は立入禁止となっている。

私が正陽門を通過して驚愕したことは、外国軍隊が駐屯する公使館区域が未だに、厳然として存在していたことであった。勿論「治外法権」区域である。現在はこの一帯は天安門広場の東側に隣接するところで、昔を偲ぶものは何物もなく、支那の屈辱の歴史を物語っていないのである。

外国公使館区域は即ち故宮の東南で、現在の北京駅から西側の一角を占めていた。北は東北安街、東は崇文大街（今の崇文門内大街）、西は公安街（今の天安門広場の東側）、南は内城の城壁（今の前門東大街と崇文西大街）で囲まれた矩形の一画であった。東西は約1200m、南北は約650mで森に囲まれ、通称は「東交民巷」と呼んでいた。

この東交民巷は一切の支那人の居住は禁じられ、日、英、米、仏、独、伊、白、蘭、丁の各国大使館が域内を占め、日、英、米、仏、伊の軍隊が駐屯していた。

各国駐留軍の各衛門の前には各国の歩哨が立っていた。日本の歩哨は規律正しく直立して立哨していたが、他の国の歩哨は銃を逆さに持った兵隊や、ふざけて笑っている者もあり、日本兵が軍紀厳正で一段と引き立っていた映像が、私の網膜に刻まれている。

この駐屯地（東交民巷区域）には、訓練のための練兵場も設けられていた。外国軍の兵隊達が蹴球を楽しんでいた光景も、明らかに我が記憶に遺っているが、大東亜戦争勃発以降にも何回か北京に出張したものの、外国軍隊の消息は記憶になく、多分、撤去されたのであろう。

私の80年に亘る生涯で、現実に治外法権だった当時に足跡を遺したことは、北京が始めてのことで、これも書き残したかった一つである。

外国公使館区域の歴史を繙くと、清朝以来、支那と国交のあったロシア人の居留地に起源をもち、それから外国の代表機関が集中していた。そして義和団事件の際に、義和団及び支那正規軍に攻撃された後、1901年の義和団事件議定書で支那の主権を排除し、外国護衛兵の駐屯を認めた「治外法権区域」としての地位を確保した。

このような性格上から、支那人にとっても悪用して、一時的な避難場所としても、利用されるようになったようである。

上記の治外法権の東交民巷の成立の原因は義和団事件であるが、その義和団事件について次に若干記載しておきたい。

ちなみに日本が支那駐屯軍を増強して華北を支配を及ぼしたのは、この北京の駐屯権を拡大解釈したものであった。

義和団事件

義和団事件とは1899年から1900年にかけて、山東省から北京周辺を舞台として爆発した事件である。列強の経済的進出にともなって流入した外国製品によって生活手段を奪われ、賠償金支払いのための増税に苦しめられた支那民衆は、キリスト教に対する反発も加わって、生活と社会秩序の破壊に抵抗する組織として、宗教的秘結社を各地につくり出した。

山東省に義和団という一種の呪術的な拳法の修行で結びついた狂信的なグループがあり、大集団にふくれ上がったのが義和団と称するにいたった。

彼等をはじめ「満に反し明を復す」（満人から漢人へ）を唱えていたが、やがて「清を扶け洋を滅ぼす」（清は満人、洋は外人）へとスローガンを変えた。「滅洋」の差し当たっての行動は「仇教」、つまりキリスト教徒や教会への襲撃、あるいは鉄道や電線など、外国の持ち込んだ近代的な施設の破壊であったが、これを繰り返しつつ北上し、1900年4月には北京に入城した。

事態に直面した列強は清朝政府に義和団の鎮圧を要求したが、政府側は和戦二派に分かれていた。この間に列強は派兵という強行処置をとったため、ついに清朝政府は宣戦布告を決定した。

こうして独、仏、露、英、米、豪、伊、日の八カ国を相手に戦争が始まった。北京駐在の各国外交使節団は、「皇城」の東南に隣接する「東交民巷」に籠城し、50日間にわたって清軍と義和団を相手に攻防戦を展開することになった。

先ず八カ国連合軍は天津に終結してから北京へ進撃し、8月に占領して外交団を救出した。連合軍は紫禁城内の宝物を略奪し、蔵書などを汚損したが、はじめて国際舞台に出た日本軍は軍紀厳正であった。共同占領の期間、紫禁城を中心とする地区を管轄した日本軍は、地域市民から好感をもたれたという。

この間、西太后は西安に逃避していた。しかし国勢の挽回を求めて、屈辱的な条件を押し付けられた北京議定書を認めた。そして連合軍も撤退したから、西太后は1年間の西安滞在を終えて帰京したのであった。

条約では莫大な賠償金や責任者の処罰などを認めさせるほか、北京から山海関までの12ヶ所に外国軍の駐留を認め、北京の「公使館区域」に軍隊を常駐させる権利を承認するなど、主権国家としては認めがたい条項も含んでいたものであった。

日露戦争の直接の原因は義和団事件の後に起こったのである。日清戦争の前後からロシアは極東政策を積極化して満州に進出し、朝鮮の支配をめぐる日本と対立していた。しかし義和団事件後も兵力を増強して満州の軍事占領を続けたため、これが動因となって日露戦争が勃発した。

紫禁城と故宮博物院 (25頁と下の図参照)

私が第35師団歩兵第219聯隊に赴任する際に北支那方面軍司令部を訪れ、多田駿軍司令官以下の軍最高幹部に申告した。その時の配慮により紫禁城や頤和園などの案内を受け、今日では見学できない所も全て足跡を残すことができた。その後は戦中に1回、戦後は2回に及び紫禁城を訪れている。

毛沢東の肖像を掲げた現在の故宮博物院は中華人民共和国のシンボルだが故宮は紫禁城と、その南側の旧皇城の一部で(25頁地図)、天安門は明の時代の「承天門」である。

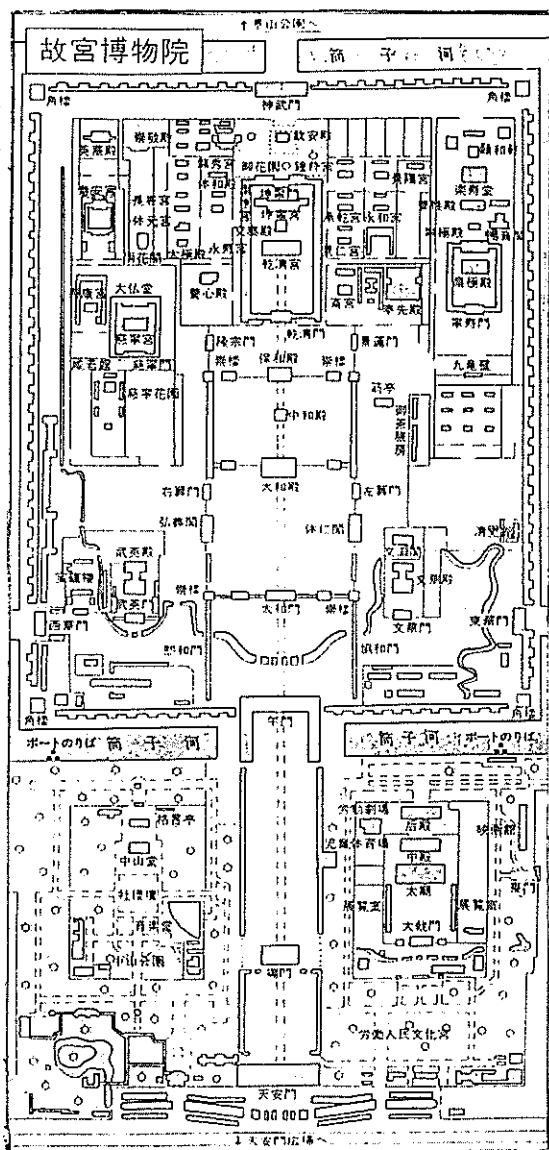
現在のような雄大で豪華な規模の天安門が建てられたのは、清の時代になってからで、最初に訪れたときには故宮という名称は聞かなかったように思っている。

北京は一千年の間、各朝廷が一国の首都として、それぞれ帝室の面目にかけて経営した上に、隆盛を誇った清朝の康熙、雍正、乾隆の三代に亘る燦然と輝く東洋文化の黄金時代も、実にこの地を中心として出現したのである。後年、北清事変(義和団事件)や、内乱によって荒廃したとは言え、老大帝国の旧都としての偉観を供えている。

皇城の北部区域に設けられている紫禁城は東西約760m、南北約1kmで現在も10mを超える城壁に護られている。

南の正門を午門、北の正門を神武門(明の玄武門)、東西の門をそれぞれ東華門、西華門と呼び、外周に幅約5mの環濠(筒子河)をめぐらしている。

紫禁城は500年以上も前のものだが、黄色の屋根瓦をのせた諸宮殿は現在



も尚、四百余州に号令した在りし日の偉容を見せている。

紫禁城は乾清門を境にして南北に二分されている。「南半分」は天子の朝儀に当てられた外朝の諸大殿で、太和殿（明の奉天殿、皇極殿）を正殿とし、元日、冬至、万寿の三大節および即位や立后など、国家的大慶の式典が行われた。そして外朝の正門である午門は、世界最大の門建築（高さ35、6 m）として知られている。「北半分」は皇帝、皇后の個人的な場としての内廷の諸宮殿となっていて、その正殿が乾清宮（殿）である。

外朝の諸大殿は古物陳列所、内廷の諸宮殿は故宮博物院となっている。

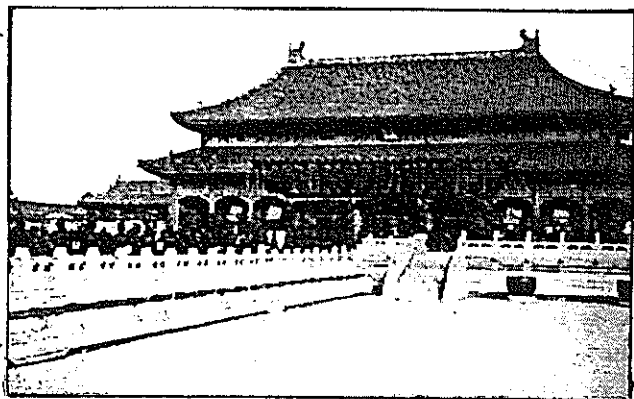
皇帝政治の象徴である紫禁城の建物はすべて黄琉璃瓦で屋根を葺き、壁と柱は朱色に塗られている。黄色は四方の中心を示す色であり、朱色は光を表現している。即ち皇帝の居城である紫禁城は天下、つまり世界の中心であり、常々光り輝いていることを象徴しているのである。

黄色は皇帝のみが使える色で、各所に見える龍と鳳凰も皇室専用である。即ち、「龍」は幸福と繁栄に恵まれた「花婿」を象徴し、皇帝の表徴でもある。「鳳」は雄で「凰」は雌であり、ともに瑞鳥の神秘的な鳥で、「鳳」は皇后の表徴であり、「花嫁」を象徴している。

落雷や放火などによって紫禁城は幾度となく火災が発生して、建物を焼失している。しかし乾隆年間に入ると宮殿の再建、新築、改築が大規模且つ豪勢に行われ、城内は一新して今日に至ったと言われている。

現在の紫禁城は北側の全域と、三和殿（太和殿、中和殿、保和殿）の東西にひろがる広大な部分は、未だに朝廷専用の区域として残されている。入城を許可された者以外は、文字とおり全世界に対して入ることを「禁じた」城であることは変わらない。

（右は乾清宮の全景）



幸いなことに私は当時の軍の威光により、紫禁城の北側の「禁止区域」も見学することが出来た。我が国の千代田の森の宮城（現在の皇居）も陸士在学中に何回か拝観が許可され、日支両国の「藐姑射の山」（仙人が棲むという支那の伝説の山で、転じて天子の御所）の神域を覗くことが叶えられたのである。

その感想を述べよと言われれば、日本の宮城の神聖さを感じさせられていた当時を思い起こすと、紫禁城はその上をいくと感じながら眺めていた。それは幽深の地に格調の高い豪壮偉大な「趣」を備えていたからであろう。

日本の宮城とは雲泥の差を感じさせ、桁違いのスケールに感動させられる中で、我が脳裡に閃いたのは満州皇帝となった愛新覺羅溥儀氏のことであった。

彼は1908年3才の時、死の直前の西太后によって皇帝の地位につけられ、大和殿で数千人の家臣にかしずかれて即位した光景が眼に浮かんでくる。

紫禁城や故宮博物院に就いては多くの出版物が出版され、私が更に述べる必要はない。しかし「太子密建の法」で語り継がれている、今は拝観が許されない「乾清宮」に就いては、書き残しておきたい。

太子密建の法

清朝第四代皇帝の康熙帝（1661～1722）の聖祖の晩年に繰り広げられた兄弟間の相剋は、勝利者である世宗にとっても悲劇であった。このため、世宗は即位の翌年、はやくも新しい皇位継承法を考案し、皇族や大臣たちに示して遵守することを誓わせた。これが「太子密建の法」である。その上諭には次のように述べている。

「昔から皇太子にはできの良くない者が多い。それは皇太子になると安心して、勉強する心と修養する意欲を失ってしまうからである。また、下心のある側近や官僚たちが、未来の皇帝であるとして甘やかし追従するせいでもある。その結果、皇太子の心に怠慢が生じ、奢侈に流れて道を踏み誤ることになる」

歴史を繙くまでもなく、聖祖の偉大をもってしても、皇太子問題については二度も失敗している。その原因を上記のように分析した上で、皇太子は立てるべきでないと結論した。しかし、皇帝も死を免れない以上、後継者を決めておかねばならない。この二つの、いわば矛盾する立場を調整して、帝が考えたのは誠に巧妙な方法であった。上諭に続いて次のように記している。

「朕はうまいことを考えた。朕は今、心の中では後継者を決めているが、それは発表しない。公にすると、先述のような事態がおこるからである。だから、その者の名を紙に書いた小篋に入れ、これを乾清宮の玉座の正面に掲げられた「正大光明」の額の背後に載せておく。ただし、朕が心中で一旦決めた者でも、その後の言動をみて、後継者にふさわしくなくなったと判断したら、躊躇なく名前を書き換えるであろう。朕に万一のことがあるって、後継者を指示する時間もなく、そのまま死ぬようなことがあれば、皇子や大臣たちは、そろつて小篋を開いてみるがよい。そこに名前の書いてある者が朕の後継者であるぞよ」

乾清宮の正面に今も掲げられている「正大光明」の扁額は、世祖の親筆であるが、その後ろに小篋をおいて次代の皇帝を指示する方法は、以後、清室の家法として受け継がれ、お家騒動もなく、暗愚な皇帝もなくなったようである。

皇城 (25頁地図参照)

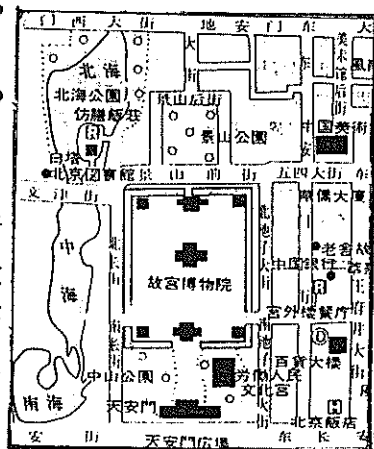
眩しく輝いていた^{コウサイリツリツ}光彩陸離の紫禁城の見学も終わって、玄武門へと進んだ。ローマ帝国建国よりも更に古い時代から大陸の歴史は続いている。秦の始皇帝が皇帝制度を創始して以来、この大陸に王朝が綿々として存在を続けてきた。そして清朝が滅亡して漸く大陸から王朝という存在が消えた。回顧すると民衆を豊かにした王朝などはあったためしがなく、苛斂誅求が王朝の状態で、その害は、王朝が賊としている草匪の害よりも、甚だしいではなかつたか。

それは皇帝が普通の人間とは本質的に異なる存在として扱われ、続けてきたからではないだろうか。それでは人間として失格であり、皇帝として成功したとも思えない。このことは世界に通用していると考えている。

玄武門の北側に聳える丘が皇城内の「景山」である。この意味は「紫禁城の風景を眺める丘」のことで、重畳として黄瑠璃瓦がきらめく紫禁城をはじめ城郭都市の古色蒼然として、聳が波打つ、壮大な寺院や大邸宅が眼下に眺望できる絶好の丘である。

この丘は明朝最後の皇帝「崇禎帝」の縊死した所である。山海関を守備していた明の「呉三桂」が敵の清に寝返り、清軍の北京入城を手助けしたことが原因であった。明朝から清朝に政権が移動する歴史に興味のある者は、登るに価する場所である。

(右は紫禁城、景山、北海、中・南海の地図)



私が初めて景山に登った時の説明では次のようであった。元の時代に築城した時に、北京が包囲される危険に陥った際、酷寒冷地の燃料である石炭が不足することを予想して、紫禁城の北側に石炭を山積みし、これを土壌で覆って植樹したのが始まりで、万樹山と呼んだとのことであった。これはまことしやかな嘘である。

その時の説明で又、「塗炭の苦しみ」の言葉の発祥の地は、この景山だと云っていたが、これもまた嘘である。「塗」は「泥」、「炭」は「火」で、塗炭の苦しみとは「水火の苦しみ」のことであり、書経の中の「桀」のところに出てくる言葉である。

現在の北京は観光名所を数多く開発したため、時間的に昔の古跡を割愛しているようである。しかし東京ならば東京タワー、大阪ならば通天閣である景山は、歴史と地理を学習すると考えて、登頂することを希望する。

「大液池」とは北海、中海、南海の三つの湖のことで、紫禁城に隣接したこれらの湖を掘りあげた土で、景山を築いたと云われている。（前頁地図参照）

しかし少しでも支那の歴史に興味のある人なら、景山のことは簡単に解ることだろう。支那では北は魔物の侵入してくる場所である。北方にある景山は、天子の棲む宮殿に魔物が侵入するのを防ぐ役割を果たしているのであった。

同じ理由で、皇帝の玉座（寺院の主な偶像も同じ）は、陰鬱で不吉な北向きではなく、必ず明るく幸運に恵まれた南に向かって据えたのであった。即ち、「君主は南面す」という言葉の通りである。

景山は以前から紫禁城に付属したもので、皇帝の遺骸を皇陵に埋葬するまでの期間、ここに安置された所でもあったと云われている。

景山の西にある歴代王朝の御苑だった所が、大液池の一つの「北海公園」であった。方面軍司令部の配慮によって公園にも案内され、散策することができた。園内は艶麗な瓊島（麗しい島の名称）に石橋が虹のように横たわり、その風致はきわめて幽邃閑雅で、満州民族の清朝皇帝が信仰したラマ教のシンボル、白塔が天高く聳えていた。

公園は北京市民の憩いの場として賑わっていた。そして支那本土に足を踏み入れてから初めて、明眸皓齒の白磁の肌をした支那姑娘に出会った。彼女たちはパーマをかけて胸にネックレスを飾り、白や色物のズボンをはき、裾のわれた支那服の姿は我々の眼を引き付けていた。

日本よりも支那の方が戦時色が薄くて洋風が流行していた。戦乱に馴れているのかもしれない。貧富の差の大きい支那の上流階級の子は、本当に優雅な暮らしをしていると感じ取っていた。サングラスをかけて自転車を乗り回す自由闊達な容姿は、若者の血を逆上させて興奮したことを思い出す。

豊かな緑と水に抱かれていた環境は我々を魅了し、その上、若者を悩殺するような光景は当時の日本では見られなかった。そのためか北海公園は忘れられない公園である。

北海の南に繋がる中海、南海は、昔は正式に清室に属していた宮殿であった。私は見学しなかったが、現在も昔のように事実上の権力者が独占している。

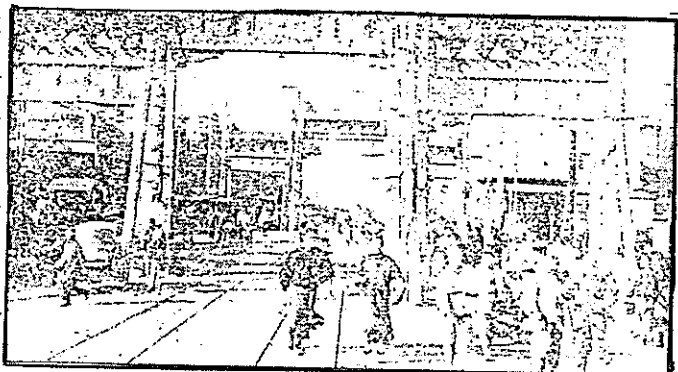
戦後、私は北海と中海の間に架かった橋の上から湖面にカメラを向けたところ、警官が跳んできてフィルムを没収された苦い経験がある。銘肌鏤骨して忘れられず、昔は今の鏡ではない。今は昔の鏡以上のように感じている。

高貴な雰囲気漂う紫禁城は君主は有名無実で、玉座だけが座っている。それと反対にこの中、南海には皇帝の称号はないが、皇帝のように権力を行使する共産党の首脳の玉座があるようだ。

内 城 (25頁地図参照)

内城は皇城の周りを取り囲んだ市街地で一般市民の住宅地である。この内城を散策した時の情景は微かに覚えているが、今では見られない古風な支那らしい街並みであった。何分にも本年はあれから還暦に当たり、60年も経過してしまっている。

昔の支那の何れの街にも大通りには木造の「牌楼」(牌坊)が建ち並んでいた。



この素晴らしい歴史的な風景だけは後世のために伝えておきたいのだ。牌楼こそ偉大な中華の国の素晴らしさを表徴し、街並みを落ち着かしているものはなかったと思っている。しかし現在は何れの古都を訪れても洋風化し、美しかった古風な雰囲気を取り去られてしまっていた。世界のために実に残念である。



(上は昔の北京の内城の牌楼)

ここ数年前から一部の街(河南省・開封、安徽省・屯溪など)では牌楼を再建し、「老街」「〇〇御街」などの名称で呼んでいるものの、歴史のイメージを再現することは不可能のようである。

(下の写真は開封の新しい牌楼)

「牌楼」とは市街の道路上に建った櫓門のことである。「牌」は古代には文字を書いた揚げ札をぶら下げてあったから、そのように名付けがたらしい。即ち意見書のようなものであろう。

大街(大通り)から横に無数に交差した「胡同」(横町通り)が通っていた。懐かしい思い出の横町である。そこには食糧倉庫から役所街に至るまで軒を並べ、そのほかは殆ど民家であった。しかし後日に通ってみると、喫茶店やカフェーの赤い火や青い火が並んでいたが、恐らく料亭、芸妓置屋、遊郭等の日本人専用の街もあったのではないだろうか。

私が赴任した当時の北支那方面軍司令部は大街に面した北京大学か、精華大学を接収して使っていたのではないかとと思っている。その近くに「文天祥」が幽閉されていた牢獄があり、そこを見学した記憶がある。彼は南宋末の忠臣で1275年に義勇兵を率いて抗戦し、南宋滅亡後も復興を計って捕まえられ、北京の牢獄で刑死した人である。獄中の作「正気の歌」は有名である。

碁盤の目のように整然と区画した市街は、遠い春秋戦国の時代から槐（エンジュ）の街路樹が植えられていたのか、雄大な樹相をていしていた。その中に樓門がいくつも聳える、貴族や大官だった屋敷の囲みがあり、甍が幾重にもうねらせていた。

見るもの凡てが驚きで新鮮であり、雄渾な書体で書いた墨痕鮮やかな看板を掲げた大街を、荷駄を山積みにした牛馬や大八車がごった返し、大北京の商売は盛大に繁盛していた光景も思い出の一つである。

もう一つの思い出は司令部の庭園で開かれた夜宴であった。多田駿方面軍司令官主催の歓迎会は「ジンギス汗」料理で、私としては初めての経験である。鉄の棒を三つ又に組んだ上に、細長い鉄の棒をわたし、その上に細長く切った羊の肉をのせ、焼き上がった肉を垂れにつけて食べたが、本当に野戦式そのもので、忘れられない思い出である。

この野戦式の夜宴で同席した先輩が、札幌歩兵第25聯隊出身の陸軍大佐で方面軍参謀の「有末精三」（29期）さんであった。終戦時は参謀本部第二部長の要職（中将）にあった陸大軍刀組の大先輩で、戦後、靖国神社で再会したときには先輩も夜宴を思い出して下され、話に花を咲かせたのである。

豪華だった野戦料理の夜宴に因んで「酒池肉林」に就いて記述しておく。

酒池肉林

今でも贅沢をきわめた酒宴のことを酒池肉林と云っている。池に酒をたたえ、林に肉をかけて酒宴を張ったという、「史記殷本記」に見える紂王の故事から出た言葉である。

紂王は酒池肉林の中で裸の男女を鬼ごっこさせ、自分は妲己（人名）を横にはべらせてその情景を見ながら、長夜の宴を張って悦に入ったのである。権力と富を一極集中させたあげく紂王は派手な散財に取り付かれ、乱行が多かったから周の武王に討たれて殷は滅亡した。夏の桀王とともに暴虐非道な帝王の代表とされている。

私も紫禁城や景山・北海公園を見物し、支那姑娘の美しさを堪能して夜はご馳走攻めに遣い、満腹した。そこで支那における「奢侈の変遷の歴史」を思い出していたが、昔の支那はひたすら喰らい飲み（牛飲馬食）、やみくもに富を蕩尽（使い果たす）したようである。

度をこえて贅沢をすることを「奢侈」という。「奢」は大きな者と書き、「侈」は多い人と書く。いずれも大量の酒、大量の肉という具合に、物量を中心とした紂王の奢侈の特徴を、言い当てた表現と言えるようだ。

常軌を逸した欲望の蕩尽は、ともすると残酷趣味と結びつき、紂王の場合も残酷性をあらわし、紂王の無道に耐えかねた諸侯が反旗を翻したのである。

この紂王を嚆矢とした支那の歴史では、亡国の天子が奢侈と淫虐に狂ったあげく自滅するというのが、王朝滅亡のパターンと化したのであった。

亡国の天子でなくとも、秦の始皇帝や漢の武帝といった古代の皇帝から、隋の煬帝や唐の玄宗などの中世の皇帝を経て、明の万暦帝といった近世の皇帝に至るまで、贅沢三昧でならした権力者たちの奢侈も、その基本構造においては紂王のケースと変わりはない。

いずれの場合も財宝、食糧、美女など、何でも手元に一極集中させたうえで、巨大な建造物や庭園を造営したり、大旅行をしたりして富を蕩尽したのである。

恐らく無上の権力というのは、これを手にした者の神経を、怖ろしい勢いで麻痺させるのである。皇帝たちは奢侈の物量作戦を、エスカレートさせていったのである。日本の政治家も歴史を繙き、前車の轍を踏んではならないと思う。

外 城 (25 頁地図参照)

外城は天子が祭典の儀式をする天壇や天神地祇を祀った寺院や陵墓、庭園などがあり、外城の全面積の半分を占めている。勿論、一般市民の居住地でもあり、北京市の大歓楽街を形成していた。

北京の冒頭に書いた昔の北京駅は、内城と外城の境界にあった「前門」の東側にあった。私が軍司令部に申告してからの北京滞在間は、前門付近にあった兵站旅館に宿泊していた。

前門界隈は昼夜を問わず殷賑をきわめ、流石に東洋各世界一の都の雑踏は東京や大阪の比ではなかった。人口はおそらく150万以上だったのであろうか。

支那人の習慣として食事は外食する人が多く、そのために広い大街通りの両側には、大小の「菜館」が櫛の歯を挽くように軒を連ね、大群衆が押し寄せているのであった。毎日がお祭りのようで東京のアメ横は顔負けである。

菜館にぶら下がっている家鴨の丸焼きが（北京ダック）、当時一匹が日本円にして50銭であったが、今の相場からすると想像もできない値段であった。しかし我々若者のような食欲旺盛な者でも、街頭に並んだ食品は不潔な気がして口にはすることはなかった。

大街通りには酒房や博打場もあり、横町には大遊郭街の灯が遠くまで連なり、その間に娼窟街、阿片窟までであるという噂まで伝わってきた。

「北津事変」（義和団事件）の時に8ヶ国の連合軍が北京に進駐した。その時、各国の若い兵士たちは前門の支那遊郭に押し寄せたことは想像に難くない。

その時の面白い話が伝わっている。日本軍の兵士たちも支那遊郭へと足を運んだ。その際に兵士たちは「さあ一行こう、さあ一行こう」、と同僚を誘って遊郭に行ったらしい。それがいつの間にか支那の人達に「サイコ、サイコ」という風に聞こえたと言う。その「サイコ、サイコ」が「性交する」という支那の「外来語」となり、全国に広まったのである。戦中に直接に話し掛けてみたが、どんな田舎に行っても性交することを「サイコ、サイコ」と云っていた。悪事千里を走り、好事門を行^イでず、である。

前門の支那遊郭には3000人の娼婦^{シヤウフ}がいるから、一見に値すると先輩から聞かされ、戦中に北京へ出張のとき隣り聯隊の同僚と見学に行ったことがある。勿論、道もわからず洋車^{ギョウシャ}（人力車）に乗って行くと、何百軒の女郎屋が延々と続き、入口も出口もわからない状態であった。

当時の支那では売買結婚のため嫁をもらえない男が溢れていた。そのために世界的な大遊郭が出現したのであろう。それを戦後に発生した自虐思想^{ジギョクシヨウ}から、日本軍が強制連行したなどと強調したのは、実情を知らない輩^{ヤク}である。

国田兵右衛門と韃靼漂流記^{タタラン}

私は大阪生まれの、小中学校は東尋坊で有名な福井県三国町の育ちである。そのため、北京の最後に三国町出身の国田兵右衛門^{クニタヘイエイモン}について紹介しておく。

激動の1644年、その10月から翌年11月まで、15人の日本人が北京に滞在していた。越前国（現在の福井県）三国浦の船乗り国田兵右衛門らである。彼等は1644年4月1日、商人竹内籐右衛門ら58名と船3艘に分乗し、松前（北海道西南部）へむけて三国港を出帆したが、途中、佐渡付近で大風に遭^{サウ}い沿^{エン}海^{カイ}州^{シュウ}の海岸に漂着した。

ここで土着民の襲撃^{シュウゲキ}をうけて43人が殺され、残る15人は韃靼国^{タタランコク}（清国）の都である盛京に連行された後、政府の移転にともなわれて、北京に入ったのである。

国田兵右衛門らはこの都で非常な厚遇をうけた。家屋を与えられ、食糧や衣服も充分に支給されたうえ、かなり自由に行動するのを許されていたらしい。ドルゴン（順治帝の叔父）も日本人に興味をもち、屢々彼らを引見している。しかし彼らの望郷の念は強く、年が明けて5月に帰国を願い出たところ、11月に出立を認められた。彼らは朝鮮・対馬をへて、翌46年6月に大阪に帰着した。そして国田ら2名は一行を代表して幕府の取り調べをうけ、2年にわたる異国での体験と見聞を報告した。これが韃靼漂流記である。

頤和園

《百歳の齡を期頤という。礼記に「百年を期と曰いて頤う」とあり、註に「人壽、百年を以て期となす。故に期という。飲食居処動作、養を待たざるなし、故に頤うという」。頤は養うである。》

紫禁城や皇城の見学を終わると、再び軍司令部の至れり尽くせりの殊遇により北京西北方約20 kmにある頤和園を訪れた。当時は頤和園という言葉は使用せず、専ら「頤和園」だ。

北京周辺に観光資源が各所に開発された現在では、紫禁城は別格として、万里の長城や明の十三陵は案内されるが、頤和園は除外されているようだ。支那の女帝や女傑と云えば則天武后と西太后だが、西太后に直接関係の深い頤和園を拙文では取り上げてみた。日清戦争に関係があるからである。

現在の我が国では、大東亜戦争があったことも知らない人がいるらしい。ましてや日清戦争・日露戦争のことは殆ど知らないようだから、明治以来の近々代史に興味のある者は、頤和園を訪れる価値は大であると信じている。

日清戦争の勝敗を大きく分け、いち早く清国（支那）が講和を請うにいたった原因の一つに、両国の海軍力に大きな落差があった。小型ながら性能の優れた新鋭艦隊の建設に成功した日本と、二隻の大型戦艦を有しながら艦隊は老朽化し、弾薬は不足し、乗員が訓練されていない清国艦隊との差であった。

（清国の戦艦の「鎮遠と定遠」は7300トンで、東洋一と謳われていたのに反し、日本の戦艦「松島」は4300トンであった）

清国の政治的実力者「李鴻章」が苦心して建設した威容を誇る北洋艦隊であったが、日清戦争開戦時には、その戦力は無に等しい水準に低下していた。

（二大戦艦は会戦と同時に撃沈され、我々の小学生の時に教えられたものである）

清末の独裁者だった西太后の還暦を記念する離宮、即ち「夏の宮殿」と称される頤和園を修理する費用に、海軍の予算の七年分を流用したと言われている。

清国の建国以来の特権に胡座をかいていた満州貴族の政治家たちは、日本との戦争よりも西太后の還暦祝賀の方を朝廷の大事と考え、巨額の国費を投入して頤和園の修築を強行したのである。西太后の歡心を買うために異議を唱える者も居なかったのがあったと言う。そのため頤和園には虚実をとりまぜた伝説が付きまとっている。

清朝の乾隆帝時代に現在の頤和園の規模にしたが、1860年の第二次アヘン戦争（アロー号事件）で英・仏連合軍に徹底的に破壊されたのを、補修、増築したのが西太后の頤和園である。

頤和園全景

キン　　エンキョウ
人　が　切　る　茶　　言

金が都を熱 京

A black and white photograph of a large, multi-story building with a prominent central tower or spire, possibly a church or institutional building. A large, leafy tree stands in the foreground on the left side of the frame. The building has multiple windows and a complex roofline. The image is somewhat grainy and has a high-contrast, almost halftone-like texture.

一、三級以上地方國家機關

うく設けられている。これは支那で取大取

左右の壁に写生画が描かれ、絢爛豪華なこ

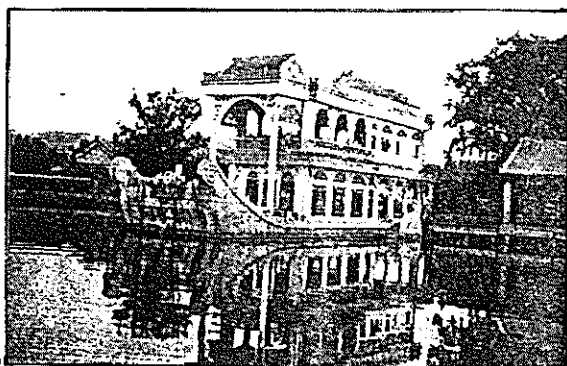
彼女はまた写真や肖像画に自分の姿を残そうとした。これは西太后の自意識過剰の現れである。その中に「大慈観音菩薩」に扮した珍妙な写真がある。これは70才を過ぎて漸く自覚し、罪滅ぼしのためであろうか。（右の写真の右から二人目が観音菩薩に扮した西太后である）



もう一つ面白いのは頤和園のシンボリックな存在の「石舫」は、西太后が一国の海軍費を浪費したことを皮肉っているものだ。（舫は二つ並んだ船の意）

「慈悲深い観音様」が清国海軍に対して、彼女の「壮麗で愉楽な隠居所」の建設に流用した資金に対し、何の返礼もしなかった、というのは正しくないとい皮肉っている、それは彼女の清国海軍に対する貢献は、将来に向かって何時までも、夏の宮殿の湖水に浮かぶ、大理石の船（石舫）という形で残っている、と。

それは清国艦隊のすべてが威海衛（山東半島の海軍基地）で不名誉な沈没をとげ、日清戦争に敗れ、清朝が滅亡した後もなお、存在している最上級の石の船だと意って良いだろう。



（右が昆明湖に浮かぶ大理石の石舫）

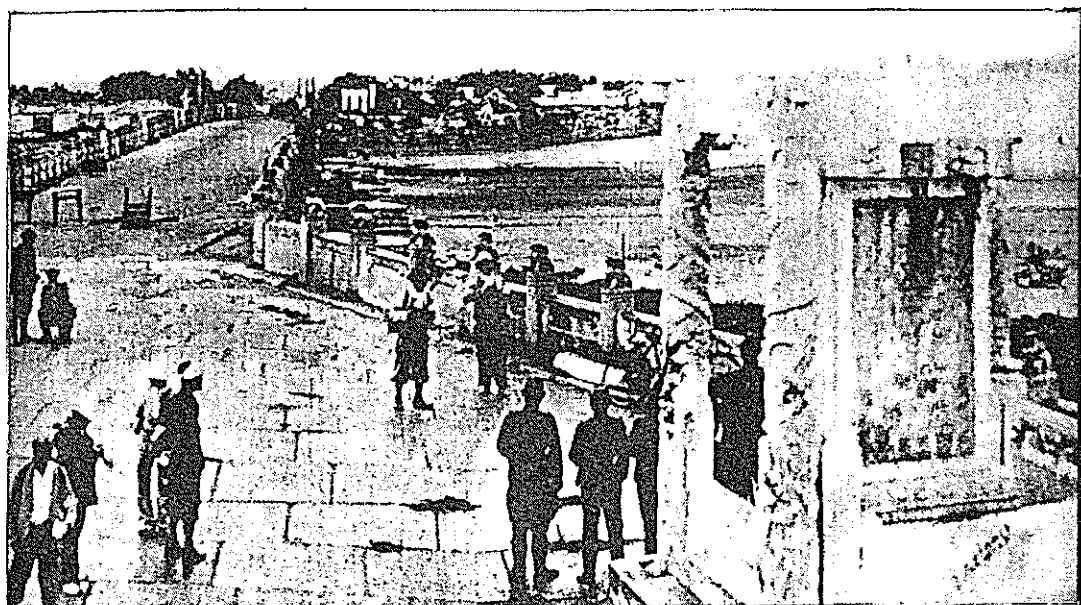
幸い私は赴任時と戦後も頤和園を訪れたが、石舫を見るたびに西太后の無謀に呆れたかえっていた。負けるのには負ける原因があるのだと、レストランとなっていた石舫の姿を目に刻み込んでいた。

又、頤和園の西太后の専用の厨房には常時、数百人のコックが働き、調理技術の究極をこらして料理を作ったようである。一日二回の正餐には百皿の料理が並び、そのほか二回の「小吃」（おやつ）でも四、五〇皿の料理だったという。

「牝鶏の晨」という言葉がある。それは西太后に最も適した言葉であろう。その意味は、妻が夫の権を奪うことである。（晨は朝の時を告げること）

書経（儒家の理想政治を述べたものとして最も重要な教典、）に「武王曰く、古人に言ありて曰く、牝鶏は晨するなし、牝鶏の晨はこれ家の索るなり・・・」牝鶏が晨を告げるのは陰陽が逆で、家道の衰えつきることを言う。索=つきる。めんどりは時をつくらないと言うが、最近の日本のめんどりは時を告げている。

日支事変の導火線となった芦溝橋



(上は事変当時の芦溝橋。右手前は詩碑)

芦溝橋は「永定河」に架かった橋の名称である。永定河は春秋・戦国時代では「易水」(易水)と称していた。旧制中学の漢文では「易水の歌」として必ず習っている。「風蕭々として易水寒し。壯士一たび去ってまた還らず」という歌詞に、我々若者は肺腑をえぐられたものである。

戦国時代に、北京を国都とする「燕」の太子「丹」の臣となった男が、この詩の作者で主人公の「荊軻」である。太子丹は荊軻に「恨みを報じ国難を救へ」といって、秦の始皇帝を刺すことを頼んだ。そこで荊軻は、到底、生きては再び帰れぬものと覚悟して都を発ち、現在の陝西省である秦の国都・西安をめざして行くうち、この易水の畔に来た。ここで彼は送ってきた人と別れなければならない。その時、朗々と「風蕭々として易水寒し」の詩を吟じたのであった。(紀元前228年のことである)

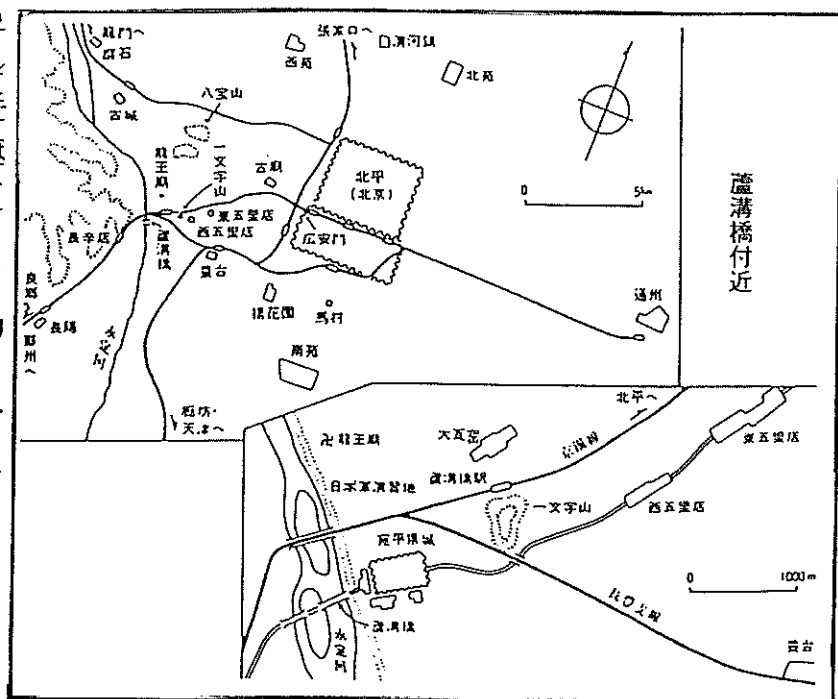
荊軻は太子丹の命を捧じて西安に至り、燕にかくまって置いた秦の敵将の首を土産に、首尾よく秦の始皇帝に謁見することができた。その場で、地図に巻いて隠しておいた匕首をとりだして始皇帝を刺そうとしたが、始皇帝もさるもの体かわし、荊軻は捕らえられて殺されてしまった。まさに「壯士」は「また還」らなかつたのである。荊軻の詩は切々たる悲壮味をおびて人の胸を刺す。

二千年後に再び易水の永定河に風蕭々と吹いて戦の火花が散ったのであった。

兵は猶火の如し

戦いは初めのうちに上手に始末しておかないと、手が着けられないほど大きく拡がっていくものである。

昭和12年7月7日、この歴史的な夜は七夕であった。一年の想いで牽牛、織女の両星が晴れて中空に相い会する頃、北京第一の観月の名所の芦溝橋畔に数十発の銃声が響きわたった。



(上図は芦溝橋付近の図と拡大図)

この夜、この時に限り、日支両国の運命の星は遂に相い離れてしまったのである。

その夜、我が支那駐屯軍に属す豊台駐屯部隊歩兵第1聯隊第8中隊は、芦溝橋（北京西南約12km）の北方約10kmの龍王廟付近で夜間演習をしていた。（この付近は演習には好適地で、我が駐屯軍も屢々演習をしていた）

この夜の午後10時30分頃、夜間演習中の我が軍に対し、ナゾの発砲があった。中隊長清水節郎大尉は直ちに集合ラッパを吹かせ、兵が終結したところへ、芦溝橋の方向から十数発の不法射撃を受けたのである。（このとき宛平県城の支那軍も銃撃を受けたと言われている）

この中隊は万一に備えて分隊長だけは30発の実弾を持っていたが、兵は全く持っておらず、全員が鉄帽すら携行していなかったのである。

中隊は演習を中止して人員の点呼を行ったところ、兵1名が不足していることが分かり、付近を搜索するとともに豊台駐屯隊長に急報した。間もなく不足した兵員は発見され、我が中隊には損害のないことが明らかになった。（豊台大隊長は一木少佐で、後にガダルカナルで戦死した一木歩兵28聯隊長である）

連絡を受けた大隊長の一木少佐は、北京城内の支那駐屯軍歩兵第1聯隊長の牟田口廉也大佐（後にビルマ派遣第18師団長、第15軍司令官、陸軍予科士官学校長）に電話し、「戦闘準備を整えて芦溝橋の支那軍と交渉せよ」との命令を受け、残存部隊を率いて西五里店に急行した。（前頁地図参照）

翌8日、午前4時20分、再び龍王廟付近から不法射撃を受けた。このとき一木少佐は牟田口聯隊長から「日本軍と承知しながら発砲してくるのであったら、断固、攻撃せよ」との指示が与えられた。

かくして午前5時すぎ、第8中隊は不法射撃に応戦して戦端を開き、一方の一文字山の一木大隊主力は芦溝橋の宛平県城外の敵を攻撃して、永定河川左岸の敵を駆逐し、支那軍を監視する態勢をとったのである。（前頁地図参照）

北京駐屯部隊は事態を重視し、森田中佐を北京より現場に急行せしめ、宛平県長及び外交委員会代表と不法射撃に関する交渉を開始すると共に、演習のため分散している北京の諸部隊に集結を命じた。

北京城内も事件発生と同時に、「宋哲元」隷下の29軍によって戒厳令がしかれ、交通が遮断されてしまった。芦溝橋付近にあった我が部隊はこれから一句、はやる胸を押さえて一文字山を一步も出ず、隠忍の日々を送っていた。

しかし20日の夜が明けて真夏の太陽がキラキラと輝き、北支那の空が青々と澄みかえっているとき、凄愴な気は芦溝橋一帯を覆ったのであった。

午後1時すぎ宛平県城の支那軍は、突如として我が部隊に砲撃を開始してきた。遂に河辺正三旅団長の命令一下、一文字山の我が砲兵陣地からの砲撃を皮切りに、全線の砲口は地軸をゆるがせて真紅な火を吐いたのである。

我が砲弾の威力は強烈で宛平県城は黒煙濛々と立ちこめた。以上が支那事変発端の最初の一齣である。

ナゾの銃声は誰が射ったのか

事変の引き金となった芦溝橋の銃声は誰が発砲したのか謎とされている。日本側説、支那側説があるが、日本側から発砲する訳はなく、もちろん支那側の誰かの発砲である。しかし支那側にもいろいろな説がある。

- ①日本側の夜間演習を眼前に見ていた宋哲元隷下の第29軍の一部が、恐怖心にかかられて射撃したのではないか。
- ②反蔣介石運動に失敗して華北の実権回復を狙っていた西北軍閥・馮玉祥につながる石友三、陳營生らの陰謀という説。
- ③中国共産党北方局第一書記「劉少奇」（後の中国国家主席で文化大革命で失脚）の指令という説など。

以上のようなものである。

現在では共産党の劉少奇が北京の大学生を利用して発砲したという説が、最も有力のようである。真相を知らない日支両軍は互いに相手を非難するだけで、北虜（塞翁が馬の塞翁のこと）を笑ったのは共産軍であった。まんまと謀略に引っかかった日本は、そのまま突っ走って行ったのである。

当時の共産軍は蒋介石の国民党軍に追われて延安に辿りつき、壊滅寸前の状態であった。そこで共産軍が仕組んだことは、蒋介石を共通の敵として対日戦に引っ張りこみ、蒋介石軍の戦力の低下を狙ったのである。そして共産軍が支那を制覇するという魂胆であった。

我が日本軍はまんまと共産軍にはめられて戦争に突入し、結果的には毛沢東の共産軍が力をつけ、蒋介石は大陸から追い出されて台湾に逃れ、悲しいかな日本は敗戦に追い込まれたのである。

芦溝橋事件発生後の7月29日に起きた日本人大虐殺事件の「通州事件」も、共産軍の画策説が強いようである。（北京東方地区）

昔から漢民族は異民族を軽視して、その名にムシ偏やケモノ偏をつけ、夷狄つまり野蛮人の軍隊と言いたかったようで、日本が使用していた皇軍を「蝗軍」と表記して、群をなして襲う蝗のような軍隊だと揶揄していたことが思い出される。

今私がこの歳になって戦争を振り返ってみると、出先の軍隊は戦争をしたがる傾向が強かったようにも思っている。しかし紫禁城をはじめ北京を兵火から守った日本軍は、心血を注いで停戦に奔走したことも事実のようである。

もしこの機会にと無統制に北京城攻撃を始めていたら、一千年の北京の文化は忽ちに破壊され、城内150万人の民衆と我が居留民4000人は、悉く戦禍に曝される運命にあった。

一方、当時の近衛内閣では政党出身の閣僚が閣議の席上、支那打倒を主張し、むしろ杉山陸軍大臣の方が、戦闘不拡大方針の堅持を訴えたようである。又、軍上層部はどのような状態であったのか。

断固一撃の戦闘拡大派と局地解決派の不拡大派の相剋が続いた。

拡大派の代表は、軍中央部では武藤作戦課長、関東軍では東条参謀長。

不拡大派の代表は、軍中央部では石原作战部長、

支那駐屯軍では池田作战主任参謀。

拡大派は支那の戦闘は数ヶ月で片が付くという甘い見方であったようである。

ナゾの発砲事件後の8月31日、支那方面軍が新たに編成され、軍司令官に寺内寿一大将が任命され、支那駐屯軍は第1、第2軍に分離された。

前記したとおり「兵は猶火の如し」で、初めの内に旨く処置しないと、始末に負えなくなるものである。

芦溝橋と一文字山へ（42頁地図参照）

方面軍の殊遇により支那事変の導火線となった芦溝橋を見学することが出来た。また戦後も1990年に単独旅行で再び足跡を残している。

私が赴任当時に訪れた際、青年将校の胸に強く印象に刻まれているのは、戦場となった「一文字山」一帯の荒涼と広がる砂漠地のことである。全く遮蔽物のない戦場に身を曝した兵士の心理を思うと、鳥肌が立ったのである。

一文字山とは一本大隊長が命名した砂山の名称で、酷暑炎熱の戦場に一の字を書いたように、横に低く見えていた砂山であったからである。（右は一文字山）

某上等兵は「攻撃は西瓜畑か芦溝橋」と詠んでいるが、砂漠地帯で飲料水がなく、将兵は渴に苦しんでいたのである。

その時、一文字山の近くに住んでいた老夫婦は、日本軍のために一生懸命に飲料水を運び、協力したという。

砂山の下にその旨を書いた立て札があり、我々が一文字山を訪れると老夫婦が小屋の前に顔を出し、笑顔で出迎えてくれた。我々はなにがしの金を老夫婦に提供し、当時の将兵に替わって御礼を述べたのである。そのことが今でも強く印象に残っていて、微笑ましい思い出となっている。（下は現在の芦溝橋）

当時は群雄割拠時代で頻繁に戦火が飛び、農民は馴れていたのであろうか。

赴任当時の昔の芦溝橋は古くさい朽ち果てた橋で、宛平県城も自然崩壊したみすぼらしい城壁であった。マルコ・ポーロが東方見聞録に書いたような、世界で最も美しい橋の面影もなく、486個の獅子像だけは1192年に完成した時のままであった。

当時の私は橋よりも実戦場となった一文字山の方に心が曳かれ、嘗ては西方から来た旅人達がすべてこの橋を渡って、北京入りしたのかと眺めていた。本当に世の中のことは知名度と実際の間には大きな落差があり、一般に一文字山は知らないが、芦溝橋の名称は永遠に残るのであった。（上の写真は乾隆帝の筆による「芦溝曉月」の事変当時の碑）



戦後に訪れた芦溝橋は大発展した北京の影響を受け、戦場となった砂漠地一帯は住宅地として開発され、一方では工場団地になって今昔の感がしていた。

昔は河畔の僅かな楊柳の緑が目にしみていたことを思い出す。しかし今では永定河の堤防も街路樹で青濃く染まり、一文字山はいずこに消えたのであろうか。昔の面影を残すものは何一つない。

ただ河畔に立っている「芦溝暁月」の碑石と「刻文碑亭」だけが、外装を新たにしてお出迎えてくれた。その碑と橋の欄干上の獅子の柱頭486本だけは、ナゾの発砲事件を知っている生き証人だが、黙して語らずである。

芦溝橋を渡り往復して向かった宛平^{エンペイ}县城は、古城は完全に取り除いて築城し、絢爛豪華な樓閣まで聳えていた。南京大虐殺記念館や柳条湖の9・18事変記念館と同様に、自国民を誘導するために「中国人民抗日戦争記念館」を城門前の一角に新築していた。

共産党の大幹部の一人である「劉少奇^{リウショウキ}」が火をつけておきながら、自らは頬かぶりして、すべての罪は日本だと言う「人民教育記念館」であった。

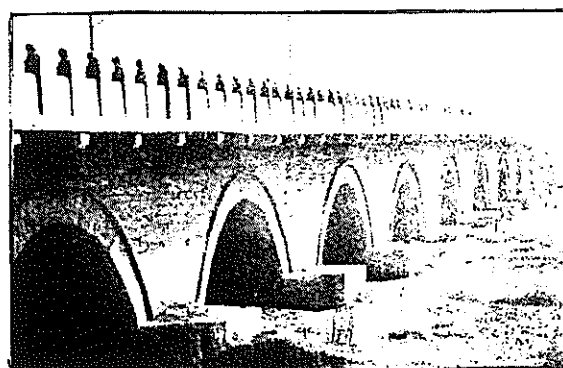
(詳細は北京郊外独り旅の紀行文を参照)

芦溝橋の袂にある現在の碑亭

41頁の写真と対照すること



現在の芦溝橋の外観



芦溝橋の獅子柱頭の傍らに立つ

1990・6・22



万里の長城

私が初めて赴任した当時の万里の長城は荒れ放題に崩壊していた。明の13陵も居庸関も同様で、私の万里の長城の見学は戦後のことである。しかし隋の煬帝が建設した大運河とともに、世界三大土木工事の一つだから、この拙文に取り上げることにした。

「天下第一関」の山海関と、「天下第一雄関」の嘉峪関については、21頁に記載した通りで重複を避けた。

万里の長城は、いつごろ誕生したのだろうか。支那の史学界では、紀元前五世紀に小型の長城が築かれていた、というのが定説となっている。

もっともそれは、辺境に点在する砦や見張り台を大ざっぱに繋いだものに過ぎなかった。やがてこれらの城壁は、短い距離であっても、国境を示すものとなっていた。本格的な長城が生まれたのは戦国時代である。諸国の国境地帯に多くの長城が出現したが、それは各国の相互不信の産物でもあった。

北方の遊牧騎馬民族の侵入を防ぐという発想で、各長城を繋いだ人物が初の統一王朝を建設した秦の始皇帝である。長城の建設は主として蒙恬將軍が担当した。「史記」によると、次のようである。

「・・・秦は天下を統一しおえると、蒙恬に命じて三〇万の兵を率い、北方において異民族の「戎」、狄を追い払わせ、黄河以南の地を手に入れた。また、長城を築かせ、それは地勢に従って、險阻な場所に「塞」がつくられ、臨洮（秦代における県名で万里の長城の西の起点、現在の甘肅省）から始まって遼東に達し、蜿蜒一万里あった」と記されている。

長城の建設は、天下統一後の一大土木工事として行われたが、秦の滅亡が、この工事に駆り出された陳勝・吳広の蜂起によって引き起こされたことは、歴史の皮肉としかいいようがない。

史記によると、長城の建設のため民戸三万戸を北辺に移して使役し、老弱賦役幾百万人なるを知らずとも書いてある。これがために民の怨恨を買ったことは夥しく、総監督の蒙恬さえも毒薬を飲んで自殺し、皇帝の逆鱗にふれて一時に460人も坑殺されたとも言う。

このような調子で彼のやり口はすべて破天荒極まり、その点に於いては始皇帝は一世の暴君であり、偉人であったとも言えるだろう。

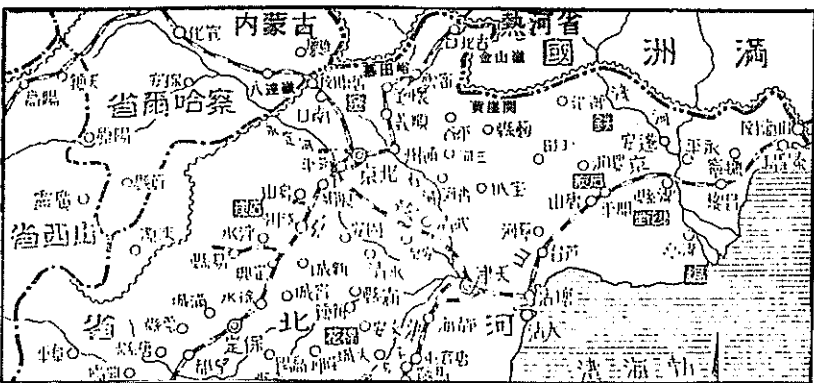
始皇帝は大長城を築造して万代不易と自惚れて死んだが、北方の形勢は彼の死後、俄然として一変し、僻地に移住して使役を命じられた者は故郷に帰り、北方の蛮夷はいよいよ猛威を振るいだしたのである。

そして匈奴が勃興して諸戎を破り、さきに蒙恬が平定した領土の大部分は回復されてしまった。

やがて漢の高祖の時代となって高祖は自ら匈奴を親征したが、天寒くして士卒、指を墮すもの10に2、3とあるように、凍傷者続出して遠征は完全に失敗した。高祖は容易に征服できないことを知るや、自ら屈して和を結び、毎年酒米を貢いで彼らの攻撃を中止させようとした。その後の長城をめぐる興亡史を辿れば殆ど果てしがなく、省略したい。(下図是北京北方の長城線図)

私が初めて万里の長城(八達嶺)を訪れたのは、日中友好条約締結(1978)後の1980年(昭和55年)である。

それまでは長城が不整備のため未



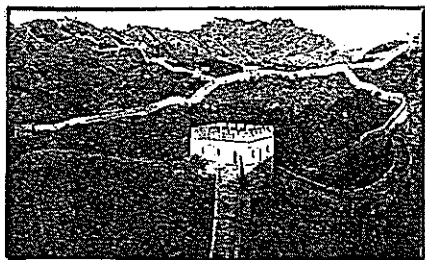
公開であった。先ず最初に解放され、訪れた万里の長城が八達嶺であった。

続いてシルクロードの嘉峪関、北京北方の慕田峪、山西省・大同の最も古い長城、旧満州国だった旧熱河省との国境線をなす古北口、金山嶺、黄崖関である。(戦中の昔に足跡した山海関は別格である)
(右は黄崖関長城で明時代に築城)



嘉峪関付近の長城は高さ2mほどの土塼に過ぎないが、超乾燥地帯の砂漠に土を築き固めた土塼は、崩壊の心配はないようだ。支那の馬は背が低いから2mでも大障害物であった。

作戦中に踏破した小規模な長城としては、河南省と山西省の国境線をなしていた封門口の長城である。太行山脈の峰を繋いだ長城は、守るに易く攻めるに難しであった。



万里の長城から支那の歴史を眺めると、漢民族と異民族との葛藤の歴史である。特に北方の騎馬民族、遊牧民族、満州民族との興亡、征服、衰運、崩壊であった。蒋介石が満州を異民族の土地として重要視しなかったことも頷ける。

地上のことも地下の地殻変動と同じく、地震が起きても不思議ではないようだ、と最近思うようになってきた。(上の写真は金山嶺長城・明時代に築城)

騎馬民族の英雄である北方の匈奴^{キョウフド}、胡^コなどの戎狄^{ジウテキ}を防ぐための長城は、古代の支那の北面に張りめぐった垣根であり、鉄条網であり、逆桶であったから、長城にまつわる故事や物語も多く、子孫のために若^{ニハ}干^{カン}記載^{キザイ}してみる。

狼^{ロウ}煙^{エン}

昔、支那では戦時や非常時の合図のために、狼煙台^{ロウエンダイ}に薪を焚^{マキ}いたり火薬に点火したりして、空高く火煙をあげた。万里の長城の各所に見える、監視所となっている望楼^{ボウロウ}も狼煙台である。その名称になぜ狼^{ロウ}という字を書くのか。それは狼の糞^{フン}を加えて焼くと、煙がよく上がるからだと言われている。私が西部の長城を見学した時の感想では、砂漠のために燃やす材料が乏しいから、狼の糞を焚いたのではないかと判断した。（狼煙、烽火とも書く）

人間万事塞翁^{ソウオウ}が馬^{ウマ}

北方に住む異民族を総称して胡と言ったが、これは胡の地との国境にあった城^{ジョウ}塞^{サイ}（城のある居住地）のあたりでの話である。

この地に占^{ウラナ}いに通じた老翁^{ロウオウ}がいた。ある時に翁の馬が胡の地に逃げてしまった。近所の人気が毒に思っ^{ナラサ}て慰^{ナグサ}めにきてくれた。すると翁は一向に気に留めている様子もなく、「これが幸福に転じるかも知れない」と言った。

数ヶ月もたつと、その馬は胡の良馬を引き連れて帰ってきた。人々は早速お祝いの言葉を言いに来たが、翁は「これが禍^{ワザワ}に転じるかも知れない」と、少しうれしそうではなかった。

翁の家は良馬で富むようになったが、やがて乗馬の好きな息子が、落馬して腰^{コシ}の骨を折ってしまった。可^カ哀^{アイ}そうに思った村人は再び翁を慰^{ナグサ}めにやってきた。翁は「いやいや、これが幸福になるかも知れない」と言って平気であった。

その後一年たった頃、胡人は城塞を攻撃してきた。村の若者は弓を引いて戦い、10人中9人までも戦死した。しかし翁の息子は不具者のために戦争に駆り出されず、父子ともに無事であったと言う。

これは「淮南子^{ヘンナンシ}の人間訓^{ジンカクワン}」にある故事で、「禍福^{ワフク}は糾^{カフ}える縄^{ナヅナ}の如し」（史記）と言うように、「人間の吉凶禍福の定まり難いこと」を意味している。

王昭君^{オウショウクワン}

漢の元帝（紀元前47～33）のころ、匈奴^{シウフナウ}の酋^{シウ}長^{チヤウ}は漢の王女を嫁にもらいたいと要求してきた。匈奴^{キョウ}の機嫌^{ケン}をそこねては漢の国が危ないと、帝は画工^{ガクウ}に命じて後^{ウキ}宮^{キョウ}の女性の似顔^{ニガオ}絵^エをかかせ、一番^{ミツク}醜^{シウ}い女^メを嫁^{トブ}がせることにした。

ところが誰も匈奴の酋長の嫁に行こうとする者はない。宮女は争って画工に賄賂を送ったが、王昭君だけが袖の下を使わなかったばかりに、醜く画かれて帝に指名されてしまった。出発に臨んで元帝は引見して王昭君の美しさに驚いたが、いまさら変更もできず、泣く泣く彼女を手放したという。

王昭君のことは旧制中学の漢文でも出てくる話である。彼女の墓は内蒙古の呼和浩特にあり、悲劇の女性とされている。

天高く馬肥ゆ

匈奴は二千年以上も前から漢民族の悩みの種であったから、長城を築いたり、酋長に女性を嫁がしたりしていた。それほど匈奴は乗馬と騎射が得意であった。

彼らは放牧と狩猟が主な日常で、大草原の唯一の交通機関は馬である。春から夏にかけて草を腹いっぱい食べた馬は、秋には丸々と肥えている。やがて草は枯れて厳しい冬がやってくる。零下何十度の酷寒の期間は自分の体をすり減らし、ゲッソリと痩せこけて春を迎える。毎年これが繰り返してである。

私もモンゴルを旅したが、秋は晴天が続いて天は高く、馬は越冬準備のために懸命に草を喰らい、はち切れそうに肥えていた。これが「天高く馬肥ゆ」の語源であろう。

杜甫の祖父も「秋高うして塞馬肥えたり」と詠じている。（塞馬は塞の馬）

雁書

漢の武將の蘇武は武帝の天漢元年（紀元前百年）、帝の使いとして捕虜交換のために匈奴の国に赴いた。ところが使節団はすべて捕らえられ、死ぬか降伏するかと脅かされた。しかし蘇武だけはついに降らなかった。

蘇武は穴蔵に閉じこめられて食も断たれたが、毛氈をかみ雪をたべて飢えをしのいだ。死なない彼を見た匈奴は人気のないバイカル湖に送り、牡羊を飼わせることにした。そして「牡羊が子を産んだら国に帰してやろう」と言った。

厳しい冬に盗賊が彼の牡羊を盗んでしまった。しかし彼は野鼠を捕らえて飢えを凌いでいた。それでも彼は匈奴に降ろうとはしなかった。

荒れ果てた地の果てに流されてから何年もの歳月がたった。単調な毎日が続く中で、広々とした空を渡る雁だけは、蘇武にその故郷を想わせたのである。

武帝が死に、次の昭帝の使いが匈奴にきて、蘇武を帰して欲しいと要求した。匈奴は蘇武は死んだと答えた。そこで漢使は言った。漢の天子が狼をしている時、一羽の雁をしとめると、雁の足に蘇武が生存していると書いた帛が付けられていたと。この故事から手紙を雁書と言うようになった。（漢書蘇武伝）

北支那を南下して中原へ

支那は昔から南北の区別があった。北支那は主として黄河の流域地で、現在の直轄地域、河北、山東、山西、河南、陝西、甘肅省の地である。南支那とは揚子江（長江）流域で、今の湖北、湖南、江西、浙江、福建、広東省である。

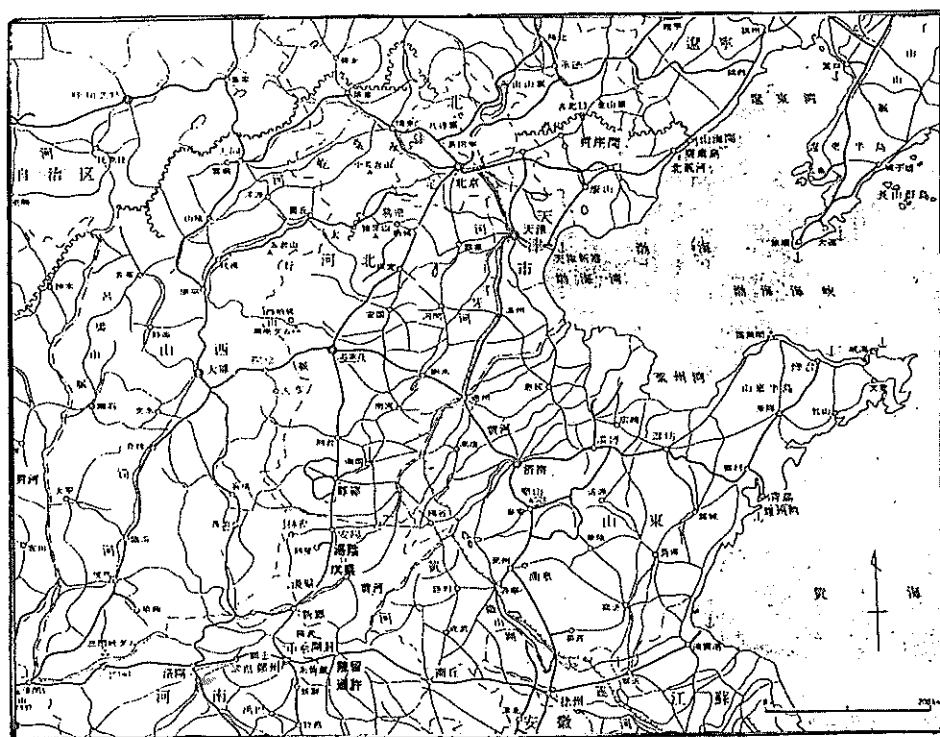
中原とは、上記の中で黄河と淮水に挟まれた広大な地域で、殷、周など大陸古代文化の発祥の地である。辺境や蛮国に対して天下の中央の意味であり、覇権を競う場となった。

支那古代において、純粋な支那人ともいうべき漢民族の根拠地は、北支那に限ったものである。漢民族は今の河南省あたりを中心とした北支那を根拠として、その四隣の異民族と区別して自らを「夏」または「華」と称し、あるいは諸夏、中華、中土等と号して威張っていた。

当時云うところの中夏とは、今の河南省を中心とした山東、山西省の大部分と、直隸区、河北、陝西省の一部に過ぎない。この中夏以外に住む種族は、戎狄もしくは蛮夷などと称せられ、排斥され軽侮された。

（古代の支那では広西、四川、雲南、貴州省は区域外に置くべきであろう）

下図は私が行動した北支那の地図である。



春秋戦国時代に世に出た文武両方面における大人物を見渡しても、みな北支那の産で、南支那人は見当たらない。例えば儒家の孔子、孟子、荀子ごとき、道家の老子、莊子のごとき、兵家の孫子、呉子のごとき、また墨子も韓非子もみな北支那から出ている。

実際の舞台に活躍した蘇秦、張儀、管仲など、いずれも同様である。要するに先秦時代には北支那と南支那との間に、文武に大きな懸隔が存在したことは、争いがたい史実と云わねばならない。

秦漢以来、漢民族の勢力範囲が拡大されるとともに、北方の匈奴の勢力に押されて漢民族の南方に移住するものが多くなり、南方の非漢民族も次第に漢民族化して、南支那も漸次開発されていった。

今から約1600年前、西暦4世紀の初め頃となると、匈奴、羯、鮮卑などの五胡と称せられる塞外種族（長城の外）が来て支那を占領して、漢族が建てた晋は洛陽、長安の旧都を逐われ、建康（今の南京）に遷都した。

隋唐統一後に南支那は開発されたが、それは南支那の北部、すなわち現在の江蘇、安徽、浙江、江西、湖北省に限ったことで、南支那の南部は唐時代に於いても、その文化は微々たるものであった。（以下の年代は略す）

以上、北支那の歴史の極く一部を記載した。当時、北京を免つて黄河流域の戦場へ赴任する時も、支那の古代史を頭に描きながら乗車したことを思い出す。

北京の方面軍司令部に申告に訪れて以来、諸般にわたる御高誼によって偉大な支那の片鱗を垣間見て、心中は感激と驚きで交錯する中で、勇躍して正陽門前駅を後にして戦線に向かった。

北京駅構内は薄暗くて群衆の悪臭に耐えられない状態であった。殆どの支那人が汚い布団を担いで乗車する光景も、日本国内では見られない現象である。（文化大革命時代の中国も同然であった）

我先にと人を押しのけて乗車する中に弁髪の人を見掛けた。我々が子供の頃の町の祭礼で、広場で軽業をして小銭をもらう支那人の弁髪を思い出した。

『弁髪』

弁髪とは満州族の男性の習慣で、前の額を剃り、後頭部だけに頭髪を残して、それを一本の長い「おさげ」にしたものである。

明朝を倒した満州族の清朝は、隷属の証拠として被圧迫民族の漢民族などに強制的に押し付けた習慣である。満州族以外には弁髪の慣習がなかったから、清朝が倒壊するとはなくなった筈だが、まだ一部に残っていたのである。

「豚の尻尾」と呼ばれた皇帝の弁髪も、光緒帝のときに廃止したはずと記憶していたが、北京駅頭で拝見したことは幸運であろう。

スケールの大きい支那に圧倒された懐かしい思い出を反芻しながら、内城すれすれに走る線路上の車窓から、壮観目を驚かす「天壇」の偉容を眺め、遂に城壁は遠ざかって去り、大平原の鉄路「京漢線」（北京～漢口）を南下した。豊台を通過するとすぐ芦溝橋であったが、京漢線建設に面白い話がある。

『支那政府は1889年、第一回鉄道会議で初めて京漢線建設案を提唱した。しかし、そのまま10年近くも放置されて、立ち消えになっていた。しかし、それから当時工事中だった京奉線（北京～奉天）の建設に所属していた英国人技師に、京漢線の工事を着工させることになった。ところが有力な反対論が清朝の宮廷内で起こった。

「神聖な帝都に蛮夷の手による火車（汽車）などを侵入させることは、許すべからざる冒瀆である」と。それはもっともなことだとの賛成の声が絶対多数であった。

それなら帝都に近い「芦溝橋」を起点にすることになり、最初は京漢線を「芦漢線」と呼んでいた。これが京漢線となり、国民政府が北京を北平と改めたので「平漢線」となり、それが支那事変で北京の名が復活して京漢線となったのである』

京漢線を南下すると、春秋戦国時代の趙とか秦とかの国名がいろいろと思い出され、華やかだった昔の歴史が偲ばれてきた。春秋時代と言えば紀元前770年から403年までの約300年間で、例の越王勾践や呉王夫差などの覇者が活躍し、孔子や老子も、この時代の人であった。日本では考えも及ばない時代のことだ。旧制中学以来の漢文や東洋史の实地踏査のような気がしていた。

その時代から戦争の絶え間はなく、弱肉強食の世の中であったが、一方に於いては列強が対立して富強を争ったため、文物が大いに興ったことも事実である。これらのことが私の脳細胞を引き付け、戦場を駆け巡った青春時代から、支那の文化に興味を抱き始めた。

『保定』に停車した。立派な城壁に囲まれた城塞都市であった。保定といえば軍官学校である。蒋介石をはじめ、近代支那の将領、高級軍官を育てあげ、支那軍内に隠然たる勢力を持っていたことで知られている。ここを巣立った將軍たちは、旧式軍閥として、あるいは抗日の將軍として活躍したのであろう、と眺めていた。（後日、日本軍の予備役将校養成の幹部候補生隊ができた）

『石家荘』に一泊した記憶がある。何の目的に宿泊したかも不明だ。ただ石炭の産地らしく、道路上に灰のようなものが拡がっていたことを思い出す。趙の時代からの古都で、石門とも呼んでいた。戦後も訪れたが大発展して、田舎臭かった昔の面影は全く消えていた。

『邯鄲』は例の「邯鄲夢の枕」の・・・廬生の夢でありにも有名である。又、私の長兄は邯鄲に司令部をおく独立混成第一旅団司令部付の大尉であった。

邯鄲の夢

唐の玄宗の開元年間のことである。呂翁という道士（道教の士）が邯鄲の宿で休んでいると、みすばらしい身なりの若者がやってきて呂翁に話しかけ、あくせくと働くが苦しいのだと不平を述べた。若者の名を廬生とிட்ட。

やがて廬生は呂翁から枕を借りて寝た。陶器の枕で両端に穴があいていた。眠っているうちに穴が大きくなったので、廬生が入ってみると、そこには立派な家があった。

その家で廬生は唐代の名家の娘と結婚し、科擧の進士の試験に合格して官吏となり、とんとん拍子に出世して首都の長官になり、また夷狄を破って勲功をたてて栄進した。しかし、時の宰相にねたまれて州の長官に左遷され、そこに居ること3年、また召されて宰相になり、それから10年間、よく天子を補佐して善政を行い、賢相のほまれを高くした。

位人臣をきわめて得意の絶頂にあるとき、突然彼は逆賊に捕らえられた。辺塞の将と結んで謀反をたくらんでいるという無実の罪によってであった。彼は縛につきながら嘆息して妻子に言った。

わしの山東の家には僅かばかりの良田があった。百姓をしておれば寒さと飢えを防ぐことが出来たのに、何を苦しんで禄を求めようとしたのだろう。昔、ぼろを着て邯鄲の道を歩いていた頃が懐かしい。今はどうにもならない……。

廬生は刀を取って自殺しようとしたが、妻に止められて果たし得なかった。ところが、ともに捕らえられた者はみな殺されたのに、彼だけは宦官のはからいで死罪をまぬがれ、驪州に流されただけだった。

数年して天子はそれが冤罪であることを知り、廬生を呼び戻して燕国公に封じ、恩寵はことのほか深かった。5人の子はそれぞれ高官に上り、天下の名家と縁組みをして、十余人の孫を得て幸福な晩年を送った。

やがて老いて健康が衰えてきてので辞職を願い出たが許されず、ついに年齢には勝てず、天子から名医や良薬を贈られたが死去した。

欠伸をして眼をさますと、廬生はもとの邯鄲の宿屋に寝ていた。傍らに呂翁が坐っていた。彼が寝る前に粟を煮ていたが、その粟もまだ出来上がっていない。すべては元のままであった。「ああ、夢だったのか」。そこで呂翁は彼に笑って言った。「人生のことは、みんなそんなものさ」

廬生は呂翁に感謝して、「榮辱も、貧富も、死生も、すべて経験しました。これは先生が私の欲をふさいで下さったものだと思います」と言ったという。

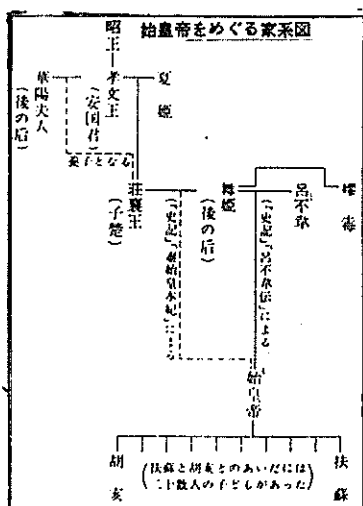
以上は唐の小説「枕中記」のあらすじで、榮枯盛衰の極めてはかないことを譬えて、「邯鄲の夢」とか「一炊の夢」という言葉が生まれたのである。

始皇帝の生誕の秘密

邯鄲は戦国の七雄の一つ「趙」の都であり、史記「秦始皇本記」「呂不韋列伝」を見のがすことは出来ず、始皇帝の生誕の秘密を記さなければならぬ。

時は戦国の末である。趙都・邯鄲は中原文化の粋を集め、商業が盛んで、韓の豪商「呂不韋」もよく邯鄲に商用で来ていた。偶然に秦の太子「安国君」の庶子で「子楚」と言っていた時代の「莊襄王」が、人質として邯鄲に住んでいることを知った。するとこの商人の頭に素晴らしい靈感が閃いた。

呂不韋は生活に困っている子楚を助けて、「秦」に食い込もうと考えたのである。そこで子楚に大金を与えて家臣を蓄えることを奨める一方、秦に行き当時太子であった「安国君」の愛姫で、後に后になる「華陽夫人」に金の力で近づき、子供のない夫人の後嗣に「子楚」を奨めて、次の次の秦の王にする段取りをたてた。



(上の家系図を参照のこと)

正妃「華陽夫人」には子供はなかったが、しかし、二十数人もの庶子がいたから、誰が太子に選ばれるか分からなかった。そこで呂不韋は大金や贈り物を華陽夫人届け続けていたのであった。

ところで呂不韋は、邯鄲の富豪の娘で、容姿も絶妙で舞いをよくする女性を妾にし、その腹に自分の子供を身ごもらせていたが、宴会でこの「舞姫」を一目見た「子楚」が大変気に入る、彼にこの舞姫を所望した。もちろん呂不韋は子楚に舞姫をやることにした。

呂不韋にすれば、秦国の政界に乗り出す絶好の機会だからである。即ち自分の子供を宿した女性が「子楚夫人」となれば、生まれてくる自分の子が「子楚」の子となり、将来、秦王の地位につけるかも知れないからである。そして、この「子楚夫人」から生まれたのが「政」、後の始皇帝であった。

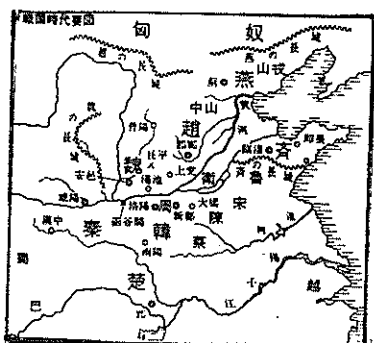
政が生まれてから子楚は祖国に帰ることができたが、夫人と政は趙の国の夫人の生家で暮らしていた。そして秦の昭王が死去し、安国君が孝文王となり、子楚が太子になったので、子楚夫人と政も趙から秦に返されてきた。孝文王は即位一年で世を去り、ここに子楚が莊襄王となったが、莊襄王も三年で逝去した。十三才の政が王位に就くと、呂不韋は若年の王に代わって実権を握り、相国(宰相)となり仲父(叔父)と呼ばれるようになった。

上記は「秦始皇本記」により記述したものである。

趙の都「邯鄲」を過ぎると直ぐ河南省であり、いよいよ我が35師団の占領地に入ることになった。

意義深い支那中原の地を想起するために、先ず戦国時代の地図を掲載しておく。

そして北支那方面軍の配置図を掲げて全般の概要を把握し、次いで昭和14年の軍備・軍制改革により(17頁参照)、我が師団、我が聯隊の北支派遣について書くことにした。(右図は戦国時代要図)



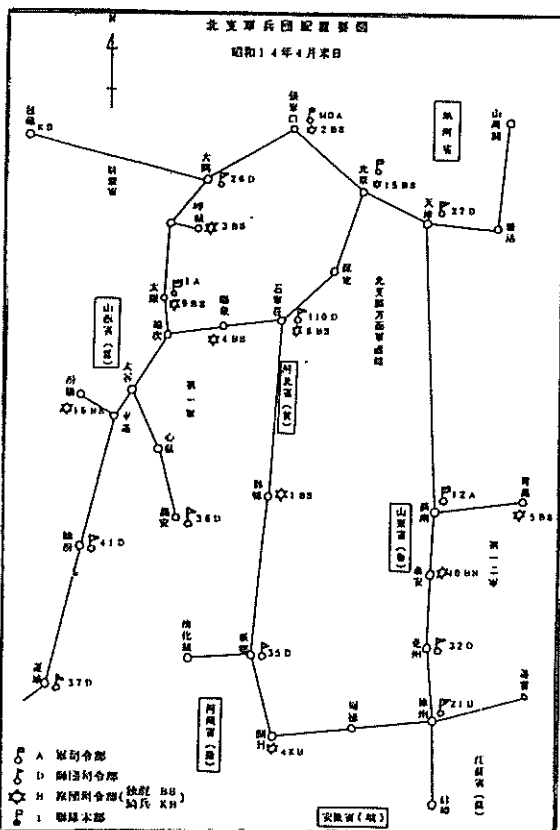
昭和14年の軍備と軍制の改革に伴い、外地部隊(含満州)の帰還と整備の必要から、新鋭の6ヶ師団が編成され、何れも30代の番号が付けられた。

我が35師団は新設兵団の第一号として誕生し、歩兵第219聯隊はその筆頭聯隊として、札幌歩兵第25聯隊留守部隊長が聯隊長に就任し、昭和14年3月23日に軍旗が授与されたのである。

4月16日から逐次小樽港を出港して大陸に上陸し、北支那の河南省に駒を進めたのであった。

私も新設聯隊の歩兵219聯隊に転属の命を受け、勇躍して今、聯隊本部の所在地である河南省汲県に向かっていたのである。

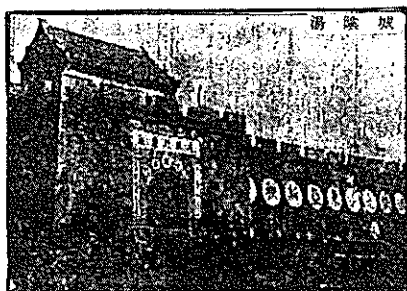
(右は北支那方面軍の兵团配置要図)



右上の図の示すとおり北から張家口の駐蒙軍、山西省太原の第1軍、山東省済南の第12軍(軍=♂)が配置され、各軍に数個の師団(♂)や独立混成旅団(☆)がある。師団は軍制改革によって歩兵3ヶ聯隊を基幹とし、歩兵聯隊(♂)は歩兵3ヶ大隊に歩兵砲、通信中隊である。歩兵大隊(♂)は歩兵4ヶ中隊に機関銃中隊(重機)大隊砲小隊(2門)。

戦闘未経験者のために記すと、独立混成旅団は戦闘部隊ではなく警備部隊である。編成は概ね独立歩兵5ヶ大隊程度で砲兵はなく、他の特科部隊もない。独立〇〇というように、独立の名称の付く部隊は警備部隊と考えて支障はない。

河南省の最初の街が『安陽』であった。ここは紀元前の周（258～1050）が殷を滅ぼしたその殷墟で有名である。いよいよ中原に鹿を逐ひ、覇を競った歴史が実感として肌に感じてきたが、しかし未だ銃弾に見舞われたのではなく平穏な大平野である。（51頁地図参照）

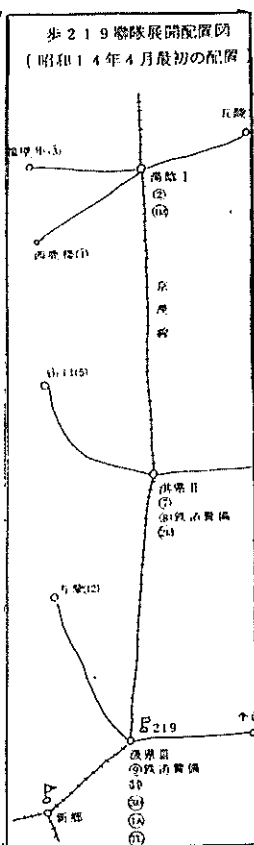


次の『湯陰』は我が聯隊の第1大隊の駐屯する地であった。この地もまた名勝古跡が多く、「金」に抗して戦った南宋の英雄「岳飛」の故郷である。岳飛は1103年生まれで、河南省には彼の古跡が多く残っている。また周の文王が幽閉された処も湯陰で、文王廟があり、歴史的に興味のある街のようだ。

続く『淇県』は殷の武乙及び紂が都したところで、我が聯隊の第二大隊の駐屯地であった。（右上は湯陰城）

『汲県』は我が歩兵第219聯隊本部の所在地で9県を所轄する府城のある街であった。

下車して細谷嵩大尉（第1中隊長、43期）先輩の案内により聯隊長他幹部先輩に申告に廻った。



赴任時の聯隊幹部は下記の通りである。（i = 歩兵）

219 i 長	大井川八郎大佐（23期）	汲県
附	島本鉄次 中佐（25期）	汲県
第1大隊長	深井武徳 少佐（31期）	湯陰
第2大隊長	中山八郎 少佐（32期）	淇県
第3大隊長	石山年秀 少佐（33期）	汲県

（右は聯隊の展開配置要図）

当分の間、私は細谷大尉の第1中隊附となった。それは河南省の省都「開封」が支那軍に一時占領されると言う事態が発生し、急遽我が聯隊が開封付近に移駐することになったからである。今まで駐屯していた騎兵第4旅団は、開封と徐州との中間で殷の古都である「商丘」に移動して、後方警備の任についた。

（右の写真は汲県城と衛河）

赴任当時の聯隊幹部は錚々たる古参の大先輩ばかりで、我々は本当に若輩の青二才の感じがして、恥ずかしい限りだが、これでお役に立てるのかと案じたのは事実である。



◎『注意』 間違えて58頁をダブルプリントしましたので、先ず最終ページの「将校の階級と進級について」を読み、次にこの頁を読んで下さい。

先の軍制の改革で将来を洞察したならば、もっと将校養成機関の充実を図らなければならなかったと痛感している。1年志願兵制度の予備役将校よりも、幹部候補生出身の方が人材も豊富で若く、この幹候の人達によって下級将校を補充したために、戦争継続が出来たと考えてよいだろう。

しかし戦争末期には極く短期間に将校を養成した関係から、どれほど役に立ったか私には判らない。ただ特攻隊の若い将校たちは一足飛びの速成将校で、誠に気の毒だった思っている。

私は昭和15年徴集兵の幹部候補生の教育や、師団の経理部幹部候補生教育に携わった経験があり、その内容も理解している積もりである。この出身者と陸士出身者の差は、戦術能力の差であると思う。

陸士本科は戦術（特に師団戦術）が主体の教育（約60％）で、その他、兵器学、射撃学、築城学、航空学等の軍事学（40％）であった。その戦術教育の目的は、第一線の小隊長であっても師団長の頭脳に接近し、上司の意図に添って戦うためであった。それだけ教育期間が長いのも将来のためである。

「将校団」は各聯隊の将校で構成する団体で、精神的に強固に結ばれていた。内地や満州であれば部隊が一地に集結していた関係上、殆ど全将校の名前も顔も出身別等も覚えていた。しかし戦場では広い地域に部隊が展開し、大隊が違えば知らない状態であった。そのため将校団意識はあまりなかったようである。戦場で犠牲者が続出し、補充されてきた幹部は顔見知りはなく、心細い心境だったと推察している。「准士官下士官団」の諸君も同じであろう。

脱線して余談に走り過ぎた。本筋に戻したい。

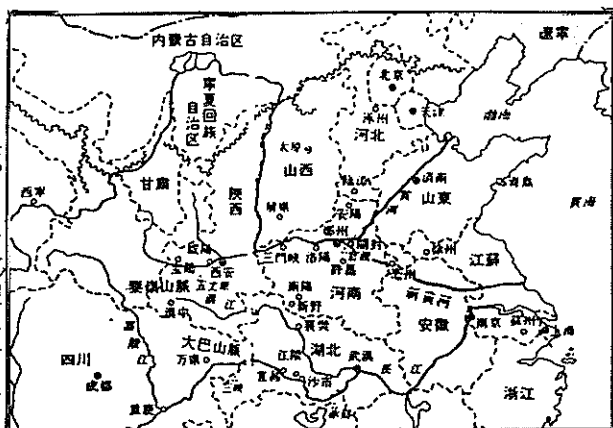
大黄河（次頁地図参照）

上記の通り私の汲県における勤務は短期間に過ぎず、聯隊本部と共に開封に移駐することになった。開封は黄河の南岸に位置する河南省の省都（現在は鄭州に遷都）である。現在の黄河の流れは開封の北方だが、赴任当時の黄河は開封の遙か南方を流れていた。

私はこれから黄河流域に約3年間にわたり戦陣生活を送ることになるが、開封の北方の黄河の跡は「旧黄河」（砂漠化していた）、開封の南方を流れる黄河を「新黄河」、あるいは「黄河」と呼ぶことにする。但し歴史上の黄河の場合は開封北方の黄河を指している。その名称の煩雑な原因は、昭和13年の徐州大会戦で敗走した蒋介石軍が、追撃する日本軍を阻止するために黄河を決壊し、人工的に黄河の流れを南に変えたためであった。

移駐する「河南省の名称」は、その大部分が黄河の南にあるからだ。しかし蒋介石が決壊してからは、新黄河が日支両軍の勢力範囲の境界線となった。

右の地図に示すように、旧黄河は開封の西方から東北に流れて渤海湾に注ぎ、新黄河は開封の西方から東南に流れ、淮水と合流して黄海に注いでいる。



即ち河南省の大部分は支那軍の占領区域で、省都の開封を含む北部だけが日本軍が占領、ただし占領とは名目だけで、主要都市の点だけの支配に過ぎず、そのために両軍の戦闘は絶え間がなかった。(右は新・旧黄河の拡大図)

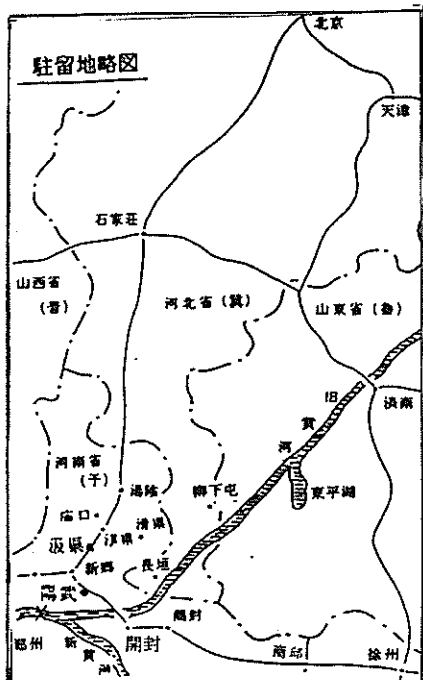
黄河は漢民族の父なる河であった。支那大陸の心臓部を東西に貫通し、豊かな水量で広大な黄土層の大地を潤わせ、早くから農業文明をはじめとした古代文明を育んできた。

水は農業の命脈である。この水の周辺の共同生活は、個人を犠牲にして団体に奉仕する精神を育て、文明思想の中核となった。そして水との長い闘いと、その生活は多くの伝説を生んだが、それは後記することにする。

古代史を繙くと黄河は巨大な水利と同じく、巨大な水害をもたらし、必然的に熾烈な種族と種族の闘争が生じている。大規模な戦争の結果、政治、軍事の権力はますます集中した。夏の禹王のとき天下は万国であった。しかし殷・商の時代になると三千余国、西周の初め頃は四百余国で、下って戦国時代には三百余りだったが七雄だけが巨大であった。しかし秦の始皇帝が初めて天下を統一したのである。

長期にわたる大規模な戦争は、必然的に権力の集中をもたらし、殺戮によって政治的に統治の権力が集中すると部族の独立性が喪失し、個人は権力の奴隷に転落したのである。そして君主は絶えず権力の拡張を図り、血生臭い権力闘争が黄河を中心にして繰り広げられていったのである。

私もその例に洩れず、歴史は繰り返すように、闘う人となってしまった。



黄河の名称の由来

黄河は日本人の常識を超えた河であることは、3年間に及ぶ黄河流域の戦闘で認識した。その水の色は黄土層を削り取って流れる影響から、「泥砂色」をしている。その色から「黄河」の名称が生まれたと考えられる。もう一つは大陸の神話時代に現れる「黄帝」が余りにも偉大であったから、その名をとって「黄河」と名付けたのではないかとも思われる。何れも我が私見である。

『黄河は夥しい量の泥砂を吐き出し続け、二〇万平方キロ（日本の面積の半分）の広大な土地を造成したという』。これは鄭州の「黄河博物館」の資料である。そして山東半島は島であったが黄河の泥で繋がったとも言われている。

黄河は水1升到泥1升を運ぶと言われていたが、水1トンに対する泥砂の含有量は次の通りである。

黄河 37、6 kg。長江 0、4 kg。ナイル川 1、6 kg。アムール川 2、3 kg。これは破天荒な数量で、年間16億トンの泥砂を渤海湾に吐き出している。

黄河下流での「治水」とは、「治泥」のことで、太古の昔から続いている。河南省・開封から河口にかけては、黄河は都市よりも十数mも高い天井川となっている。人々は、高くなる一方の河底と競争して、堤防を高く築かなければならない。現在の開封北方の黄河を見ると、戦争当時と格段の差が見られた。

黄河流域に住む人々は、この河に三分の親しみと、七分の恐れを抱いており、黄河を「暴れ黄龍」と呼んでいた。

過去の暴れ河の歴史を見ると、この二千年間に堤防の決壊は千五百回、大きな河道の変化二十六回。河口の変遷は、天津の南から安徽省の淮河まで、七百kmに及んでいる。それは正にのたうち廻る龍の姿である。

『黄河の諺』

- ①「七十年一大漫、三十年一小漫」（70年に一度大洪水があり、30年に1度小洪水がある）
- ②「説過龍年、賽過神仙」（辰年は龍神が暴れて黄河の水が増える年。この年が過ぎれば神仙も恐くない）
- ③「三年兩決口、十年九旱」（三年に二回は堤防が決壊し、十年に九回は旱魃がくる）

『黄河の起源を暗示する伝説』

三皇五帝の一人、炎帝（神農）に精衛という娘がいた。ある時、東海で泳いで溺れ死んだ。娘の魂は小鳥に生まれ変わり、溺死した東海を埋めようと日夜、西の山から泥や石や木をくわえて運び、東海に投げ落とした……。

『黄河をよく治めた者が、中華の王であった』

黄河は古代人の生活と密接に結びついて食糧生産に直結していた。黄河が氾濫したあとには、田畑の耕作に適したアルカリ性の土壌が残されたから、黄河をよく治めた者が中華の王たり得たのである。

史記「^{カホンギ}夏本紀」によると、「^ウ禹」は名を文命といい黄帝の玄孫に当たる。父親は「^{コン}鯀」である。この父子の名は、魚形神または蛇身、龍身を連想させ、鯀の魚偏、禹のなかにある虫は、水との関係の深さを感じさせる。

帝^{ギョウ}堯の時、洪水がたびたび起こって民衆は困窮していた。堯が洪水を治めることが出来る人物を捜していたところ、群臣が鯀を推薦したから、堯は鯀を登用した。しかし9年経過しても水が引かず、治水は成功しなかった。

そこで堯は^{シヤン}舜を見付けて登用し、天子の^{マツリゴト}「政」を^{モツコ}攝行させた。舜は鯀の子の禹を挙げて父親の事業を継承させた。禹は自らの身を苦しめ、外にいること13年、自分の家の前を通っても中に入らず、衣食を節約して鬼神の供えを豊かにし、宮室も質素にして、その浮いた費用で溝をつくった。

いつも左手に「^{ミズホリ}準」と墨繩を、右手には「^{ブンフツ}規」と「^{サシゴ}矩」を持ち、測天器を載せて九州を開き、九道を通し、九沢に堤防をつくり、九川を渡れるようにした。（支那では九は最も多いという意味がある）

これが「史記」に記された禹の治水ぶりで、我々が習った漢文が懐かしい。漢の司馬相如が、禹の功績を称えた文が「^{モンゼン}文選」に次の通りに書いてある。

「禹は洪水の地を埋め立て、河を切り、あるいは^{ツナ}繋ぎ、大水を分散して災害を止め、東の大海へ水を導き落とし、こうして天下は永遠に平和となった」

だから禹を祀る「禹王廟」が全国各地に祀られている。（禹の話は伝説）

『黄河をよく治めた者が王なら、黄河を自らの手で破壊した者はどうなるか』

そのような禹とは対照的な人物がいる。明末の周王^{キョウキョウ}恭^{キョウ}と、国民党軍の指導者・蒋介石である。黄河に関する限り二人の評価は極端に低い。

明末の1641年、^{センレイ}陝西省で挙兵した李自成の農民蜂起軍が、^{ラクヨウ}洛陽を一気に突破して開封を囲んだ。開封を守っていた恭^{キョウ}は初回は死守していたが、第二回目の攻撃の時に^{ロウジウ}籠城し、李自成軍を^{オバ}溺れさせようと黄河の堤防を切っている。その濁流が開封に殺到して明軍と住民を合わせて30万が水死した。

もう一つは、日支事変二年目に徐州を陥落させた日本軍は、黄河沿いに猛追撃を敢行した。蒋介石は日本軍の進撃を^{リシ}阻止するため、開封の西方「^{サンリウウサイ}三劉寨」と「花園口」で、黄河の堤防を爆破し、人工的に大洪水を引き起こした。

濁流による水没面積は日本の九州よりも広い地域に及び、河南、安徽、江蘇省の死者八十九万、被災者千二百五十万人に達し、^{ソイダ}淮河に流れ込んだのである。「水を以て兵に代える」という戦術は、国家百年の計を誤った作戦である。

『偉大な黄帝の名に因んで黄河と呼んだのではないか』

大陸では民族的統合のシンボルが「黄帝」である。

最近、共産国家の中華人民共和国でもよく「我々中華民族は黄帝の子孫であり・・・」という言い方がされるようになった。とくに北京から台湾に統一を呼びかける時は、屢々この言葉が用いられている。階級闘争一本槍の時にはあまり見られなかった現象であり、民族的な統合のシンボルとして黄帝が使用されるのも、偉大な皇帝だったからだろう。

理想の皇帝の指導的像として、「その仁は天の如く、その知は神の如く、これに就けば日の如く、これを望めば雲の如し」、と十八史略の「山皇五帝」に書いてある。

三皇とは伏羲、神農、女媧、または天皇、地皇、人皇などとも言い、古代伝説上の三人の皇帝である。三皇について神話時代に現れるのが「黄帝」を筆頭とする五帝である。五帝とは「黄帝、顓頊、帝嚳、堯、舜」のことである。

『黄帝』は夏、殷、周の各王朝に先立つ神話伝説時代の五帝の初めの皇帝である。母が、北斗七星のまわりを巨大な稲妻がとりまくのを見て感応し、黄帝を生んだと言われている。そして黄帝は、

（この世ではじめて舟と車を作り、これによって、それまで往来できなかった所まで、道が通じるようになった。また、風后、力牧という人物を得て、それぞれ宰相、将軍に任じた。また、黄河の大魚から河図をさずかり、日、月、星を観察して天文の書をつくった）と云われている。

往来もできなかった所に道をつけたというのは、統合・統一のシンボルとされるのに相応しい業績である。また黄帝は、「不老長寿の神仙として、古来から民衆の間でも人気があった。

以上のような黄帝の最高の善政に感激した住民たちは、その名に因んで、河の流れにその一字を冠したのではなかろうか。これは前記の通り私見である。

また北京の紫禁城をはじめ、各王朝の宮殿の屋根瓦もすべて「黄色」の瓦である。これは皇帝の独占的な色で他では使用できない。この色も「黄帝」の「黄」を取り入れているのではないかと私は思っている。

『黄河に関する言葉』

「黄泉」とは①「孟子 滕文公下」には地中の泉とあり、②地面の下にあり、死者が行くと言われている、冥土、よみじ、と書いてある。③「黄泉の客」とは、黄泉の国への旅人で、死者を云う。④私の体験では黄河の流域は黄土層のため、地下を掘ると何処でも泉が出てきた。大陸では「土葬」だから地下に埋めると、そこに黄色い泉が出たから、死人を「黄泉の客」と呼んだようだ。（私見）

旧黄河を通過して開封へ(下図参照)

57頁にあった我が師団司令部(新郷)は一足先に開封に移駐したため、急速我が聯隊(本部・汲県)も開封を中心とした新配置に移動することになった。

京漢線は汲県の西南方の新郷から西南に延びて黄河をわたり、鄭州(右図では鄭県)を通過して南下し、漢口に通じている。

しかし鄭州北方の京漢線の鉄橋は爆破され、再建することは至難の工事であった。そのために新郷から東南方の開封まで、旧黄河の砂漠化した河床に鉄道を敷設した。これが『新開線』である。(上図)

方面軍は河南省東部の交通の便のため、京漢線の新郷駅と隴海線の開封駅を結ぶ「新開線」102、9kmを、鉄道聯隊2ヶ聯隊で新設したのである。

(爆破された黄河の鉄橋は英人が架橋した延長3、010mで、1905年完成)

乗車していた列車は旧黄河を横断することになった。砂漠化した河の北側は築堤であり、その南側は延長約1000mの木橋が架かり、ゆっくりとした速度で通過して行った。

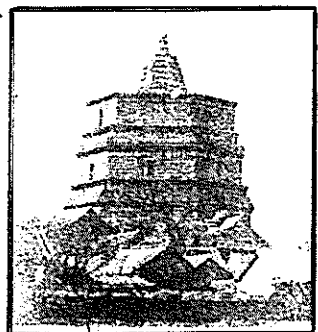
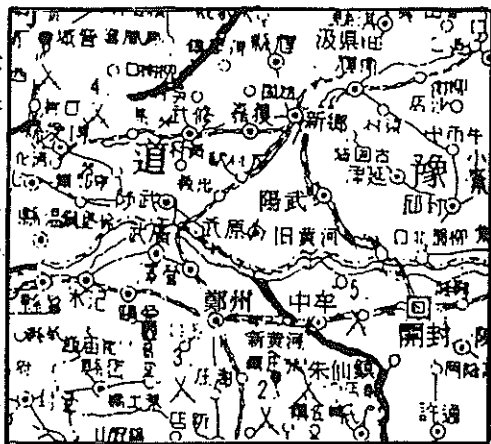
水無し黄河を眺めて、黄河は古代文明を育んだが、同時に恐るべき災害、特に人災までもたらしたことを思い出していた。

(右は二枚とも黄河の決壊時に人命救助に励む日本軍兵士の光景)

史上、治水で名高いのは夏王朝の「禹」である。開封駅に到着して東方に目をやると、高台に幅広い塔が聳えていた。これが開封で最も古い、北宋の建立で有名な繁塔であった。(右の写真)

一般にラマ塔と呼んでいたが、治水の神様である禹王を祀る禹王台であった。(古吹台)

開封の第一印象は禹王の次のような言葉であった。
『生は寄なり、死は帰なり』。生は生かされている仮の宿(寄)で、死は土に返る「帰」である。これから戦場に臨む私に無言の教訓を与えていた。



陽 武（位置は前頁の新郷・開封の中間）

開封での思い出は翌年、聯隊本部附として勤務したから後記することにした。河南大学の本部に師団司令部が駐屯し、師団長原田熊吉中将に申告を終えた後、我が聯隊本部の宿舍となった河南大学医学部の建物に落ち着いた。

しかし10日後に第11中隊附を拝命し、警備地の「陽武」に向かつて再び新開線に乗車した。開封付近の中^{チュウケン}原の地を眺めていると、大陸文明の基礎を支える農耕の発祥地だったことが、理解できるような気がしていた。これが開封付近の第一の思い出である。

砂塵を巻き上げる砂漠化した旧黄河を渡った地が陽武県で、県城のある陽武は堂々とした城壁を巡らし、輜重兵第35聯隊の警備区域となっていた。即ち第11中隊は輜重聯隊の配属歩兵で、中隊長は渡辺鉄男中尉（特別志願4期）であった。警備する駐屯地は新開線の陽武駅で鉄道警備が主任務である。

敵と相對峙する最前線ではなく後方勤務でも、開封を中心とした師団の補給線である新開線の確保は重要であり、歩兵中隊がその任を担当していた。

黄河流域は匪賊、盜賊の巢窟であった。その原因を考えると、広大な流域には毎年のように水害、旱魃、蝗^{ソウゾウ}の災害に襲われ、一村丸ごと家屋も耕地も沈没してしまい、破産農家たちは、やむなく流民となって他の村を襲う盜賊化したのであった。この現象は支那全土に見られる武装集団である。

鉄道警備

私の支那やビルマの戦陣生活の中で、一番のんきに暮らしたのは陽武の鉄道警備であった。「華北交通（株）」が経営する駅には立派な駅舎があり、隊員も凡て交通会社の建物に居住していた。全員が営外居住の気分である。

駅を中心にして鉄条網を張り巡らし、銃眼を設けたトーチカを備えた警備だったが、私が第11中隊に所属していた約1ヶ月間に、敵襲の経験は全くなかった。兵士たちには隣接する分遣隊まで、地雷の探知や電線の点検等の巡察勤務があったが、将校は責任はあるものの勤務はないという状態である。

時折、年輩の駅長との話に夢中になり、ご馳走になった楽しみも記憶に残っている。満鉄から志願して支那に來た駅長の自慢話は、俺は聯隊長と同じぐらいの月給だ（約300～350円と推定）、ということであった。

それに支那語が達者な彼から学んだことも懐かしい。陸士で学んだ支那語など、土語が横行する大陸では北京官話は通用しない。支那語で二人称のことを「你^ニ」というが、軍隊語では「ニーヤ」「ニーコ」であった。これは蔑^{ベツシウ}称であり、劣等の意が込められており、「チャンコロ」は日清戦争以来である。

毎日することもなく、何事も忘れたように恍惚状態を続けてはと、プラットホームの広場で准尉を相手に剣術の練習をしていた。これが戦陣生活かと疑ったぐらいであった。剣術や銃剣術の道具が完備していたのが幸いで、軍隊では「剣道」と云わないで「剣術」と呼んだ理由は私は知らない。

鉄道警備の我が中隊の分遣隊は敵の襲撃を受けなかったと前記したが、輜重兵隊の分遣隊はときどき夜襲を受けていたらしい。それは歩兵隊は機関銃も装備しており、小銃も長いからだと言っていた。確かに特科隊の小銃は短いから敵になめられていたらしい。これは戦地ならではの笑い話である。

華北交通の列車では1週間に一回、各分遣隊の将兵をサービスする目的で、日用雑貨の物品販売列車を運行していた。四周が荒涼とした砂漠地の中で生活する兵士には、30分ほど停車するその列車が最大の慰問であった。^{ボウチウケン}忙中閑ありではなく、^{カンチュウケン}閑中閑ありと言うことである。

ある時、輜重兵聯隊本部の運動会に招待されて城内へ行ったことがある。戦地で運動会があるとは考えられなかったが、飛び入りの私が走高跳で優勝してしまった。聯隊長から商品を受領するとき、傍らに朝鮮の婦人が列席していた。その時は全く気付かなかつたが、あれが例の慰安婦という名称の婦人達であったのだ。本当に私にも²⁷初な青年将校時代があつたのである。

『装甲列車』

軍は鉄道線路を維持確保するため武装兵が搭乗した装甲列車を運行していた。鉄道線路に敷設された敵の地雷を踏んで時折、装甲列車が爆破されて襲撃を受ける事件が発生した。その惨状を新開線では見なかったが、後日、開封～徐州間の^{ロウカイ}隴海線で2回も見せつけられた。

初めは^{シンパツケン}隣発信管の地雷だったから先頭の機関車が吹っ飛んだ。これに対して日本軍の装甲列車は先頭に^{ムガイシキ}無蓋車に配置し、それに機関車と同重量のレールを積んで運行した。地雷を踏んでもレール積載の無蓋車が爆破されるだけで、後方に配置した機関車は無事だったのである。

すると敵は考えて^{キンキ}延期信管の地雷を敷設した。レールを積載した車輛が地雷を踏んでから、何秒か後に破裂する仕掛けの地雷であった。

装甲列車で最も重要な車輛は機関車だったから、列車編成の上では絶えず機関車の位置を変更するなど、敵と信管の発火時間の勝負であったようだ。

機関車の位置は概ね10両前後の装甲列車の中央付近に配置し、警乗兵1ケ小隊程度が乗車して、直径10cm程度の列車砲まで装備していた。

被害現場を見ると、機関車は高く積み上げた線路から真っ逆様に^{カタハ}転げ落ち、警乗兵との戦闘の悲惨な跡が^{チナマフサ}血生臭く遺っていた。点と点だけを占領していた日本軍の悩みの種は、到るところに存在していたのである。

『認識票』

認識票を初めて見たのは陽武であった。戦闘中の混乱状態の中で戦死者の名前を確認するために、各人は支給された認識票を必ず身に付けていた。

それは真鍮製の小判型のもので、一連の番号が刻まれていた。戦死者が誰だか不明であっても番号を見れば、将兵の所属部隊や官氏名が判る仕組みである。だから認識票は肩から紐で脇の下に吊り下げ、風呂に入るときでも常に素肌から離さないようにしていた。

『ドラム缶風呂』 (右下はドラム缶風呂の風景)

殺風景で色気無しの戦地では娯楽というものが全くない。将兵の楽しみは食と睡眠と風呂であった。支那にも都市部には銭湯はあったが、田舎の街では見掛けなかった。(銭湯については開封の所で後記する)



日本人ほど風呂好きな国民はいない。野戦においても分遣隊ではドラム缶の上を切り取り、風呂として代用したものだ。しかしビルマの戦場ではこのような余裕がなく、戦闘ばかりで風呂に入った記憶は浮かばないから、まだ支那の戦場の方が増しである。

簡単に説明すると、ドラム缶の中に板が浮いている。入浴するときには、その板の上に足をのせ、静かに体重をかけながら板を下に沈ませ、湯に浸るのである。即ちドラム缶製の五右衛門風呂である。

『アヘンの密輸』

アヘンは見たことはないが、鉄道警備の任務に服していた間に、アヘンの密輸について時々耳にすることがあった。アヘン摘発のために列車には特別な捜査員が乗車していた。それは憲兵隊員か誰だか判らない。

アヘンの運搬は脚絆(ゲートル)に巻き付けるのは初歩のようであった。惨い話では、さらってきた乳幼児の腹の臓器を取り除き、空の腹の中にアヘンを入れて縫い合わせ、死人の乳幼児に帽子を深くかぶせて、その子を抱っこして列車に乗っていたと言う。

アヘン戦争以来、英国は強引に清国(支那)をアヘンで侵略してきた。しかし戦後に出版された本によると、日本も支那の奥地で生産管理していたと書いている。それは内蒙古と呼ばれた察哈爾省、綏遠省や山西省の農民たちに栽培させたようだ。

真実かどうかは判らないが、支那戦線に従軍している3年間、アヘンの密輸の問題は屢々聞いていた。日本は聖戦を遂行していくには大きな戦費が必要だ。アヘンは確かに汚い金だが、聖なる目的の戦争に使うのだからやむを得ない、とも書いていた。それは蒙疆銀行の記録だったように記憶している。

燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らんや（史記・春秋戦国・秦）

『陳勝曰、燕雀安知鴻鵠之志哉』この陳勝の出身地は「陽武県」であった。

ある日、陳勝は田を耕している時、鋤を投げ捨てて丘に上り天を仰いでいた。彼の胸は秦の圧政に対する憤りと、自分達のみじめな境遇に対する恨みにふさがれていた。しかし彼は将来への野望に燃え立っていたのである。

仲間たちに「将来おれが出世しても、お互いに忘れないようにしよう」と言っていると、仲間の百姓たちは笑った。すると彼は「あゝ、燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らんや」（燕や雀のような小鳥には、大鳥の大志はわからない・・・）と言った。

陳勝は秦の二世皇帝の元年（紀元前209）7月、河南省の各県から徴用された900名の貧農とともに、長城警備のために漁陽という所に送られる途中、大沢郷という所で長雨に閉じこめられた。徴用兵たちの漁陽に到着すべき期日は迫っていた。秦の軍法はきびしく、遅れたら彼らは斬罪に処せられるのだ。しかし強行軍で行っても期日までに着くことは不可能であった。

このとき陳勝は、同じく徴用兵の「吳広」とともに秦に反旗をひるがえすことを謀った。吳広も河南省の貧農の出身で、兵士たちの間に人望があった。

陳勝と吳広は兵士たちの不満をつのらせ、反抗心をあおり、彼らの迷信を利用して、魚の腹の中に「陳勝、王たらん」と朱書した布切れを入れたり、陣営の傍らの森の社にかくれて狐の声をまねて、『大楚（楚は秦にほろぼされた彼らの祖国）興らん、陳勝、王たらん』と鳴いたりして、農民たちの心を陳勝に引き付けながら、900人の一隊が立ち上がる機会を待っていた。

やがてその時が来た。吳広は事をかまえて徴兵官を怒らせ、彼が剣を抜いた途端に吳広は奪い取って逆に徴兵官を斬り殺した。兵士たちが騒然となったその時に、陳勝は兵士たちを静めて号令した。

『おれたちの生きる道は一つしかない。それは、おれたちを苦しめ通してきた秦と戦うことだ。おれたちの国をおれたちの力でおこそう。おれたち百姓だけが虫けらのように、辱められていることはない』と。

そして陳勝は声高く叫んだ。「王侯将相寧んぞ種有らんや」（誰も皆同じ人間ではないか。王侯にも将相にも皆なれるのだ）

900人の農民兵たちは、どっと喚声を上げて陳勝に応えた。こうして大沢郷に蜂起した農民軍に、長らく秦の圧政に苦しめられてきた各地の農民たちも、武装して加わり、「陳」に入城する頃にはその兵力は数万に達した。

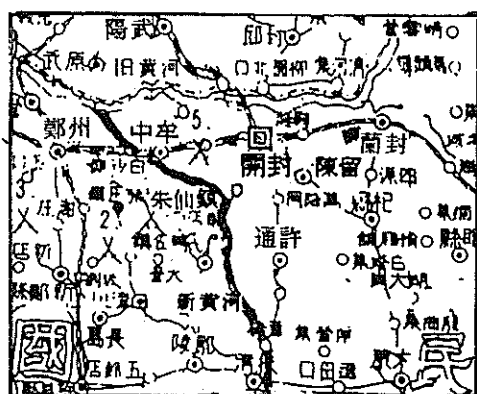
陳勝は「陳」で王と称し、国号を「張楚」（楚を大きくするという意）と名付けて秦に対抗した。これが支那大陸では勿論、世界史上でも最初の農民蜂起として有名だ。事の始まりをなすことを「陳勝吳広を為す」と言うのである。

本当の支那を見た通許県(下図参照)

「郷に入れば郷に従う」と言う^{コトワザ}諺は、支那では「郷に従って郷に入る」と言う。郷に入る前から郷のことを、知っておかなければならないのである。

支那に渡った兵士が先ず最初に覚える支那語の一つが、「没法子」であった。この言葉が最も大陸人らしいというか、支那数千年の歴史を受け継ぐ大民族らしい言葉で、諦めの心境を意味している。

64頁の陽武で記述したが、自然の災害を常に受けている農民は、くよくよしても始まらないと悟り、凡てが諦めの心情となって至ってのんびりしている。この点については島国の日本人は正反対であった。



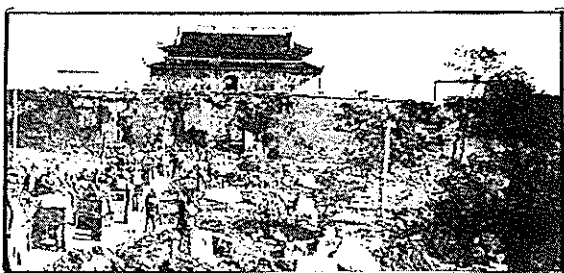
通許のことを書き始める前に、先ず彼我の軍事状況を簡単に書かなければならない。省都「開封」南方約40kmの通許付近は西方に新黄河が流れ、蒋介石国民党の中央軍の勢力範囲である。そして又、新四軍あるいは八路軍の共産軍の跳梁跋扈するところで、国共相剋(国民党軍と共産党軍)の地帯であった。そこへ新たに日本軍が進出してきたから、「殺さなければ殺される」という、三軍が入り混じった^バ戦が展開されることになったのだ。

陽武の第11中隊に勤務してから僅か1ヶ月、突然、同じ大隊の第9中隊附を拝命した。命令は絶対であり、命令に理由が附記されているわけがない。後日、耳にした風の便りでは、大隊長の石山少佐(33期)は鉄道警備に現役将校を勤務させるよりは、一日も速く最前線の戦闘の体験を積ますべきだと意見^{イシ}申し、聯隊長が承諾して命下されたらしい。

第9中隊長は先輩の石岡浩武中尉(51期、比島で戦死)であった。先輩の^{ミト}許で戦闘体験を積み、戦闘指導を受けさすべきだということで、急遽、発令になったと私は考えながら、欣喜雀躍して陽武から開封(1拍)へ、翌日、軍用トラックに便乗して通許に赴任した。(上図参照)

開封から通許県に通じる広漠とした中原街道の途中に「陳留^{チンリウ}県城」があり、この県城を警備する分遣隊は第9中隊の1ヶ小隊であった。陳留も通許も共に古代から中原で発達した街で、三国志でもしばしば出てくる有名な県城であった。又、忘れられないのは私の原隊である歩兵第25聯隊が、徐州会戦^{ジョウシュウカイセン}で蒋介石軍の退路を遮断し、殊勲^{シュクン}をたてたところが通許県城であった。

城外から見えてきた城壁は繁栄していた昔日の面影を残していたが、城外は寂寥とした田舎町の感じであった。それはそのはず今日まで目にしてきた土地は大会ばかりで、いよいよ最前線にきたのである。蒋介石が決壊した新黄河は西方約20



kmを流れており、自然な気持ちを持ちながらも、次第次第に清水の舞台から飛び降りるような心境になっていった。地は気を制するのであろうか。

（上の写真は通許県城の東門の景観）

城内は閑散とした雰囲気^{ミナギ}が漲って活気はなく、敵地区という空気が充満していた。通許城内に駐留する我が第三大隊は、本部、第9、第12、機関銃中隊、大隊砲の主力（約500名）が集結し、機動力によって敵と相対する作戦のようであった。

通許付近の戦闘に関しては20年前の1980年に上梓した「我が戦闘記・両忘」（生と死を忘れて戦ったという意）に、詳細に記載したから省略する。

良民証^{リョウミンシヨウ}

当時の通許城内の推定人口は約5～6000人であった。一辺約1500m程度の城壁が東西南北を囲い、同じく東西南北に一つの城門があり、城壁の周囲には外濠、城内の四隅には内濠が設けられていた。

城内の日本人は我が大隊将兵と憲兵分隊（情報収集）の他、拓殖大学出身の副知事が勤務していた。知事は支那人であったが実権は日本人の副知事が掌握し、知事の指揮下に文官の他に保安隊という警察隊が存在していた。保安隊は各城門の昼間警備（夜間は日本軍）と、県内各地の情報を収集して治安維持に勤めていた。

県城内外を問わず県知事が敵性でないと認めた住民には、「良民証」（身分証明書）を発行して携行させていた。通許県城の城門を出入りする時には、必ず良民証を保安隊員に提示しなければ通過できなかった。未然に敵性住民の城内侵入を防止するためであった。

城内に居住する住民にも城外の耕作地に出て野良仕事をする人も多く、ある時、私も彼らの良民証を見たことがある。それには性別、年齢、職業のほか、身長、体重まで書き込まれていた。古代から内戦・内乱が続いてきた大陸では戦争慣れしているのか、割合素直に県令に服従していたようで、国民党と共産

党の両軍と日本軍との巴戦の地域の人たちは、前記したように「没法子」思想で諦観していたようであった。

それとともに支那独特の「便衣隊」が横行していたからであろう。匪賊、馬賊、土匪と言われるものから地方軍閥まで、彼らは自ら生きていかなければならない。その生活資金として各県の住民から税金をきびしく取り立てた。しかし軍服を着用していれば日本軍の攻撃の的となるため、便衣となったのである。

便衣隊は同じ支那人から百姓の着物を掠奪、着用している軍人のことで、外見だけでは軍人だとは判らない。又、兵器は家屋の中に隠しても搜索されるから、畑の中に穴を掘って隠すなど実に巧妙である。そして日本軍の兵力が手薄と見ると、武器を掘りだしてきて兵士に早変わりし、不意に攻撃を仕掛けてくる所謂、ゲリラ戦法である。時には女子供までが後方から射ってくるから百姓姿でも油断はできない。（上は捕虜にした便衣隊）



その他に「督戦隊」とうのがあった。これも他の国では見られない支那特有の戦法である。戦力に優る日本軍と戦闘するとき、支那側の兵士が退却しそうになると、「予」め後方に配置しておいた督戦隊が射撃し出し、逃げ出すのを阻止したのである。この大きな戦例が南京大虐殺事件の同士討ちである。

こんな民族となぜ戦争するのか

非常召集で緊急出動命令が下達され、急遽、戦闘準備を整えて夜中に出発し、通許南方地区に急行したことがあった。

通許県城を一步出れば国民党軍や新四軍（新編第四軍）、八路軍（第115師団）の共産党軍、さらに地方軍閥や匪賊が入り混じった混沌とした地域である。彼らたち相互の戦闘地域の中に日本軍が入り込んだのだから、日本軍叩きは当然である。

本当に誰が誰やら、どこと戦っているのやら、このような複雑怪奇な戦場は我々は予想もできなかったことで、春秋戦国時代に逆戻りした感がしていた。予想する米英軍や露軍のような近代国軍との戦闘とは、異質の戦闘である。

情報によって行動した我が大隊は漆黒の中を隠密に展開し、粛々と黎明を利用して命令された各部落に突入した。しかし敵の大部隊が侵入してきた形跡はなく、匪賊の逃走した家屋の寝床に未温まりが遺っていただけであった。

各中隊は朝食を摂るために警戒陣地を配置して休憩に入った。すると歩哨から人影を発見したとの報告があり、私は直ちに歩哨の位置に急行した。少人数の便衣の者で百姓かも知れないが、警戒するにこしたことはないとは対敵の配置につかせた。しかし農民の恰好をした彼らは更に接近してきた。

突然、チャルメラの軽いラッパが鳴った。間髪を入れず銅鑼の音が大きく鳴り響いた。彼ら便衣たちは銃を腰に構えて射ちながら突撃してきた。我が方は至近距離まで引き付けて射殺し、数名の捕虜を捕まえた。その時のその場は「哀呀」と泣き叫ぶ声が鳴り響いていた。全く無謀な突撃である。(チャルメラとはポルトガル語で「葦」のことで、葦の笛のような音がするラッパ)

戦闘の経験は浅いとはいえ、敵に突撃されたのはこれが最初であった。通訳を交えて捕虜の尋問を始めると、彼ら便衣隊は共産軍系の「紅槍会」だと名乗っていた。これも初めて耳にした名前であった。

死を覚悟の上としか思えない、無謀な突撃を何故敢行したのかと徹底的に調査した。後刻判明したことだが、彼らを教育した指導者は空包を使って訓練している。低脳な農民たちは弾丸が命中しても、死なないと教え込まれていたのであった。空包そのものを全く知らない輩である。

紅槍会を信仰すれば、弾丸に当たっても死なないと訓練されたとしても、疑問を抱くのが普通の人間である。このような鳥獣よりも劣る民族と戦闘を交えている我々も亦、愚かであると思ってきた。広大な土地を武器とした上に、これほど無学な民族が雲霞の如く住んでいる大陸は、目に見えない強大な戦力を持っていたのだ。

辞書で調べると、紅槍会は清朝末以来、軍閥の搾取に対する華北を中心とした農村に、組織された農民自衛武装集団であった。それが抗日戦争の中で共産軍に吸収された団体であることが判明した。平和主義、農村主義を標榜する共産党の本当の姿が暴露したのである。

他の一人の捕虜を尋問調査した時のことである。我々は日本から来た軍隊だと言っても、日本という国名も知らない。満州から来たと言っても、北京から来たと言っても判らない。最後に上海から来たと言ったところ、上海の軍隊は本当に強い軍隊だと言ったのである。こにな相手と何のために戦争しているのかと疑問を抱き、馬鹿らしくて笑い話にもならないと思っていた。

(右上の写真は茶を飲んで暇をつぶしている長閑な農村の老人たち)



「土匪」(匪賊)というのは支那古来から存在した土着民の武装集団で、富豪や商家や官吏の家を襲い、食糧や金銀宝玉を奪い、人を殺し、婦女子を陵辱するうなど、掠奪・暴行を業とする賊のことである。満州では馬に乗っているから馬賊と称していた。日本の追い剥ぎのようだが規模が大きく数も多い。

軍隊という組織を失った雑軍の残党が匪賊で、彼らは掠奪強姦をしながら生きていくのが生活の手段であった。食糧を奪い取り、女を犯し、男たちを青龍刀で斬り殺し、阿片を常用するのもある連中である。それを防ぐために、どんな小さい部落でも土堀を巡らし、外周を水濠で囲い、自警団を組織していた。だから日本軍が行くと歓迎され、阿片の密輸のことも理解できたのである。

一方、共産軍は軍紀が厳しく、民衆のものは無断で掠めとらない。その規律は江西省・南昌蜂起の革命記念館でも見たことがある。軍紀の厳正は日本軍と同じ程度で、共産軍も蒋介石中央軍の両軍とも、匪賊を討伐して住民の人気を獲得しようと懸命であった。だから匪賊たちは、コソ泥の追い剥ぎに過ぎないが、無防備の農民にとっては恐怖の的である。(匪=箱の中のワルモノの意)

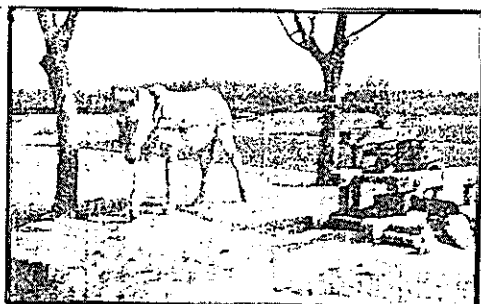
過去の戦闘を振り返ってみると支那人は軍隊といわず百姓といわず、行動は大陸的で「慢慢的」という支那語がぴったりであった。しかし軽装な彼等は逃げ足は速く、容易に捕獲することはできなかった。正規の組織を持たない彼らの戦法は、徹底して3日計逃げるにしかずだ。弱い者には強いが、強者には諦めが肝心だと直ぐ逃げてしまった。

追いつめられた結果、通許地区でも彼らの「帰順兵」は時々見られた。帰順とは敵対することを止めて、服従することである。蒋介石隷下でも地方軍閥の隷下の軍隊でも、端くれの隊でも匪賊でも、その親分は子分を養って行かなければならない。どうにもなくなると、日本軍に帰順を申し込んできた。その数が余りにも多くなりすぎて、日本軍の方がぐうの音も出ない時もあったようである。

もてなし上手な農民たち

(下は驢馬が水車を回す農村風景)

通許に私が勤務した期間は約5ヶ月に過ぎなかったが、支那人について学んだことは限りなく大きいものがあつた。その一つが彼等の客人をもてなすことが上手なことである。これは通許県城の内外を問わず、敵に接した危険な農村地区でも同様であつた。これは人間の知恵の現れだと言える。



討伐行の途中でどんな小さな部落などで休憩しても、^{ハヤコミ}早耳の村の^{オホサヘ}堡長や長老たちが飛んできて腰まで曲げて礼をした。そして必ず20本入りのタバコの箱から一本だけを抜き出して進呈する。それも数人の人だけで女性は顔を出すことはなかった。しかし県城内や日本軍に馴れた近村では女性も顔を出していた。（堡は「とりで」を意味しているが、支那ではレンガか土堀で村を囲いしていたから、村のことを堡と称し、村長をと呼んでいた）

このような接待が、^{リンボウセンキ}組隣保郷の命を守る最高の術策だと考えた結果であろう。古来から乱世続きの大陸とくに中原地帯では、権力者や強者に抵抗することはまかりならぬと言う鉄則があるのか、悟りきった行動だと感じていた。日本流に言えば「長い物に巻かれよ」とか、「挨拶は時の氏神」と言った諺のとおりであった。

それは十八史略の「堯舜」に出てくる「鼓腹撃壤の歌」の心境を、彼等は如実に物語っているようだ。その歌とは『日出でて作し、日入りて息す、井を鑿りて飲み、田を耕して食う。帝力我において何か有らんや』である。

天子の力は我々には何の関係もない。我々は皇帝の天下であれ、共産党の天下であれ、日本軍の天下であれ、平和に暮らしていければ、それで良いのである。これが彼等の真実の心であり、「道教」の無為自然の思想の影響かも知れない。そのための接待だと割り切っていたようだ。

秋に蒔いた麦の種が芽を吹いて伸びだし、耕地一面が緑となった農村に宣撫工作をかね、情報収集の目的で行軍していた。敵の代わりに雁の群が窪地になった麦畑で、麦の芽を食べているのを発見した。

支那にきて雁の肉の美味しい味を知っていた私は、自然に兵士を一行横隊に散開させ、号令一下、雁を目標に一斉射撃をして5羽ばかり射止めた。（右の写真は支那中原の麦畑）



雁一羽の重量は5羽の鶏に匹敵し、兵士は交互に背囊の上にのせて帰隊した。水鳥の中でも雁の肉は最高の味がする。時には兵士たちにもご馳走したいと思い、「旅の恥は掻き捨て」とばかり、国際保護鳥も眼中にはなかった。これを大陸ボケと云うのかも知れないが、誠に申し訳なしと言わねばならない。

正月を迎えると必ず敵は夜間攻撃に出てきた。夜半から城門めがけてチエッコ機関銃を乱射するのである。軽い音のするチエッコでも正月をゆっくりと休めない。白兵で突撃してくるのなら射撃することはないと思っ^{って}いても、巡察将校の当番であれば各城門・樓閣を廻らなければならず、嫌がらせの正月妨害は支那全土の慣例行事のようであった。

反対に支那の正月である旧正月の春節になると、我々日本軍は大隊主力が出動し、意地にかかるように示威討伐をしたものだ。近代国軍同士の戦闘では見るこのできない、笑い話の戦闘であった。

やがて一陽来復、中原の野に春の気配がしてくると、畑の麦は伸びだして杏や李の花が咲き、楊柳も芽を吹いてくる。支那では城壁や土塼を作るのに必ず土を掘り上げるから、何処にでも水濠や池がある。そこには楊柳が植えられていた。楊柳とは川柳のことである。

楊柳が芽を吹く春先になると、農民が柳の新芽を摘む長閑な光景が見られた。つみ取った柳の芽を蒸し、揉んでから陰干しをしたのが一販の支那の茶である。彼等が接待してくれる支那茶は日本茶のように香りはなく、色だけは日本と同じであった。

『川柳』という「日本茶」の名称は、支那の川濶や池の縁に生えた楊柳からつみ取って作った茶だから、『川柳』という名前が日本に伝わったらしい。

柳には「柳絮」という名称の柳がある。これも同じように芽を摘んで茶にするが、その実が春の終わり頃になると雪のような真っ白い綿毛を飛ばし、実に風流な美しい光景を醸し出していた。これは北支那からシベリアにかけてと、樺太でも私は見ることができた。（右は運搬用の馬車）



農民の家の構造は概ね土塼の門をくぐると中庭があった。それを囲むように房子（部屋）のあるレンガ造りの棟があった。その棟には両側に寝室があり、炊事場は屋根続きの別の部屋となっている。それらは皆うす暗い簡素なもので、日本人なら一日も暮らせない住まいであった。

農耕用の馬や驢馬はどの家にもいた。驢馬は体は小さいが耐久力があり、粗食に耐え、少量の水で生きられる大層な動物で、農家にとっては貴重な財産である。彼等の生活の知恵と言っても良いだろう。勿論、乗馬の代わりをするから非常に便利な動物で、我々も利用したものである。

家の裏には黒豚や鶏を放し飼いにしており、水路や池に近いところでは家鴨も飼っていた。馬や驢馬、騾馬（馬とロバの掛け合わせ）以外の動物は餌はやらないから、人糞まで餌にして食べていた。これを見ていると豚肉も食べられないが、次第に大陸ボケになって気にしなくなってくる。

庭のある家では「石榴」の木を植えているのが普通である。これは孔子の教えの儒教の思想であった。儒教では「孝」が根本である。そのために子孫を沢山つくらなければならない。石榴の実の中には沢山な子供が入っているから、それにあやかって石榴の木を植えて、子孫の繁栄を祈っていたのである。

討伐の帰路のある時、農村の土壁に囲まれた中で大休止していると、堡長がタバコを1本差し出し、病人がいるから診てくれるようにと掌を合わせてきた。日本軍には医者がいることを知っていたからだ。これも宣撫工作だと軍医に依頼すると、マラリアであった。

『マラリア』には三日熱、四日熱、熱帯熱（熱帯性マラリア）などの種類がある。三日熱は中一日、四日熱は中二日をおいて発熱するという特性をもっている。中日には症状が現れないから、普通の健康体のときと同じような行動がとれる。そして48時間ごと、或いは72時間ごとに発作に襲われる。支那では三日熱、四日熱だが、私がビルマで罹病した熱帯熱は始末が悪く、10日間も高熱が続いて頭髪も抜けてしまった。

先ず最初に非常な寒む気に襲われる。それから体に悪寒が走って身震いが始まり、いくら毛布をかけて温かくしても全身の震えは止まらない。数十分も経過すると震えは静まるが、今度はどんどん熱が上がり始める。熱は40度を超し、体中りあらゆる関節が痛んでくる。これがマラリアの特徴で戦闘行動は出来ない。（右は通許県公署前の望楼と私及び小^{シオハイ}孩）

大隊会報で『狂犬病』が発生したと伝達されたことがある。日本国内でも狂犬病の予防注射は行われていたが、発生した事実は全く記憶にない。元来は犬の疾患だが、罹患した犬にかまれると唾液を介して人畜にも感染する。これは中枢神経がおかされるから痙攣や幻覚症状、恐水病をおこし、殆ど死亡する怖ろしい病であった。



支那では県城や城壁のある市街などでは、何処にでも『仁丹』の看板をよく見かけた。仁丹の名称は漢方薬の本家である支那の薬の名前か、それとも富山の薬の名称かは判らない。進撃していった敵地区にもあったのは間違いなく、漢方薬の仁丹は万能薬として通用していたようである。しかし貧民の彼等には高価な薬であった。

ふだん薬を飲むことがない支那の人達に、日本兵が風邪薬の代用薬として歯磨粉を与えたら、いっぺんに風邪が治ったと言う笑い話がある。日本の軍隊では恤兵品（兵士への慰問品）として歯磨粉、石鹼、鉛筆、紙などの日用雑貨類は支給されていた。

我々が農村部落で最も悩んだことは、風呂に入ることのない彼等人間の悪臭と、放し飼いの家畜類の排泄物が臭気^{フンアン}芬々として臭^{ニオイ}っていたことである。「居は氣を移す」と言うが、本当に人の住む場所は氣分に影響する。そして中原でも満州と同じく牛糞、馬糞を捨てる百姓は多く、化学肥料は見たことがなかった。

通許県城内生活

城内の日本軍は大隊の約半数の500人程度の兵力が駐屯していた。しかし大隊は一箇所に駐留するような建物はなく、本部、第9、第12、機関銃、大隊砲の各隊は別々に、支那家屋の大廈（大きな家）を接収して駐屯していた。（戦後の米軍が接収していたのと同様である）

各隊は門衛があつて歩哨が立ち、内務班も日本国内に近い状態に建築隊が改造し、将校以下全員が兵舎内に居住を共にして、何時でも出動できるように臨戦態勢をとり、通信設備から医療設備等も一応は整っていた。

心の動揺を冷静沈着な判断で補いながら、初陣から数多くの出動の体験を積み、奈落の底に蹴落とされるような思いをしたことがあつたが、住めば都で城内に帰り我が部屋に落ち着いた時は、虚無感という心境であつたかも知れない。

城内は東西と南北を貫く大通りがあり、その交差点の城内中央が一応、通許の繁華街という所であつた。だが我々が想像するような街ではなく、どの支那街にもあるように豚肉を吊した肉屋、饅頭や餅子、焼餅など、メリケン粉で作って油で揚げた食べ物ばかりが並んでいた。

日用雑貨類を売る店があつたか思い出せない。ただタバコの商いが一本売りの小さい商いで、経済が至って小さいことに呆れていた。ちり紙一つにしても一般の住民は紙は使用せず、木の葉などで始末していたようである。

通許県の東方に殷の都であつた商丘の街がある。古代の殷は商とも称し、初めて物々交換の市が立ったから「商」の語ができたと言われている。商丘に近い通許は商売が盛んだと思っていたが、正反対であつた。

史記に「有無を交易するの道通ず」と書いてある通りお互いに有るものと無いものとを交換しあい、融通しあうことが商売の始まりであつた。だから城内のどこかに物々交換の市場があつたのかも知れない。我々日本軍は軍紀厳正で、日曜日であっても街をぶらつくことはしなかったから判らなかつた。（上は城内第9中隊兵舎内の私の部屋の前にて）



『小学校』は城内の県公署広場の一角に建っていた。これが県内で唯一の学校で学年の数や生徒数は判らない。運動場（県公署広場）で遊んでいた光景を思い出すと全校生徒は50人内外であろうか。

義務教育制度でなかつたから、役人か豪農の子弟だけが通学するだけで、一般住民は生活に汲々としていて学問どころではなかつた。先生も読み書きソロバンができる程度で、国家百年の計などは論外であつたと思っている。

教育するにも学校はなく、学問に志しても金がないという状態だから、一般住民は読み書きもソロバンもできない。県知事さえも読み書きはできず、資産家あるいは豪農だから知事に就いたのであった。当時の支那は地主制度が徹底していて、庶民はうだつが上がらなかったのである。

街の中に県公署からの布告が貼りだされても誰も読めない。その布告文の前に人が沢山集まって眺めているのは、誰か読める人がきて読んでくれるのを待っているのであった。実に支那人はのんびりしていた。

「人生、字を識るは憂患の始め」という諺がある。それは人は字も読めず、何にも知らない方が、かえって気楽であるという意味で、彼等に適した言葉であった。昔の日本の寺子屋以下である。

今、残念に思っているのは、学校教育の内容まで気が届かなかったことである。儒教の本場の国では、論語に書かれている親孝行とか、親切とか、正直とか、友愛など、先人の知恵を如何に伝えているのか、知っておくべきであった。

無学文盲は学校ばかりではなく、『裁判所』にまでも影響を及ぼしていた。「地頭に法なし」とか「地獄の沙汰も金次第」という通り、権力のある人は法律を無視し、自分勝手な行いをしていた。これは拓殖大学出身である副知事が言っていたことで間違いのないことである。これだけ生活が貧しく教育程度が低ければ凡てが金次第で、「阿弥陀も銭で光る」であったようだ。

この思想は現代共産中国でも同じだと報道されていた。「刑は士大夫に及ばず」という科挙時代の言葉が、まだ生きていたというのは驚きで、逮捕されるのは下端だけである。現在でも省長以上の幹部が逮捕されると、共産党体制にひびが入り、国家が揺らぐからであるようだ。支那という土地柄が、それを必要としているのだろうか。（上の写真は兵舎内にあった私の吊りランプ生活の個室）



この状態では、「民は道に落ちたるを拾わず、外戸閉じず」とはならない。このことは「平和と繁栄となって国民は道に落ちているものを拾うこともなく、家を開け放っておいても泥棒に入られる心配はないほど、治安がしっかりしている」ことで、懐かしい通許も「千里を行くに尺兵を持せず」（護身用の短刀もいらない）であって欲しいと願っている。

日本の街頭で見ることのできない光景は『夫婦喧嘩』であった。盛んに大声を出してがなり立てているのは女房の方で、その周りを黒山のように人が集まっている。それは皆さんに聞いてもらうためで、一時間以上も喧嘩な騒ぎだ。恥も外聞もないのが支那の夫婦喧嘩である。この伝統は戦後も維持している。

日本軍は一般住民を手なずけるために宣伝工作の目的で『宣無班』を編成し、人心を安定させるいろいろな努力をしていた。特に戦っている日本軍の方針を知らせるたふめに工夫を凝らしていたが、その中の一つに『映画班』があった。

あるとき県公署前の広場に大きな白い幕（映写用の幕）を張り、夜間の映写会を実施した。城内の住民たちは映画そのものを見たことがなく、前評判が効いて大変な噂になっていた。

県公署まで存在する通許でさえも電灯があるわけでない。発電機で煌々と輝く照明を見たときの驚きは大変な騒ぎであった。墨を流したような真っ暗い夜が、一瞬にして昼の明るさになったのだ。40 km北方の開封まで行かなければ電灯はなく、貧民の彼等は生涯に一度も電気を見ないで死んでいった。

いよいよ映写が始まって垂れ幕いっぱい画面が動き出すと、どよめきが沸き上がって右往左往し始めた。映画を説明する発声が何処から出てくるのか、観衆の彼等には判らないからであった。

男も女も大人も子供も全員が垂れ幕の前に近寄ったり、幕の後ろ側に廻ったりして落ち着かなかった。この発声装置は説明しても住民たちには判らないから、宣無班の説明はなく、この不思議さは不可解のままで終わった。

戦時中とはいえ当時の日本では想像もできない情景である。この光景を目にした私の感想は、無知文盲の支那との闘いは不毛の闘いだと感じていた。それは蒋介石隷下直系軍の精鋭部隊と、未だ対戦したことがなかったからである。

楽しみはカメラのみ

通許県城内外のことを上記したが、百分の一も書き表すことはできていない。一握りの榮耀榮華の表現はできても、貧しい生活ばかりの限りない状況は手が着けられない。

このような街に住む日本人は副知事一人で、日本軍兵士が日曜に外出しても行く所がなかった。支那人の食堂は不潔で入る気にもなれず、戦後になって騒ぎ出した慰安婦などの姿はなく、否、最前線では許される状態ではなかった。

私の唯一の道楽は写真機をいじることであった。私たちの陸士予科時代には科目の一つとして「写真術」を習った。だから現像、焼き付け、引き延ばしの凡てが自力で出来たのである。

月給は使うところがなく、当時の金で120円もする「ツェイスイコンター」というドイツ製の写真機を、開封に出張した際に朝鮮人経営の専門店から購入した。他の将校たちの仲間もカメラを持たない人はなく、各々自慢の写真を競争して撮ったものであり、この拙書に掲げた写真は凡て自製自前である。

結婚披露宴に招待される

石岡中隊長は千葉の歩兵学校へ入校のため内地に帰還し、私が前任将校として中隊長代理を務め、討伐を始め精神訓話や初年兵教育まで一手に引き受け、多忙な日々を送っていた。

昭和15年の暮れの頃、副知事の結婚披露宴の招待状が中隊長宛に來た。隊長の内地帰還を伝え、代理の私が招待されることになった。これが縁で彼との交際が深まり、支那について造詣の深い彼から教わったことは、実に大きいと今でも感謝している。

副知事は日本に本妻が居るのか否かは知らない。披露宴の正面の席に着いていた花嫁は明眸皓齒の美人の上に聡明で、流暢な日本語で愛嬌を振りまいていた。ただ結婚式そのものが拝見できなかったことは残念である。

当時の支那は「売買結婚」であった。婚約が成立すると結納を贈るのが習慣で、普通の贈り物は金であった。男は資力の許す限りの金銭を使って女性と結婚する。だから金持ちや資産家は沢山な妻を抱えていた。各妻たちは共同の夫を守り立てていくと言う考え方で、日本では考えられない思想であった。反対に金のない男は一生涯、妻帯できないのである。

これは儒教の思想で、子孫を多くつくることが最高の親孝行であった。儒教を国教とする漢民族社会では、子胤がないということは男として失格者を意味している。先祖を尊崇することが民族の原点で、先祖の祭祀を絶やすことが最大の不幸とされていた。おのれの男性機能を切り取った「宦官」は、人間ではないと早しめられたのは、先祖の祭祀をする能力を失っているからだ。

支那には幾多の氏と族とに分かれていた。男子は血族の近い者、及び同じ氏の者とは結婚することは出来ない。この風習は一層良好な子孫を得るためである。血族結婚を避ける風習は、古代の周の記録にも明らかに書いている。唐代は更に厳粛に行われ、「是故取妻、避其同姓、畏乱灾也」「男女同姓、其生不蕃」と左伝にも書いてある。早くからこの思想は存在していたようである。

副知事の話では、支那では嫁は処女でなければならないと言う。売り物の思想である。初夜には婿の母親が嫁が処女かどうか身体を検査をする。処女であれば翌朝、家の玄関に黄色い旗を掲げ、処女でなければ赤い旗を出して追い返すと言う。都会では知らないが、田舎の通許付近では古代からの習慣が踏襲されていたのであろう。

日本軍が作戦や討伐に出て行った農村で、女性を見たことがない原因は上記したような検査のためであろうか。戦後の記事では日本軍の強姦を書き立てていたが、私の経験では、そのような行為は絶無であったと断言できる。

結納の値段を副知事に訊ねたことがある。値段に切りはないが安い値段の女では、当時の金で「30円」であった。少尉の月給が70円83銭、中尉の2等級が85円、1等級が95円、日本内地の小学校の校長が大体85円ぐらいであったから、一人の女の価格としては随分安いような気がした。

生活費は一日一人約10銭程度だったから1ヶ月で約3円と考えると、支那人としては負担が大きくて、妻を養っていくのは大変なことだったようだ。だから通許などの田舎町では存在しなかったが、開封のような大都会では「支那遊郭」が繁盛したのである。

食事に招待されたときの習慣は、先ず箸をつけて食べ始めるのは招待した家の主人である。毒味する意味を現しているのだ。魚を食べるときの慣習として、「君主は魚を裏返さず」という礼儀があった。戦後17回も訪中しているが、この食事の礼式を知っている者は半数程度であった。

「拱手の礼」というのは、両手を胸の前で組み合わせ、その手を上に挙げてする敬礼で、我々の小中学校時代の教科書に其の画がのっていた。当時の支那でも私は見たことはないが、多分宮廷の習慣だろう。「交手」とも称し、重大な事態に当面しながら手をこまねいて、何もしないことを「拱手傍観」という。

招待された後日、副知事に抗議を申し込まれたことがある。それは『越中禪』のことであった。日本の兵士は支給された禪を全員が着用していた。好天気の時などは兵士を裸にして体操をさせたものだが、兵隊さん全部が禪姿になることは、今後、中止してくれとのことだった。

支那では禪を着用するのは、男性は淋病にかかったとき、女性は生理の時しか使用しない習慣で、日本の兵士は全員が淋病だと思われるから、裸になることを止めてくれと言うのであった。「郷に入っては郷に従う」べしであった。

その他に、副知事から聞いて覚えていることを書いてみる。

『包丁』

戦国時代の「莊子」に「一包丁文恵君のために牛を解く・・・」と書いている。それは牛を解体する包丁さばきが見事だったことであった。包丁というのは古代の料理の名人の名前で、仮装の人物だろうと推察している。

『呉服』

三国時代(229～280)の呉の国の服のことで、呉の国から日本に伝わった呉の織り方で作った織物のことを言う。

『五服』

古代王朝の周囲を、王城から五百里(1里は405m)ごとに区切って定めた五つの方形区域。

『五福』は人生の五つの幸福。長寿、富裕、健康、好徳、天命を全うする。

葬 式

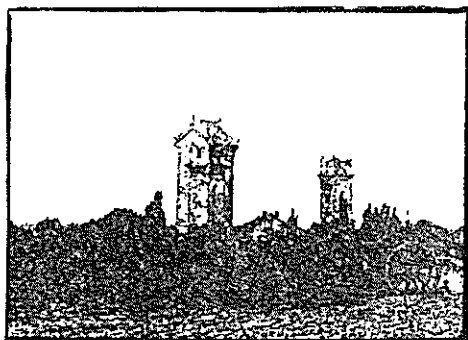
結婚式とちがって葬式の行列には何回か出会ったことがある。家庭あるいは斎場で行う式は知らない。出会ったのは死体を埋葬地まで見送る、野辺送りの行列だけであった。

行列はチャルメラを吹く男が先頭に立ち、棺桶に木の棒を通して担いだ二人の男性が続き、その前後に白い旗をもった人が何人かいたようだ。農耕地の一隅にある共同墓地まで「哭き女」が、大声をはりあげて泣き叫ぶ光景は支那独特の習慣である。

支那の感嘆詞は「哀呀」である。葬式で哀呀と叫ぶことを『哭礼』と云い、本当に我々日本人まで其の哀しみに巻き込まれそうであった。支那の家庭内には仏壇はなく、儒教を現した何物もなかったから、支那の葬式は仏式、儒教式、道教式ではないようだ。勿論、導師や僧侶を葬式の行列で見たこともない。通許の東門外に「廟」があったが、そこで葬式が行われた様子もなかった。

（廟は儒教や道教の寺。小さい方から道教では廟、閣、洞、祠、觀と称す）

大都市の墓地の入口には右の写真のようなレンガ或いは石の門が立っていた。通許のような田舎の街では門はなく、決められた範囲の土地に穴を掘って棺を埋め、その上に土を積み上げて土饅頭のようにしたものが墓石であった。



命日になると家族が土饅頭の前に跪いて線香を捧げ、哭礼している光景を眺めると、祖先崇拜思想は大変に厳しいようであった。（上は開封の共同墓地の門）人々の信心を神仏に伝える媒介として、線香は使用していたようである。

貧乏な農村地域では副葬品などを埋葬することはなく、土饅頭の墓地群は我々にとっては敵弾に身を隠す貴重な遮蔽物であった。当時の支那は火葬ではなく土葬であったが、現在の中国では火葬のため、あの光景が見られないのは残念である。（しかし一部の山村地帯では許可を得て埋葬している）

支那では病人が臨終が近くなると其の人の前に棺桶を見せ、安心して死んで行けと部屋に飾り付けることが親孝行だと、我々時代の旧制中学の漢文の先生から教わった記憶がある。その通りの棺桶は時々見掛けていた。

戦闘中に戦死者が出た場合には、農村から馬車などを借りて基地の通許まで運び、その夜は衛兵が立哨して読経は兵士の誰かが行い、全員が焼香して香煙縷々の間に厳粛に行った。翌日、茶毘に付したが苦勞したのは薪であった。

当時の支那は火葬でなかったから薪の必要はなく、暖房用の燃料も作物の殻を燃やしていたから、樹木は極端に少なく、茶毘用の薪の入手は困難であった。（支那の暖房装置のオンドルは、たき口で火を燃やし、床下の煙道を通して床を温めた）

明時代に書いた葬式の記録には次のように書かれていた。

大要によると、死人の埋葬に重点をおいて生前より準備する。人の死後の準備を整えることは、子孫にとっては最上の孝行と認められていた。死人は必ず棺に納めて土中に埋葬するのを礼としていたから、平素はすべてに儉約な支那人も棺桶代は惜しまなかった。特に宦官は、遺産を遺す妻子がなかったから、資力を使い果たして死後のことに勤めたのであった。

支那人は新造した棺桶を居間に備えて見せると、老いた親は満足を感じた。棺の次は墓地である。城内は埋葬が許可されないから、占い師によって城外に火墓地を求めた。将来、幸福が多くなると判断された土地の価格は高くなった。自家の墓地を変えない人のために、共同墓地が設けられていた。

死人を扱う最初の儀式は、臨終の迫った病人を布団のまま客間に移すことである。死んだ時には先ず沐浴を行う。死者が女であれば女、男であれば男が実施する。湯浴の後、絹または練り絹で死体を包み、更に晴着を着せて棺に納め、防腐剤と香料を入れて悪臭の発生を防いだ。

以上のような準備が終わると、門の外に紙で作った弔旗を立てる。この旗は死者の悔やみを受ける準備が出来たという報せであった。弔問客がくると門の内側に用意した太鼓を打って報せ、客間に通じる廊下からラッパが鳴らされた。

客間の柩の後方に垂れ幕があり、その後ろに親族の婦女子が集まっていて、弔問客が客間にはいると同時に婦女子は泣き声をあげた。男子は柩の左右に血統の順序に従って立ち並び、弔問を受けることになる。

親の喪に服す期間は満三年、その間は子等は決して安楽椅子は使わず、簡単な腰掛けを使うだけで、夜具も床板に敷くだけであった。酒や肉は食わず沐浴も許されない。喪中は夫婦生活も遠慮し、科擧の受験も中止した。

柩が家にある間は日々「哭礼」を行って供え物をした。「礼記」を読むと、朝夕哭、朝夕奠（供え物）と書いてあり、死者に仕えること生けるが如しであった。これが礼である。

葬ってしまうと以後は朝夕に拝む時間と度数が決まる。これを「卒哭」と云い、親は三年間、朝夕に哭さねばならない。後世になると甚だしいのは、喪中に子を生むと妻が誰かと姦通したと騒がれたらしい。それで自殺した妻も出たと云われている。

これを見ると葬式の様相は日本も同じようだが、おそらく支那の様式が日本に伝来したのではないだろうか。

纏足

私が支那に渡って以来、纏足の女性を目にしない日はなかった。アヒルが歩くようにヨチヨチと歩く纏足の女は40歳過ぎの人で、農村の細い道を一人で歩いている纏足は更に哀れみを感じた。彼女らは農作業もできず、隣村に行くにも驢馬の背中に横向きになって乗り、誰か家族が連れていかなければ不安であった。近代以前の支那女性について語るとき、どうしても避けて通れないのが纏足である。

10世紀中頃、江南の南唐王朝に生まれた纏足の風習は、五代十国の乱世をおさめて支那を再統一した北宋（960～1126・都は開封）になると、広く庶民に浸透し始めた。

歪んだ小さな足を好む、男の変態的な美意識から始まった纏足の奇習が、次第に広がるうちに、女は纏足するものだという固定観念ができあがった。その結果、好むと好まざるに拘わらず、女の纏足が制度化されてしまった。

近世の始まりの宋代は歴史の転換期であり最も栄えた時代であった。政治的にも文化的にも発展した宋時代には、科擧（官吏登用試験）の制度が高度に整備され、文化的には山水画が確立し、朱子学が完成した中で、女を女たらしめる人工的な纏足が定着したのである。

全土を再統一した北宋も頂点に立つ皇帝が放蕩に溺れ、周辺の異民族の脅威にさらされ、ついに金軍によって北宋の首都・開封は滅ぼされた。江南に逃れた亡命王朝の南宋も金軍の攻撃にさらされた。十三世紀後半、南宋の遺民が書いたという「燼余録」に、金軍の残虐な行為の中に纏足女のことも書いてある。

一枚の布団に纏足をした三十才以下の女をくるみ、これを四十歳以下の力のある二人の男に担がせて連れ去った。この記録から金軍は漢民族の纏足女を好んだことが良く分かる。

纏足は宋・元・明と時代が下がるにつれて普及したが、満州族の清王朝だけは纏足に馴染まなかった。満州族は纏足はしなかったし、漢民族に向けて纏足禁止令を出したこともある。しかし纏足に魅了された漢民族は馬耳東風、うやむやになってしまい纏足を続けた。

古来から漢民族は料理にしても、繰り返し煮たり蒸したり炒めたりして、元の材料が何だか判らなくなるまで、徹底的に調理するのが常であった。このように人工の極を尽くそうとする志向が、逸脱して人体にまで及んで、去勢された宦官と同じく、纏足された女が作り出されたのかも知れない。

宦官の歴史は三千年に近いが、その数は知れたものである。一方の纏足の歴史は北宋以来、二十世紀初頭の清末まで千年もの間、殆どの女が標的になっ

たのだから、全く嘆かわしいと言うほかはない。

南唐時代に始まった異様な纏足の奇習は、宮廷生活の芸術思想から生まれたと伝えられている。黄金で蓮の花をかたどった舞台上で踊った、華奢な体つきのダンサーは、足を布で小さく縛り、指先を上にもらせて新月のような形にしていた。この新月のような足に白い靴下をはいた女が、蓮の舞台でくるくると旋回すると、まるで天女が空高く舞い上がって行くようであったと言う。

又、一説によると、支那では昔から小さい足は一つの美観であったと言われる。さる皇后が奇形の足であったが、その欠点を補うために初めて行ったのが纏足で、ついに一般人にまで模倣されたと言われている。

纏足は骨がまだ発達しない幼女のころから、足の親指以外の四本の指を内側にねじまげ、布でくくりつけて奇形化させる。そうすると、もっこりと突起した足の甲の先に、尖った親指の先だけが突出して、丁度、バレエのシューズのような形になるが、それが纏足であった。無理矢理に足を変形させるのだから、それには凄まじい激痛を伴い、幼児は泣き叫んだと言う。

私の調査したところでは、大正の初め、支那全国で8歳以下の女子の4分の1は纏足していなかったようだ。だから私が支那戦線に従軍したときには、逆算すると33才以上の女性は纏足していたようである。

県知事に纏足をする目的を訊ねると、①支那は売買結婚だから逃げられないようにするため。②古代の皇帝が雪の降った朝、蓮の花のような足跡を見付け、その足跡を辿っていった部屋の女が性的技術に最高であった。それから皇帝は連日連夜その女に通った。③纏足の女は「カガト」で歩くことになるから、太股の筋肉が強くなり、それによって性器まで発達する。その三つを指摘した。

首 丘

通許は私にとっては最も懐かしい街である。この拙書を書いていると、若い時代のあの頃のまゝ、私には時間が止まっているような感じがしてくる。傘寿の私には若返りの妙薬のようであったが、想いの百分の一も書けない。

支那に関して学び、よく知り、語学も覚え、隊長不在で八面六臂の活躍をし、最初の戦闘を経験した地でもあった。戦後2回も河南の開封～中牟を訪問したが、通許は未開放地区という理由で行けず、永遠の別れとなってしまった。

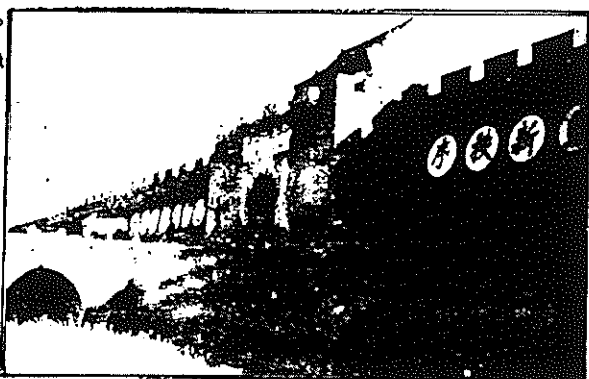
狐は死ぬときは、もと住んでいた丘の方に首を向けるから、丘に首すという「首丘」（礼記）の言葉が生まれた。通許は将に私の故郷の感じがする。

通許時代の戦友の一部は南太平洋の戦旅に征き、ニューギニアのヌンホル島で玉砕して悲しい運命を辿った。衷心から伏して御冥福を祈ります。

華麗な宋の都・開封へ転勤

田舎の支那の本当の生活を体験した思い出の深い通許とも、離別しなければならない時が来た。いくら通許が私の性^{しやう}にあったといっても宮仕えの軍人は命令一下、服従しなければならない。

幾^{いく}の重なる大廈高樓が軒をつらね昔の雅^{みやび}の香りと商業の活気が満ち満ちている開封の都、そこに駐屯する我が聯隊の本部附となり、第二代聯隊長湯口俊太郎大佐（25期）に申告して聯隊旗手を拝命した。時は昭和16年3月末であった。



これから長い軍人生活の中で（日米開戦も敗戦も予想外）旗手を拝命することは最高の栄誉で、人生に二度とない一期一会だと心中は花の舞台に飛び上がったような歓喜であった。59年も前の秋^{しゅう}水^{すい}（軍刀）を帯びていた当時を思い出しながら、すっかり忘れていた思い出を呼び寄せてみたい。

（上の写真は開封西門の城壁と樓閣）

『軍旗の由来と儀式』

明治7年、明治天皇が近衛歩兵第一、第二の兩聯隊に勅語とともに軍旗を親授されたのが最初で、その後も聯隊が新設される度に行われるのが慣例になった。

「歩兵第〇〇聯隊編成ナルヲ告グ。仍ッテ茲ニ軍旗一^リ旗^ヲヲ授ク。汝等協力同心シテ益々威武ヲ宣揚シ、國家ヲ保護セヨ」という勅語を賜ったのである。これに対し聯隊長は「謹ンデ明勅ヲ奉ス。臣ヲ死力^{ツツ}ヲ竭シテ誓ッテ國家ヲ保護セン」と奉呈する。

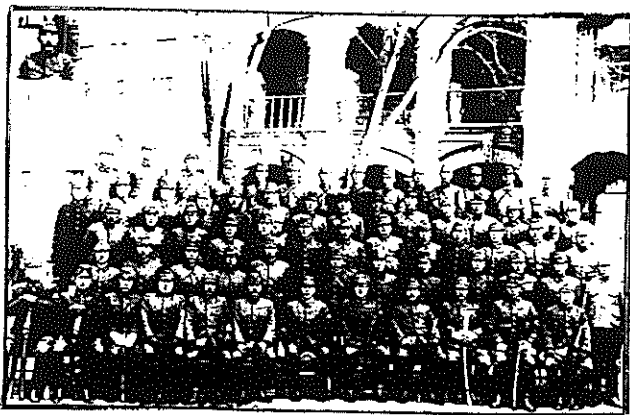
聯隊では将兵整列して軍旗奉迎式が行われ、喇叭手^{らふぱしゅ}の吹奏する「足曳^{アジビキ}」の歌詞の響く中に帯刀者は軍刀を一閃し、兵は着剣して「捧げ銃」をする。

軍旗が部隊の団結と士気の象徴として神聖視される伝統は、欧米先進国の陸軍に由来している。しかし日本陸軍における軍旗の崇尊^{あやふかし}は、やや極端といえるものがあつた。有名な例として、西南戦争の時に乃木聯隊の軍旗が敵の手に落つたことが原因で、明治天皇の崩御^{ほうご}直後、乃木大將は自刃^{じじん}している。

したがって部隊が最後の時に陥つた際の軍旗の処置が聯隊長の最も頭を悩ませた問題であった。私が大隊長として赴任したビルマの師団に於いても、二ヶ聯隊の軍旗は奉焼して玉砕している。奉焼する時間的な余裕がない時には竿頭^{かんとう}に爆薬を仕掛け、旗手もろともに四散するような工夫が凝らされたようである。私の旗手時代は支那軍相手の勝ち戦の最中で、高い誉れに包まれていた。

熱所^{シベクシム}忘れ難い^{カタ}通許から開封
に転勤すると生活は一変した。
偉い人達に囲まれた中での勤務
は緊張の連続で、学び取ることも
亦^ソ大きかったと思っている。

（右は聯隊本部前で撮影した大
井川聯隊長の送別の記念写真、
最後列左より2人目が私。左上
の枠は新聯隊長湯口大佐）



当時の師団司令部は河南大学

の大講堂を、我が聯隊本部は河南大学の医学部を接収して威容を構えていた。
旗手の私の席は上の写真の2階であった。懐かしい場所も現在は立ち入ることは許可されていない。

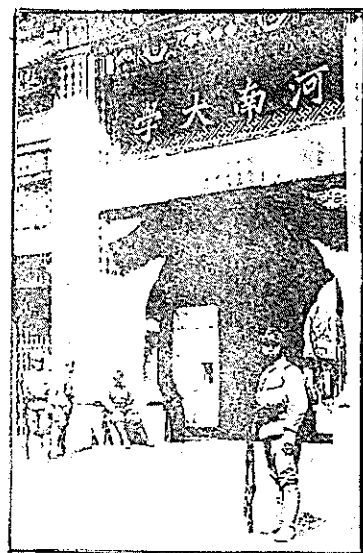
私が旗手を拝命したのは、昭和16年5月1日～6月末日間に行われた中原会戦のための人事異動で、旗手の席を温める暇もなく準備に追われていた。

中原会戦から開封に帰還したのもの束の間で、9月から開始された黄河渡河作戦の河南作戦には、中隊長を拝命して第一線に立つことになった、栄華の街と騒がれた開封の東北角の一隅に、旗手として勤務したのは5ヶ月の内、3ヶ月に過ぎなかった。

これから開封の思い出の記事を書き始めるものの、それは聯隊旗手を奉職した期間のことよりも、中隊長時代に開封に出張した時に体験したことの方が、断然多いことだろう。それは作戦のための中隊長会議を始め、中隊長教育の受講者となり、或いは将校教育の教官を命じられたり初年兵教育の打ち合わせの会等、大体2ヶ月に1回位は開封に出張し、戦塵の垢を落として優雅な味を噛みしめていたと懐古している。

（右は河南大学の正門）

支那の戦闘というのは、敵の動向によって討伐や作戦が実行された他、年に2回程度の大規模な作戦が積極的に実施された。大東亜戦争のガダルカナルやニューギニア、比島、ビルマの戦闘のように、来る日も来る日も戦闘に明け暮れる状況ではなく、補給のためと将兵の休養のために、ある程度の間隔において作戦・戦闘を継続していたのであった。



『開封の歴史』

新任地の開封は前宋の都城である。その歴史については戦後2回訪れた紀行文に詳しく記述したから、ここでは簡明に記しておきたい。

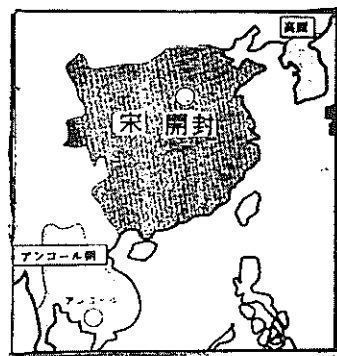
今年(1987年)は西暦二千年である。千年前の世界はどのようなものであったのかと繙いてみると、前宋の都として栄えていた開封は、世界第二位の人口の大都市であった。

日本では藤原道長の摂政関白政治の絶頂期で、自分の娘を天皇に嫁がせて天皇の外戚となり、政治に大きな影響をもっていた時代である。文化の面では源氏物語、大和絵など、日本独特の文化が開花した時代であった。

その時、開封の宋時代は火薬を使用し、木版印刷の出版も盛んで、千人を乗せる大型船も建造し、17世紀の英国の2倍の鉄鋼生産高であった。当時の官僚の数もまた、2万人に達していたと言うから驚きである。

人口から見ると世界第一位は	ゴールドバ(スペイン)	45万
二位	開封(支那)	40万
三位	コンスタンチノーブル	
	現イスタンブール(トルコ)	30万
四位	アンコール(カンボジア)	20万
五位	京都(日本)	17万
六位	カイロ(エジプト)	13万
七位	バグダット(イラク)	12万

(左図は宋・開封の位置図)



開封が如何に発展していたかが判る。その証拠に北京の故宫博物院に保管されている「清明上河図」に、庶民の生活が生き生きとして描写されている。

その発展した原因は、隋の煬帝が造った世界的な大土木工事の運河によって、黄河との交差点に当たる開封に江南の物資が集まり、暫くの間で大発展を遂げたのである。更に開封から黄河の上流の洛陽や長安の都に物資が転送された。他の都市が戦乱によって瓦解するのを尻目に、開封だけが飛躍したのである。

煌々として電気の光が輝く大城郭都市・開封は、誰しも憧憬的であった。その雅やかな都の地に私は転任することになり、河南大学医学部を接収した官舎の人となったのである。

前古無比の殷賑を極め、世界第二の国際都市として名声を轟かしていた開封は「七朝の古都」で、当時は河南省の省都であった。市街の中にはあらゆる露天や屋台が並び、人が群れ、弦歌嬌声に満ち、娼家や酒房の軒先をかざる採光が、客を妖しく招き寄せていたようである。

開封の記事では先ず城郭都市を述べ、皇帝の由来から後宮や宦官について書き、その後に私の見聞した当時の開封を描写してみたい。

城郭都市

(開封城は典型的な城郭都市であった)

支那の都市に城壁をめぐらしたことは紀元前からのことで、春秋戦国時代だったと思われる。これは盗賊や外国の軍隊(当時の国として)を防ぐためである。「城」という字をみても判るように、「土」が「成」ったものである。つまり土をこね上げたもので、城にもいろいろな種類があることが判ってくる。

支那では規模が大きいものに政治都市としての都城があった。漢、隋、唐時代の長安や洛陽城、宋時代の開封城、元時代の大都城、それを受け継いだ明、清の北京城など、周囲数10kmの城壁をめぐらす巨大城郭都市である。

「共産党による人民革命以後、旧来からの伝統ある城壁を撤去したことは、往時を知る者の一人として誠に残念と言わなければならない。都市人口の増加や交通の不便を解消するためと称しているが、ローマを見習うべきだったと言いたい。ムッソリーニは旧ローマを昔のままに保存して、新ローマを開発したのである」

現在ほぼ完全な形で城壁を残している都市は、唐の長安であった陝西省の「西安」、三国時代に呉と蜀漢との争奪の地となった湖北省の「江陵」、山西商人の活動拠点であった「平遥」などである。

伝説によると夏の禹王時代には国の数が万国あったという。殷の初めに三千国、周の初めに千七百国、春秋の初めに千二百国あったという。そのときは都市国家で、「邑」或いは「国」と呼んでいた。

「邑」(邑)の字は、周囲を画した土地と、ひざまずいた人から成り、濠、柵、土壁などで囲まれた内に集合して居住する人間、つまり集落を意味する。そのために和訓では「ムラ」と訓じている。

「国」の字は漢字の辞書の中で最も古い。漢の「説文解字」に「国とは、邦なり。口に従い、或に従う」と書かれている。又、「大を邦といい、小を国と白う。邦の居する所を亦た国と曰う」とも他の書物に書いている。

国の字の大きな口は囲いをめぐらす城壁、中の或は武器の代表である戈と人民を意味する口、そして土地を意味する一からなっている。つまり邑も国も城郭をもつ都市国家を表した文字ということである。

邦は丰と邑から成っており、若木(丰)を境界に植樹して新しい邑を建設することを意味している。

城の字は、「説文解字」には、「城とは、民を盛る以(どうぐ)なり。土と成に従う」と書いている。盛り土をすることを「成」と云うから、防壁の内に人民を集めて住まいすることが城の字の意味で、都市国家である。

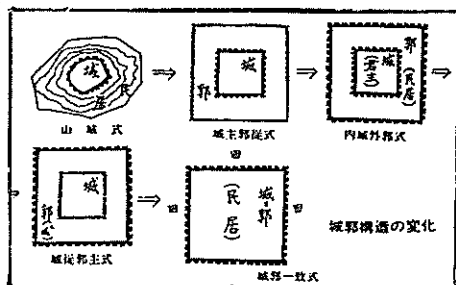
『城郭構造の変化』

春秋時代から戦国時代へは大きな変革の時代であった。^{モッパ}専ら丘陵上に立地した原始集落が、従前の濠や柵といった簡単な^{ボウキョ}防御から、土壁で囲むものが登場し、やがて都市国家へと発展し階級社会へと移行した。

殷代の中小邑は「山城式」が一般的であったようである。それから「城主郭従式」となり、春秋時代になると「内城外郭式」が出現した。民居区を囲む外壁が従前より強化されている。この外壁を「郭」と称し、内壁を「城」と云った。即ち内城と外城という二重構造が明確となった。

「内城外郭式」は「城主郭従式」から次第に外郭が強化され、内城をしのぐ構造をした「城従郭主式」へと移行したようである。このように城は内城、郭は外郭で、内外の異なる城壁の呼称であった。

郭内の住民のほとんどは農民で、郊外の一帯範囲の耕地へと、朝に郭門を出て農耕に従事し、日暮れに郭内に戻ってくる生活であった。（上は城郭構造の変化の図）



戦国時代になると内城はないに等しい状態になり、専ら外郭の強化が図られた。非常時における防御の拠り所であった内城に代わって、外郭を強化して外敵に抗するようになり、内城と外郭の区別が消滅した。（上図参照）

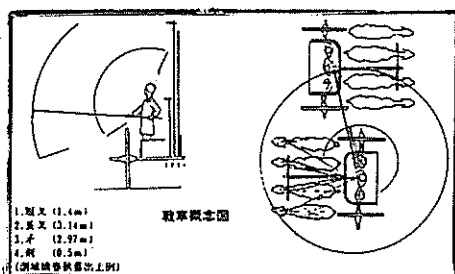
城郭の語は一つの熟語として通用されているが、本来は別々の字義であった。

『戦法の変化と城郭』

春秋末期から戦国時代には、邑と呼ばれる都市国家から脱皮して領土国家が形成された。そして領土国家の形成とともに戦争の様相も大変化した。

都市国家同盟相互の戦車戦を中心とした野戦から、領土国家間の大規模な歩兵を主力とする攻城戦が、主な戦術と変化してくると、外郭の強化が必然的になってきた。内城の必要度の低下と外郭の著しい強化によって、城と郭が事実上一体化となったのである。

春秋までの戦争は戦車を主体とした野戦が多かった。戦車は2～4頭の馬に牽引されたもので、^{ギョシヤ}馭者と戦闘員である右士・左士の3人乗りが一般的であった。馭者は馬をあやつるのが主任務で、戦闘員は長短の戈や矛、剣を振り回して、敵の歩兵を斬り殺す人であった。（この戦車は古代エジプトや西アジアから伝わって来たものである）



（右上の図は戦車戦の概念図で、戦車の方向変換、戦闘員の闘い方が判る）

北宋の国都・開封城

開封の歴史は戦国時代の魏にまで遡る。魏は現在の山西省の夏県に国都を置いていたが、前364年に大梁（開封）に遷都し、前225年に秦軍による水攻めで陥落し、滅びるまでの魏の国都であった。

魏によってこの地が「封疆を開拓」されたのが、開封の地名の由来である。「封疆」とは「封界」（封境、封域も同じ）のことで、国の境である。国境を開拓するという意味が開封であり、辺境開拓の意味であった。

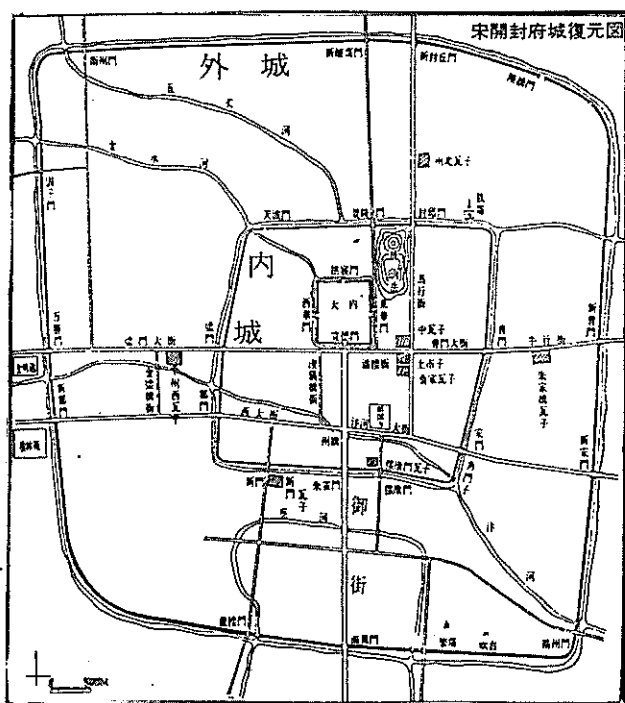
唐時代には汴州と呼ばれた。そして87頁に記したように大運河建設のために繁栄した。考えてみると、国都の立地条件が軍事的よりも、経済的、財政的な要請にかなうことが、第一義的に求められたのであった。

これまでの治安維持を第一義とした閉鎖的な城郭都市から、開放的な都市へという都市の変貌ぶりが最も典型的に見られる。これが宋の開封城である。

右図の開封城で目に付くのは三重からなる城郭である。周囲約2750mの大内は宮城で、周囲約11kmの内城は外郭城である。周囲約27kmの外城はさらに拡張され、城高は12、3m、城基厚18mであった。

右の開封城復元図の中に7ヶ所の「瓦子」が見えているが、この瓦子の位置こそ開封城の発展を如実に物語っている。

瓦子というのは勾欄（常設の演芸劇場）、酒樓（高級料理店、クラブ）、その他各種の店舗が軒を連ね、あらゆる娯楽施設が集中した盛り場のことである。



宋代の消費都市としての特徴は、この瓦子の登場によって代表される。唐代までの城郭都市では、夜禁のために日没とともに全ての城門は閉ざされ、城内への出入りはストップした。人や物資の移動が活発になるに従って、城門外に宿屋、飲食店、運送屋、倉庫業などの常設の店舗が続々と開店し、市街地化が進んだ。このように城門外が発展したのは、開封の内城外の瓦子のためである。

現在の開封でも観光のために瓦子が復活し、夜市が珍しく終夜営業していた。

旧来の城郭外が著しく市街化、都市化すると、新たにそれらの地域を城壁で囲むという点で、都市とは即ち城郭都市なりという、支那の伝統的な都市観が示されている。開封は大規模な例であり、我々は城外を「関」と呼んでいた。

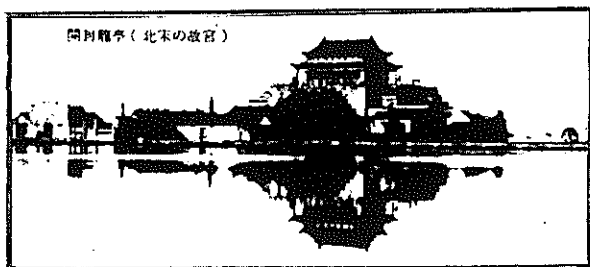
（南門外は南関である）。開封城の街並みは、内城から外への発展に伴って外止が継ぎ足していったから、外城内の街路や街並みは不規則であった。

開封城のすぐ北を東流する黄河は、暴れ竜と形容されるように、過去に大きな氾濫を繰り返してきた。黄河は華北の大平原に入ると流速が低下し、黄土の泥土が河床に堆積して天井河を形成する。そして開封から河口までの距離は約700 km、その間の高低差はわずか95 mに過ぎない。傾斜がないために河床は高くなるばかりで、決壊すると元の河道に再び戻ることはない。これが黄河が幾たびも大きく河道を変えてきた原因である。

開封付近の地勢は黄河の北側が高く南側がやや低いため、氾濫した黄河の溢水は南側の開封を直撃した。したがって、宋都の開封城は度重なる黄河の氾濫によって、¹⁷龐大な泥土の下に深く埋没してしまった。その深さは5～12 mと推定されている。

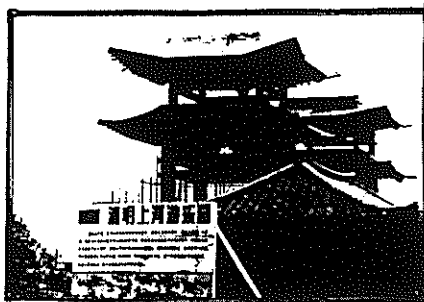
開封・竜亭（北宋故宮）

竜亭は前頁地図の中央にある「大内」の一部で、宋時代の宮殿の庭園の跡だと云われている。明代末の大洪水でほとんど流れてしまったが、庭園の一部の土山が残った。清代末の1692年にこの土山に万寿亭を築き、皇帝の誕生日に文武官吏が来て拝謁したという。



正面の72段の石段には見事な雲竜が彫刻され、亭前には宋代につくられた一対の獅子像が坐っていた。屋根は黄色い瓦で葺かれ、楼閣は朱塗りで天高く聳えて故宮の雰囲気漂っていた。現在は更に殿宇の数も増加して絢爛豪華な姿を見せていた。

竜亭の南面に広がる潘家湖と楊家湖は共に將軍の名前で、戦中とは見違えるほどに整備拡大されていた。（上は現在の竜亭、左は宋代遺跡）



皇帝の由来

天下を支配した秦皇「政」が最初に行ったのは、最高権力者としての自らの称号を決定することであった。

秦に先立つ統一王朝「周」の天子は「王」と称したが、春秋戦国の乱世を経てから、諸侯もすべて王と称したため価値が下落した。そこで秦王となった政は「皇帝」という称号を採用した。「皇」は天帝（宇宙の支配者）の意であり、「帝」は伝説の五人の聖王「五帝」からとったものである。

十八史略には次のように書かれている。『秦王、初めて天下をあわせ、自らおもえらく、「徳は三皇を兼ね、功は五帝に過ぎたり」、号をあらためて皇帝という』と。皇帝という言葉は、二千二百年前に秦の始皇帝が発明したのだ。

これらは太古の伝説にある聖王で、天皇、地皇、人皇を三皇といい、其れよりあとに現れた黄帝、顓頊、帝嚳、尧帝、舜帝を五帝という。この皇と帝とを合成したわけである。さらに天子の自称を「朕」と定めている。

『天下の意義』

天の覆うところ、地の戴すところの世界は、一人の天子が支配するものとして、これを「天下」と称した。天下とは元々は「世界帝国の観念」で、支那では「天下思想」のもとに四千年の長い間、政治が行われ、戦争が絶えたことがなかった。これまでに二十数回も為政者が交替している。

『日本の天皇』もこの称号を真似たのであろうか。皇帝は神に近い存在であり、明治以来は神そのものであり、神の体现者であった。則天武后は夫の高宗の在世中に、皇帝を「天皇」と呼び皇后を「天后」と呼ぶように定めている。これからとったのであろうか。詳しくは私は知らない。

『龍顔の出所』は漢の高祖「劉邦」から出た言葉である。

劉邦の母親が池の畔でうたた寝をしていると、雷鳴閃電、雲霧が四方に立ちこめ、真っ暗になった。その夫が案じて探しに出た。すると妻の上に龍が覆い被さっていた。そう見えたのも瞬間、かき消えた。やがて劉邦が生まれた。もちろん、劉邦を英雄豪傑にする伝説でもある。

十八史略では、「天子の顔を龍顔と称するのはここが出所だ」と書いてある。

『年号の起源』は漢の武帝である。彼は即位の時に、初めて年号を立てて「建元」と称している。これが東洋における年号の起源である。

『後宮』皇帝には後宮は付き物である。後宮とは、もともと皇帝がプライベートな生活を送るための奥御殿を意味していたが、転じて皇后を始めとする女性たちの総称となった。制度としての後宮については、古く「礼記」婚儀に、天子には一人の「皇后」のほか、三人の「夫人」、九人の「嬪」、二十七人の

「世婦」、八十一人の「御妻」と、順番にランク付けされる計百二十人の女性が配されるとの規程が見える、つまり皇后を頂点にして、ランクが下がるほど数が増えて、ピラミット型を形成していたのである。しかし、いくらでも増やすことの出来る仕組みであった。荒淫で鳴らした呉の皇帝・孫皓の後宮は美女を数千人も吸収したため、後宮は一挙に一万人に達し、身を崩して崩御した。

これらは流石に親孝行を第一義とする儒教の国らしい現象である。日本の皇室でも明治までは、皇后以外に〇〇局と言われる女性が居たことは明らかなだ。

唐の詩人白居易は、かの「長恨歌」の中で、「後宮の佳麗 三千人、三千人の寵愛 一人に在り」、つまり楊貴妃が玄宗の後宮の美女三千人の寵愛を、独り占めしたと謳ったが、三千人の数も誇張だったとも言えないのである。

『宦官』宦官とは、去勢によって男性機能を喪失した、きわめて人工的な存在である。支那の歴史上、宦官の誕生は古く三千年以上も前、殷王朝の頃までさかのぼる。以来、今世紀の初頭、製王朝が滅亡するまで宦官は存続していた。

宦官そのものの始まりは、征服した異民族の捕虜や刑余者を去勢し、宮廷内部で用いた者である。時代が下がりその勢力が強くなると、自ら去勢して宦官を志願する者が増えてきた。

男性機能を喪失しているため、後宮の奥深くに出入りを許される宦官は、皇帝の淫靡な私生活の共犯者となり、いつしか皇帝を陰から操る闇の権力を手に入れるようになった。王朝がいくら交替しても、絶対権力者としての皇帝が存在し、闇の権力者宦官もまた存在をし続けたのである。

あの絶対無比の権力を誇った始皇帝の秦でさえ、始皇帝が死去すると、忽ち宦官の趙高が権限を握り、その滅亡を早めたのであった。

『外戚』皇帝政治を恣にした三つの勢力の宦官、後宮の最後が「外戚」であり、三つ巴の闘争であった。後漢は、終始一貫、外戚（皇后の一族）と宦官の権力主導権争いに翻弄された王朝であった。宦官の優位が決定的となったのは、後漢第十一代皇帝の桓帝（在位一四六年～一六七年）の時である。

桓帝は猛威をふるった外戚の梁冀一族を一掃するために、單超、左悺、徐璜、具瑗、唐衡ら五人の宦官の助けを借りた。この五人の宦官は内密裡に事を運んで近衛師団を動かし、首尾よく梁冀一族を一網打尽にすることに成功した。こうなると、あとは彼等の天下だった。五人の宦官はその功績によって侯に封じられ（五侯と呼ばれた）、一族郎党を実入りのいい地方官の職につけて権勢をるい、賄賂を取り放題という有様だった。

以上のように皇帝政治は、後宮と宦官と外戚によって支配され、専横によって政治機構をズタズタに破壊して、結果的には王朝は滅亡の一途を辿り、甚だしい政権交替が続いたのである。

恋しい開封懷古

傘寿になった今でも開封の夢を見ることがある。赤い灯、青い灯がともってランタンが揺らぎ、脂粉の香りが漂う開封の街は、我が聯隊将兵にとっては恋しい懐かしい都であった。その都大路を思い出すために、師団の兵士が謳っていた歌詞を先ず掲載して懷古談の始めとしたい。(右は開封小唄の歌詞)

当時の開封の人口は市街地だけで約25万と云われていた。軍を除いた民間人の日系人の数は約一万人で、小学校も開校され華北交通鉄道(株)の鉄道管理局、領事館領事館警察署、陸軍病院、特務機関、電報電話局などの施設も、日本の県庁所在地並みに存在していた。

私の出身県である福井市の当時の人口は約4万、北陸随一の大都市であった金沢市が約15万であった。それらを比較して開封の大きさを判断すると、開封は宋時代には及ばないが大都市であり、大城壁に囲まれた威容は宋都の面影を残していた。

前記した通り、旗手時代に開封に滞在した期間は実に短く、実質的には約3ヶ月に過ぎない。だから開封の地理さえも余り知らなかった。これから懷古していく開封の思い出の文も、大半は中隊長時代の経験だと思っている。

中隊長になった私の任地は、北支那方面軍では最大の激戦地であった。しかし2ヶ月に1回程度は出張命令によって開封の人となり、命の洗濯をしていたようである。だから誰よりも都のことは知り尽くしていた積もりだ。だが、いざ書き出そうとすると、百分の一も思い出せず、手が着けられない感じがしている。それは時間的に60年近い昔のことであり、我が身の老碌からであった。

戦地でも後方基地は、内地にいる者となんら変わらない環境であった。兵隊に入って戦地に行ったといっても、多くの者は後方の兵站(補給)勤務で、歩兵隊に於いても接敵の場所により、危険度には雲泥の差があった(右は清明上河図を復元した瓦子の料亭)

開封小唄

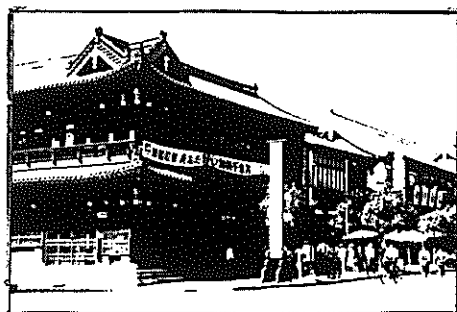
一、何故に咽ぶか胡弓のひびき、更けて淋しい省府路
君と別れた鼓樓の下に、今もアカシヤの花が咲く

二、誰を待つやら大路の角に、一人佇む時計台
恥しいのか夕焼空に、染めて紅さす円い顔

三、鈴が鳴る鳴る馬車が続く、揺れる花籠嫁御寮
開封恋しや主なお恋し、嫁御十六しゅしゅの靴

四、月の揚家湖まこもを分けりや、竿に砕ける湖電亭
霧ににじんだ墨絵が紅か、うすら灯りの書店街

五、一人暮しのやつれも見えて、月にすねてる鉄塔寺
小糠雨かと空見上げれば、なんの黄河の砂が降る



古都の逆旅

日に夜を継いで敵の砲銃弾下のもとで暮らしながら、たまに開封に出張を命じられて落ち着くところが逆旅（旅館）であった。旗手時代は河南大学医学部の立派な官舎に住んでいた。中隊長を拝命してからは連日連夜戦鬨に明け暮れていたが、古都開封の常連の宿屋は何時も「日東ホテル」であった。

開封に駐屯する部隊以外の将校は、兵站司令部が指定したホテルに宿泊し、そこを根拠にして活動していたのであった。軍人は無断で任地を離れることは許されず、許可なく離れた場合は、敵前逃亡罪として陸軍刑法によって厳罰に処せられた。

我々将校は聯・大隊長から出張命令書を受領し、物資輸送の兵站トラックに便乗して開封に到着し、兵站司令部に命令書を提出して旅館の指定を受けた。それからその宿泊券を持参してホテルまで「洋車」（人力車）を走らせた。勿論、宿泊は兵站負担だから我々には負担はかからない。無料である。

大都会の開封には兵站指定ホテルが7～8軒あったと思っている。開封の最高級旅館の帝国ホテルには大佐や将官が宿泊し、私の所属した聯隊の第一大隊の将校は主として日東ホテルであった。大隊によって別々に指定されると言うことは、旅館の規模が小さいから一箇所に宿泊できないのである。

旅館は奥行きの深い支那家屋を改造し、障子、襖、畳など純日本風に造作が施されていた。概ね街の中心部に位置していたが、開封占領当時に軍が接収したのであろう。

我が守備陣地の中牟から黄河を渡河し、トラックに揺られながら中原の荒涼とした大平野を疾走し、雑踏する市街の風光に目を光らせてホテルに着いた時の歓喜は、地獄から極楽に來たような感じであった。

二年間ばかり、常連として宿泊していた私は、日東ホテルの主人以下の人達とは家族同然であった。毎日黄河戦線で血を見ていた戦塵を流し、日本風の浴衣や丹前に着替えた時は武陵桃源の別天地の感がした。（上は日東ホテル主人夫婦）

床付きの畳の間に落ち着くと先ず茶と菓子の接待が始まる。すると和服を着た接待さんがお膳を運んで夕食となったが、女気のない戦場から出てきた我々には、彼女らは全て菩薩に見えた。「月夜に米の飯」の故事を噛みしめながらの夕食は、龍袍（王様の着物）をまとったような感じだ。しかし寝静まる頃になると、徹夜で死守する部下達のことが脳裏に浮かんで来るのであった。



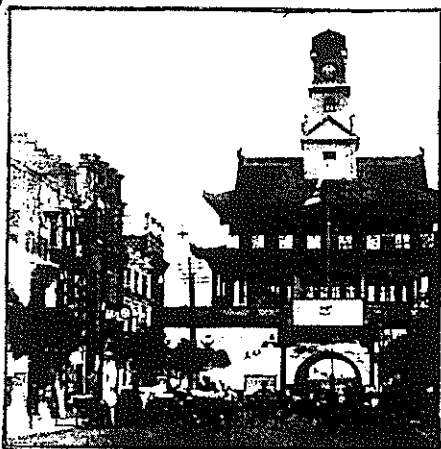
日東ホテルの人達は福岡県の出身者が殆どで、主人は軍隊の経験もあり、開封居留民団の役員をしていた。実に親切で、私が陸大の受験にパスした時には、開封電報電話局から我が故郷の母や兄宛に打電してくれた。

忘れられないのは主人の妹さんのことである。何時も好意をもって歓待してくれ、愛しそうな口調で話し掛けてきた。私に犬のように尻尾があったら振るのですが、と淡い恋心を打ち明けられた。然しそれも東の間のこと、彼女は嫁入り修行のために帰国し、結果的には「磯の鰐の片思い」になってしまった。彼女の美しい麗姿は今も二十歳前の娘のまま止まっている。

豊かな異国情緒

開封を語るには先ず「開封小唄」(94頁)にあるように、「鼓楼」を挙げなければならない。市街地の中心にあり、時を告げる鐘が鳴る樓閣のことで、時計台とも呼んでいた。

この鼓楼は500年以上も前の古い建築で、有名な馮玉祥將軍が河南督軍時代に、大時計を寄付したと云われている。これが開封第一の異国情緒である。(右は鼓楼)



この鼓楼を中心にして街路が碁盤の目のように四通八達し、宋時代の瓦子を思わせる繁華街は殷賑を極めていた。

ホテル前で客を待っている洋車に乗って走ると、開封で最初に驚いたことは、「割れた茶碗を縫ぎ合わせる」職人を見付けたことであつた。日本では絶対に見られない光景で、欠けた茶碗を鑊で鑿ぐのである。支那の庶民は新しい茶碗一つ買う金もなく、タバコまで一本売りの商売であつた。

街路の所々に露天の散髪屋が店を開き、結構、繁盛している光景も異国情緒があつた。昔は理髪とは云わなかった。武士が断髪したとき、散髪という言葉が生まれたのかも知れない。散髪が終わると手鏡を客に渡して出来映えを見てもらうようだ。一般に支那人はバリカンで髪を刈ることはなく、分厚い剃刀で丸坊主に剃っていた。それが一番経済的に安上がりである。二人一日の生活費が一銭というから我々は想像もできない。(右は露天散髪屋)



鼓楼に向かつて右側（南）は支那の食道楽街で、店舗あり屋台もあり、麵の立ち食い、蒸籠から蒸気をあげている饅頭、店にぶら下がっている腸詰め、湯円や月餅、皮蛋、小麦粉の薄皮に肉と汁を包みこんで蒸した湯包子、その他に鶏や家鴨の丸焼きなど数えきれず、美味しい臭いが充満している。どれもこれも臭いを嗅ぐだけで涎が出てきたが、不衛生的で口にすることはなかった。

この光景を眺めると宋時代の瓦子の意味が分かるような気がした。瓦は集まれば屋根を葺いて瓦合わせが出来るが、ばらばらになれば瓦解してしまう。支那は文字の国だけあって、人が集まり散る場所を瓦子と云ったのであろうか。

支那人の朝飯は、極く上流階級の人たちを除き、戸外に出て食べるか、上記の店で買って食べるのが習慣であった。貧民ばかりの彼等は茶碗と箸を持って外に出て、今日も自分達は朝食を食べていると他人に見せるためであった。だから私らが陸士で習った語学では、朝の挨拶は「吃飯完了麼」であった。即ち「朝飯がすみましたか」という意味だが、現在では使用しておらず、その意味も理解していないようだ。現在の人達は生活費がかさみ共稼ぎをしているから、外食をするのだと云っているが、女性が料理を嫌っているのではないだろうか。

『銭湯』鼓楼の近くにあった帝国ホテルの前に、「湯池」と書いた一軒の大銭湯があった。しかし私は中に入って浴場で体を洗ったことはない。軍人でも入ることは禁止されていないが体裁が悪く、居留民の人に話を聞いてみた。

一階は大浴場となっていて支那人ばかりだから、日本人で入る人はおらないようである。二階は個室の浴場で「三助」（銭湯で湯を沸かしたり客の体を洗ったりする人）の小孩が垢すりをしてくれる。二階にある脱衣場に接して理髪室があり、そこで散髪をしてから入浴することも出来るし、風呂上がりの顔に剃刀をあてて髭剃りもしてくれる。その上、爪切りや耳掃除もしてくれるし、支那料理店もあって一切揃っている。（下は街を闊歩するマント姿の私）

「大尽遊び」（大金持ちの豪遊）となると、それだけでは足りない。次は女である。三階には豪華な個室があって、小孩を呼んで女を頼めば直ぐ電話をしてくれ、姑娘が飛んでくるらしい。現世主義こそが彼等支那人の極楽であった。

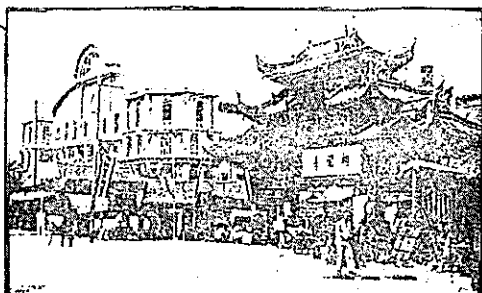
この大銭湯で殺人事件が起きた。私の良く知っている幹部候補生出身の国立大学出の少尉が、泥酔して銭湯に入り込み、一階の大浴場に入って抜刀し、数人を殺傷したのであった。彼は見習士官時代に私が教育した優秀な士官だった。酒に飲まれたのである。結果は軍法会議に回され、降等免官であった。



『開封劇場』鼓楼から南の通りの馬頭街^{バトウガイ}を行くと、国立の相国寺があった。その向かって左が開封劇場で、京劇、手品、奇術、音楽、漫才などの寄席芸が繰り広げられていた。日本からの前線慰問団の人たちは、開封などの後方の大都市までは訪れたが、それより先の危険な最前線には慰問しなかった。

支那の贅沢は前記したとおり庭園、食事、芝居である。庭園は頤和園で、食事は北京の酒池肉林で記述したから、開封では芝居について述べてみたい。

支那の芝居と言えば「京劇」である。京劇とは北京の劇の意味で、支那の代表的な伝統古典劇であり、私も何回か開封劇場で観劇したことがある。



(上の写真の左が開封劇場、右が相国寺)

京劇の構成は唱^{ウタ}、念^{ネン}、做^{シヤ}、打^チの四つで、庶民によく知られている「三国志演義」「水滸伝」「西遊記」などに基づくものが多いようだ。唱の伴奏に使われる胡弓^{コキウ}の音は大陸的で哀愁を誘っていた。

三国志の五丈原^{ゴジロウゲン}の諸葛孔明^{シヨカツコウメイ}は日本では有名であったが、支那では必ずしも日本ほどではないようだ。日本の歴史は日本向けに書いたような気がする。



(右上の写真は京劇の「孫悟空」の中の「牛魔王王」の場面)

この劇場で渡辺はま子さんや淡谷のり子さん、山口淑子さんの李香蘭などが、超満員の兵士の前で唄っていた。それよりも私の心に深く刻み込まれているのは、聯隊合同慰霊祭がこの開封劇場で行われたことであった。

大体、二ヶ月に一回の割合で施行された慰霊祭で、聯隊長が読む弔辞は聯隊旗手の責任で書かなければならなかった。文才のない私には戦闘に参加するよりも、尚一層の苦痛を感じたのであった。

我々が出張した際によく食べに行った菜館^{サイカン}の中で、日本の有名な落語家であった柳家金五郎^{ヤナギヤキンゴロウ}にそっくりの、瓜二つの支那人がいた店が劇場の近くにあった。

金五郎は当時の日本では兵隊漫才で一世を風靡した人で、支那にまで名声が届いていたのであろう。支那人の彼は日本の金五郎は大金持ちだが、支那の金五郎は金がないと、片言混じりの日本語で話していた。その愛嬌^{アイキョウ}たっぷりの顔が面白く、それに料理の素晴らしかった膾炙^{カイシヤ}(美味しいこと)も亦忘れられない。彼は現代風で云えば人寄せパンダであった。その当時を思うと現在の中国料理の味は実に不味く、毛沢東は味まで変えてしまったのだろうか。

支那料理にはいろんな種類の料理があった。開封で初めて知った料理は、イスラム教徒（支那では回回教^{フイフイキョウ}と云う）が食べる「清真料理」であった。開封が宋の都であったころ、西域からイスラムの回教徒も開封に大勢が移住してきた証拠である。イスラム教は豚をたべない。支那人と反対である。

清真料理は信仰上から羊肉料理が多い。羊を食材にした44品目から108品目からなるフルコースは、「全羊席^{チュアンヤンシェ}」と云った名物料理であった。

『喫茶店』中山路に我々青年将校がよく屯^屯して雑談にふけた喫茶店があった。日本人が経営していた店はここ一軒だけで、数ヶ月に一回程度しか開封に出てこない連中が、出張の任務が終わった一時^{ヒトトキ}をすごすのには絶好の店であった。その間に何人かの人達が亡くなっており、その話で持ちきりであった。

この店の流行った理由の一つは、「沈魚落雁閉月羞花^{チンギョラツカンヘイゲツシュウワ}」と形容したい超美人の姑娘がいるからであった。最前線で戦闘に明け暮れている若者たちは、女の顔も見ることもしなかったために、美しい魚は沈み、雁は落ち、月はかくれ、花もしぼんでしまうような美女を一目見たかったからであろう。

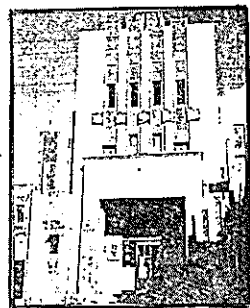
可愛い支那娘は片言の日本語を話し、その子を相手にしていた純真な青年将校も、また再び逢えるのかと四散しなければならなかった。



（右上の写真は喫茶店内風景。一番右は私、他は沖縄、ニューギニアで戦死）

『開封映画館』喫茶店の反対側に開封唯一の日本映画館があった。喫茶店の次は映画館という順序で余暇を過し、翌日は再びトラックに乗って最前線の任地に帰っていったものである。

下戸の私などは一人でカフウなどに入る度胸というか勇氣もなく、ニースに飢えていた時代の我々には恰好の場所であった。居留民が一万人もいる街だから映画館は大繁盛で、我々軍人は小さくなって、居留民たちに遠慮しながら見ていたように懷古している。（右上の写真は開封映画館の正面）



開封の街には異国情緒は氾濫^{ハンラン}していたが、書き出してみると纏まりのないことしか浮かばない。朝起きてホテルの前に立ってみると、先ず目に着くのは一輪車^{ミズワ}に水桶を積んだ「水売り」であった。支那の土は鉄分が多くて飲み水にならず、そのために支那では魔法瓶^{マジホウビン}が発明されたのである。

夏季の都大路も夜になると街路の光景は一変した。大陸の内部の夏は非常に暑く、室内では寝られないから汚い木製の寝台を舗道の上に並べ、団扇^{ウナフ}をおおぎなかせら何時の間にか眠ったようだ。蚊取線香を買う金がないのであった。

開封市民とのつどい

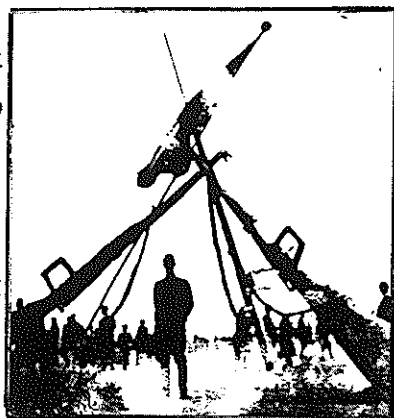
我が聯隊が開封に移駐してから一年が経過し、市内の治安や民政も安定した。市民すなわち居留民団の人達や支那人との融和と親睦、宣撫を図るために、いろいろな興行や催し物が計画された。

その中で最大な聯隊主催の行事は『軍旗祭』で、支那側主催は『双十節』であった。双十節とは「1911年、孫文らが清朝打倒の行動を起こした記念日で、中華民国の建国記念日の10月10日」のことである。同時に清朝の滅亡記念日でもあった。

我が歩兵第219聯隊の軍旗拝受は昭和14年3月23日で、昭和16年3月23日に第1回の軍旗祭が行われた。前年は部隊が分散して駐屯し作戦・討伐のために挙行できなかった。

開封城内東部の広場で行われた軍旗祭は閱兵分列行進から始まり、続いて射撃、剣術、銃剣術大会が行われた。各隊は警備に支障のない程度の兵員を開封に集合させたのである。

(右は軍旗と叉銃の模型と私)



会場の入口には軍旗と小銃を模型にした門が立ち、場内広場は瓦子のように食い物漬けの食べ放題、酒漬けの飲み放題の屋台が並び、市民を大歓迎していた。盛り上がっていると居留民女性の手踊りが始まり、支那人の獅子舞や輕業(曲芸)から、両国小学生の遊技などが行われていた。

(右は支那独特の獅子舞)

この時ばかりは日本人、支那人の区別はなく、和氣藹々の微笑ましい情景を展開して友好親善の実を挙げたと思っていた。



双十節は支那側の主催で竜亭公園か鉄塔公園(鉄塔は全国第一位)で行われた。私も初めてみる「高足駄踊り」は珍しく、野外の京劇も亦た味わいがあり、その活劇から支那の歴史小説を面白おかしく、楽しみながら理解したのであった。

支那の祭は騒然としていて銅鑼はジャンジャン鳴り響き、太鼓の他に間断なく爆竹がバリバリと炸裂し、音響だけなら実戦場に匹敵していた。（前頁左下写真は鉄塔広場の高足駄踊り）

昭和17年の軍旗祭では、前年の春に戦った中原会戦で、帰順してきた二人の支那軍の中将与再会し、肩を組んで写真を撮ったことがある。貴重な写真だが紛失したのか、残念ながら見当たらない。（右は野外の支那の活劇風景）



開封の風俗街

カフェ街

開封の夜は電灯の明かりは灯っていたが薄暗かった。その中で、鼓楼の北側の大通の書店街だけは赤い灯、青い灯が灯り、色あせたネオンが瞬いていた。（94頁の開封小唄の第四節を参照）

宋の全盛時代は読書熱が盛んであった。それに科擧の試験が開封で行われたから、「書店街」の名称が今も残っているようだ。その街が戦争当時は脂粉の匂うカフェ街となっていた。誰がこのような都市計画をして接收し、どのようにして居留民に営業を始めさせたのか、私には全く判らない。

一万人も居住する日本人相手のカフェは大繁盛で、夜になると書店街の通りは殷賑を極め、そこに将校連中が割り込んで入ったような恰好であった。今でも私の記憶に残っているカフェは祖国、花壇、世紀、明星で、十数軒もあった名称も、すっかり忘れてしまった。

前線勤務の尉官連中がたまたま出張してきた時、先ず第一に羽根を伸ばすところがカフェ街であった。この恰好こそ「弓は袋に太力は鞘」といった状態で、天下太平の命の洗濯場であったようだ。

書店街の楡（ニレ）、槐（エンジュ）、楊柳といった街路樹の緑の香りが若い将校を引き付け、お互いに無事で再会できたこと喜び合いながら、高歌放吟している夜景は、矢張り戦場の匂いが漂っていて、内地では経験できない雰囲気ではないだろうか。毎日ではその気分になれない。

旗手時代の昭和16年の始めころ、開封では日本内地では口に出来なかった贅沢な料理も食べられ、和菓子、洋菓子もなんでも揃い、日本的な生活には事欠かなかった。だから下戸の私は河南大学の将校宿舎で夜を静かに送っていた。

宿舍の右隣りの部屋は聯隊副官岸田大尉（最古参の少候8期）、左隣りは聯隊本部附次級軍医で東大医学部卒の軍医大尉であった。軍医大尉の将来は洋々として軍医總監にもなれる人で、私を実の弟のように可愛がってくれた。

私を初めてカフェ（洋風酒場のこと）に案内してくれたのもこの軍医大尉である。彼は祖国というカフェの某女給に熱をあげ、逆上せ上がっていた。しかし私は勿論のこと、彼も一人でカフェに行く度胸がない初心な人であった。

夜になると軍医大尉の彼は、隣室の私を毎晩のようにカフェ遊びに誘い出した。人生は短く楽しんで暮らすことである。「人生は行楽せんのみ」と洋車に乗り、約2 kmの距離を遠しとせず突っ走っていった。

入り挙げた軍医と何ヶ月ほど同行したであろうか。すると女給の方は金を支払う軍医の方を嫌い、若い私の方に気が変わったらしいと、他の女給が告げ口をしてくれた。室内の電気は薄暗く、化粧の力をかりた女給の顔は、太陽の光に晒されるとどんな顔になるのかと、考えただけでも興味は沸いてこなかった。

「人生別離足る」（足る＝多い）だ。人生はとかく分かれが多いもので、我が聯隊は中原会戦のために出動となった。そして作戦終了の2ヶ月後に開封に無事に凱旋すると、軍医大尉は榮転して転任となって一巻の終わりとなった。後に彼女に会ったところ年増の人妻で、今で言うアルバイトであった。

カフェと言うところは大体に於いて、一軒の店に長居することは嫌われるようで、将校連中は気晴らしのために梯子することが普通であった。どの店だったか記憶にないが、その時、陸士予科時代の支那語の教官だった某中佐と再会し、小躍りして喜んだことがある。中佐は開封特務機関勤務で開封に赴任してきたのであった。

旗手時代だったから時間的に余裕もあり、その後、何回かお会いする機会があった。そこで「先生、支那語は通用しますか、と訊ねたところ、こんな酷い土語ばかりでは話にならない」と口説いておられた。

特務機関の人達は情報を得るためにカフェは勿論のこと、麻雀屋からダンスホール、場末の薄汚い料理屋などに入出入りし、遊びの中で敵味方の密偵から情報を取るようであった。特に男は酒が入ると口が軽くなり、女を自分のものにしようとする時には、あることないことを寝物語に喋るから、特務機関員の活躍は概ね夜間で、支那遊郭などが情報収集の恰好の場所だと云われていた。

戦後2回も訪れた書店街は右写真のように火は消えて寂しい街になっていた。



支那 P

戦地の軍隊では遊郭のことを「遊郭」「女郎屋」などと日本国内のように呼ばなかった。全部「ピ」あるいは「ピ屋」と呼んでいた。

この呼び名は何処から来ているのだろうか。いろんな事を云われるが判らない。英語のプロスティテュート (prostitute) (売笑婦) から頭文字の「P」を取ったのであろうか。支那語の「𪛗」からきたのだという人もいる。「𪛗」とは漢和辞典によると、母、亡母と書いてある。中国の新華事典では、鳥の性交、交尾のことを「尾」と云うと書いてあるなど。どれを当てはめても、ピか、ピ屋であり、先人は実に賢人であったと思っている。

後学のために一度は見学すべき場所だと思っていたところ、先輩に連れられて数人が案内された。その支那ピ街は鼓楼の門をくぐった東側一帯に広がり、悪臭の匂いが充満している売春窟^{ヌク}というのか、薄暗くて薄汚い所であった。

この街角のあちこちから胡弓^{コキウ}のむせび泣くような音が響きわたり、格別な哀愁を誘うようで、歌の文句の支那の夜らしさを感じた。何処からか便衣隊が飛び出して来そうな不安な小路を、数台の洋車をつらねて或る一軒の前で停った。

客足の姿も見えない不安に包まれながら、素早く門の中に急いで入った。すると幾つもある部屋から若い女が顔を出し、我々の前に寄ってきた。これは数人の女の中から、誰かを選んでくれという行動である。

先輩は「開房子^{カイフアンズ}」と言って一人のピを指名した。開房子というのは、お茶を飲んで帰るだけの遊びで、一種のヒヤカシである。開はひらく、房子は部屋、即ち部屋を明けるだけのことで、性交することではない。

西瓜^{スイカ}の種やカボチャの種、向日葵^{ヒマワリ}などの種を炒^{ヒキ}った実を、割って食べながら雑談するのだが、話が通じないから長居することは出来ない。不思議なことは彼女たちは母親と一緒に、このピ屋に住まいしており、女は母親にも金をやってくれとせがんでいた。それは貧富の差の大きい国柄であらうか。

彼女たちは体しか売^ウるものがないから売春婦になったのである。夜毎に変わった男の枕^{マクラ}の塵^{チリ}を払^{ハラ}う女に向かって、若い我々はいくら煩惱^{ボンノウ}が体の中から湧き出してきても、将校の面子にかけても支那の淫売婦にまで手は出さなかった。このことは在支3年間を通してであった。

店の前には女の姓名が書いてあり、それに合格、不合格、生理中などと記入されていたのは、日本軍の軍医の検査結果であった。日本軍兵士の性病予防のためで、強制売春ではないことは当然である。

通許でも記述したが、支那は売買結婚のために、金のない男の性欲の捌け口^{捌け口}としてピ屋があった。洋の東西を問わず売春婦が消えたことはないのであった。

朝鮮 P

カフェ街の書店街を北に進むと、そこから狭い小路が延びている。そこが朝鮮ピと呼ばれていた所であった。しかし聯隊旗手時代の私は開封に5ヶ月間も滞在していたが、全く知らなかった場所であった。それは神聖な軍旗を奉持する職にある間は、絶対に女性に接してはならないと言う信念を持っていたからであった。

朝鮮ピの問題は戦後も随分過ぎてから、「従軍慰安婦」という問題で世を騒がした。しかし当時の支那では「慰安婦」という言葉を、聞いたり使ったりしたことはなく、ましてや「従軍慰安婦」などと呼んだことは全くなかった。ただ軍の会報などには「慰安所」と書かれていたような気もするが、明瞭な記憶はない。それほど曖昧で、全てピ屋で通用していたのである。

「従軍」という名称が付いていたのは従軍記者、従軍画家、従軍僧、陸軍病院の日赤の従軍看護婦ぐらいで、誰が付けたのか、勝手に付けた名称である。その上、「強制連行」まで付けて嘘八百を言ったのは言語道断である。

強制連行という言葉が発展した結果、日韓基本条約で解決済みであるはずの戦後補償の問題を、民間レベルで再度補償せよと日本に迫ったのである。その陰で操るのは日本側の複数の援護団体で、この教唆と扇動によって売春婦だった人達が、補償という表面に躍り出たのであった。

私は新聞報道があった最初から、強制連行は絶対になかったと言っていた。当時は日本を始めとして世界各国には「公娼制度」があった。それは「公」に営業を許可された売春制度である。強制的に強引な連行の必要はなく、自然的に女が集まったり、集められたりしていた。売春防止法が交付されたのは1956年の昭和31年である。

日本の例をみると、昭和の初期の世界経済恐慌時代に、農村の不作と相俟って、東北地方の娘たちが東京の遊郭に売られていった。このことは2・26事件の時に一般に公表されており、我々も知っていることである。

親は一家の生活を維持するために売るものがなく、誰も知らない間に可愛い娘まで女郎に売る契約を済ませ、いざ娘を連れに来た時、娘は何にも聞いておらず、無理にでも連れて行かれたから強制連行と勘違いしているのである。

日本内地でさえも上記のような状態であった。まして内地よりも一層厳しかった朝鮮半島のことは想像に難くない。親の金銭取引を娘は知らないから、悲惨な結果を生んだとしか思えない。

私が中隊長になった昭和16年の秋、数十倍の蒋介石直系軍に囲まれ、背水の陣を敷いていた橋頭堡・中牟城で、朝鮮ピの親方からピ屋の開業を依頼され

てきた。敵弾飛来して毎日犠牲者が続出している戦場で、ピ屋なんか開設出来ると思うかと、一喝^{イチカク}して追い返した

中牟警備隊の兵力は多少の増減はあっても3～4百名の戦力で、彼等親方連中にはその魅力ある兵員の数に目を付けて、誰よりも早く開設の許可だけでも、受^{ウケ}たいと願^{ネガ}い出てきたのであった。逞^{ツツミ}しい商魂である。

名刺代わりだといろんな品物ま用意してきて、裏から手を回してきた。そこで警備隊長の私は、大隊長や聯隊長、更に師団の参謀長の許可書を取ってきたのかとと質したところ、軍の許可はないが、軍の許可は必要はありませんと返事した。軍は関与していないのかと質すると、ピ屋の女たちは軍が連行して来たのではなく、我々が連れてきたので、開設の許可をだけ御願^{ゴガン}いしたいというのであった。女は強制連行してきたのかとも強行に質問すると、隊長さんも知^チつてのとおり、現在は公娼制度ですと反対に逆襲されてしまった。

以上で慰安婦の強制連行は真^{マコト}赤な嘘であることが判明しただろう。当事者の証言だから真実である。第一線の指揮官が許可を与えないのに拘わらず、大・聯隊長や師団が許可することは絶対にあ^アのえないである。

兵舎や慰安所の建築となると、聯隊の建築班が第一線まで出てきて支那家屋を改造するから、それを勘違^{カンサ}いして軍が全てに関与したと云ったのかも知れない。それは好意的な行動で何処までも兵士のためが目的であった。

満州事変の時には内地や朝鮮から犯罪者が満州に流れ、国内の治安問題に苦勞した。その前車の轍^{ワダチ}を二度と踏まないと、支那事変勃発後は、支那に渡る内地人も朝鮮人も徹底して吟味調査したから、支那の現場では満州のような問題は訊いていなかった。それが敗戦となり、日本が隆盛の波に乗りだした途端、金ゆすり問題に発展して慰安婦までが強制連行に飛躍したとか考えられない。

後に開封に進出してきた我が部隊の一員として、先に開封を占領した部隊が、日本軍の歓楽街から居留民の居住地まで立派な都市計画をして接収し、このように繁栄していることは敬服に値することである。この朝鮮ピの東街道には日本人小学校があり、日東ホテルの中山路には大陸軍病院があった。これには朝鮮ピの女性たちも、一週間に一度は検査のために御世話になった筈である。

開封の朝鮮ピ屋は数十件もあっただろうか。我々将校は出張してきても昼間は公務の会議などがあり、自由な時間は夜間だけだつたから、ホテルで夕食を済ませた後に、気晴らしのために明かりの灯った繁華街に足先が向き、一部の人は朝鮮ピにも通ったと思っている。

昼間の兵士たちの遊びについては知らないというのが、私の実情であった。兵士たちの愉快的な会話を耳にしていると、「朝鮮征伐に行^イって来たが、良かったとか、わるかった」とか、将校の陰に隠れて話をしていたことは知っていた。

芸者置屋

日本人の芸者や遊女がいた家のことを何と呼んだかは覚えがない。覚えがないと言うことは縁が遠かったということである。芸者屋といったのか、置屋といったのか、待合いといったのかは知らないが、日本ビ、妓楼、遊郭とは呼ばなかったことは確かであった。

日本の芸者や酌婦が住まいしていた通りは、朝鮮ビ街を北に突き当たった東西の界隈で、玄関は分厚い板戸の構えで重厚な感じがしていた。内部も朝鮮ビのような遊郭造りではなく、純日本式の式台が設けられ、上がり^{カマ}框があり、廊下をめぐらし、畳座敷には床の間があって掛け軸が下がり、花生けが飾られていて、内地にある日本風な座敷と全く変わりはない。そして朝鮮ビの方は客寄せのために玄関前に女が出ていたが、日本の置屋の方では無人であった。

そして居留民は一万人以上もいるから、当を得た芸者ハウスであった。しかし市内の将校の数は師団司令部や他兵科の聯隊本部を入れても、百人にも達してはいないだろう。だから私がよく知らないと言うのは、芸者を上げて宴会するには金はなく、自己負担になるから出来なかったと言うのである。

居留民の民間の人か、佐官以上の軍人でなければ、芸者まで挙げて遊ぶ費用が賄^{マカ}えない。軍隊では大隊長以上になると「機密費」といわれる「交際費」が計上され、その金で対外的にも、作戦後の部下の接待にも充当出来たのである。即ち毎月支給される月給で遊べるような場所ではない。だから尉官連中は「われわれは芸者に若さで持てるが、佐官以上は金で持てる」と言っていた。しかし現実には芸者は金次第であった。

私は2～3の大隊長や聯隊長、それに時々師団参謀の遊び相手に呼び出され、芸者置屋に連れて行かれたことがある。その中で思い出の深いのは、聯隊旗手を無事に勤めて中隊長に転出するとき、慰労の意味で聯隊長が置屋に連行した時のことであった。聯隊長は前から準備していたようで、朴念仁^{ボクニジン}でない私も「親の心子知らず」であっては申し訳ないと、「据え膳^{スエダン}食わぬは男の恥」と男になったのであった。

支那人は日本の芸者のことをどの様に呼んでいたか、と調べたことがある。最も適していると思ったのは、「一日奥さん」と云う言葉であった。日本人は芸者置屋で一泊するからで、支那や朝鮮のようにショートはないからであった。

(右の写真は、日本の芸者置屋の道を西に進むと、竜亭前に広がる潘家湖に出る。その美景である)



師団長を始め將軍の遊びともなると、嚴重な警戒網がひかれた中で行われ、芸妓置屋の前には劍付鉄砲を持った歩哨^{ホショウ}が立哨し、目には見えなかったが料亭の周囲にも巡察が廻っていたことだろう。何回か私も目にした光景だが、偉くなると窮屈^{キョウクツ}そうであった。しかし我々の憧れの的だったことは違いない。

私が中隊長になって背水の陣を敷き、北支那方面軍の最激戦地として名声を轟^{トドろ}かせていた時、支那派遣軍総司令官・北支那派遣軍司令官・第12軍司令官・歴代の我が56師団長・歩兵团長の将星が、しっきりなしに訪問してきた。

その時の聯・大隊長の注意は、将官の犠牲を出すと進退問題になるから、嚴重に警戒せよとのことだった。当時は天皇は神様であったから、將軍も矢張り神様だったのである。

中原会戦の終了後に行われた中隊長会議が終わり、その後に挙行された聯隊長主催の慰労会の責任者は、聯隊長の私が命じられた。初めてのことであり右往左往して手こずったことを覚えている。

上記のような大宴会は、開封には〇〇楼とかの名称の料亭が幾つかあった。それに経験の全くない芸者の手配もしなければならず、非常に苦労した記憶がある。これにはどうしても遊びの経験が必要だと痛感した。

時期は忘れたが、橋頭堡・中牟城^{カンクオ}の攻防戦が一段落した際に、第12軍司令官から慰労の意味で、聯隊長と二人が青島に招待されたことがある。重砲の射撃演習後に行われた大宴会では50人以上の芸者が舞い踊り、京都出身の聯隊長はこれを見て、京都の祇園でも見られない光景だと驚愕^{キョウガク}していた。これほど軍司令部の機密費は大きいのである。

大隊長以上には機密費があったと上記した。誰から聞いたか忘れたが、将官給の機密費は莫大な金額なために使い切れず 何年か一回、青島のような散財をするらしい。機密費の性格から金は主計が管理するのではなく副官が掌握して長の指示に従って支出し、余れば貯金して積み立てておくと言う。もし司令官が転勤などになると、副官は貯めておいた機密費の全額を司令官に渡すらしい。

都会でよく見た将官級の豪邸は副官が貯めておいた機密費で建ったようである。目に見えない軍の墮落の一端を暴露している。

(上の写真は我が大隊将校の小宴会模様、最後列の右端が私)



開封にまつわる故事物語

運用の妙は一心に存す

漢民族は古くから、北方の諸民族と争っていた。松花江のあたりに興った女真族の金が次第に強大となり、ついに1127年、金の大軍は南下して宋の都の開封を攻め落とした。宋の徽宗と欽宗の二皇帝も、皇后や大官たちも捕虜となって満州に連れ去られた。残った宋の勢力は徽宗の弟を立てて高宗とし、南に移ることになった。この時、留守として残り金軍と闘ったのが宗沢である。

この宗沢のもとに岳飛という若い将校がいた。農家の出だが力は強く三百斤の弓をひき、果敢な行動で功を立てていた。しかし宗沢は、更にこの青年の力を伸ばしたいと考え、ある日、岳飛を呼んで言った。

「お前の勇氣と才能とは、古の名将も叶わぬほどだ。だが一つ注意したい。お前は好んで野戦をするが、これでは万全のはかりごととは言い難い。これを見よ」　そういつて岳飛に示したのは、軍陣をしく方式をのべた陣図であった。

この時、若い岳飛はきつと顔をあげ、悪びれずに次のように言い放った。
「陣をしき、その後に戦うというのは戦術の常であります。しかし、運用の妙は一心にあると存じます」。

戦術は方式である。その型だけでは用はなさない。これを活用するかどうかは、その人の心一つにかかることだ。活用しなければ、型にはなんの値打ちもないのだ・・・岳飛は遂に頭角を現して南宋の名将となった。彼が開封奪還のために奮戦した朱仙鎮は、後日、私が中隊長として赴任した任地であった。

杞憂

杞という国は周の時代に開封のすぐ近くにあった国名である。この国にある人がいた。その人は、もしも天地が崩壊したら身の寄せ所がなくなってしまうと、そればかりが心配で夜の目も見ず、飯ものどを通らなかった。一方、その人の心配しているのを、心配する人があった。そこで出掛けていつて言い聞かせた。「天は空気が積もっただけだ。どうして天が崩れ落ちるなんて心配するんだ」。「天がほんとに空気が積もったものなら、日月星宿（星座）など、落ちてくるのではないか?」。「日月星宿も空気の中で輝いていて、落ちてきても怪我をさせることはないのだ」。「どうして大地は壊れないのだ?」。「大地は土塊が積もっただけで、土塊のない所はないんだ」。そこで、はじめに心配していた人は胸がさっぱりして大変喜び、言い聞かせた人も気が晴れた。

この「杞憂」とか「杞人憂人」とか云う言葉は「列子」（戦国時代の鄭の人）の「天瑞篇」に出ている故事である。あれこれと無用な心配をすること、取り越し苦労のことである。

紅一点

北宋第六代の皇帝（在位1067～1085）に仕えた「王安石」は、唐宋八家文中にその比を見ないと云われるぐらいの、卓抜な文書家であった。その王安石が作った「石榴の詩」の中に、次のような句がある。

「万緑叢中に紅一点あり、人を動かす春色は須らく多かるべからず」

一面の緑の中に咲く一つのザクロの花の美しさ、可愛らしさを、春色第一とたたえている。

はじめは植物のことだったらしい「紅一点」も、多くのものの中で異彩を放つもの、の意となり、今では専ら「男性の中にいる一人の女性」という意味に使用されている。

五十歩百歩

戦国時代には当時の思想家や策略家たちは、諸国の王を遊説して廻っていた。その一人、孟子が魏の国の王、恵王に招かれたときの話である。恵王は都を梁（開封）に遷したので梁の王とも云われる。

魏は当時、西からは強国の秦に圧迫されて東方の梁に遷都した。また東の斉の国との闘いには再三にわたり大敗し、逆境のどん底であった。恵王は名声のある賢士を招いて意見を聞き、国運の挽回に勤めていた。孟子もその一人である。孟子「たとえ話を申しあげましょう。戦場でいざ両軍が矛を交えて白兵戦になった時、ある兵は兵器や甲冑を捨てて逃げ出し、百歩ばかりで立ち止まった。もう一人逃げ出した者がいて、こいつは五十歩のところで立ち止まり、百歩逃げた奴を卑怯者と云って笑った、としましょう」。王はいかがですか？

恵王「いやはや、馬鹿げたことだ。五十歩も百歩も、逃げたのには変わりはないではないか」

それがわかりなら、と孟子は自分の話したいことへと恵王を引きずり込んでいった。それは王道すなわち王者の道であった。

王道とは、つね日ごろからの民の生活の安定をはかり、民を主人とし、民のために存在する、愛情と礼儀にみちた道徳国家、教育のゆきわたった文化国家をめざすことであり、また、それ以外の何ものをもめざさない考え方なのである。その国が強大か否かは、王道にとっては関心のないところである、と。

中原会戦（昭和16年5月1日～6月15日）（下図参照）

我が聯隊旗（軍旗）が会戦という名称の作戦に参加したのは、中原会戦が初めてのことであり、終わりのことであった。それほどの大軍が干戈（タテとホコで戦鬪の意）を相交えた大作戦に、私が軍旗を奉持する聯隊旗手として従軍できたことは光栄であった。

駐屯地の開封を隠密のうちに出発したのは、5月1日の午前零時であった。先ず自らを欺かせるために、今回の出陣は黄河南岸の敵の拠点「鄭州」攻撃だと信じこませていた。あらゆる手段を講じて宣伝工作を行い、巧みな陽動作戦で敵を引き付けて牽制していた。しかし敵は本能寺で、実際の攻撃目標は河南省西部から山西省にかけての敵陣であった。

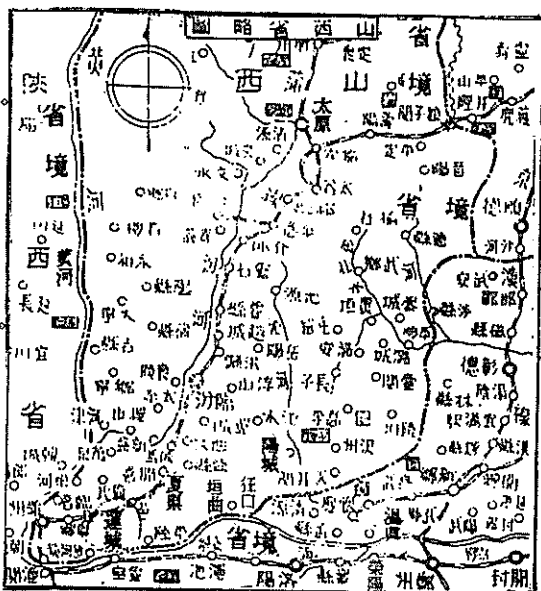
開封から攻撃準備位置の河南省西部の「温県」までの距離は約100km、これを5日間の強行軍で進軍した。旧黄河の干し上がった砂漠地帯の通過は言語に絶し、目も口も開けておられないほどの砂塵万丈の砂嵐に遭遇した。防塵眼鏡を着用してマスクをつけ、頭からはおかぶりしながら、呼吸困難な状態で突破した。回顧すると懐かしい支那の思い出だが、当時の苦闘は忘れられない。

旗手は聯隊長とともに一緒に行動する立場である。聯隊本部の全将校は乗馬本分者（ホンブンシャ）といって行軍は乗馬であった。乗馬の蹴り上げる砂塵は濛々として我々徒歩行軍者の目（メクナ）を閉ざし、意識までもボーとさすほどであった。

黄河河畔の五日間の行軍は、旗手としては死ぬ思いの行軍であったが、立場上から弱音を吐くことは出来ず、勇躍ではなく、漸くのことで攻撃準備位置の温県に滑り込んだ。

我が師団長原田熊吉中将（22期、ジャワ軍司令官で死刑）は温県に到着した我々を前にして、隠密裡に部隊が集結できたことは、作戦が50%成功したに等しいと宣言した。戦いは戦わずして勝算を得なければならないからである。

戦いは偶然性に依存してはならない。そして条件が揃っていなければ、勝利は獲得できないことを知ったのであった。



5月7日から我が35師団は数年にわたって築城した敵の堅塁を突破した。引き続いて敵を東西南北に蹂躪し、作戦終了の5月15日までの間、陣地攻撃、不期遭遇戦（予期しない敵と遭遇すること）、追撃などを繰り返しながら黄河の線に圧倒し、その行程は約500km以上に及んだ。

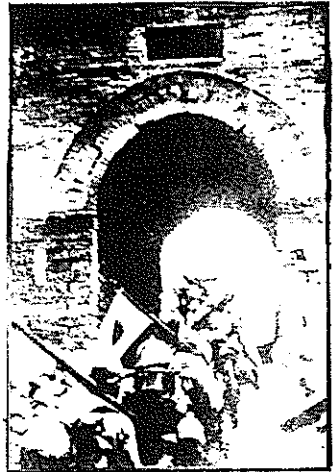
烈風枯葉を払うような勢いの我が軍は、包圍網を圧縮して狼狽する敵を反転して攻撃するなど、変転万化の状態であった。これらの戦闘で最も印象に残っているのは「封門口」の陣地攻撃であった。

（右上の写真は封門口陣地線の一部の光景）



河南省と山西省との省境をなす敵陣は北京北方の万里の長城と同じく、「一夫関に当たれば万夫も開くことなし」といった堅塁で、追撃していた佐久間騎兵旅団はこれを突破することは出来なかった。

追及していた我が歩兵聯隊は歩兵の本領を発揮して地形を利用して接近し、素早く敵の誇る堅陣を奪取してしまった。この光景を旗手の立場で観戦武官のように眺めていたが、本当に快哉であった。



（右の写真は封門口の城門通過の歩兵部隊）

山西省の太行山脈や中條山脈には地隙や断崖が多くそれを利用した住民は穴居生活をしていた。我が猛追を避けるため敗走する敵兵たちも、洞穴に潜伏して隠れていたと思われる。

作戦中、聯隊本部も黄土層の洞穴の奥に軍旗を安置して夜を徹したこともあった。支那・中原の地では三国志に出てくる通り、地隙の穴蔵に食糧を貯蓄していたが、とくに洛陽から鄭州（前頁地図参照）にかけての黄河兩岸に多く、劉邦の滎陽（鄭州西方）の穴蔵倉庫は有名である。（黄土層の穴の中は食糧保存が良好で、劉邦の当時でも米なら5年、粟は9年も保存できたと云う）

中原会戦は敵との戦いと共に疫病との戦いでもあった。支那の水は硬水が多く、不衛生な環境からアミバー赤痢に罹った患者が続出し、聯隊副官の岸田大尉（少8）も遂に野戦病院に入院となった。アミバー赤痢は粘血便の下痢が続き、年取った副官の便通の状態は本当に気の毒であった。

湯口廉隊長も蜂に首を刺されて腫れ上がり、連日の戦闘行動で疲労も蓄積して遂にご老体もダウンして後送となった。その後は聯隊附の島本中佐が聯隊長代理をつとめ、作戦には支障を来すことはなかった。

会戦参加に際して湯口聯隊長が訓示した中で、最後に次のように述べられた。
「今次の作戦には部隊将兵は一致協力して、軍旗の御威徳を遺憾なく発揚する
好機なり。諸士宜しく以死必勝の誓いを固くすべし」

今まで将兵の一員として軍旗を拝したときは、神である天皇を拝したという
精神状態であった。しかし中原会戦では、天皇の御名代のように旗手として参
加してみると、聯隊長の注視の的となり、軍旗は天皇親率を表し、天皇の軍
隊であることを眞に感じたのであった。

封門口の敵陣の前の叢に多くの人馬の戦死した惨状を見たとき、彼等は
天皇を神と信じて軍旗を崇拜し、その忠誠心の最後の拠り所として、靖国神社
での再会を誓い合い、将兵は身を犠牲にして死んでいったのであった。

支那やビルマ戦線に於いて多くの部下を失った私は、天皇（軍旗）を神と信
じて死んでいった将兵の心中を思うと、天皇が靖国神社の御親拝を怠っている
ことに対し、紅涙を浮かべて悲憤しなければならないのである。このことは凄
惨な残酷極まる戦場に身を曝した者だけが感じるもので、更に旗手経験者は尚
更ではないだろうか。

戦闘経過の詳細は拙書「両忘」に記載済みのため割愛し、違った観点から会
戦を眺めてみたい。先ず「会戦の意味」を記したい。

会戦の意味

大部隊（通常、軍以上）相互の戦闘をいう。初期の旧日本陸軍の教書では、
敵・味方両軍が戦場で相会遭して戦うことを会戦といい、別に主力相互の戦い
を全戦と呼んでいた。

1885年、陸軍大学校の教官として招聘されたドイツの参謀将校メッケ
ル少佐著の陸大教本（戦時帥兵術）では、「戦闘」とは一般に戦いの総称だが、
慣用上、「戦闘」といえば小部隊の戦いを意味し、大きい部隊の戦いを「会戦」
と云う。

「決戦会戦」とは、戦役の局を結ぶため、彼我の本軍が相衝突することを云
う、となっていた。これを受けて、たとえば日露戦争では、日本軍の主力を挙
げての戦闘を遼陽会戦、奉天会戦などと呼んだ。その後、陸大では1913
年出版された「兵語の解」では、会戦を「両軍主力の戦闘」と定義し、10年
後の改訂では「決戦的効果をもたらすべき兵团主力の戦闘、及びこれが前後に
おける行動の総称」となり、さらに1930年には「敵を圧倒殲滅する目的を
もって、通常、軍以上の第兵团をもって行う戦闘、及びその前後における機動
を総称する」と改訂された。

1930年の改訂は、当時の日本陸軍の徹底した攻勢賞揚による殲滅戦思想の流れからきたもので、やや偏った定義となっている。一般概念としては大部隊相互の戦闘と、包括的な意味に把握するのが妥当であろう。（右の写真は洞窟陣地の入口）



会戦の目的が、必ずしも敵を圧倒殲滅するとは限らず、単なる持久戦であつたり、敵を抑留する（一つの正面にとどめ、他の正面に転用させないこと）ためであつたりすることがあるからである。

科学技術の進んだ現代の戦闘では、戦闘の様相が複雑・立体化し、集中、機動、戦闘のような段階が明確に区分しえなくなったので、会戦の用語は使用されなくなった。

会戦を準備するため、会戦指導に関する方策に基づいて、まず「戦闘序列」を定め、部隊を所定の地域に集中させる。戦闘序列とは、一般的には部隊を会戦の目的に適合するように編成組織することをいうが、旧日本陸軍では、戦時または事変に際して、天皇の大権に基づいて発令される作戦軍の編成組織に限って戦闘序列と云い、これによって指導統率の関係を律した。発令は大本营命令（大陸令）によった。（右上の写真は中原会戦で休憩する軍旗と旗手の私と護衛小隊）



それ以外の部隊の臨時の組織編成、たとえばある作戦に適合するように、部隊を一時的に編成することを「軍隊区分」と云った。軍隊区分は、その必要がなくなれば、速やかに元の編成に返さなくてはならない

会戦は通常、戦略展開、補給・補充・衛生等の平站的諸準備、機動、戦闘、追撃（または退却）の段階に区分したが、明確に分けられない場合もあった。

『支那戦線では師団等の命令には下のような各省の略称を冠していた』

各省の略称について

中国の各省には、古代国家名や河川名に因んで名付けられた略称が広く使用されている。

山東省(魯)	雲南省(滇)	山西省(晋)	貴州省(黔)	河北省(冀)
広東省(粵)	河南省(豫)	甘肅省(隴)	安徽省(皖)	山東省(魯)
江西省(贛)	福建省(閩)	四川省(蜀)	江蘇省(蘇)	陝西省(秦)
湖北省(鄂)	湖南省(湘)			

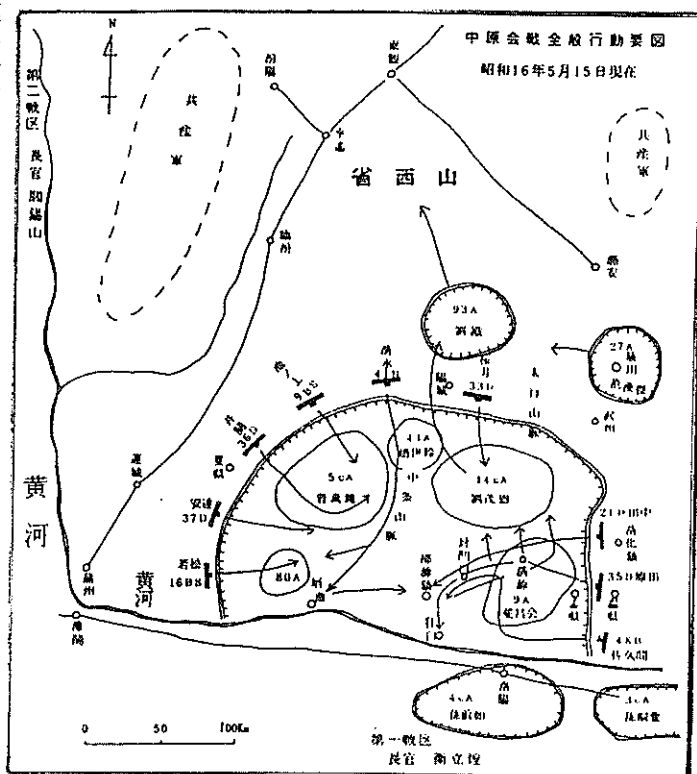
中原会戦の規模と戦果 (下図参照)

山西省の太行山脈と中條山脈の山岳地帯に、堅固な陣地を擁する蒋介石直系軍・第一戦区司令官「衛立煌」麾下、中央軍26ヶ師団・約18万の敵に対し、北支那方面軍(軍司令官多田駿中将)は、その隷下の6ヶ師団と3ヶ旅団・約8万を以て、温県から陽城を経て夏県に至る敵の占領地域(東西約200km、南北約100km)の広大な外周に肅々と展開し、昭和16年5月7日から包圍殲滅戦を敢行した。

この会戦のために中支派遣軍から2ヶ師団の転用を受け、東西北の三方面から黄河に向かって圧倒した殲滅戦であった。

各師団は警備駐屯地域に約三分の一の兵力を残地して占領地を確保していた。

支那戦線に於いて会戦と称した作戦は「徐州会戦」に次ぐ大会戦であった。



我が35師団正面の敵の堅固な陣地を中央突破するため、戦車聯隊の配属を受けて敵陣を圧倒蹂躪し、敵の退路に当たる黄河の渡河点の垣曲や狂口には我が航空隊が猛爆を続けていた。

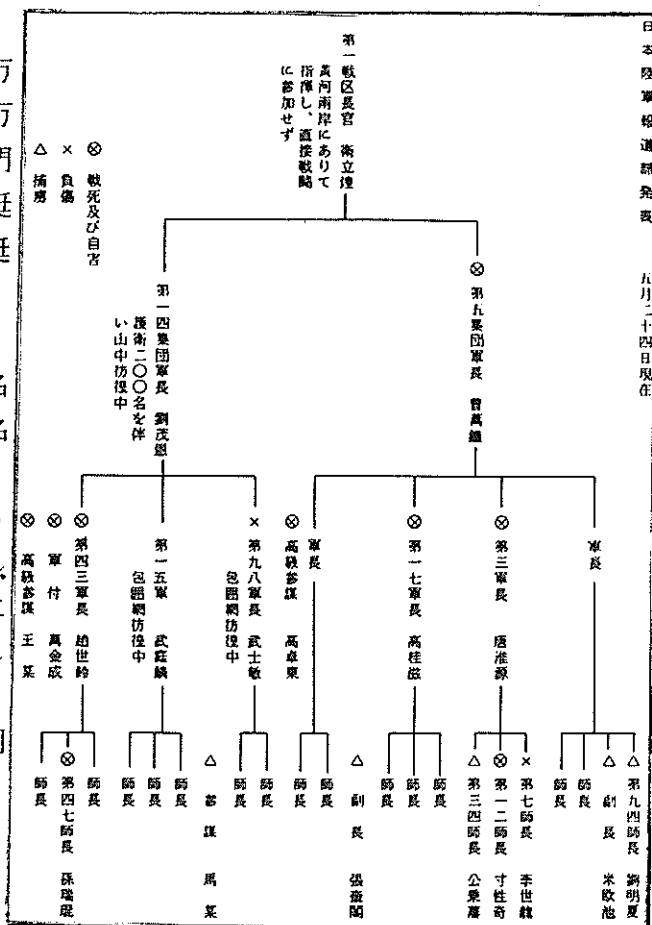
これこそ、作戦要務令の綱領に謳っている「戦捷の要は有形無形の各種戦闘要素を綜合して、敵に優る威力を要点に集中發揮せしむるに在り」という、そのものずばりの戦闘であった。(捷は大勝利の意)

これが大東亜戦争(米軍は太平洋戦争と称した)になると、日本の陸海軍は全くの逆行動を採っていたのである。兵力の逐次使用は軍の最も戒めていたところだったが、敢えて逐次使用の愚を冒し、兵力を分散配置して勝ちを求めることは出来ないのであった。敗戦という結果は、無責任で巨像的な軍上層部や統帥部の責任であり、天皇の名を使用すれば全てが可能といった迷案のみに依存したからである。

日本陸軍報道部
五月二十四日現在

戦傷 2 2 9 2 名

野球選手は試合で投げたり打ったりして野球を覚え、自信を身につけるのである。それと同様に戦闘の経験がない教育者も幕僚も高級指揮官も、激しい戦闘の経験で始めて責任の重要性を感じるのであって、命令すれば必ず実行されなければならないと考える指揮官がいれば、部下は死を待つばかりである。



中原会戦とビルマ作戦の比較

中原会戦の日本軍は外線作戦（包囲体勢）であり、支那軍は内線作戦（被包囲）であった。中原会戦の我が軍は6ヶ師団と3ヶ旅団の約8万に対し、支那軍は17ヶ師団の約18万である。それは兵員数であって戦力ではない。中原会戦では日本軍には飛行機、戦車等があり、砲兵力でも格段の差があつて、戦力比でも日本軍が数倍であり、断然優勢であつた。

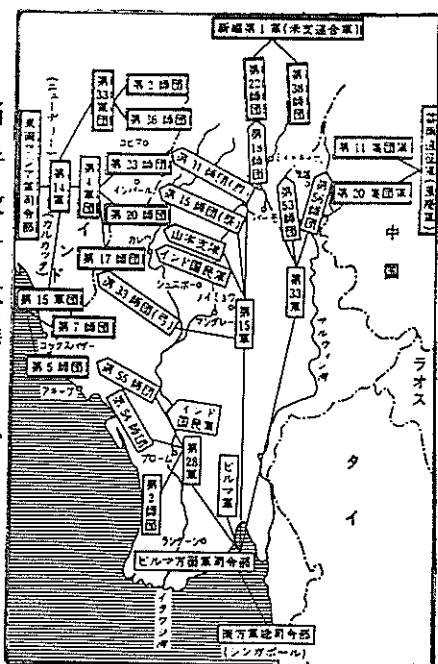
これに反して、ビルマ作戦では日本軍は内線作戦で、連合軍は外線作戦であつた。兵力は日本軍の8ヶ師団と2ヶ旅団の約2.5万に対し、連合軍は26ヶ師団の約130万で、戦力比では霄壤の差（霄は天に近い雲、雲泥の差）があつた。即ち飛行機、戦車の戦力比は1000対1以下で、砲兵力も日本軍は弾がなくなり比較できない程の差であつた。

両作戦に参加した私は鷺（白）と鴉（黒）の戦のように正反対の立場で戦つてきた。本当に貴重な体験者である。中原会戦では「濡れ手に粟」というか、「棚から牡丹餅」のように敵を捕獲した。ビルマでは「手のない将棋は負け将棋」で、「赤子の手をひねる」ようにねじ伏せられ、「石を抱いて淵に入る」といった凄惨な死闘を余儀なくされた。

これらの体験から総合して判断を下すと、私は一に指揮官の頭脳の差と云うべきだと思う。これは「岡目八目」ではなく、日本軍の「当たって砕けよ」といった人命軽視が、度を越していたからであつた。

指揮官は作戦開始前から結果が出ていることを考えるべきである。「戦いは必勝にあらざれば、以て戦いを言うべからず」（十八史略・尉繚子の攻権第五）、戦争は必ず勝つという見通しがなかったら、これを口にすべきでないのである。（上の図はビルマ作戦の彼我の態勢要図）

作戦要務令綱領第一に「軍の主とするところは戦闘なり・・・」と書いてあつたが、これでは不十分で、「軍の主とするところは戦勝なり」とすべきであつた。そして綱領第二の「戦捷の要は有形無形の各種戦闘要素を綜合して敵に優る威力を要点に集中發揮せしむるに在り」の両綱領は、中原会戦では遵守されていたが、ビルマ作戦では遵守されていなかったのである。



万卒は得易く一将は得難し

この言葉は誰でも知っている言葉だが、私が軍人として戦陣に立っている間、つくづく感じていたことの一つであった。「兵は死地なり」と言われるように、戦争は個人にとっても国家にとっても、死生存亡の命運がかかっており、自己陶醉と自惚れをもって戦鬪をすれば、国が滅びることは当然である（ビルマ）。

私の拙い戦争体験から更に申せば、「名將は人一倍臆病でなければならない」。臆病こそ敵の情報を知る源泉と言うべきで（慎重）、相手の量と質、主將の性格、心理、あるいは常套戦法などについて執拗に収集する。ついで「自分の側の利点と欠点を考えぬく」ことであった。中原会戦やビルマ作戦に於いて、彼我の指揮官を下から見た私の感想である。

「桂馬の高上がり」のように、実際の戦鬪に役立つ能力のないに拘わらず、責任の高い地位に就き、惨々たる結果を招いた例を沢山知っている。ペーパテストでいくら優秀であっても、「座敷兵法」は実戦の役に立つものではないのである。能力主義とか血縁主義かと騒いだ時期も軍にはあったが、私に言わせれば実戦の経験主義が第一と申したいのである。

天下を取り、漢王朝を築いた高祖の「劉邦」が帝位についたあと、酒宴のさいに諸侯、諸將に、『朕が天下を取った所以は何か、また項羽が天下を失った所以は何か』と聞いた。臣下たちは我先に劉邦の才能を褒めたたえたが、「さにあらず」と劉邦は言った。

『諸君はその一を知って、まだその二を知らない。そもそも「謀」を本陣の帳の中で巡らし、その結果、勝ちを千里の外に決する点では朕は「張良」に及ばない。国家を治め、人民をなつかせ、食糧を供給して糧道を断たない点では、朕は「蕭何」に及ばない。百万の軍を連ねて、戦えば必ず勝ち、攻めれば勝ち取るという点では、朕は「韓信」に及ばない。この三人はみな人傑だ。朕はこの三人をよく用いることができた。これが朕が天下を取った所以だ』

戦略を立てる能力では「張良」、内政や補給に関する能力では「蕭何」、また軍を指揮する能力では「韓信」、私はそれぞれの点に彼等に及ばないと言っているが、彼等諸將を使いこなした劉邦は正に「將に將たる人物」であった。

この四人の墓はそれぞれの故郷の地に祀られいいが、幸いなことに私はこれらを参詣することができ、彼等の戦史に興味を持ったのであった。

反対に、項羽にも范增という傑物がいたが、彼はこの一人すら使いこなせなかったから、項羽は敗れたのであると言えるだろう。

人間には万能の士はいない。そして秀才と騒がれて逆上せ上がると、その気になるのか、自分一人が軍を背負い、自分一人で戦いが出来ると錯覚するのだ。

責任感というものは、部下を持った指揮官でなければ痛切に感じないものである。特に部下の死傷を直接に見る指揮官ほど強烈である。作戦・用兵などを計画して指揮官を補佐する立場の人（参謀等）は部下を持たず、責任感は極めて薄かったと私は思っており、無責任者ほど自惚れが強かったと感じている。

夢のような理想を掲げて戦わされ、死んだ人達は誠に気の毒である。戦後になって日本経済が発展し、平和を享受できるようになって始めて命の大切さが強調された。彼の戦争当時に生命の尊さが叫ばれていたなら、軍の作戦はもっと真剣味を帯びて、あれほどの犠牲を出さずにすんだとビルマ戦を回顧している。

「優れた戦いには優れた作戦計画と、優れた指揮官がいなければならない」とは、インパール作戦に勝利を収めた英軍第14軍司令官スリム中將へおくった、第11方面軍司令官ギファード大將の祝辞で、私も読んだことがある。

これに対し我が軍は、「おそまつな作戦計画とおそまつな指揮官」が重大な錯誤を演じ、全ビルマ戦線が崩壊した。お粗末な作戦計画の立案と運用の責任は、いったい軍司令官と幕僚の何れにあったのであろうか。

軍司令官の教範と言われている「統帥綱領」という書には、次のように記してある。『軍隊指揮の消長は指揮官の威徳にかかると。將の將たる者は高邁の品性、公明の資質及び無限の包容力を備へ、堅確の意志、卓越の識見と非凡の洞察力により衆望帰向の中樞、全軍仰慕の中心たらざるべからず』と。

しかし日本軍の將軍は、どの項目にあたる能力を有し、全軍仰慕の將軍であったかどうか、甚だ疑わしい。幕僚や他の補佐する人の言葉を頭から無視する独裁型や、統帥をいっさい幕僚に任せる、事なかれ型將軍もいたようだ。

統帥綱領に、軍司令官を補佐すべき「幕僚の任務」について、次のように書かれている。『將帥の精神を諸種の圧迫より解放し、その意志の独立、自由を確保し、これを輔けて將帥の天稟を遺憾なく發揮し、その將徳を完うし、以て將帥の權威を發揮せしむるにあり』と。

これを読むと、軍司令官の主体性を尊重するように明示されている。しかし幕僚長が我がもの顔で采配し、將帥の權威は宙に浮いていた事もあったようだ。

幕僚制度は大別してドイツ型、フランス型、イギリス型の三型があった。

「ドイツ型」は「高位の司令官のもとに陸大出の幕僚を付け、幕僚を通じて全軍の統帥を行うので、司令官はどちらかというとロボット的な存在」である。

「イギリス型」は「幕僚はむしろ書記的な存在で將帥の力がすべてで、幕僚はたんに実行の確認者」とみられた。

「フランス型」（米軍も同じ）は両者の中間で、日本軍はフランス型を採用していたが、ドイツ型に陥ったことも否めない。

ビルマ戦はイギリス型とドイツ型とが雌雄を決する戦いであつたようである。

補給と休養

十八史略に「軍に輜重なければ則ち亡び、糧食なければ則ち亡ぶ」と書いてある。軍隊に充分な軍需品がなければ戦いに敗れ、食糧なくして戦えば、これまた失敗すると、輜重の重要性を論じている。

戦力は飛行機や戦車や弾薬量ばかりでなく、特に第一線の将兵にとっては食糧の方が先づ問題であった。すべて精神力で補へと強調されていたが、精神は朦朧としてきて聞こえず、食糧は戦闘に欠かせない絶対条件であった。

中原会戦では補給に関して充分な準備をしていたが、自動車の通行ができない、山西省の険しい山岳地帯では駄馬輸送まで途絶し、我が聯隊も一週間ばかり米飯の顔を見なかった。その間、桑の実や、柿の皮を干したもの（やや甘みがあり、支那人は砂糖の代用としていた）を食べ、追撃戦をした経験があった。これは勝ち戦であり、何れ補給があるものと期待ができたからである。

ビルマ戦線では私が赴任して以来、我が大隊に一切の補給を受けたことはなかった。師団輜重隊は輸送する軍需品がないために、最前線に布陣して直接的に敵と戦火を交えていた。それほど補給を軽視していたのである。

左伝に曰く「軍には私怒なし」、戦闘は自分一個の怒り、恨み、功績のためにすべきではない、と戒めている。しかし、ビルマの戦闘は全く反対であり、「牽強附会」であった。自分の都合のいいように強引に理屈をこじつけたのである。そして「乾坤一擲」とか「起死回生」の勝機を掴もうと、掛け声ばかりが伝わってきたが、最前線部隊長には博打としか受け取られなかった。

ビルマの将星に「生兵法は知らぬに劣る」、「生兵法は大怪我の基」という諺を贈りたいものだ。

休養と上に題を書いたが、ビルマで我々には休養があったことがない。休養は充分な「給与」があって始めて、「休養」である。

連合軍には「チャーチル給与」と日本軍が名付けた給食が、輸送機から落下傘で投下された。薄い弁当箱大の缶に入った携帯食料である。中にはクラッカー、紅茶袋、砂糖の包み、缶入りミルク、チーズ、コンビーフなどが入っている。マッチと十本入りの煙草が一箱、食塩粒とビタミン錠のほかにトイレットペーパーまで入っていて、これが連合軍の携帯口糧であった。

日本軍の携帯口糧は乾麺類（乾パン）の非常食だけであったが、これさえも補給はなかった。日本軍は米飯を食べ、飯盒という食器兼携帯炊飯具でもって、米を炊きながら戦った軍隊である。日本軍将兵は米の飯を、それもかなりの量を食べなければ、腹が空いて戦闘ができない。これは日本軍の弱点であった。

ビルマの戦場で我が大隊でも、農民部落から掠奪してきた僅かな米を鉄 兜

の中に入れ（臼の代用）、ゴボウ剣（銃剣）の鞘の尻を杵にしてつき、米にしたものだ（精米）。それを飯盒に入れて炊くのに数十分を要した。木枝を焚くと炊煙が上がり、炊煙を見つけると敵機は急襲してきた。炊飯の火は夜になってから、谷間や密林の陰に隠れて焚かなければならなかった。だから数食分を一度に焚いていたのである。

日本軍の乾燥野菜といえば、ワカメなどの乾物と粉味噌ぐらいであった。その他にタラやニシンの干物があり、牛、魚肉の缶詰もあったが、それは支那戦線だけでビルマでは全く何もなかった。ビルマでは食塩さえもなく、掠奪してきた塩は貴重品であった。食糧の補給の皆無だけでなく、弾薬さえも射つ弾がなくなり、砲兵も重い砲を引っ張っていくだけであった。

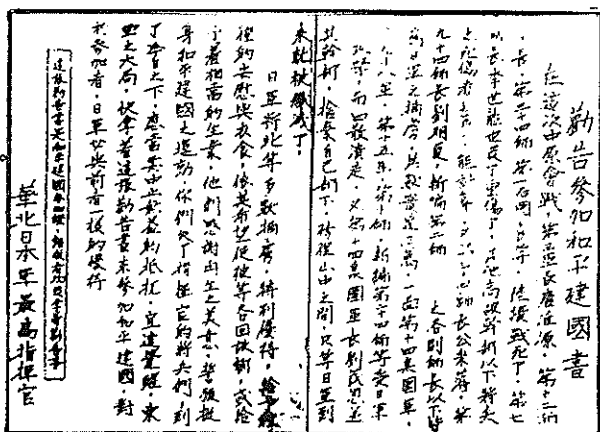
それに対し連合軍は上記した以外に、牛肉と豆、肉と野菜のシチュー、肉とスパゲッティ、ハムと卵と馬鈴薯など十種類におよび、それを携帯燃料で温めて食べ、果物や野菜の缶にデザート缶まで落下傘で投下していた。

終戦後、連合軍のダンプカーやブルドーザーを見たときの驚きは、表現する言葉さえ知らず、日本軍は負けるべくして負けたのだと知らされたのである。本当に無に近い戦力で戦ったビルマ戦は、中原会戦の裏返しであった。

降伏勧告文と娘子軍 （下は中原会戦の投降勧告文）

北支派遣軍司令官は支那軍に対し、右の写真の通り、降伏勧告文（伝単）を要所に掲示し、散布した。訳文の要旨は次の通りである。

今次の中原会戦では第三軍長唐淮源、第十二師長寸性奇、第三十四師第百聯隊長等相つぎ戦死し、第七師長李世龍また重傷を負い、その他高級幹部以下将兵の死傷者は甚だ多く数えられず、又、第三十四師長公乘藩、第九十四師長劉明夏、新編第二師の歩兵团長以下は捕虜となり、その数は実に三万名に達している。一方、第十四集團軍、第九十八軍、第十五軍、第十師、新編第二十四師等は日本軍の攻撃を受けて散りじりに潰走した。第十四集團軍長劉茂恩とその幹部は部下を捨てて山中を彷徨し、日本軍の殲滅を受けるのを待つばかりとなっている。



日本軍はこれら多数の捕虜を特別優遇し、衣食を与えて、希望によっては故郷に送って、それ相応の職業に就かしめ、再生して感謝している。そして和平建設の運動に挺身し、指導者の立場で今日に及んでいる。諸士は無益な抵抗を止め、東亜の大局を早く目覚め、この勧告書に従い、和平建設に参加されたし。これに参加する者には、日本軍は必ず前者と同様に優待を与えます。

この勧告書を持ち来る者には和平建国に参加した証として取り扱うから、帰順者は之を手にして来るようにしなさい。 [北支那方面軍最高責任者]

以上が勧告文の訳文の要旨で、支那軍の将官級の犠牲者は、115頁の表に示した⊗×△の通りで、我々にとっては中原会戦は鎧袖一触の作戦であった。

追撃また追撃と進軍して行くと、各谷間に数千人～万の数の捕虜が見えた。疾風枯葉を卷く勢いで猛追したから支那軍は逃げ切れず、輜重隊の輸送縦列を見て騎兵の大部隊と間違え、投降してきた数百名の捕虜も混じっていた。

捕虜の縦隊の中に正規軍と同じ軍服を着用した『娘子軍』の姿が見えていた。噂には聞いたことがあったが、戦場で娘子軍にお目にかかったのは初めてのことである。長い捕虜の行列の中央付近あった敵軍の、司令部か本部の隊員たちと一緒に彼女らは行動していた。その数は約50名以上だったと思っている。

命令であったのか否かは忘れてしまったが、敵軍の捕虜の司令部が駐屯している部落に、我が聯隊本部も駐留して監視することになった。



我が軍旗を見て聯隊本部だと認識した敵の将校の一人が、我が本部に姿を見せ、流暢な日本語で丁寧に挨拶に來た。取りあえず彼等の兵器を一箇所に集積を命じ、種々の指令を下した。(上は捕虜と捕獲兵器)

翌日、少将の階級章をつけた敵将と大尉の副官の二人が、旗手の私の所へ顔をみせた。副官は日本大学卒の人で達者な日本語を話した。要件は命乞いで、望みの女を聯隊長に献上するから命だけは助けてくれ、ということであった。如何にも支那らしく、敵将は私にさえも愛想笑いをしていた。彼等は自国内の軍隊であったから、妻帯者も、妾も娼婦も売春婦もいたことだろう。彼等には、女は恐怖意識をぬぐい去り、女の肌のぬくもりが恐怖を溶かす特効薬であった。

唐書の平陽公主伝に、「婦人で組織した軍隊の娘子軍は、唐高祖の女の平陽公主が数百人の婦人を率い、高祖を援けて京師を安定させた女軍の称」と書かれていた。果たして唐時代の娘子軍の再現か、夫人・妾・売春婦かは判らない。

中隊長として朱仙鎮へ

5月1日から作戦行動を起こした中原会戦は6月15日に矛をおさめ、我が聯隊本部は列車輸送により駐屯地の開封に帰還した。開封駅の駅前広場には在開封居留民が日の丸の小旗をかかげて歓迎し、歩武堂々と市街行進をして軍旗は懐かしい河南大学医学部の駐屯地に帰還した。

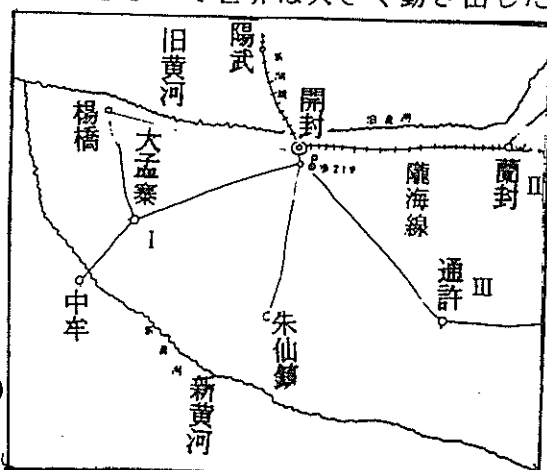
中華民國30年（昭和16年）発行の蒋介石隷下・第一戦区中央軍の文書を解読してみると、中原会戦のことを次のように書いている。

『敵（日本軍）は作戦兵力の抽出、転用を徹底して行い、局部の兵力は絶対優勢であったから、速やかな戦術上の勝利を得た訳で、こういう規模で逐次包囲攻撃をして来るならば、我が軍（支那軍）は対応の処置は難しいことになるだろう。だから敵軍（日本軍）の真の作戦を会得することが、本戦鬭（中原会戦）の教訓でる』と。敵ながら天晴れな反省である。

帰還すると間もなく徳蘇開戦の戦端が開かれた。即ち昭和16年6月22日に「独ソ」が開戦し、第二次世界大戦が火蓋をきって世界は大きく動き出した。

この時期に大本営は日米決戦を予想していたのであろうか。支那派遣軍総軍（南京）も（大陸打通作戦）を想定していたのだろうか。我が師団は黄河南岸の敵の大拠点「鄭州」を攻略占領し、その間に、黄河南岸の「中牟」と「霸王城」に橋頭堡を構築するという作戦準備が急がれた。

（右は開封南方40kmの朱仙鎮の位置）

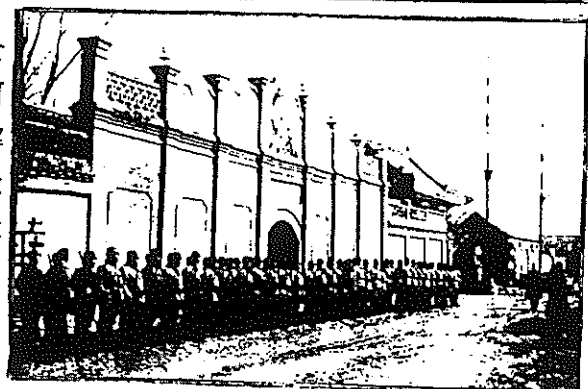


私は昭和16年9月1日附で朱仙鎮

に駐屯する第三中隊長を拝命した。

上記した日米決戦や大陸打通作戦などは誰しも毛頭になく、黄河の渡河作戦のための中隊長の交代だと理解していた。又、前任者の開米中尉は幹部候補生第一期生出身で、将校は加算を含めて13年で恩給受給者になり、該当者になるからであった。

（右は朱仙鎮の駐屯地正面）



当時は軍人恩給の権利がつく前に内地に帰還するのが普通で、それほど軍費が莫大であったから、作戦とは関係なしに軍人恩給費にまで影響を及ぼした。

駐屯地の朱仙鎮は聯隊旗手になる前に勤務していた通許と同じような任務であった。国民党軍に共産軍、それに日本軍との三つ巴戦で、我が第三中隊単独の責任に於いて行動しなければならない。これは私としては初めてのことである。治安維持は先ず住民との信頼関係と、友好を追求することが第一でなければ、警備地域の確保と防衛はできないと考え、処置した積もりである。しかし敵側も同じような考えで行動していると思うと、異国民の日本軍に対しては「面従腹背」が本当の住民の精神状態だと推察していた。

そのために情報収集を兼ねた宣撫工作が重要となり、環境衛生状態の悪い支那人の医療、それには衛生兵でも充分に果たし得る程度の応急処置だと考えた。又、戦場というところは、正常な感覚では一日として生きることが出来ないが、掠奪、強姦は彼等の尊厳を冒瀆するもので、これだけは絶対にしてはならないと命令した。朱仙鎮にP屋の施設があったかどうかは記憶にない。

いろんな構想を抱いて張り切って赴任したが、河南作戦の黄河渡河が10月2日夜半と決定されると、その準備に没頭されて治安や宣撫工作は打ち切った。

私が朱仙鎮に滞在した期間は1ヶ月にも満たない短期間で、渡河作戦までに部下の名前も覚え切らない状態であった。しかし朱仙鎮は宋の岳飛が金軍を破ったところであり、支那三大鎮の一つとしても有名で、それらを記述したい。

鎮の出現

宋代以前にも州県城郭外の街道筋に「草市」と呼ばれる定期市があった。草市は近在の農民たちが自分の生産物をバーター取り引きして、生活必需品を入手するための場であった。だから草深い田舎の市場、草市と呼ばれたのである。

唐末には各地に割拠して半ば自立化した節度使軍閥勢力は、領内での殖産興業を積極的に推進したため、各地に新たに地場産業が興り、その中心は小都市を形成した。節度使は戦略要地や新興の小都市に軍隊を駐屯させ、各種の商税を徴収して自らの重要な財源とした。（節度使は辺境の傭兵軍団の司令官）

これらの新興小都市には軍隊が駐屯したため、「鎮」と呼ばれ、これより小規模な草市・村市は「市集」と呼ばれた。鎮には徴税のために県の出張所が置かれ、宋朝時代には欠くことの出来ない行政末端機関として公認された。

鎮の中には人口五千人から数万人に達するものもあり、宋代における新興の商業・産業小都市である鎮の代表格は「景德鎮」であろう。北宋の三代真宗の景德年間（1004～08）に、その年号を冠した鎮名に改称されて公認され

たのが景德鎮であり、良質の陶土と水利の便が産業を発展させたのである。私も戦後2回も訪れているが世界一の陶磁器の生産地であった。

朱仙鎮は南船北馬の地として栄えた賈魯河の河畔の街で、他の一つは武漢であり、これを「三鎮」と称したのであった。

岳 飛 (1103~1141)

河南省に生まれた南宋の武将で、金に滅ぼされた北宋の都・開封を奪還するために北に進み、朱仙鎮でその機をうかがっていた。しかし時の宰相の秦檜は和平派で、皇帝の高宗に講和を進言した。軍の引き上げを命じられた岳飛は涙を吞んで、都(現在の杭州)に引き上げなければならなかった。

杭州に祀られている岳飛廟には、金と戦って百戦百勝した岳飛を、関羽と並ぶ武将として尊敬した像が立ち、引き上げを進言した宰相の秦檜が土下座している像があり、庶民が秦檜の像に唾を吐いている像まで立っていた。それほど大衆に敬われている武人が岳飛である。この岳飛廟にも私は訪れている。

岳飛に関しては、それぞれの紀行文に記載済みのため、彼が常に「義」について述べていたから、それについて少々書いておく。

「義」という字は、「羊」と「我」に解体することができる。「羊」は転じて「美しい」という意味をもっている。即ち「義」とは「我を美しくする」ことである。岳飛は常に、義は旺盛な壮烈さであると自分に言い聞かせて出陣したと聞く。率先垂範の勇士であった。士は知識人のことである。

乾坤一擲

朱仙鎮は賈魯河の上流の河畔に位置し、南船北馬の通り、ここまで舟で北上して、これからは馬によって運ばれた。開封の船着き場のような街であった。

乾坤一擲という言葉は「韓愈」(字は退之、昌黎と号した。768~824)の「鴻溝を過ぐ」という詩から出たものである。鴻溝というのは現在の河南省の賈魯河のことで、秦が滅んで天下がまだ統一しない時、楚の「項羽」と漢の「劉邦」(後の高祖)が、この河の線で一線を画して天下を分有した。詩は当時を追懐したものである。詩は次の通りである。

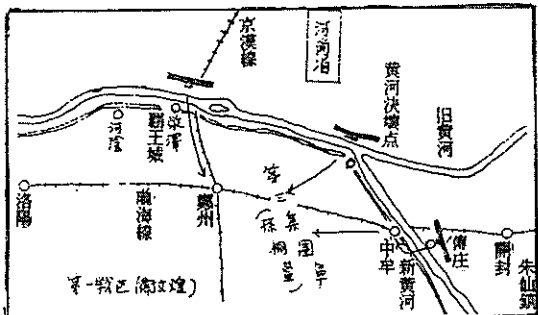
『竜疲れ虎困じて川原に割ち、 億万の蒼生、性命を存す。』

誰か君王に馬首を回らすを勧めて、 真に一擲乾坤を賭するを成せる』
韓愈は張良たちが漢王を援けた功業を鴻溝の地でしのび、正に天下を賭けた大博打と見たのであろう。一擲とは全てを一度に投げ出すことで、乾坤は天地、乾坤一擲とは、天下を取るか失うか、のるかそるかの大冒険のことである。

黄河渡河作戦（河南作戦）

我が第35師団は中原会戦に引き続き、昭和16年10月2日午前4時を期して黄河を渡河し、蒋介石直系軍第1戦区（司令官衛立煌）の一大拠点である「鄭州」を攻略し、その間に黄河の南岸（敵地区）の霸王城と中牟の二箇所に堅固な橋頭堡を構築し、将来の作戦の基地を確保することが目的であった。（右下要図は河南作戦の概要図）

この作戦は同時に、中支那派遣軍隷下の阿南惟幾中将（終戦時の陸軍大臣・自決）指揮する第11軍（呂集団）が、同時に作戦を開始した長沙作戦に策応し、敵を北支方面に牽引する目的でもあった。

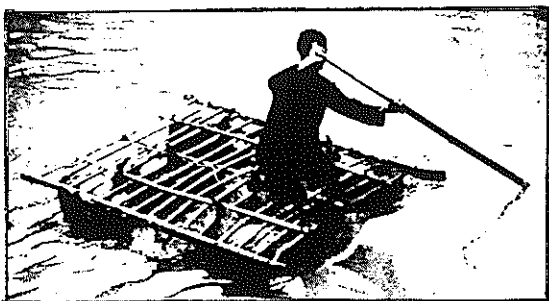


この渡河作戦は大東亜戦争開始2ヶ月前のことで、それまで日本軍としては上陸用舟艇による敵前渡河の経験はなく、我々が最初であった。（それまでの渡河は河の中を歩いて渡る「徒渉」作戦であった）

舟艇作戦で想い出されるのは「三国志」で有名な揚子江中流の古戦場「赤壁の戦い」である。後漢末の208年、呉の孫権と蜀の劉備の連合軍が諸葛孔明の謀を採用し、舟艇攻撃で魏の大軍を撃破した所が赤壁の地で、この結果、三国鼎立の時代が確定したのである。幸い戦後私は同地を訪れ感無量であった。

古代支那の渡河の歴史を繙いてみると、黄帝はたまたま池に浮いていた柳の葉の上に蜘蛛が乗っているのを見て、河を渡る方法として舟を発案し、敵前渡河に成功したと言う。

又、「羊皮筏子」という筏を黄河沿岸の住民は古代から使用していた。これは羊の皮の胴体を袋の状態にして空気を入れ、それを浮き袋にした筏である。右の写真の「羊皮筏子」は昭和60年に甘肅省の蘭州から舟に乗り炳靈寺ダムで私が撮影したものである。



渡河作戦の詳細な記事は拙著「両忘」に記載済みのため、重要な部分以外は割愛することにした。

渡河作戦の要諦は「企図の秘匿」であり、「不意急襲」でなければならない。これは何事も同じである。しかも渡河する舟艇上は無防備のため尚更である。

そのために周到綿密な計画と準備が必要とされるから、決行まで大変であった。

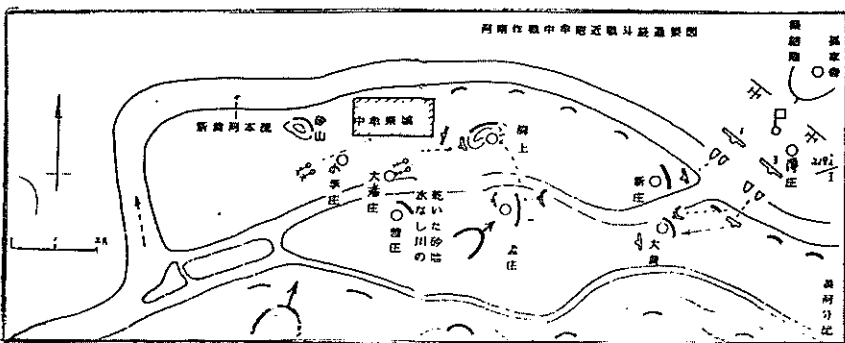
「戦闘は条件が揃っていなければ勝てない」 その中でも重要なことは計画と準備が8割で、実施が2割である。「算多ければ勝ち、算少なきは勝たず、いわんや算なきにおいてや」の孫子の通りであった。

渡河は「自分の正体を敵に現さず、無形こそ最高、無音こそ最善」である。新任の中隊長として先頭に立ち、隠密の中を鞭声、肅々として渡河工兵の舟艇で黄河を渡った思い出は、年老いた現在でも懐かしく思い出される。

率先垂範だと強く意気込んでいた私は奇襲が成功したと見るや、河岸の敵陣を突破して鬼神の如く疾走し、後退する敵兵に膚接（くつついて）して追撃すること約2km、しかし敵の大逆襲を受けて1名の戦死者を出してしまった。猪突猛進の誘りは免れないかも知れない。だが戦いは勢いが絶対に必要である。私は敵の指揮官は受動的な立場に立たされて、周章狼狽していると判断したのであった。（上は昼間の砲兵の渡河の光景で、暗夜の歩兵の渡河の情景は撮影は出来ない）



弾丸飛来の戦場は誤りが許されない極限の場である。勝負は時の運などという言葉は戦闘には通用しない。勝たなければなら



ないのである。誤れば全滅である。負けられないだけに真剣である。何時、真剣が頭上にふり懸かってくるか判らないのである。

（上は渡河点～大黃～孟庄（敵の逆襲）～洞上～中牟城までの戦闘経過要図）

我が第3中隊に対する大隊命令は大黃の占領までであった。それが孟庄まで追撃し、さらに北方の洞上までも進出した。ここに「独断と専恣」の問題が生じてくる。「独断」は大局を判断して、状況の変化に応じる最良の方策でなければならず、結果が良くなければならない。それに反し「専恣」は「わがまま」「気まま」「専横」のことで、結果が良くなければ上官の意に反することになる。上官の意のようにならなければ独断は専恣になってしまうのである。

今日の政治家は「国家・国民のために」とか、「国民と共に歩む」とか、「全力投球」という言葉をしょっちゅう使っている。彼等の美辞麗句を聞いた時に、私は彼等がそのような行動をしていない言い訳だと思っている。戦場はそのような生半可なものではなく、死を賭しているのである。不言実行の場である。政治家たちよ！。戦場に立ったような真剣さを持って、と叫びたい。

「下、三日にして上を知り、上、三年にして下を知る」という言葉がある。二人か三人しかいない上官の目を誤魔化することが出来ないような者は、一人前になれない。しかし、下の者の目は絶対に誤魔化すことは出来ないのだ。この言葉は戦闘場の中隊長として敵に対したときに、はじめて感じた言葉である。生涯、忘れることは出来ない。これが責任感に通じるのである。

暗闇の中の渡河準備から敵前渡河、戦闘にひき続く追撃、敵の大逆襲の撃退、湊れ河床を渡って中牟城東南の洞^{ドウ}上高地の占領等、約16時間に及ぶ不眠不休の戦闘を回顧すると、そこには死も恐怖心も考える余裕すらない心境であった。これは純真な若さからと身体強健の賜物であったと思っている。

その結果、中牟城攻撃を容易ならしめたという功績により、原田熊吉師団長から「賞詞」を受領した。（軍司令官であれば「感状」である）

孫子に「よく戦う者は人を致して人に致さず」と書いている。戦闘というものは「主導権」を握った方が勝つと言うことで、中隊長になって初めて肌に感じたことであった。

「兵は心を攻めることが上策である」と言われている通り、企図を秘匿した渡河作戦の成功により、一瞬にして敵は受動的な立場に陥ったのである。狼狽した敵の指揮官は心理的に敗北したのであった。一方の我が中隊の積極的な行動が一層深く敵を痛打し、中隊の全将兵は勇敢以上である「勇悍」（気があらく強いこと）であった。

同火共食（同じ釜の飯を食う）の中隊は団結の単位である。そのことは実戦場で指揮して始めて強く認識し、一に経験、二に経験、三に経験の重要性を自覚したのであった。

武士の「士」とは「仕」であり、「仕」は「つとめ」である。中隊長の「つとめ」

とは、部下の生と死を背負っていることで、体験ほど指揮官^{イチ}否人間を利口^{リコウ}にするものはないと、貴重な体験を積んだのであった。

（上の写真は中牟城の外周に構築した敵の掩蓋銃座と戦車壕）



金鵒勲章 （金の鵒の模様のある勲章。鵒＝鶇）

明治23年（1890）に制定された勲章で、武功のあった軍人軍属に与えられ、昭和22年に廃止された。功一級から功七級まであり、軍人としては最高に名誉なものであった。功級に応じて終身年金が下付された。

私は中牟城攻撃に際して師団長より賞詞（前頁）を受領したが、当時の軍隊には功績名簿というものがあって、それに「殊勲甲」と記入された。その評価が軍中央の「論功行賞」で認められると、金鵒勲章の受章となったのである。

私が従軍した時代には昭和14年4月29日（昭和天皇誕生日・天長節）付で支那事変の第一回の論功行賞があったが、それ以降から大東亜戦争の長期に亘り、全く論功行賞は行われなかった。但し戦死者についてはその都度、叙勲された。だから悲惨だった大東亜戦争では金鵒勲章はなかったのである。

私が陸士に入校した時の予科の区隊長は金鵒勲章五級の受賞者であった。それは昭和7年の上海事変に小倉歩兵聯隊の小隊長として上陸した際、聯隊で最初の負傷者であったから、叙勲となったと正直に我々に述べていた。だから区隊長（42期生）は戦鬪の話は経験がないから話さなかった。

満州事変の勃発時に柳条湖付近に駐屯していた中島中隊は、勃発と同時に支那軍の兵營の北大營に突入して占領した。それで中隊全員が金鵒勲章を受章している。中隊長の中島大尉は進級して私の本科時代の戦術教官となっていた。

昭和12年12月の南京城一番乗りをして、名声を博した靖江歩兵36聯隊（脇坂部隊）は、聯隊の功績が殊勲甲であったため、聯隊本部附の軍医、獣医、主計将校まで全員が金鵒勲章を受章し、私の知る人も受賞していた。

勝負事は「運不運」があり、ツキがつき纏うものである。私の体験から述べると、金鵒勲章受章者は幸運な人だと言うべきである。それ以上に武勲をたてながら、叙勲されなかった人が数多く存在していることを忘れてはならない。

再び河南渡河作戦に話を戻すが、渡河の翌日の10月3日、黎明時を期して中牟城に突入して占領した。その時、私の双眼鏡に写ったのは、敵の迫撃砲数門が交通壕の中を退却している光景であった。中隊長の私は直ちに高橋小隊に追撃を命じた。その結果、迫撃砲2門と軽機関銃数挺を捕獲したのであった。

後日、敵の迫撃砲2門の捕獲が論功の対照となり、下士官兵から殊勲者2名を選び報告せよとの命令があった。小隊全員の功勞であって2名の功績ではない。作文によって殊勲者2名を選ばなければならない矛盾が生じるのである。

金鵒勲章は上記のように戦果がなければ認められないのである。屍山血河の犠牲者が続出する凄惨な激戦であっても、或いは莫大な弾丸を撃ち尽くした苦戦であっても、目に見える戦果（戦いの成果）が要求されたのであった。

陸海軍の中央が行う論功行賞は広大な戦場を対象にするから、運不運は仕方のないことである。敵の砲銃弾下で戦う将兵は、一人として金鵄勲章を目標にして戦っている者はない。ただ「生を視ること死の如し」と我々は戦ったのであり、叙勲は人生の全てが運であるのと同様である。戦後になって生半可な戦闘経験者でも、歴戦の勇者のように振る舞っている人が数多く見受けられるのは、誠に遺憾千万である。

昨今の我が国では叙勲の問題が取り上げられている。特に政治家の優先叙勲が問題とされているが、同じ人間に等級が付けられているのも問題である。私見を述べると、文化勲章などを除く位階勲等は全廃すべきである。位階勲等ほど曖昧なものはない。皆は各々希望して職を選んだことであり、職に貴賤はなく、政治家だけが国を動かしたのではない。国民各層の努力こそが国を動かしているのである。

直接部下を指揮している者は、部下に甲乙付けることに反対だと推察している。美辞麗句だけで飾る政治家に何の功績があるだろうか。昨今、生命を賭している政治家の存在は知らない。失敗すれば辞任すれば事終わりである。我々が戦った戦闘では失敗は死であり、死んでも責任は免れなかったのであった。

日章旗（国旗・日の丸）

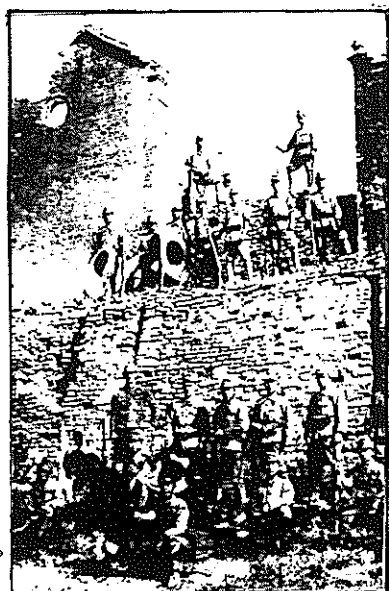
日本の国旗は明治3年（1870）の太政官布告で制定した日の丸の旗である。但し船舶法の規定するほかは制文的根拠はない。それ以前にも島津藩や幕府も日の丸を使用していたことがある。

私が軍に在籍していた時の記憶では、陸士の卒業式には天皇の行幸（天皇が出掛けること）があった。その予行演習の時に、国旗を天皇に見立てて演習をしたことが思い出される。

軍隊の入隊や除隊に際して国旗を掲揚したかどうかは記憶にない。また戦場で小隊長、中隊長、大隊長を勤めた経験からすると、天皇中心主義、天皇は神であった時代に出征した軍自体が、日章旗を携帯・携行していたことは全く無い。

右の写真は私が中隊長として河南渡河作戦に参加し、中牟城東方500mの太仙廟高地を占領した記念写真として聯隊史に掲載されたものである。

この写真の中にある数本の日章旗は中隊が携行



したものではない。兵士たちの私物である。軍は日の丸のような兵器に属さない物は一切携行して行かなかった。兵士たちは入営するときに親戚や友人たちから、武運長久の寄せ書きをした国旗を送別の意味で贈られたもので、腹に巻くなどして持ってきた。勿論、現地の住民に押し付けるようなこともなかった。（前頁の写真の城壁の下で立っている5人の左端が中隊長の私である）

残念ながら私は支那戦線、ビルマ戦線に出陣に際して、部隊として出発したことはない。従って国旗を贈られたり、^{カシコ}歓呼の声で見送られたこともない。兵士たちは戦友が戦死したときに、その^{シカバネ}屍を国旗で包むために携行していたようで、すべて戦友愛の^{ハツロ}発露であったと理解している。

実戦場では日章旗を掲げることはあり得ない。それは我が位置や兵力を敵に報せることになり、攻撃目標になるからだ。前頁の写真も後日に写真版が撮影した物で、交戦状態の真っ最中に日の丸を掲げることは自殺行為である。

私の戦場の体験では「勝ち戦」の時にしか掲げなかったと思っている。ビルマ作戦で私は日章旗を見たこともなかった。「負け戦」では掲げる意欲さえ沸かなかったと思っている。外地の写真で日章旗を見ると、それは戦闘してない証^{シロコ}拠だと言ってよいだろう。心の余裕の問題である。

我が国でも国歌や国旗が法律で制定された。しかし全てを法律で定めても意味がない。戦前・戦中のように法律できめてなくとも、国民の自発的な自然にまかすことが肝要でないだろうか。帝国時代の日本は法制でなくとも慣習として尊重されていた。現在の政治家は法を作って魂を入れない輩ばかりである。

私は戦後80ヶ国以上も訪れているが、国旗はその国の理想、国民性、歴史等を現していた。国が法律で定めた国もあり、慣習的にきめている国もあったが、その国独特の色彩や意匠をもっていて、精神主義が特徴だと感じていた。

イギリスはイングランド、スコットランド、アイルランドの合一を象徴するユニオン・ジャック。米国は1776年制定の13の條と州の数の星の星条旗。仏は1790年制定の自由、平等、博愛の三色旗。中国は1949年に制定した五星紅旗である。

背水の陣地構築

中牟城攻撃の10月2日の当夜、敵の逆襲を受けて私は初めて負傷した。しかし幸いにも軽傷であった。我が第3中隊を中牟城に残置した大隊主力は鄭州攻撃に転進し、悲哉、大隊長の深井武徳中佐（31期、死後大佐）、聯隊では中隊長の53期2名、54期1名が戦死した。謹んで哀悼の意を表します。

我が35師団が鄭州を攻撃する間に、石山少佐(33期)は歩兵1ケ大隊と砲兵1ケ大隊を基幹とする諸部隊を合わせ指揮して「霸王城」に、寺前中尉は歩兵1ケ中隊に配属歩兵1ケ小隊、重機関銃4銃、砲兵(野砲2門、後日15榴1門追加)、迫撃砲10門、渡河工兵1ケ小隊、野戦病院等を合わせ指揮して「中牟城」に、それぞれ堅固な陣地を構築し、予想される後日の軍の進攻作戦のために「橋頭堡」を確保し、師団主力が黄河北岸に撤退後も同地を死守すべし、という命令を受領した。中牟の総兵力は約400名であった。

「橋頭堡」とは、直訳では橋を守るために築く堡壘のことである。転じて上陸や渡河してきた部隊を守り、または攻撃の足場である対岸の拠点のことを言う。堡とは壘のことである。(125頁地図参照のこと)

師団主力が黄河北岸に撤退すると、黄河を境界にして蒋介石軍と国境を形成することになる。師団の収集した情報によると、中牟城正面には歩兵2ケ師団、砲兵20門、迫撃砲40門を有する約3万の敵の攻撃が予想され、それに対応する半永久陣地の構築が下命された。

滔々として濁流逆巻く幅1000mの大黄河を背にして、大軍を迎え撃つ我が中牟城守備隊は、将に「背水の陣」であった。予想される戦闘は「条件が揃っていなければ勝てない」と、これほど真剣になって考えたことは、生まれて初めてのことであった。

「背水の陣」とは「史記・淮陰侯伝」に出ている辞である。漢の「韓信」が川を背にして陣を立て、味方に必死の覚悟を固めさせ、趙(敵軍)の軍勢を破った故事のことからきている。即ち一步も後にはひけない、せっぱ詰まった状態のことを言い、必死の覚悟で事に望むことである。

天は若輩の私に「死中に活を求めよ」と命じたのであった。兵力の絶対差からも、私の経験からも、自分ではどうすることも出来ない「風を待つ露」だと覚悟を決めると、あとは少々心の余裕も出てきたようであった。

数日後、師団の作戦主任参謀の林中佐が単身で中牟を訪れ、私に言った。君は師団長に指名されて中牟城守備隊長に選ばれたのだと。この一語に若い私は光栄の至りだと感激してしまった。それ以来、「逆境は最良の教師である」と決意し、築城計画と実施に真剣に取り組んだ。

部下となった諸隊の将兵にも背水の陣を決意させながら、偶然性を期待してはならないと戒め、部下を勞れば生死をともにすると確信し、叱咤でなく専ら激励に激励を重ねる毎日であった。

鄭州攻撃が終了して中牟城の南方高地に後退してきた湯口聯隊長は、直ぐに中牟の私を訪ねてきた。青二才の私がどのような陣地の構想を抱いているか心配していたのである。実に有り難いことだと慈父のように感じたのであった。

我が守備隊要員だけでは各陣地の構築だけで手一杯で、各拠点陣地を繋ぐ遮断壕や交通壕、城内の道路に沿った交通壕、避難壕までは手が回らないと申しあげた。すると聯隊長は驚くべき威力を発揮され、黄河北岸から毎日500人の支那苦人を中卒へ動員した。(右下は苦人群)

秘密保持のため陣地内の工事には苦人の立入禁止の処置をとった。苦人たちには村長が監督となり、ノルマの実行に責任を負わせたから工事は進捗し、10日間で幅3m、深さ2、5m、延長8kmの壕の構築が完成した。

工兵1ケ中隊の援助により、太い丸太で組み厚さ1mのレンガを積み重ねた20数個の掩蓋銃座(トーチカ)や、地下、半地下兵舎などの設備も完成した。(右は壕を掘る苦人群)

「小水の魚」のような、危うきこと巢卵の如き我が中卒の各陣地も日に日に強度を増し、張り子の虎も猛虎に変貌し、いよいよ衆敵と雌雄を決する時を迎えたのである。



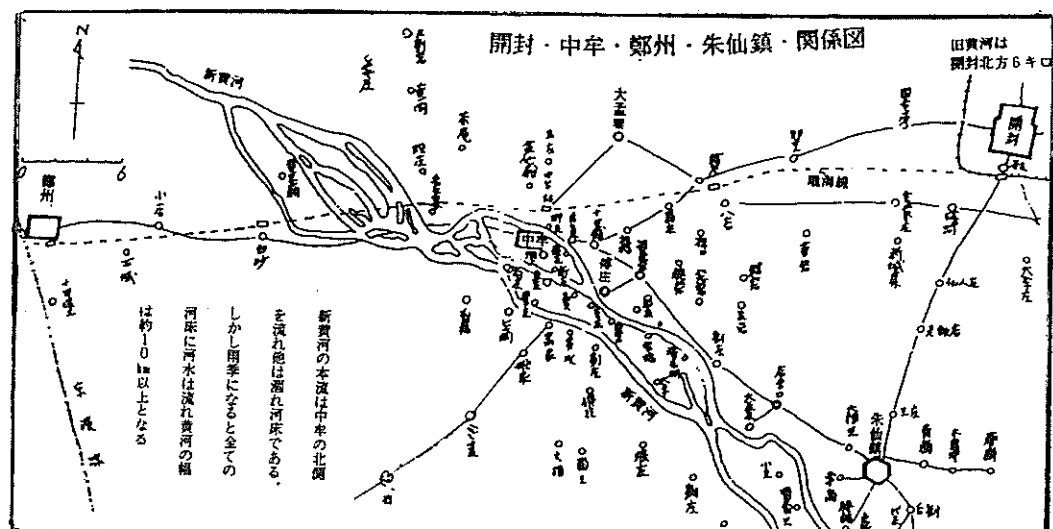
我れ大佐に進級、首に懸賞金

誰一人助けてくれる者はなく「脛一本腕一本」、自分以外に頼れる者はないと決意し、中卒城を共同墓地だと覚悟した中卒の攻防戦は、60年になろうとする今日でも、「計画8割、実施(実戦)2割」の戦闘だっていると思っている。自分の正体を敵に現わさず、「無形、無音こそ最高」を目標にして敵の大軍を陣地の直前まで引き付け、周到綿密に計画準備した不意急襲射撃によって衆敵を撃破し、猛攻を頓挫させたのであった。

孫子に「よく戦う者は人を致して人に致されず」とあるとおり、戦闘は主導権を握った方が勝のである。防禦戦闘に於いての主導権とは、難攻不落を認識させることであり、金城鉄壁に向かって卵を投げつけているような感じを抱かせることである。(防禦の本来の漢字は防禦である)

11月16日夜間から連続三日三晩の敵の執拗な猛攻は、百雷が一時に落ちてきたような砲弾の炸裂音に加え、雲霞のような大軍の連続した猛攻であった。生きた墓石となり、決死の覚悟で沈着冷静に、強固な陣地を信頼する戦闘の結果、「死中求生」を目標にした我に天は凱歌を挙げたのであった。

敵の中牟城に対する猛攻は、昭和17年の1月末までの約3ヶ月の間繰り返された。それに対し我が方は15^{センチリョウダンボウ}榴弾砲、15^{センチ}迫撃砲の追加配備、火焰放射器など、敵が見たことも聞いたこともない新兵器を繰り出して使用した結果、遂に敵は攻撃の続行を断念したのである。(下は中牟を中心とした黄河流域)



我が35師団司令部の通報によると、敵の情報では「中牟城守備隊の兵力は約3000名で、最高指揮官は大佐級」と言うことであった。新任中隊長の中尉が5階級も特進して大佐に進級し、諸兵合わせて約400名が3000名と判断されたのである。

背水の陣を敷いた戦闘は、現在の今だけがあって将来がなく、敵を倒さなければ我は死ななければならない。食うか食われるかである。私は出征以来これほど必死になって戦闘したことは嘗てなかった。肌に粟が立つと言われるが、私にはそんな暇さえなかった。

人生は成功することに意義があるのではなく、心魂を傾^{シンコン}注^{ケイチュウ}して努力することに意義があると言うが、そんなことで戦闘が出来るとするのは間違いである。「死を必す」、命がけの戦闘は何としても勝たなければならない。その結果、「天の命を拾う」というか、命を拾ったのである。

後日の師団の情報によると、中牟城守備隊長の私の首に「懸賞金^{ケンショウキン}」が懸けられていたと言う。金額は記憶にないが、聯隊唯一の稀少な存在価値を認めてくれたことだけでも、守備隊長の面目躍如^{ベンボクヤクジョ}と言わなければならない。

一方の黄河上流の橋頭堡「霸王城」も同じように猛攻を受けて激戦が続いていた。霸王城中牟城も最初に守備に就いた時、師団では半年で守備隊を交替すると宣言していたから、それによって霸王城の石山少佐は半年で交替した。

しかし中牟城の私は交替を拒否し、継続して守備の任に就くと返答した。そのことが師団～軍全般に大評判になった。その真意は、漸く中牟の守備に馴れて一木一草も知り尽くしたからだ。移動すれば後任の部隊が苦勞するだけだと思ったからである。単純すぎるほど明解であった。

中牟城の緒戦から得た教訓は、「戦いは理屈ではない」と言うことであった。理屈で戦ができれば、これほど簡単なことはない。戦闘は体験である。戦闘体験から戦法が生まれるものである。机上の計画のように理屈ばかりでは、実際の戦闘の役には立たない「素引きの精兵」である。

死 生 観

中牟は私に死を決意させた最初の地であった。そして戦闘の恐ろしさを知った地でもある。それは上記したように背水の陣頭に立ったからであり、「疾風に勁草を知る」の辞の通りであった。困難なことに出合って、初めて本当の価値が発揮されるのである。

死生観に就いては拙著「両忘」（生と死の両方を忘れて戦った意）に記している通りで、責任感を痛感すればするほどそこには生も死もなくなり、ただ使命感のみに生きる崇高な精神状態となっていく。それを死生観と言うのではないだろうか。この精神状態が死を超越させ、戦場では死生観と責任感とは直結している。

死生観は死ぬと言うことではない。無心になって責任感に生きよと言うことである。極限状態の人間心理を鋭く体験した戦場、命よりも名を惜しむ時代だった戦場でしか、我々のような凡人は味わえなかったと思っている。「責任は職務に在り」で年齢には関係はないのである。



（右上の写真は中牟城守備隊長時代の私）
死生観には強弱はあったと考えている。指揮官だけが感じるものではない。死が免れない状態に立つと、人間は誰しも任務に生きようとするものである。即ち、境遇を支配する者が真の英雄であり、中牟城で戦った戦友は凡て英雄と称すべきであった。各兵科の戦士に心から感謝している。私の力なんか高が知れている。

激戦場では階級章や地位が指揮するのではなく、信頼感で結ばれた職責と人格で指揮してこそ、真の戦場指揮官と言えるのではないだろうか。

「学問なき経験は、経験なき学問に優る」と中牟城は私に教えてくれた。又、機会が人を見捨てるよりも、人が機会を見捨てるほうが多いのではなかろうか。

空中から侍従武官視察など

昭和16年11月22日、我が中牟城守備隊は、北支那方面軍の最激戦地と認められ、侍従武官の搭乗機が中牟城の上空に飛来するという、当時としては前例のない光栄に浴したのであった。

当日の午後2時、東方から黄河に沿って飛翔^{ヒシヨウ}してきた侍従武官の搭乗機は、中牟城の上空にさしかかってきた。守備隊全員が捧^{ササゲ}げ銃^{ツツ}をして迎えると、機はゆっくりと旋回^{センカイ}しながら高度を下げて低空を飛行し、翼^{ヨク}を左右に振って我が守備隊の労をねぎらったのである。

このことは私の生涯を通して忘れられないことであり、戦死された戦友の霊も浮かばれたことと思っている。

当時の侍従武官は「大元帥ダイゲンスイとしての天皇の御名代ミミウダイ」であった。後日、中牟城の状況が「天聴テンチョウに達した」（天皇の耳に入ること）と「承ツクり、守備隊全員に「恩賜オンギ（天皇から頂くこと）の煙草タバコ」が下賜ゲキマツ（下さること）されたのであった。

聯隊長の訓辞である「以死必勝」の精神で任務を達成したことが嘉賞（褒められること）されて以来、支那派遣軍総司令官畑俊六大将、北支那派遣軍司令官多田駿大将、第12軍司令官土橋中将、同じく喜多中将（終戦時大将）、第35師団長原田熊吉中将、同じく重田徳松中将、同じく坂西一良中将等の諸将星が中牟の視察に訪れた。その都度、私は戦況を報告して激励の辞を賜った。そして、それらのことが内地の新聞にも報道されたのであった。又、各軍司令官の訪問視察を受けた結果、軍通信隊による黄河を渡った有線通信網が架設され（それまでは無線のみ）、或いは15種榴弾砲が配備されたが、その度毎に我々守備隊員は水を得た魚のように嬉しかったことが思い出される。

その諸将星の来訪のお陰であろうか。私は聯隊創立以来、初めて開封飛行場を飛び立ち、中牟前面の敵情視察に飛行し、聯隊長や師団長に報告したことがあった。当時としては珍しいことである。（参考のため軍隊記号を掲載）

[illegible]

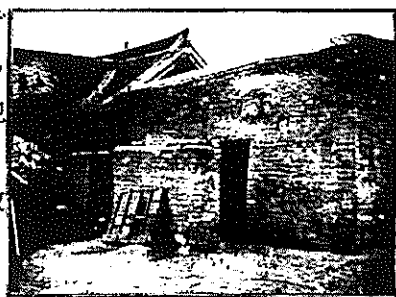
日米開戦を3号無線で知る

中牟守備隊の将兵は戦う日の長いことを実感として肌を感じながら、殺伐とした、しかも荒涼たる戦陣生活が2ヶ月を経過すると、戦闘に馴れすぎた戦場心理として幾分か緊張が弛緩する時期を迎えていた。

昭和16年12月8日の早朝、地下兵舎に起居をしていた私に、配属師団通信隊の3号無線班長から日米開戦の報告を受けた。予想もしなかった開戦は将に青天の霹靂で、鬱憤をはらすような朗報（喜ばしい報せ）であった。

針の筵に坐り地獄の大きな口が開けて待っている中牟城に陣した甲斐があり、時の首相・東条大将の独特の高い声で絶叫する宣戦布告文を始め、開戦の赫々たる大戦果を耳にした。その燃えるような感激は筆舌に尽くすことは出来ず、欣喜雀躍してこの報道をガリ版（謄写版）にして各陣地に伝え、黄河北岸の大孟寨におられる大隊長にも報告をわすれなかった。

歩兵聯隊通信隊の5号無線や大隊の6号無線では、宣戦布告文などは到底聞くことは出来なかった。しかし配属されていた師団の3号無線は内地との行進も可能で、開戦の状況を直接に聞くことが出来たのも中牟のお陰であった。背水の陣の激戦の成果がこの感激に繋がり、九死に一生を得たような興奮は本当に僥倖であった。



（右上は敵の野戦重砲の弾丸にも抵抗できる中牟城の半地下兵舎の一つ）

日米開戦は政府首脳や軍統帥部も「肺肝を砕き」（考え抜くこと）、熟慮決心したことと推察していた。後日に私も大東亜戦争の最激戦地の一つビルマ宣戦に従軍し、敗戦後、戦争に関する多くの書を読むと、最前線で死闘を経験し、多くの部下を失った責任者として、心の底から慨嘆することが多いのである。ひたすら幽明界を異にした死別者に対し、ただ頭を垂れるだけで、これらの心中は実戦に直接参加して、死闘を演じたか否かでは雲泥の差があるようだ。

朝日新聞特派員来る

中牟城内外は縦横無尽に隙間がないほど陣地が構築され、守備隊員以外は誰一人として存在していない状況であった。その中牟に非戦闘員の人が足跡したのは朝日新聞社特派員、写真班、画家の三名が初めてのことで、渡河工兵の操縦する舟艇に乗船して黄河を渡ってきた。

各新聞社は師団参謀部や我が連隊本部に中牟城の取材の許可を申請していたが、連日連夜、激戦が続いていた最前線に赴いて、もしも犠牲が出ると問題と

した時は、城内の各家に「月餅」(中秋の名月に供える菓子)が飾られていた。しかしそれ以来、炸裂する稲妻のような砲弾は雷鳴のように城内を揺るがし、紅蓮の炎は風に煽られながら家屋を焼き払い、遂に瓦礫の街と化し、猫の子一匹さえも生存できないお化け屋敷となってしまった。



(右上の写真は変わり果てた城内の殺風景な街の風景。朝日新聞写真班撮影)
三光作戦とか清野作戦と言うことが支那戦線でよく言われるが、これは支那軍が射界の清掃と陣地構築の資材を獲得するために建物を破壊し、日本軍が利用できないように民家を焼き払った。極端な焦土作戦で、支那軍は同胞の一般市民を守るところか、彼等を殺害して逃亡したのである。掠奪も日本兵がしたと非難しているが、支那軍の方がもつと酷かった。中牟に入城したときには城外、城内の各所に放火して、敵は退却したのであった。それから我々日本軍も陣地構築のために家屋を破壊したことは事実である。しかし黄河の氾濫のため城外は削られ、城内も益々瓦礫化していった。(以上は参考として記述)

慰問袋・千人針・御守など

世界の隅々にまで見ることが出来る鴉や雀さえも見られない、死の街の中牟城には何一つ心を慰めるものはなかった。そこで私は各隊対抗の角力大会を実施したほか、私が作詞作曲(勿論まねごと)した「中牟守備隊の歌」などを唱わせたものだ。指揮する者の職責は「心を配る」ことである。

戦場は生と死の綱渡りの場であるから慰問はないのが当然であった。しかし個人からの贈り物の慰問袋は勿論のこと、軍の恤兵部(恤はあわれみ、恤兵部は兵士に物品をめぐむ機関)から均一に配分される慰問袋も、実に愛情がこもっていると感じながら、兵士たちは開くのを楽しみにしていたようだ。

貰った慰問袋の送り主が女性であった場合には、兵士たちは若い女性からだとは早合点するようで、早速、艶文のお礼状を書いて差し出すようであった。それが縁で恋愛にまで発展し、内地に凱旋して結婚した例もあったようである。

私の親戚のお婆さんが町内会で贈った慰問袋の中に、達筆の慰問文を入れて於いたところ、うら若い女性と勘違されて、恋文を貰ったと大笑いしていた。

男社会の戦場は苦しいことや悲しいことばかりではなく、誰にも味わえない極く単純なことにも楽しさを求めるのであった。その筆頭が慰問袋である。

恤兵品の慰問袋の中身は日用品や娯楽用品が多く、歯磨き粉、石鹸、タオル、手拭い、針、糸、鉛筆、ちり紙、吊り道具など、様々な物が積み込まれていた。

出征してくるときに親戚や友人から贈られたのが「お守り」であり、「国旗」であったようだ。そして慰問袋の中には必ず「御守」が入っていた。私の経験では、各神社仏閣から直接、出身地部隊の兵士に「御守」を贈ってきたと記憶している。その中で最も多かったのが「成田山」の木札であった。

現代の平和に馴れた人達には判らないが、戦時中には「千人針」と言うものがあつた。一枚の白い木綿の布に千人の女性が、赤い糸で一針ずつ刺して結び目をつくり、武運と無事を祈って出征兵士に贈ったのである。これは日清・日露戦争の頃に始まったと伝えられている。

千人針の中に五銭玉や十銭玉を縫い込んであつたものもあつたようだ。五銭玉は「死戦を超える」(死戦は四銭)、十銭玉は「苦戦を超える」(苦戦は九銭)というように、縁起を担いだのであつた。

千人針は腹巻きの代用にしていたようだが、不衛生な戦場では虱の巣になったようである。私は「御守」も「千人針」も持ったこともなく、贈られたこともない。支那戦線もビルマ戦線への出征も単独で赴任したから、それを贈られる機会がなかった。

面白い話では、千人針に縫いつけてあつた五銭玉か十銭玉の硬貨に敵弾が当たり、命拾ひしたと言う話も聞いている。万の一つぐらいはあるかも知れない。又、懐中の財布の中に「三本の陰毛」を入れておくと、敵弾除になるのだと後生大事にしていた話も聞いている。本当に戦場は不可解な所である。(右は法隆寺の御守)

私は中卒の築城や戦闘に上記したような縁起は一切担ぐことはなかった。御守や千人針は皇太神宮や八幡様、正一位稻荷大明神も成田不動さんの新勝寺の御札の凡ては、蛸壺一つの力もないことを、兵士たちは知っていたと思っていた。

中卒守備隊長として私は、部下を殺してたまるものかと言った信念で固まっていたが、苦しいときの神頼みは戦場では役に立たない。



黄砂と下痢

黄砂は支那大陸の黄土層地帯の細かい砂が強風で吹き上げられ、次第に降下してくる現象である。春先の日本でも屢々観察されるが、支那中原で経験した黄砂現象は生易しいものではなかった。天を砕き地を裂くような激しい蒙古風の中で戦ったのである。詩経に「終風且霾」と書いている。辞書を引いてみると霾(ツチフル)とは、大風が砂や土を空に巻き上げふらすと書いてあり、「つちぐもり」とも書いてある。即ち黄砂のことである。

黄河流域は凡て黄土層地帯であった。黄土は風に運ばれて堆積した淡黄色、または灰黄色の微砂や粘土からなり、黄河流域からモンゴル高原地帯までが黄土層地帯が広がっている。

私が主として従軍した河南省、山西省、安徽省では春先になると黄塵万丈と言った現象が起こり、目も口も開けておられない状態になり、防塵眼鏡やマスクをした状態では射撃もできず、自然的に彼我ともに休戦となった。

家屋の窓などを凡て嚴重に密閉して、炊事班の兵士が守備隊の飯を炊いても、細かい黄砂の粒子が何処から入ってくるのか、食べる飯は砂混じりでジャリジャリして食べられなかった。このような状態は年に4から5回は経験している。その間、中卒のような最前線の戦闘部隊将兵は、携帯口糧の「乾麵麪」(旧軍では乾パンとも称した)で過さなければならなかった。

黄砂のひどい時には蒼穹(青空)は太陽が隠れて真っ黒となり、砂嵐が吹くと顔に黄砂が打ち当たって痛くて顔を上げられない。警戒する歩哨は勿論のこと立っていることさえも出来ない状態で、彼我両軍とも休戦であった。

「下痢」に就いては、私が支那戦線に従軍していた3年間、一日として下痢をしなかった日はなかった。中卒城では少ない日で3～4回、多い日は6～7回も通便し、心配した当番兵は後に排便の状況を調査していたらしい。

私の調査では下痢の原因は水質である。その水質は黄土の影響からきている。黄土は酸化鉄の粉末と粘土が混じった物で、その鉄分が私の下痢の原因であった。胃腸の頑丈な人は下痢しなかったが、私のような弱い人は苦勞させられた。聯・大隊長から入院を奨められたこともあったが、応じたことはなく、絶食して治療した記憶がある。

中卒城の戦闘では第12軍の防疫給水部から濾過器が配属され、黄河の水を濾過して守備隊は使用した。しかし私には濾過した水も下痢の原因となった。黄土層を流れてくる黄河の水も鉄分が多く、濾過器では鉄分まで除去できない化合物となっていた。結局煮沸するより方法がなかったのである。

陸大に合格した報せを聯隊長から受け、内地に帰還した途端、いっぺんに下痢は止まってしまった。下痢は矢張り支那の水の影響であった。水質が悪いから支那で「魔法瓶」が発明されたが、窮すれば通ずの知恵であった。

(右の写真は当時の支那で板を引く光景で、電力がないから当然のように機械工業は発展せず、製材所も全くなかった。実に大陸的な慢慢的であった)



蝗の大群

支那は何かにつけてスケールが大きいと何回か書いた。それは善悪の両方である。大黄河を年百年中眺めて暮らした中牟城一帯に大量の蝗が発生し、農産物に甚大な被害を及ぼし収穫は皆無となったことがある。これは昭和17年の夏である。

蝗は「稻子」とも言い、イナゴ属のバッタの総称で、体長は約3 cmで緑色、羽は淡褐色、発達した後足でよく跳び、鳴かない農作物の害虫である。

又、蝗のことを「飛蝗」とも称し、「トビバッタ」「ワタリバッタ」とも言っていた。支那の蝗は大群で飛来して畑の作物を食い尽くしてしまう。これは7月の異常高温と乾燥が要因らしい。つまり異常気象であり、戦争による荒地の増加も一因だとも言われていた。

普通ならそれほど飛べない蝗のバッタは、異常繁殖で生息密度が高くなると（密生）、体を軽くして飛びやすいように「変身」するらしい。

私も何回かバッタの大群に遭遇したことがあった。億兆の蝗が蒼穹を黄褐色に覆って飛来し、一粒の穀物も一枚の葉っぱも残さずに、食い尽くしてしまうのであった。蝗は農作物ばかりではなく屋根瓦の上にも重なり、塀といわず壁といわず、止まれる所を覆い尽くしている。それも一ヶ所に数秒いて、次々と微風に乗り、一面を染めんばかりの勢いで移っていった。

ある時、私が開封の聯隊本部に出張を命じられてトラックに乗車すると、約4 km四方の土地は地肌が見えないほど蝗が埋め尽くし、麦も大豆も粟も凡てが丸坊主に食い荒らされ、道路上の蝗をビシビシと踏みつぶして走ったトラックのタイヤは、無気味な音を残していた記憶が未だに残っている。

大地から緑が消滅した一面の土地は赤らみだけを残し、蝗害に苦しむ農民は着の身着のままで途方に暮れ、不衛生で無秩序な社会を形成していくために、昔から匪賊が生まれたのであった。

昔の支那の節度使は蝗の被害の状況を、誰一人として中央に報告しなかったという。これは保身のためであったが、その結果、破産農民が激増して各地に盗賊の群が多発した歴史が遺っている。

バッタは各地で卵を産み付けて行くから、大量の卵が冬を越すと、来春の被害拡大が懸念される。しかし当時の支那では駆除する農薬も資金もなく、天命だと諦めるより仕方がないと、没办法子と言っているだけであった。

古代の支那では、政治が乱れていると、凄まじい蝗害が起きると信じられていた。唐の太宗は「蝗を吞む」と次のように書いている。（太平記）

『貞観二年、京師旱す、蝗虫大いに起こる。太宗苑（園）に入り禾（稲）を

視、蝗虫を見、数枚を綴りて喫^クしていう。人は穀を以て命となす、^{シカ}而るに汝^{ナニジ}これを食う、これ^{ヒヤクシヨウ}百姓に害あり、百姓に^{アキマチ}過あれば、予一人に在り、爾^{ナニジ}それ靈あらばただ^{アケル}當に我心を蝕^{シバ}むべし、百姓を害するなかれと。

將^{マサ}にこれを呑まんとす、左右^{サマ}遽かに^{イサ}謀めて^{イフ}曰く、恐らくは疾^{ヤマイ}を成さん、不可なりと。

太宗曰く、^{コイネガ}冀^{カガ}う所は^{ワガ}災^{サイ}を朕^{テン}が^{シバ}窮に移さん、何ぞ^{ヤマイ}疾^{ヤマイ}をこれ^サ避けんと。遂にこれを呑む。これより蝗また^{ワガ}災^{サイ}いをなさず」^{キミ}責一人に帰す』

この文を読むと、支那では蝗の大群の発生は屢々あったようだ。私が見た光景では小型飛行機は墜落の危険さえあったと思う。農民の死活問題であった。

想い出深い中牟と黄河（下の写真は黄河の氾濫光景）

昭和16年10月2日、大黄河を敵前渡河して中牟に入城して以来、私^シが中牟城の総責任者として指揮を執った期間は約2年弱であった。予想以上の大敵を迎える心理作戦に追われた築城から、万雷の如き銃砲撃の激しさに^{ドキキ}度肝を抜かれた緒戦の戦闘は、^{マサ}將に^{シバ}断末魔の針の筵^{シバ}に坐らされた心境であり、計り知れない苦難の心中は表現する言葉も知らない。半年を経過した頃から戦闘状態は^{ツツ}膠着し、敵は攻撃を諦観して陣地構築を始め、^{イイジン}対陣・^{イイジ}対峙の態勢に移行した。

しかし、平静を保ち始めてきた中牟戦場に新たな別の大敵が出現してきた。鶴翼のような形をして中牟城を包むように流れる黄河は、新たな大敵となって押し寄せてきた。水との戦いは体験者しか判らない心痛な戦闘で、弾丸飛来の戦闘にも優るものがあり、古代から黄河を制する者は天下を制すと言われた。



魔の河の黄河は時には暴れ河の本性をさらけ出し、龍の逆鱗に触れたように激しく怒り出し、支那の苦人を飲み込んだこともあった、遂に中牟城北側の陸地を殆ど削り取り、濁流は北面する城壁を直撃して崩れ落とし、挙げ句の果ては逆巻く黄河の流れが城内まで侵入してきた。

黄河の魔の水との戦いは、一瞬にして隊員全員が水没する危険さえもあった。その憂いは玉砕と同じである。敵陣も同じ状態に瀕しているから、戦火を交えることは考慮外だったが、無言の水は防ぐ方策がなく、如何なる権謀術数も役に立たず、支那人と同様に「没法子」（諦めの心境）と叫ばなければならないのだろうか。しかし守備隊員の生命を預かる責任者は、簡単にその気になれない。「処置なし」とは水に対する言葉かもしれないと思いながら、時間が解決するまで待とうを決心し、圧迫される心境で濁流を見守ってすいた。

中牟城に入城した時には、各家屋に月餅が飾られて中秋の名月を愛でていた。月見の習慣は古代の支那から伝わったもので、当日の私は北門の近くにあった「銭湯」（渡河工兵の位置）に入り、戦塵を流し落としながら観月したことを記憶している。平穏な中牟の懐かしい思い出の一つである。しかしそれも束の間、以降は連日連夜の築城と激戦が展開して、市街は冥府から呼びかけられた共同墓地のようになってしまった。

中牟城を堺にして、黄河南岸から以南の地域は被弾区域として戦場化し、無人地帯のために農地は黄河の流れと共に荒れ放題であった。反対に黄河北岸地域は日本軍の勢力範囲で、農民たちは心配なく耕作に励んで王道楽土であった。

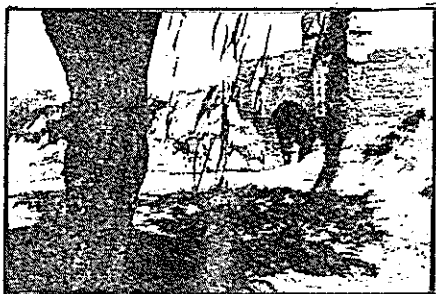
黄河北岸の中牟城対岸には、中牟の守備に直接協力する配属聯隊砲1小隊が駐屯し、陣地を構築して警備の任に就いていた。昭和16年の暮れのことだったと思うが、その周辺に狂犬病が発生しているとの情報があり、苦慮していたことがあった。狂犬病の犬に噛まれると、痙攣、幻覚、恐水状態となって全身が麻痺し、殆ど死亡するという怖ろしい病であった。

年が明けた17年の正月、聯隊砲小隊の初年兵は古年兵に遠慮して、正月の好きな祝い酒も十分に飲むこともできず、近くの部落の支那人から高粱酒を一升買ってきて、隠れて一人で飲んだところ、ふらふらになっっていると電話があった。軍医が駆け付けたが胃が冒されて間もなく死んでしまった。全く気の毒なことで、私の責任に於いて戦闘状況を作り、作文を書いて戦死としたことがあった。戦場とはこのような面もあったことは事実である。

黄河を渡河工兵の舟艇に乗って渡った上陸地点から、北方約5kmのところ到我が大隊本部が所在する「大孟寨」という部落があった。（寨＝とりでの意）

大孟寨は城壁に囲まれた部落で、この地で昭和16年徴集兵の初年兵教育が行われた。中隊長の私は1週間に1度、精神訓話に同地を訪れ、顔と氏名を覚えることに懸命であった。教官は高橋少尉だったが、19年の春に中隊長に栄転してニューギニア戦線に転戦し、ビアク島で玉砕してしまった。嗚呼、悲哉。

大孟寨に通じる田舎道に数本の柳^{リュウジヨ}絮^{ジュ}という柳の木があった。初夏のころになると、柳絮の綿のような実がふわりふわりと風に吹かれて舞い上がり、本当に支那らしくのんびりとした風流な景観が見られた。これらの思い出は、幽鬼^{ユウキ}の棲む街、地獄^{ジゴク}の縮図^{シュツズ}のような中牟と比較対照するから、尚更、強く感じたのであろう。



(上の写真は、大孟寨の東門と城壁に柳の木)

最後になったが、中牟城で活躍してくれた各兵科の将兵は、九死に一生ではなく、十死に零生の戦闘に耐え抜き、全員が殊勲甲だと感謝申しあげたい。

中牟城の戦闘は「習うより慣れよ」という戦法を教えてくれた。また「学問なき経験は、経験なき学問に優る」と教えてくれた。孫子の「よく守る者は九地の下にかくれる」という教えを痛感した。即ち、敵が混乱に陥るまでは自己の本当の戦力を温存し、隠しておくのだということであった。戦術上、最も難しい防禦戦闘の要諦^{ヨウテツ}を会得^{カイドク}したと自負^{ジボ}している。

蘇東坡^{ソトウバ}（蘇軾^{ソシキ}）の詩に「高処不勝寒」という表現がある。「高き処、寒さに勝たず」ということである。即ち、権力の階段を上っていけば、環境は次第に厳しさを増してくる。頂点に上りつめた者は、全てのことに責任を取らなければならないのである。

私の如き若輩^{ニヤク}しかも浅学の身で経験の浅い者が中隊長を拝命し、軍の最先頭で戦った戦闘を顧みると、「高処不勝寒」の言葉の意味を痛切に感じてくる。現今の我が国の人達にもこの言葉を噛みしめて、事に当たって貰いたいものだ。

中牟城の戦闘に参加した将兵、特に我が聯隊や師団に所属した人達の多くはニューギニア方面に転戦し、大半が玉砕してしまった。共に戦った在りし日の勇姿^{ユウサ}を彷彿^{ホウフツ}として思い浮かべると、私のように生き残った者の辛さは、生き残った者にしか判らない。故人に対する思いは、生きている人々に対するよりも強いと信じている。彼等は将に花の盛りの死であったのである。

私が中隊長を勤めた時の中牟城守備をともした将校では、高橋少尉はビアク島で玉砕。前田、中村（4中配属）関根（機関銃配属）各少尉は沖縄戦線に転戦して玉砕。高山少尉は物故。平松軍医、佐藤（4中配属）、森山（機関銃）各少尉は不明。斉藤中尉、浅賀、永長各少尉はご存命である。（当時の階級）

鈴木竹海

くりました。その時静かな前方で闇の中
で、何處までも様々様々かか
し、人散らして十人位し、又直に
都のなりきつた。又在るが、
分岐所へ、之で、心してお
それ、身体を横に、さあ、
朝、さう、さあ、さあ、
り、四〇〇、花、花、花、
り、白、白、白、白、
殿は、夜、夜、夜、夜、

うはだつて来たので、
此の西園寺は何回か敵の侵入を受け、或
時は獲りよかうと檣を投げるれ、元朝とく
りすへしに所て、古孝等ははやく彼の路用
の目には被感です。そして現在中華は北の外
を雲河と称するはなくなり、此の西園寺は西
北に平明を中原と追跡をとり、南側には雄
り佐官が華の街路橋を種えられ居ります。



敵前 乙女の宣撫放送

中牟配属渡河工兵隊 越中矩雄

訴うるが如く心死に放送を続ける可憐な中国女性があった。彼女は河北省生れ今年（昭和十七年）二十一歳、姓名を張玉芳といった。かつては第二十九軍宋哲元將軍の配下として、抗日戦線の花と咲いた娘子軍の才媛で日本軍向けの宣撫工作隊員として活躍した。

戦線に楽器（バイオリン）を携えてきた兵隊がいたが、写真機（今様ならカメラというべきか）を持ってきた兵隊も極めて稀であつたろう、私もその稀な存在の兵隊であつた。奇麗な戦線生活の中で、シャッターがとらえた数々の映像には、それぞれの想いが秘められていて懐かしい、その中の一枚の画像に一際印象深いスナップがある。

それは黄塵吹き荒ぶ北支戦線にあって日本軍に協力した中国娘子軍の一隊員の姿である。（昭和十七年九月十九日、北支河南省中牟城砲台上で活躍中の張玉芳嬢）このスナップは当時の読売新聞にも戦線記事として掲載された、その要旨は。

新黄河、中牟対岸の第一線地区に躊躇する敵軍団十四万を前にして……。

「あなた達の故郷ではあなたの父や母又、あなたの妻、子供達が一日も早く帰ってくる日を楽しみに待っているのです。血腥い、抗日武器を捨て、早く故郷に帰らないさ。」

敵弾嵐の中、マイクを両手に、しっかりと握りしめ、嘆く如く

ところが昭和十五年三月二十九日杞県南方地区の戦線で宣撫工作中、日本軍の攻撃を受けた際、腰部を負傷し仮死状態の危機を味方ならぬ敵日本軍に救助された。温かいベッドに傷ついた身を横たえた彼女は、親身にも勝る手厚い治療に感激し、それにも増して皇軍將兵達の真心に心を打たれ嬉しさに感動した。

やがて傷病が癒えたと共に自ら進んで日本野戦放送局員となり、以来幾度か激刺とした容姿を前線にみせては宣撫活動を続けてきたという。捕虜の身とはいえ爾來親日派として活躍したことはいうまでもない。

かくして戦争は終結した。波乱に満ちた中国も時代の変遷と共に国情も変革した。今日往年の彼女張玉芳が存命であれば六十一歳である。現、国際社会注視の中で着実に歩みつゝある共産主義国、中国大陸の一隅に在って彼女は如何様な日々を過しているのであろうか。

越中矩雄氏は我が歩兵聯隊第一中隊出身者で、中牟には渡河工兵隊員として配属されていた。私は戦後何回か再会している。

あとがき

世紀末を迎えて回顧すると、20世紀は戦争と暴力の時代であり、今もなお世界は^{ジュッパ}戎馬（戦争にあけくれていること）である。^{モクハヤ}澎湃（勢いよく）とした未来を感じていた戦中は、死への不思議な空間の中で身をすてて戦い、戦後は精神的に^{キッペン}虚脱状態に突き落とされて人生の冬を体験し、年老いた現在は刻々と迫ってくる^{トシヨ}屠所の^{ヒツジ}羊の^{アツミ}歩みを感じている。

「故聖人之用兵也 亡国而不失人心」、これは国が亡んでも人心を失わず、万世に及ぶと言う意味で、我々の年代の者にとっては金言であった。私が見てきた戦前と戦後を照らし合わせて、「あとがき」を綴（つづ）ってみたい。

「支那戦場余話」と題して書き上げた今、私の耳には、息を引き取って死んでいった人達の最後の言葉が、^{イクラリ}脳裡から聞こえてくる。「長い間お世話になりました」「申し訳ございません」（隊長より先に死ぬことが申し訳ないの意）と言う簡単な言葉であった。しかし、その中には多くの想いが込められていた。祖国を遠く離れた異国の地で死んでいく^{タマシ}耐え難い心中は、体験者だけが理解できるのである。

日本における神仏の信仰は祖先の霊を^{マツ}祀ることが主であった。そして武士道は主君のために身命を惜しまぬところから出発していた。江戸時代の人々は忠義を最高の道徳とし、面目を失った武士は切腹するのが当然であった。

明治以来の各戦役から昭和時代の各事変、大東亜戦争を日本国民は「^{イサナ}聖戦」（神聖な戦い、正義の戦い）と信じさせられ、神であった天皇の^{キキシ}赤子（天子を父母にたとえて人民のこと）として「^{ミコクニ}皇国ニ生^{タマ}ヲ^{タケ}葉ケ^ニ若^ニ恩ニ^{タテマツル}報イ奉ル」と、天皇のために戦死することを最高の忠義だと教育され、真剣にそう思って戦場に^{オモム}赴いたのである。

^{シノヅク}銃後の国内では食糧がなくなっても爆弾が落ちてきても、必ず^{カミタテ}神風が吹いて最後は日本が勝のだと信じていた。それが我々が小さい時から叩き込まれていた、皇国教育（天皇が統治する国の教育）の成果というものであった。台風を神風と信じ込ませていた結果は^{ダンバ}惨敗に帰し、みじめな負け方に終わった。我々がどのように教育されたのかを知るため、「まえがき」に「教育勅語」、末尾に「^{トウゴ}軍人勅諭」「^{ミヅノ}米英との開戦詔書」「^{シヨウシ}終戦の詔書」等を参考のために掲載し、後の世の人のために伝えたい。

これらを基本にして教育され、死に向かって戦わされた日本の軍隊は、神である天皇が^{トウゴ}統率する軍、すなわち^{テンノウ}天皇親率（天皇自ら率いる）の軍であった。（当時の日本国男子は兵役の義務があり、現在の自衛隊とは根本的に異なる）

歴史を繙いてみると、天皇が討幕の命を出したり、或いは天皇が平家や源氏に操られて結託するなど、天皇が武士と直結した時は国は乱れている。我々が参加した昭和の戦争は天皇親率であり、開戦以来の大敗を喫してしまった。

戦場に立って一身の利害をかえりみず、一途に天皇のために死ぬのだと、靖国神社に祀られることだけを念頭に死んでいった英霊が、いま我が身に乗り移って語らせているような感じを受けるのである。

生き残った我々戦友は、「天皇の靖国神社への参拝」を是非とも実現して欲しいと懇願している。実現しなければ戦死者の心が浮かばれない。それは戦争当時の無言の約束であった。

終戦記念日の8月15日、武道館で施行される戦没者慰霊式典は、英霊の霊魂は不在である。肌を接して戦死者とともに戦った我々にとっては、靖国神社以外には英霊の安んじられる「御社」はないと信じている。

天皇は政治的な行動はできないと言われているが、諸外国を訪問して戦争したことに対して謝意を述べ、無名戦士の墓に参拝されている。これらの行為は全て政治的であると私は思っている。

天皇の靖国神社参拝に先立って、内閣総理大臣は「先ず隗より始めよ」と靖国神社に公式参拝し、天皇の参拝の道をつけるべきである。中曾根内閣以来の総理に、日本人の血が流れているのかと疑問を抱いている。

天皇すなわち国が命令し、国のために生命を犠牲にされた靖国の英霊に対し、国が先頭に立って慰霊しない国が何処にあるだろうか。このことが先ず第一だと思ひ余り、「まえがき」の筆頭に書いた次第である。

この支那戦場余話は、戦闘行動の記録が目的ではなく、戦闘以外のことを書くことが目的だと「まえがき」に書いた。しかし「中牟城」の攻防戦場は猫の子一匹もいない殺伐な瓦礫の戦場であった。（125頁以降）そして滔々として流れる黄河の濁流を思い出すと、亡き戦友の魂が見えてくるような心になり、戦記のように書いてしまった。「戦闘は人間を魔性に変える」というから仕方がないようである。

戦時中の悲惨な食糧難などの戦争体験談は、多数の若い人達が存命だから未だ風化しないだろう。しかし直接敵と戦場で戦火を交えた人は少なくなり、風化してしまったようで、私などが掉尾を飾っている状態となってしまった。

体験というのは所詮は体験した者にしか判らない。体験しない者にどのように話しても、これだけは「頭の中の知識」に過ぎないのである。

戦争～戦闘に関する反省(?)は、116頁の「中原会戦とビルマ作戦の比較」で若干書いた。私が言いたいことは、私のような鈍才は弱点ばかりだが、

上層部の秀才にも秀才なりの弱点があるということだ。そして上層部の弱点と失敗は多数の将兵の生死に関わることが甚大であった。「愚直の一念」ということも大事なことだ。たとえ愚かであっても実戦では秀才よりも大きな仕事をしたものである。

実戦場の体験から述べると、鞭を当てさえすれば馬は走るわけではない。そうでない馬も随分いたのは確かであった。上層の幹部たちが策に尽きた場合には、何事も天皇の名を持ち出せば良いと考えていたようだ。そのような無責任な者が多かったことも事実で、反省すべき大事なことである。

軍人はまた（政治家にも相通ず）自己意識が過剰であった。他人や部下の欠点はよく判るが、自分のことになると気がつかず、判らなかつたようであった。それは持ち上げられていることに鈍感であったからである。「土弘の永遊」のように自ら災いを招き、知らず識らずのうちに身を滅ぼしたのであった。

旧軍に一つだけ愚痴を申しあげる。今春義父母の墓参の際に「桶狭間」を訪れ、それ以前にも長篠の合戦場に足を運んだことかある。武田の騎馬大軍団に対して長篠の対決では、小国で劣性な信長の鉄砲隊が勝利したのである。将来戦の在り方を読み取っていた信長の知恵が、武田に勝った良い戦例であった。伝統だけでは戦力にならず、鉄砲を学んだことが勝利の原因であった。

「学ぶ」ということは「真似る」ということで、「真似る」ことが第一である。明治以来の我が国は外国の長所を真似して各部門が発達し、軍も近代化された。然しそれ以降は時間の経過と共に慢心し、真似することも怠って軍の改革も断行できず、日清・日露の勝利の原因は精神的要素だと陶醉してしまった。

自惚れは退化の大原因である。一日として真似し、改革改良しなければ新しい兵器も制度も生み出すことは出来ず、理論倒れの覺の上の永練に過ぎない。

年老いて漸く落ち着いてくると、「年こそ素なり」という言葉の味がよく理解できるようで、自分のこと、自国のことに気がつくものだ。戦争は絶対にしてはならず、「龍の鬚を蟻がねらう」ような危険なことは起こらないことを祈願している。

戦後に民主主義が普及されたことは結構なことである。しかし、それと引き換えに失われたものも少なくない。我々が子供の頃から教え込まれた躰（仕付）礼節、気品、謙譲の美德（他にゆずる）、測隠の情（あわれみ）、慎み（ひかえめに）、潔（汚れない）、奥ゆかしさ（心がひかれる）などで、枚舉にイトマ違がない。

これらの多くは「仁」を根本とする儒教思想（孔子の教え）に基いていた。しかし、儒教は民主主義に反すると決めつけられて、教育現場から追放された。

私は儒教思想は何も民主主義と相容れないとは考えていない一人である。

江戸時代の学問や思想は神道・仏教・儒教を根本とし、公家も武家も庶民も、この三本の柱を糧にしていた。

仏教は祈りである。必ずしも君臣の道や親子の礼を説かない。儒教は先人の知恵を伝える学問である。支那の古典は即ち「人間学」であり、「教養の源」であったと思っている。

時代が進み、体制が変わり、世の中が進歩しても、余り変わらない部分は人間の心だと思っていた。しかし戦後とくに最近は大変化したのである。道徳心の躑躅は先進諸国の中で日本は最低だと報道された。その影響で学力もアジアで最低の水準になってしまった。

それは国を担う戦後の政治家が責任を負わなければならない。当然のことである。昨今の政治家は戦前の政治家と比較して、国を思うという筋金が入っていない。全てが自分の選挙に直結し、選挙区への利益の仲介業者に成り下がっている。政治家の大多数は2、3世議員ばかりが横行して、小選挙区は私有財産化し、世襲政治の欠点が暴露して、戦前の「井戸堀」議員は見当たらない。

支那と呼んだ時代と今の中国という国の両方を見てきた私の感じでは、毛沢東～鄧小平～江沢民と引き継がれた国家は、皇帝政治が復活したと思っている。それは超越した権威主義に走るからである。国名の中の「人民」は無視され、主席権力の絶対化に突っ走っている。

党中央への絶対服従を要求し、個人的な権威の確立に腐心しているから、皇帝化批判が強化してきている。戦後17回も訪中し、陰からガイドに巧妙に接してみると、彼等は全く共産新中国を信用していないのが現実である。

首脳は自由主義国型民主主義の浸透に警戒を呼び掛けているが、自由諸国に留学した経験者は面従腹背である。だから米国を筆頭に西側諸国は中国を「西洋化」、「分裂化」させていると警戒している。

日本に対しては「極少数の極右勢力が中日関係を破壊している」と、相変わらずである。然し注目すべきは12年連続、国防費の二桁の伸びの軍備増強である。それには新装備の調達や開発費は含まれていないのである。

朝鮮戦争では北鮮が南進する一年も前から、朝鮮系の中国軍が3ヶ師団も北鮮に進駐し、蒋介石軍を圧倒した余生をかって北鮮の南進を支援していた。

毛沢東以下首脳は南鮮の武力解放を積極的であったことと思うと、何れは台湾問題から米中の間に、「きな臭い」匂いが充満して発火するのではないかと、心配している。日本も傍観してはおれない立場である。中国は「正義の戦争であれば先制攻撃は許される」と公言しているからである。（平成12年4月記）

我國は軍隊は世々天皇に統率し給ふ所とす。昔神武天皇躬つかり大伴物部の兵とを率ゑ中國のまわりをめぐらせしを計り平け給ひ高御座し即ちせられて天下を統一し給ひより二千五百有餘年を経ぬ此間世の移り換るゝ國ひ兵制の沿革も亦異なりき。古は天皇躬つかり軍隊を率ゑ給ふ御制にて時りてを皇后皇太子に代り給ふこともあつた。大凡兵權を臣下と委ね給ふことをあつた。中世に至りて文武の制度皆唐國風に倣はせ給ひ六衛府を置き左右馬寮を建て防人など設けられし兵制は整ひされとを打續ける。昇平は後て朝廷の政務を漸次明し流しければ兵制のつらう二三分れざる微兵はいつとなく壯兵の姿に變り遂に武士となり兵馬の權は一向に其武士どもの棟梁たる者に歸し世の政と共政治の大權も亦其手に落ち凡七百年の間武家の政治とはなりぬ世の様に移り換て斯かるは人力もて挽回をへきとあらそひひなからしは我國體に反り且も我祖宗の御制に背き奉り後世に大弊なりき降りて弘化嘉永の頃より徳川の幕府其政を海外國に事ども起りて其弊をも受けぬへき勢に迫りければ朕如皇祖仁孝天皇皇考孝明天皇いたく哀憐を憐れ給ひしこそ悉くも又慢られ然るは朕幼くし

て天津日割を受けし初征夷大將軍其政權を返上し大名小名其版籍を奉還一年を経せし海内一統は世とあり古の制度に復しぬ。是文武の忠臣良將ありて朕を輔翼せぬ功績なり。歷世祖宗の尊養生を懐き給ひ御遺澤なりといへども併我臣民の其心に順逆の理を辨へ大義の重きを知らぬか故にこそあれされし此時於て兵制を更め我國の光を耀さんと思ひ此十五年の程に陸海軍兵制を今様く建定めぬ夫兵馬は大權の朕が統ふる所なれ其可やをこそ臣下は任せられ其大綱は朕親之を攬り背て臣下は委ねへきものなれ子々孫々に至るまで篤く斯旨を傳へ天子は文武の大權を掌握するの義を存して再中世以降の如き失體なかりんことを望むなり朕を汝等軍人の大元帥たるは朕を汝等が股肱と頼み汝等は朕を頭首と仰きて其親を特々深まるべき朕が國家を保護して上天の恩に應じ祖宗の恩に報いさめられし事を得るも得ざるも汝等軍人か其職を盡せと盡さざるに由るぞか。我國の威振をさるることありも汝等能く朕と其妻を共にせよ。我武維揚と其策を盡さず朕汝等と其妻を併し一へ汝等皆其職を守り朕と一心に盡て力を國家の保護し盡さば我國の養生ハ永く太平の福を受け我國に威烈を大し世界に光華ともなりぬへし朕斯を深く汝等軍人に望むられしを爾後遂すへき事こそ思ひてや之を

左に述へむ

一軍人の忠節を盡すを本分とせし凡生を我國に奉くるもの誰か。國に報ゆるの心なからへき況して軍人たらん者。此心の固からてき物の用を立ち得へしと思ふ。それ軍人にして報國の心堅固ならざらん。如何程に熱し學術に長ずるも指偶人といひしか。一其隊伍も整ひ節制も正しくとも忠節を存せざる軍人ハ事し難みて身合の業に同かるへ。抑國家を保護し國權を維持するは兵力に在れし兵力の消長は國運の盛衰あることを辨へ世論の惑も政治に拘り只一途に己を本分の忠節を守り義ハ山嶽よりも重く死ハ鴻毛よりも輕しと覺悟せよ。其操を破りて不覺を取り汚名を受くるものれ一軍人の體格を正くせ。一凡軍人ハ上元帥より下一卒に至るまで其間官職の階級ありて統屬するものとあり。同列同級とても同年。新舊あれし新任の者ハ舊任のものに服従せしむるをその下級のものを上官の命を承ることに實に直に朕が命を承る義なりと心得よ。己が統屬する所にあらざらん。上級の者勿論停年の己より舊きもの。對ふを總へて敬禮を盡し。一又上級の者ハ下級のものを向ひし物を輕得。儀儀の振舞ひ。へからせ公事の爲し威嚴を主とせし時ハ格別をまとも其外を悉くて慈み取扱ひ慈愛を專一と心得

け上下一致して王事ふ勤勞せよ若軍人たるものゝるて體格を素王上を敬み下を慈まそめて一致の和睦を失ひたりんか當に軍隊の奮發たるのろる國家の爲にもゆるし難き罪人なるへ

一軍人は武勇を尙ふへ夫武勇は我國に古よりいとも貴へる所なれど我國の臣民たうんもの武勇なくしては叶ふまい又一軍人も戰に臨み敵に當るの戦ふれど片時も武勇を忘れてよかるべきかされ武勇も大勇も小勇も同じからば血氣もや相暴の振舞ふとせん武勇とは謂ひ難し軍人たりむをの常ふ能く義理を辨へ能く膽力を練り思慮を揮ふて事を謀るへ小敵たりとを侮らず大敵たりとを懼らず己の武勇を盡さむこそ誠の大勇ふとされ武勇を尙ふをの常十人も接るゝを溫和を第一と一諸人の愛敬を得むと心掛けよ由み勇を好みて猛威を振ひたりは果て世人を忌嫌ひて豺狼あすの如く思ひなむ心すべきことこそ

一軍人の信義を重んずへ凡信義を守るゝと常の道とあれとわきて軍人の信義なくして一日も隊伍の中と交りてあらんこと難かるへ信とを己か言を踐行ひ信義とを己か分を盡さむをいふなりされ信義を盡さむと思ふは始より其事の成し得へきと得へらるさ

るを審み思考せへ一腹氣ある事を假初より諾ひてよと大關係を結ひ後に至りて信義を立てんとそれの違違谷りて身の損き所苦むことあり悔ゆとも其詮あり始に能く事の順逆を辨へ是非を考へ其言を所詮履むへらるると知り其義へとてを守るへからる情とならぬ止るこそよけ古より成の小節の信義を立てんとて大綱の順逆を踐り成の公道の理非と踏迷ひて私情の信義を守りぬたら英雄豪傑とせし願ふ違ひ身を滅し屍の上の汚名を後世まで遺せること其例少なりぬをの深く審みてやらるへき

一軍人の質素を旨とせへ凡質素を旨とせされハ文明と流れ輕薄な趣り驕奢華靡の風を好み遂に汚し陷りて志を無下し賤くあり節操も武勇も其甲斐なく世人の爪とせらるゝ迄に至りぬへ一其身生涯の不幸なりといふも中々思ふなり此風一も軍人の聞と起りてハ彼の傳染病の如く蔓延し士風も兵氣も頓に衰へぬへたと明かり朕深之を懼れて義と免難條件を施行し略此事を誡め置きつれと猶も其惡習の出んことを憂て心安らぬ故に又之を訓ふるをう汝等軍人ゆえ此訓誡を等閑ふと思ひそ

右の五ヶ條は軍人たるんをの旨を忽しへらるきて之を行はんか一の誠心と大切れは抑此五ヶ條は我軍人の精神ふいて一の誠心の又五ヶ條の精神をり心誠をらさむ如何なる高潔を實行を當うへへの裝飾何の用ふかハ立つへき心たふ誠あれ何事を成るものうかい死してや此五ヶ條ハ天地の公道人倫の常經なり行ひ易く守り易く汝等軍人能く服か訓ひ遵ひて此道を守り行ひ國を報ゆるの務を盡さむ日本國は蒼生奉りて之を悦びん朕一人の憐れをあらんや

米英兩國に對する宣戰の詔書

昭和十六年十二月八日

天佑ヲ保シ萬世ノ系ノ皇統ヲ續メル大日本帝國天皇ハ昭ニ忠誠勇武ナル汝有衆ニ示ス

朕ハ米國及英國ニ對シテ戰ヲ宣ス朕カ陸海將兵ハ全力ヲ奮テ交戦ニ從事シ朕カ百僚有司ハ勵精戰ヲ奉行シ朕カ衆庶ハ各々其ノ本分ヲ盡シ健忘一心國家ノ總力ヲ舉ゲテ征戰ノ目的ヲ達成スルニ遺算ナカラムコトヲ期セヨ

抑々東亞ノ安定ヲ確保シ以テ世界ノ平和ニ寄與スルハ至願ナル皇祖遺志承ナル皇考ノ作還セル遠慮ニシテ朕カ衆庶カサル所而シテ列國トノ交際ヲ萬クシ萬邦共榮ノ樂ヲ倍ニスルハ之亦帝國カ常ニ圖ル所ナリ今ヤ不幸ニシテ米英兩國ト戰端ヲ開クニ至ル尙ニ己ムヲ得サルモアリ豈朕カ志ナラムヤ中華民族政府ハ帝國ノ眞意ヲ解セス蓋ニ事ヲ構ヘテ東亞ノ平和ヲ攪亂シ遂ニ帝國ヲシテ干戈ヲ執ルニ至ラシメ

茲ニ四年有餘ヲ經テ幸ニ國民政府更新スルアリ帝國ハ之ト善隣ノ誼ヲ結ビ相提攜スルニ至レルモ重要ニ殘存スル政權ハ米英ノ庇蔭ヲ恃ミテ兄弟尙未タ斷ニ相聞クラ復メス米英兩國ハ殘存政權ヲ支援シテ東亞ノ禍亂ヲ助長シ平和ノ美名ニ蔽レテ東洋列國ノ非難ヲ出ウセムトス對ヘテ與國ヲ誘ヒ帝國ノ周邊ニ於テ武備ヲ増強シテ我ニ挑戰シ更ニ帝國ノ平和的進取ニ有ラユル妨害ヲ與ヘ遂ニ經濟斷交ヲ敢ニ帝國ノ生存ニ重大ナル脅威ヲ加フ朕ハ政府ヲシテ事態ヲ重シニ對シテ復シシメムトシ堅忍久シキニ彌リタルモ彼ハ毫モ其ノ精神ナク徒ニ時局ノ解決ヲ遲延セシメテ此ノ間却ツテ帝國ノ經濟上軍事上ノ脅威ヲ増大シ以テ我ヲ壓迫セシメムトス

茲ニ東亞ノ安定ニ關スル帝國積年ノ努力ヲ水泡ニ歸シ帝國ノ存立亦正ニ危殆ニ瀕セリ事既ニ此ニ至リ今ヤ自存自衛ノ爲メ毅然起ツテ一切ノ障礙ヲ破碎ス

皇祖皇宗ノ神靈上ニ在リ朕ハ汝有衆ノ皇武ニ倣シ祖宗ノ遺業ヲ恢弘シ遂ニ禍根ヲ剷除シテ東亞永遠ノ平和ヲ確立シ以テ帝國ノ光榮ヲ保全セムコトヲ期ス

御名 御璽

米英兩國トノ開戦ニ際レ
陸海軍人ニ賜ハサル勅語

義ニ支那事變ノ發生ヲ見ルヤ朕カ陸海軍ハ勇奮奮闘既ニ四年有餘ニ彌リ不逞ヲ磨滅シテ戰果日ニ増ルモ禍亂今ニ至リ尙收マラス朕因ノ深ク米英ノ包藏セル非意ニ在リニ鑑ミ朕カ政府ヲシテ事變ヲ平和ノ裡ニ解決セシメムトシタルモ米英ハ平和ノ願念スルノ誠意ヲ示サズノミナラス却テ經濟上軍事上ノ脅威ヲ増強シ以テ帝國ヲ屈辱セシメムト圖ルニ至レリ

是ニ於テ朕ハ帝國ノ自存自衛ト東亞永遠ノ平和確立トノ爲途ニ米英兩國ニ對シテ戰ヲ宣スルニ決セリ

朕ハ汝等軍人ノ忠誠勇武ニ信倚シ克ク出師ノ目的ヲ貫徹シ以テ帝國ノ光榮ヲ全クセムコトヲ期ス

昭和十六年十二月八日

終戦の詔書

昭和二十年八月十四日

朕ハ深ク世界ノ大勢ト帝國ノ現状トニ鑑ミ非常ノ措置ヲ以テ時局ヲ收拾セムト欲シ茲ニ忠良ナル閣臣民ニ告ク

朕ハ帝國政府ヲシテ米英交戦四國ニ對シ其ノ共同宣言ヲ受諾スル旨通告セシメタリ

抑々帝國臣民ノ康寧ヲ圖リ萬邦共榮ノ樂ヲ倍ニスルハ皇祖皇宗ノ遺範ニシテ朕ノ衆庶カ共ニ務ムル所ニシテ二重戰セル所以モ亦實ニ帝國ノ自存ト東亞ノ安定トヲ確保スルニ出テ他國ノ主權ヲ排シ領土ヲ侵スカ如キハ固ヨリ朕カ志ニアラス然レニ交戦已ニ四載ヲ閱シ朕カ陸海將兵ノ勇戦朕カ百僚有司ノ勵精朕カ一億衆庶ノ奉公各々最善ヲ盡セルニ拘ラス戰局必スシモ好轉セス世界ノ大勢亦我ニ利アラズ加之敵ハ新ニ後進ナル爆彈ヲ使用シテ無算ヲ殺傷シ慘害ノ及フ所廣ニ瀕ルヘカサルニ至ル而モ尙交戦ヲ繼續セムカ終ニ我カ民族ノ滅亡ヲ招来スルノミナラス延テ人類ノ文明ヲ破壊却スヘシ斯ノ如クムハ朕何ヲ以テカ

健忘ノ赤子ヲ保シ皇祖皇宗ノ神靈ニ謝セムヤ是レ朕カ帝國政府ヲシテ共同宣言ニ應ジシムルニ至レル所以ナリ

朕ハ帝國ト共ニ終始東亞ノ解放ニ協力セル諸盟邦ニ對シ遺憾ノ意ヲ表セサルヲ得ス帝國臣民ニシテ戰陣ニ死シ戰域ニ殉ジ非命ニ斃レタル者及其ノ遺族ニ想ヲ致セハ五内爲ニ裂ク且戰傷ヲ與ヒ災禍ヲ蒙リ家業ヲ失ヒタル者ノ厚生ニ至リテハ朕ノ深ク軫念スル所ナリ惟フニ今後帝國ノ受クヘキ苦難ハ固ヨリ尋常ニアラス爾臣民ノ哀憤モ朕普ク之ヲ知ル然レトモ朕ハ時運ノ趨ク所堪ヘ難キヲ堪ヘ忍ビ難キヲ忍ビ以テ萬世ノ爲ニ太平ヲ開カムト欲ス

朕ハ茲ニ國體ヲ護持シ得テ忠良ナル閣臣民ノ赤誠ニ信倚シ常ニ爾臣民ト共ニ在リ若シレ情ノ激スル所遂ニ事變ヲ滋クシ或ハ同胞排擠五ニ時局ヲ亂リ爲ニ大進ヲ試リ信義ヲ世界ク失フカ如キハ朕最モ之ヲ戒ム宜シク舉國一家子孫相傳ヘ難ク神州ノ不滅ヲ信シ任重クシテ道遠キヲ念ビ總力ヲ將來ノ建設ニ傾ケ道義ヲ篤クシ志操ヲ堅クシ誓テ國體ヲ擁護シ時局ヲ挽回シ世界ノ永遠ニ後レサラムコトヲ期スヘシ爾臣民其レ克ク朕カ意ヲ體セヨ

御名 御璽

◎『注意』間違えて58ページをダブルプリントしましたので、この58ページを読み、
それから本文の58ページを読んで下さい。

『将校の階級と進級について』

当時は未だ軍縮時代の影響が少し残っていたのか、満州のチチハルの原隊と変わらない状態で、佐官は5名、大尉は聯隊副官米満大尉（少7）、聯隊高級軍医大地薫大尉（昭13）、第1中隊長細谷大尉（43期）第3中隊長岸田大尉（少8）、第12中隊長梅原大尉（39期）、通信中隊長植松大尉（42期）の6名である。各部将校を含めた歩兵聯隊将校の数は120名程度だが、大尉といえは貴重な存在で6名に過ぎず佐官待遇であった。

昭和初期の軍縮の時から、少尉3年、中尉4年、大尉8年を経なければ少佐に進級できず、それも大尉待命、少佐進級待命、少佐進級と3段階に分かれ、現役将校として少佐に進級できる者は3分の1であった。

高等官である将校としての体面を保つ生活のため、「貧乏少尉」「やりくり中尉」「やっそこ大尉」とまで世間では噂^{ウワサ}していたのである。

当時の年俸は月給に換算^{かんざん}すると、少尉＝70円83銭、中尉は1、2等級があり約85円～95円、大尉は1、2、3等級があり約120円～180円だったと記憶している。（当時の大卒の初任給は約50～55円）

将校が不足していた証拠に現役兵編成の師団だが、上記以外の中隊長は特別志願将校の中尉が主体であった。特別志願将校とは、支那事変発生後から採用した幹部候補生制度以前の、制度の出身の将校である。軍縮で軍に資金が不足していたから、1年志願兵制度をもうけて200円を軍に納入させ、短期間に予備役少尉を養成したのである。（資格は旧制中等学校卒以上）

だから聯隊の編成表を見ると大尉以上は軍歴が長くて年輩者で、中間がなく、中隊長以下の軍歴は期間が短く、年齢的にも若いように感じていた。

後日のことになるが、大東亜戦争の勃発前と後とでは、軍が急に大膨張した関係から、それに合わせて将校の数も急激に多くなり、進級も速くなってきた。比率で最も数が増加した階級は中将だと聞いている。終戦前後の師団の数は何百と数えきれず、だからインフレ中将と言われたのであろう。

佐官にしても負けず劣らずで、赴任当時の佐官と終戦時とでは、進級に15年近い差があるようだ。その点は尉官の養成は陸士だけが養成機関ではなく、その数は極く一部に過ぎなかった。一方、幹部候補生制度が発足して2、3年間は合格率は20%だったと記憶している。私が中隊長に就任した昭和16年時分では80%強の合格率であったばかりか、定員3人の小隊長のところに5人の少尉がいたこともあり、在支那方面軍は南方軍の予備将校養成所であった。

不思議にも終戦後の某日、予備役中尉を終戦時に遡^{さかのぼ}って大尉に進級させた。その数は膨大でマッカーサーの指令か？不明だが、ビルマ戦線の大隊長の私も多くの部下中尉から申告を受けた。それを思うと赴任時の大尉は気の毒である。